埋蔵文化財発掘調査報告書

岩野原遺跡

1981

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は高速自動車国道関越自動車道の建設に伴い，長岡市が日本道路公団から委託を受けて発掘調査を実施しました「岩野原遺跡」の記録です。

岩野原遺跡は長岡市を眺望する信濃川左岸の河岸段丘上にあります。遺跡の東側は長岡の美田がひらけ，信濃川を経て東山連峰につづいています。西側は松や杉などの繁茂する山地で，現在長岡ニュータウンの計画地となっています。

今回の発掘調査によって火焔型土器群・クッキー状炭化物をはじめ膨大な土器，石器，敷石住居等の住居跡群，13,000基を超えるピット群が発見されました。

これらをみるとき，ここに居住した先人達が厳しい自然のなかで，山河の恵みを受けながら生活した息づかいが，そこはかとなく感じられます。

この調査は3年の歳月と25,000人余の作業員の労苦を結集したものです。この間，新潟県教育委員会・日本道路公団をはじめ，関係各位の御指導と御協力をいただきました。ここに心から厚く御礼申しあげます。

昭和56年3月

長岡市教育委員会

教育長　横田　博

例　　言

1．本書は高速自動車国道関越自動車道（以下「関越自動車道」という）の盛土材料に供する土採取工事に伴い昭和53年4月から昭和55年6月にかけて実施した岩野原遺跡（新潟県長岡市深沢町字岩野原）の第1次から第3次発掘調査の記録である。

2．調査は日本道路公団から長岡市が委託を受け，長岡市教育委員会が実施した。発掘調査費は日本道路公団の負担による。

3．遺構の写真撮影・測量及び遺物の整理・復元は駒形敏朗と寺崎裕助が主としてあたり，中山誠二・佐藤雅一・安藤正美の協力があった。また，土器の復元は第2次調査以降，江尻清・江尻昭子が担当した。

4．遺物の写真撮影・実測及び図版等の作成は駒形と寺崎が担当した。

5．本書は駒形と寺崎が協議を重ねながら，分担執筆をしたもので，文末に執筆者の氏名を明記した。

6．発掘調査・遺物整理から本書の作成まで，多くの方々や機関から御指導・御協力をいただきました。氏名等は明記しませんが，ここに深く感謝いたします。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯

1．調査にいたるまで……1

2．調査の経過……3

3．発掘調査の方法……6

第Ⅱ章　遺　　跡

1．遺跡の環境……8

2．グリッドの設定……10

3．土　　層……10

第Ⅲ章　縄文時代

第1節　遺　　構……13

1．縄文中期の遺構……14

(1) 住居跡　(2) Fピット　(3) Gピット　(4) 土器捨て場

2．縄文後期の遺構……68

(1) 住居跡　(2) Lピット　(3) Gピット

第2節　遺　　物

1．縄文中期の遺物…… 111

(1) 住居跡出土の土器　(2) Fピット出土の土器

(3) Gピット出土の土器　(4) 第1土器捨て場出土の土器

(5) 第2土器捨て場出土の土器　(6) その他の遺物

2．縄文後期の遺物…… 146

(1) 住居跡出土の土器　(2) Lピット出土の土器

(3) Gピット出土の土器　(4) 小ピット等出土の土器

(5) その他出土の土器　(6) 土製品・石器・石製品その他

第Ⅳ章　歴史時代

1．第1号建物跡…… 196

2．第2号建物跡…… 196

3．遺　　物…… 196

4．ま と め…… 198

第Ⅴ章　ま と め…… 199

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図……9
第 2 図　グリッド設定図……11
第 3 図　土層断面図……12
第 4 図　第5号住居跡……14
第 5 図　第6号住居跡……15
第 6 図　第98号住居跡……16
第 7 図　第100号住居跡……17
第 8 図　第104・105・111号住居跡……折込み……18・19
第 9 図　第101号住居跡……19
第 10 図　第106・107・108号住居跡……折込み……20・21
第 11 図　第114号住居跡……22
第 12 図　第109・113号住居跡……折込み……22・23
第 13 図　第115号住居跡……23
第 14 図　第118号住居跡……24
第 15 図　第119号住居跡……25
第 16 図　第120・121・167号住居跡……26
第 17 図　第124号住居跡……27
第 18 図　第126・128・180号住居跡……折込み……28・29
第 19 図　第130号住居跡……29
第 20 図　第129・169号住居跡……折込み……30・31
第 21 図　第131号住居跡……31
第 22 図　第132・148号住居跡……折込み……32・33
第 23 図　第136号住居跡……33
第 24 図　第143号住居跡……34
第 25 図　第144号住居跡……35
第 26 図　第146・163号住居跡……37
第 27 図　第150号住居跡……38
第 28 図　第152号住居跡……39
第 29 図　第157号住居跡……40
第 30 図　第160号住居跡……41
第 31 図　第170号住居跡……42

第 32 図　第172号住居跡 ……43
第 33 図　第178号住居跡 ……44
第 34 図　Fピット……47
第 35 図　Fピット……49
第 36 図　Fピット……51
第 37 図　Fピット……53
第 38 図　Fピット……55
第 39 図　Gピット（中期）……59
第 40 図　Gピット（中期）……61
第 41 図　Gピット（中期）……63
第 42 図　Gピット（中期）……65
第 43 図　Gピット（中期）……66
第 44 図　第2号住居跡……68
第 45 図　第3号住居跡……69
第 46 図　第9号住居跡……70
第 47 図　第10号住居跡……71
第 48 図　第13号住居跡……72
第 49 図　第12号住居跡……折込み……72・73
第 50 図　第15号住居跡……73
第 51 図　第18号住居跡……73
第 52 図　第17・33号住居跡……折込み……74・75
第 53 図　第29号住居跡……75
第 54 図　第32号住居跡……76
第 55 図　第34号住居跡……77
第 56 図　第48号住居跡……78
第 57 図　第49号住居跡……79
第 58 図　第50号住居跡……81
第 59 図　第182号住居跡柱穴断面図 ……82
第 60 図　第182号住居跡 ……折込み……82・83
第 61 図　Lピット……85
第 62 図　Lピット……87
第 63 図　Lピット……89
第 64 図　Lピット……91
第 65 図　Lピット……93

第 66 図　Lピット……95
第 67 図　Lピット……97
第 68 図　Lピット……99
第 69 図　Lピット……101
第 70 図　Lピット……103
第 71 図　Lピット……105
第 72 図　Lピット……107
第 73 図　Lピット……109
第 74 図　Gピット（後期）……110
第 75 図　住居跡出土土器（中期）……115
第 76 図　住居跡出土土器（中期）……117
第 77 図　住居跡出土土器（中期）……119
第 78 図　住居跡出土土器（中期）……121
第 79 図　住居跡出土土器（中期）……122
第 80 図　住居跡出土土器（中期）……123
第 81 図　住居跡出土土器（中期）……125
第 82 図　住居跡出土土器（中期）……127
第 83 図　住居跡出土土器（中期）……129
第 84 図　住居跡出土土器（中期）……131
第 85 図　住居跡出土土器（中期）……132
第 86 図　住居跡出土土器（中期）……133
第 87 図　住居跡出土土器（中期）……134
第 88 図　Fピット出土土器（中期）……136
第 89 図　Fピット出土土器（中期）……137
第 90 図　Gピット出土土器（中期）……139
第 91 図　住居跡出土土器（後期）……149
第 92 図　住居跡出土土器（後期）……151
第 93 図　住居跡出土土器（後期）……153
第 94 図　住居跡出土土器（後期）……155
第 95 図　住居跡出土土器（後期）……156
第 96 図　Lピット出土土器（後期）……159
第 97 図　Lピット出土土器（後期）……161
第 98 図　Lピット出土土器（後期）……162
第 99 図　Lピット出土土器（後期）……163

第100図　Lピット出土土器（後期）…… 165
第101図　Lピット出土土器（後期）…… 167
第102図　Lピット出土土器（後期）…… 168
第103図　Lピット出土土器（後期）…… 169
第104図　Lピット出土土器（後期）…… 171
第105図　Lピット出土土器（後期）…… 173
第106図　Lピット出土土器（後期）…… 175
第107図　Lピット出土土器（後期）…… 177
第108図　Lピット出土土器（後期）…… 179
第109図　Lピット出土土器（後期）…… 180
第110図　Lピット出土土器（後期）…… 181
第111図　Lピット出土土器（後期）…… 182
第112図　Lピット出土土器（後期）…… 183
第113図　Lピット出土土器（後期）…… 185
第114図　Lピット出土土器（後期）…… 187
第115図　Gピット出土土器（後期）…… 189
第116図　Gピット出土土器（後期）…… 190
第117図　第1号建物跡……折込み……196・197
第118図　建物跡位置図…… 197
第119図　建物跡出土土器…… 198
第120図　第2号建物跡……折込み……198・199

附　　図

第121図　遺構位置図組み合せ図
第122図　遺構位置図（1）
第123図　遺構位置図（2）
第124図　遺構位置図（3）
第125図　遺構位置図（4）
第126図　遺構位置図（5）
第127図　遺構位置図（6）
第128図　遺構位置図（7）
第129図　遺構位置図（8）
第130図　遺構位置図（9）
第131図　遺構位置図（10）
第132図　遺構位置図（11）

図　版　目　次

図版第1図　遺跡遠景
図版第2図　調査風景
図版第3図　調査風景
図版第4図　調査風景
図版第5図　遺物出土状況
図版第6図　遺構群
図版第7図　遺構群
図版第8図　遺構群
図版第9図　住居跡（縄文中期）
図版第10図　住居跡（縄文中期）
図版第11図　住居跡（縄文中期）
図版第12図　Fピット（縄文中期）
図版第13図　Fピット（縄文中期）
図版第14図　Gピット（縄文中期）
図版第15図　第1土器捨て場
図版第16図　第1土器捨て場
図版第17図　住居跡（縄文後期）
図版第18図　住居跡（縄文後期）
図版第19図　第49号住居跡（縄文後期）
図版第20図　Lピット（縄文後期）
図版第21図　Lピット（縄文後期）
図版第22図　土偶
図版第23図　三角形土製品・三角錐土製品・土版・耳飾り
図版第24図　土笛・鈴状土製品・土錘・板状土製品・スタンプ状土製品・土皿
図版第25図　石斧

図版第26図　凹石・石皿
図版第27図　ナイフ・石槍・石鏃・石錐・石匙
図版第28図　板状石器・石錘
図版第29図　石棒・異形石器・浮・環状石斧
図版第30図　大珠・玉・クッキー状炭化物
図版第31図　骨・耳飾り・植物遺体
図版第32図　住居跡・Fピット出土土器（縄文中期）
図版第33図　Fピット・第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第34図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第35図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第36図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第37図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第38図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第39図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第40図　第1土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第41図　第1・第2土器捨て場出土土器（縄文中期）
図版第42図　住居跡・Lピット出土土器（縄文後期）
図版第43図　ピット出土土器（縄文後期）
図版第44図　グリッド出土土器（縄文後期）
図版第45図　B地区試掘グリッド・遺物出土状況・灰釉陶器
図版第46図　B地区建物跡

第Ⅰ章　調査の経緯

1．調査にいたるまで

岩野原遺跡は従来より広く知られており，戦後間もないころの農道拡幅工事で縄文中期の土器や土偶・滑車形耳飾りなどが出土し，それを地元研究家が収納している。また，昭和40年8月には長岡市立科学博物館が本遺跡の一部を発掘し，縄文後期の土器を伴う竪穴式住居跡1基と配石炉3基を調査している。昭和40年調査の成果は「先史時代と長岡の遺跡」の中に報告されている[註1]。本遺跡はその後も，地元小・中学生などによって表面採集がなされ，種々の遺物が収集されていた。特に，今回発見した第1土器捨て場にあたる旧岩野原窯場付近は土器や石鏃が採集されることで，地元の人々の間には知れわたっていた。

昭和40年代に入ると長岡市内においては新幹線，国道長岡東バイパス，関越・北陸の両自動車道，長岡ニュータウン等の大型プロジェクトが軌道に乗り，また民間企業の開発事業が各地で行われることとなった。

このような開発の波は信濃川左岸の河岸段丘の岩野原遺跡にも及ぶこととなった。日本道路公団は本遺跡地及びその周辺地を関越自動車道建設に供する盛土用土砂の土取場として選定するとともに，新潟県教育委員会に対し土取場予定地内にある埋蔵文化財の調査を依頼した。これを受けた新潟県教育委員会は地域内の現地踏査を行い，岩野原遺跡が周知の縄文土器を出土するA地点と，新らたに土師器を出土するB地点の2ヵ所にわかれていることを確認した。これと併行して日本道路公団・新潟県教育委員会・長岡市教育委員会の三者で盛土材料の採取と本遺跡の調査に関する協議を開始した。協議は数回行われ，結果的には盛土材料採取前に長岡市教育委員会で発掘調査を行いその記録を保存するということで合意した。

これを受けて，長岡市教育委員会は昭和53年4月長岡市が受託者となり，日本道路公団と本遺跡の発掘調査委託契約書を取り交わした。

なお，調査は当初2ヵ年計画で実施する予定であったが，調査が進むにつれて，昭和52年12月に新潟県教育委員会の立会い指導で設定した遺跡範囲より遺跡そのものが拡大していることや，遺構・遺物量が当初の予想よりもはるかに上回ったことなどから，期日を延長して3ヵ年で現地調査を行った。

（駒形敏朗）

註1．中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館　1966年

発掘調査組織表

調査主体……長岡市教育委員会（教育長　横田　博）
調査担当者……駒形敏朗（長岡市教育委員会学芸員）
調　査　員……寺崎裕助（　　同　　上　　）
事　務　局……長岡市教育委員会　社会教育課（課長　駒形一郎）

なお、本調査の協力者は次のとおりです。

調査補助員……佐藤雅一（現　新潟県教育委員会嘱託）
　　中山誠二（現　山梨県教育委員会文化財主事）
　　安藤正美
土器復元……江尻　清　江尻昭子
発掘調査・整理……鈴木俊成　田海義正　池田晃一
　　伊沢義和　品田高志　鶴見勝司
　　原田昌幸　山崎和巳　米塚裕貴
事務補助員……小野塚ミエ　酒井滋子　堀川優子

2．発掘調査の経過

第1次調査（昭和53年4月10日～昭和53年12月10日）

4月10日に現場事務所を設置し，翌日調査器材を搬入する。12日から14日までB地区にグリッドの杭打ちを行い，17日からB地区の試掘調査に着手する。B地区の試掘調査と並行してA地区のグリッドの杭打ちをし，22日からはA地区の9～11ラインの試掘を行う。B地区の22Oで柱穴と思われる落ち込みを発見し，周辺グリッドを発掘することにした。この結果，平安時代ごろの土師器を伴う掘立柱の建物跡を2棟発掘した。B地区の発掘はこの建物跡の調査をもって終了した。

A地区の試掘は5月31日で切りあげた。試掘で確認された遺跡の範囲は新潟県教育委員会の指導で想定した範囲より広がっていることがわかり，第1次調査区域を変更することになった。また，PからVまでの試掘は葉タバコの収穫後に行った。

A地区の発掘調査は6月2日から実施した。まず，日本道路公団から要請のあった幹線道路（9～11グリッドライン）の調査を優先することにし，土砂移動の関係等から9Oに着手した。6月5日，発掘残土の処理について日本道路公団長岡工事事務所と協議をする。その中で，当初日本道路公団が予定していた表土置場の変更が知らされ，これに伴い調査グリッドの変更が生じてきた。このため，すでに着手していた9・10Oの調査は継続し，その後は9Eから調査することにし，8月中旬までは暫定的に発掘残土を9～11M・Nに集めることにした。

9・10Oの調査で第II層中に礫が多くあり，ピットも多数発見されたが，竪穴住居跡として明らかにとらえられるものは第2号・第3号住居跡などで，ピットの発見数に比較して極端に少なく，地山面までの土層が浅いことなどから竪穴住居跡の発見も含めて，調査の困難が予測された。

9月中旬には9～11E～Lまでの調査がほぼ終了する。この時点で9～11M・Nにおいた発掘残土が処理されていないため，9～11P～Rの調査に着手し，9～11M・Nは第2次調査に繰り越すことで日本道路公団と合意した。そして，9～11M・Nを通って北東側の沢へ表土運搬道路の取り付けに先立って，4～6Kの一部を急きょ9月27日から発掘した。この地点は第2次調査予定地で，試掘調査も実施しなかったところであるが，遺構・遺物とも豊富であり，遺跡の広がりを予測させた。

第1次調査は途中で種々の事情から調査区域等の変更を生じたが，12月10日に終了した。

第2次調査（昭和54年4月5日～昭和54年12月18日）

4月5日に第2次調査の現場事務所を開設し，調査器材の搬入を開始する。器材搬入と並行して発掘調査の基本杭を設置する。また，発掘方法を第1次調査の反省からベルトコンベ

アーの長さ，作業員の作業半径などを考慮して，各作業班及び各作業員ごとの区割りをして行うこととした。結果的にみて，作業時間の短縮，細かな地域での遺物収納ができるなど，第1次調査より効果があがった。そして，安全確保のためにベルトコンベアー操作係，安全推進員及び緊急医療班を作業員から選んだ。

こうして，14日までに発掘に着手できる諸態勢を整え，16日から第2次調査の発掘を開始する。調査は，第1次調査中に工事等の関係で第2次調査地に繰り越された幹線道路部分の9－11M・Nから着手した。

4月19日，9Mの第II層黒色土中に径2.2mの敷石住居跡を発見する。その地域では，第1次調査で発見された9O・Pの第II層中の礫群の続きが検出され，その範囲は9・10M・Nにわたっていた。この礫群は，8Pにまで広がっていることが後日判明した。

これまで，調査従事者がいない休日等に多くの人々が調査地に立ち入ることが度々あったため，5月12日，事故防止などに備え「立入禁止」の看板を随所に立て，調査地の周囲にロープを張りめぐらした。

6月4日，9Nの第20号ピットからクッキー状の炭化物がつまった小形石皿が出土した。

27日，7L－IX，h・iの地山面に骨の密集地が検出され，直ちに長岡警察署に通報した。骨は，事件等とのかかわり合いはないとの判断を受ける。骨の供養を正林寺に依頼した。

8月に入って調査の進み具合いを見直したところ，当初の計画より大巾に遅れていることがわかった。これは第1次調査よりも第2次調査で発見された遺構・遺物の量が多く，我々の予想をはるかに上回っていたことによる。このため，8月6日，日本道路公団と長岡市教育委員会が調査計画と土取工事との関係について見直しをし，とりあえず，次のように調査を進め，10月中旬に再度協議をすることにした。この調査は，遅れの第1原因となっている遺構の把握を主目的として行われた。これは遺構の種類及び数量をある程度知ることにより，今後本遺跡の調査を遂行するのに必要な人員と日数を予測しようということであった。これを受けて，未発掘地域の表土及び遺物包含層の発掘調査を行い，地山面での遺構確認を急ぐことにした。遺跡全体における遺構を把握することは結果的にみて，その後の調査計画をある程度細かいところまで知ることができるなどの効果があがった。

8月下旬ごろから，旧岩野原畜場に入る沢の入口部で遺物が多量に出土しはじめた。この遺物密集地域は，規模が広がりはじめたため，この地域を人為的に遺物を廃棄した場所――土器捨て場としてとらえ，特に重点的に調査することにした。9月中旬過ぎに2F・Gの北向き斜面にも土器の密集がみられ，これも土器捨て場と推定し，先に発見された6－7G・Hの土器捨て場を第1土器捨て場，2F・Gを第2土器捨て場とした。

10月14日，本日で遺構確認の作業が終了する。両次調査合わせて約160基の住居跡と約13000基のピットを確認する。この資料をもとに，日本道路公団と長岡市教育委員会とで今後

の調査と工事等の関係について，10月25日に協議を行う。当初，調査は2ヵ年で終了することになっていたが，第2次調査で遺構・遺物が第1次調査の約4倍も確認・出土したため，翌昭和55年6月まで調査を継続することにした。その後の第2次調査は，土器捨て場と2－4C～Gの遺構を調査し，残りの5～8C～Kの遺構発掘は，第3次調査に繰り越すことにした。

12月上旬に土器捨て場と遺構の発掘が終り，12月18日には遺構の図化作業も終了し，第2次調査を終結した。

第3次調査（昭和55年4月7日～昭和55年6月11日）

第3次調査は例年にない積雪のため，3月下旬に調査地域の除雪を日本道路公団からやってもらい，4月7日から発掘を開始した。第3次調査は第2次調査で確認した5～8C～Kの遺構発掘だけに限られていた。

まず，5～6D～Gにある住居跡の発掘に主体をおき，ピットの発掘は5F・Gから順次発掘地域を広げていくことにした。5F・Gに袋状ピットが多く発見されだす。袋状ピットは地山面での確認は不可能に近く，掘り下げていくうちにやっと袋状ピットと判断されるため，発掘に日数を要した。4月下旬ごろには，5・6D～Gの調査は住居跡と住居跡内の袋状ピットの発掘を残すだけとなり，作業員の一部は7・8D～Gの遺構の再確認作業に移り，順次遺構発掘に着手しはじめた。

5月に入ると突風のふき荒れる日が多く，6日には突風のため休憩用のテントが倒壊するという事故が発生した。幸い，その後の調査に支障をきたすほどの大きな事故につながらなくホッと胸をなでおろした。

8E・Fには第1次調査で発見されていた9E・Fのトンネル状遺構の開口部が多く確認された。トンネル状遺構の覆土は第1土器捨て場の地山直上の無遺物層と同じ性質をもっているとの判断から，人為的なものではないとみなし，一部を除いては発掘をしなかった。

5月中旬には第3次調査地域全体にわたって発掘が行われるようになり，5月30日には遺構の平面図実測作業を残すだけとなった。そして，6月11日，最後に残った7Kの平面図実測作業が終了し，ここに3ヵ年延345日にわたっての岩野原遺跡の発掘は終了した。その後，現場事務所の撤収や遺物の水洗いなどが6月下旬までかかり，6月30日には，全て現地における調査を完了した。

（駒形敏朗）

3．発掘調査の方法について

私達は本遺跡の発掘調査を実施していった中で，次にあげることなどを採用しながら調査を進めていった。これは他の調査団体がすでに実施していることでもあり，とりたてて述べることもないが，私達の経験や反省をまじえながら若干述べてみたい。

まず，100名前後の人員による作業だけに遺物包含層発掘班・遺構発掘班・実測班・遺物収納班などを編成することから調査を開始し，次の作業行程をつくり実施していった。

① 表土及び包含層の発掘　この時だけに限ってベルトコンベアーを使用した。そして，発掘した土砂は日本道路公団の好意でブルドーザーによって移動した。ベルトコンベアーを使っての発掘方法は「第2次調査の経過」で述べたとおりである。

② 地山面での遺構確認作業　横一列に刃付ジョレンを持った作業員を並べて端から確認する。この時，発見された遺構は平面形態に沿って線を引き，竹グシを遺構平面形態の中央部に立てる。

③ グリッドカードに確認遺構を記入　10cm×10cmの方眼目の入ったグリッドカードに10m×10mの範囲にある遺構の略図を作成する。これは遺構の位置関係を把握したり，遺構番号を確認するのに大いに効果があった。遺構番号の確認については私達は藤橋遺跡の調査の時に大きな失敗をしている。藤橋の調査では番号を記入した荷札をポリ袋に入れ竹の棒にくくりつけておいたが，ひと雨降っただけで流されてしまうものもあり，後で遺物と照合できなくなったことがあった。また，種別・数量をある程度把握できるため，その後の計画が立案しやすいなどの副次的な効果もでた。この時，平面実測用の釘を1mごとに打つ。釘はすぐにさびて，地山面と同色になるため，10mごとの基本釘は赤，1mごとの釘は青のペンキをスプレーで着色し目印とした。

④ 遺構の発掘　断面観察を行う必要のある遺構は断面の写真撮影を考慮して，東もしくは南側を発掘する。また，断面図作成の基本点の位置には白ペンキで着色した釘を実測後に打ち込む。この時，住居跡やLピットなどの遺構については「遺構カード」に調査中にしか得られない情報をメモする。しかし，この遺構カード記入は調査員が少ないことなどのため，不完全なものとなってしまった。

開口部が小さく，内部が広がって発掘に危険を伴うFピットの発掘には埋文ニュース(註1)の記事を参考にしながら，次のような方法をとった。

（イ）開口部発掘　この段階ではじめて，内部が広がるFピットと確認される。

（ロ）開口部の平面図作成　（ハ）の作業が入るため，開口部の平面形態はこの段階で記録しなければ，図化する機会を失ってしまう経験にもとづいた。

（ハ）土層断面観察のためFピットを半截して発掘

（ニ）土層断面の写真撮影及び実測図作成

（ホ）ピット残存部の発掘

上記の方法は発掘に直接たずさわる作業員の安全を確保するためであり，ここに至るまでには，天井が崩れ落ちたりしたことなどの経験があった。そして，この調査方法を採用したのは第3次調査に入ってからである。

⑤ 写真撮影　個別の遺構の写真撮影は脚立上から，全体的な写真撮影は工事用のローリングタワー上から行った。調査中に福岡県でローリングタワーが倒れ，死者が出たというニュースが入った。このため，ローリングタワーの固定には万難を排し，いわゆるカメラワークが多少悪くなろうとも足元の不安定な場所はさけるようにした。

⑥ 平面図実測　本遺跡の遺構はこれまでみてきたように住居跡をはじめ種々雑多であり，各遺構単独の実測では位置関係をつかむことは困難である。そのため大グリッドを4分割した10m×10mの範囲に含まれる遺構は全てその中で図化していった。縮尺率は全て20分の1で統一した。また，遺構の深度等を計測するための基本となるベンチマークはコンクリートの標識杭を遺跡の各所に埋設した。そして各ベンチマークの標高は日本道路公団の好意により専門家の手で近くの水準点から移動してもらった。

調査の流れを追いながら本遺跡の調査の方法を述べてきたが，この他に私達は現地において次の作業もやった。

○遺物の水洗い　主要遺物はもちろんのこと，土器片にいたる全出土遺物を現地で水洗いすることにした。水洗いを現地でやることにより，発掘調査員の目にふれない主要遺物が水洗い後の乾燥中に発見することが多かった。注記までは手が回らなかったが，注記も現地でやれれば整理作業時間の短縮が大いに計られるのではないだろうかと思われる。

○土器の復元作業　第1次調査の際は調査員が雨天等，発掘作業ができない時に少しづつやっていたが，第2次調査以降，大学の芸術科出身者の作業員で彫塑に造詣の深い方々に，専門に土器の復元作業をやってもらった。彼らの参加により博物館展示も随時可能になるなど目にみえて効果があがり，ひいては本書作成にあたっても大いに効果があがった。

私達はこのようにして調査を進めてきたが，岩野原という規模の大きい遺跡を調査するにはいろいろな方法があると思う。私達は決してこれが最良というわけではなく，専従調査員2名という中で種々の体験に基づいたものであり，この方法はやっと第3次調査が終了した段階で到達したにすぎない。（駒形敏朗）

註1．福岡県教育委員会の「埋蔵文化財調査に関する安全基準」III－13で，本遺跡のFピットと同じ貯蔵穴の調査方法が図入りで示してあり，私達はそれを参考とした。

「発掘調査と安全対策」埋蔵文化財ニュース　17，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　1979年

第 II 章　遺　　跡

1．遺跡の環境（第1図）

長岡市は新潟県のほぼ中央に位置している。西は八石山から続く東頸城丘陵にさえぎられ，東及び南には魚沼丘陵が迫り，北は新潟平野に面し，はるかに弥彦山が望まれる。市内のほぼ中央には関東山地に源を発し，長野県下では千曲川と呼称される信濃川が南－北へと貫流し，市街地を川東地区と川西地区に分断している。

信濃川は県境の津南地区から中流域の長岡までの間にいく段もの河岸段丘を発達させており，それらの段丘は地盤運動と川の作用に基づいて津南・十日町右岸地域，十日町左岸地域，小千谷南部地域，小千谷・越路町地域，関原・三島地域[註1]に5分され，川西地区は信濃川河岸段丘の北端が新潟平野に没する関原・三島地域にふくまれている。渋海川によって小千谷・越路町地域と区分される関原・三島地域には高寺面・関原面・上富岡面（以上洪積段丘），深沢面（沖積段丘[註2]）という4面の河岸段丘が現在知られており，岩野原遺跡はそのうちの上富岡面に所在する。

信濃川河岸段丘上には神山・貝坂・荒屋（旧石器），卯の木・本の木・田沢（縄文早期），泉竜寺・北原八幡・堂平（縄文前期），沖の原・城倉・大平（縄文中期），三仏生・矢原・三木明（縄文後期），朝日（第1図2）・平林（縄文晩期）など旧石器時代－縄文時代にかけての多くの遺跡が発見されており，岩野原遺跡が所在する関原・三島地域でも高寺面5ヵ所（中期4・後期1・時期不明1），関原面11ヵ所（早期1・中期7・後期3），上富岡面8ヵ所（前期1・中期3・後期5・晩期2），深沢面1ヵ所（中期）など25ヵ所の遺跡[註3]が1975年現在確認されている。中でも岩野原遺跡（中・後期）（第1図1），藤橋遺跡（中－晩期）（第1図3），馬高・三十稲場遺跡（中・後期）（第1図4）は①広い平坦面を有する台地上に立地している。②多数の住居跡及び貯蔵穴，墓壙群などのピット群の存在が確認又は予測される。③土器，石器など各種遺物が豊富であり，特に土偶，石棒などその時代のいわゆる特殊遺物がしばしば認められる。④継続的な定住地となっていた可能性が強いなど大遺跡[註4]としての特徴をかねそなえている。この3遺跡は約3kmの距離を隔てて所在し，周辺部にはより小規模と考えられる遺跡が点在している。

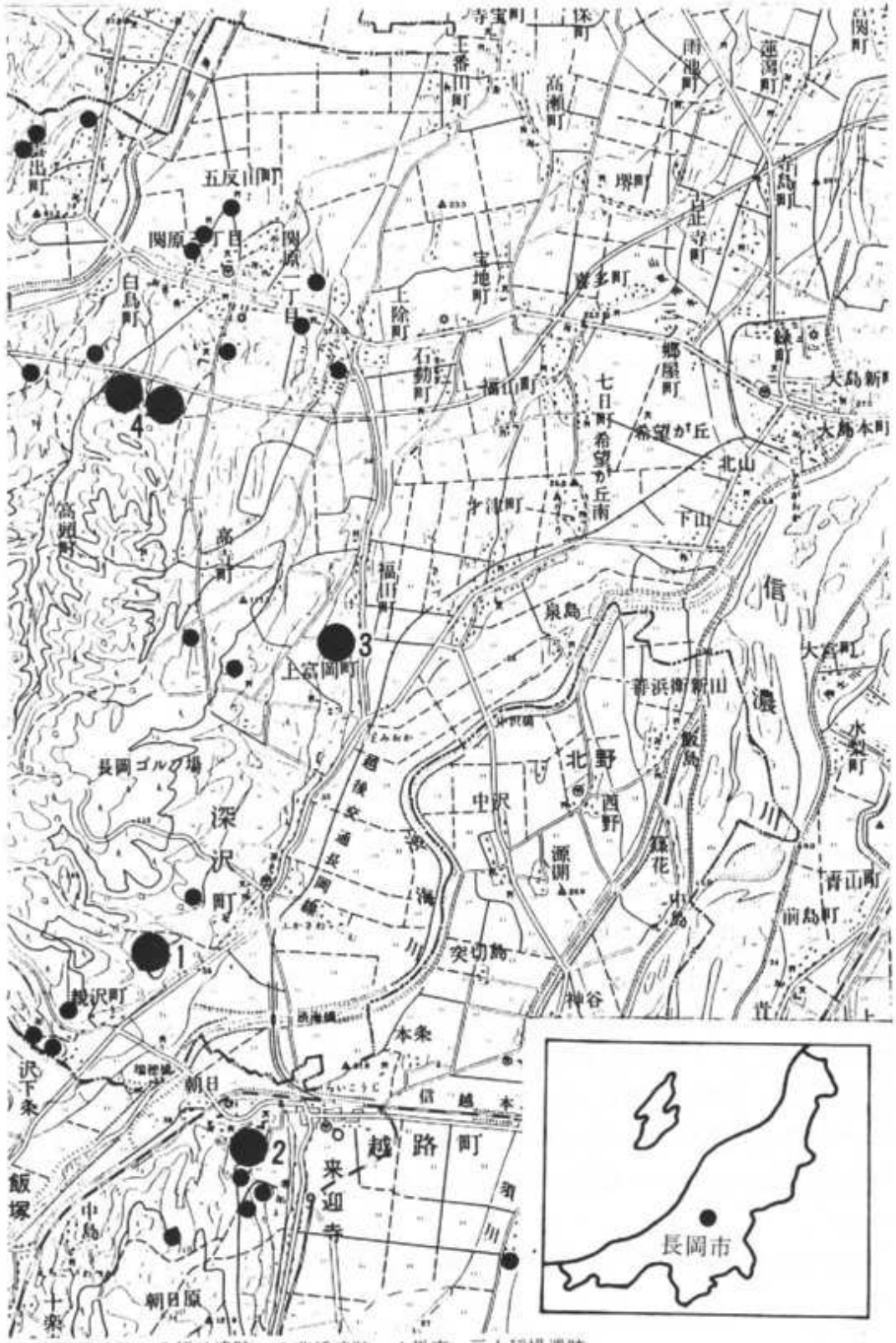
（寺崎裕助）

註1　新潟平野団体研究グループ「信濃川の河岸段丘」URBAN・KUBOTA　1979年

註2　註1と同じ

註3　小林達雄「信濃川・阿賀野川流域の先史文化」URBAN・KUBOTA　1979年

註4　小林達雄「多摩ニュータウンの先住者」月刊文化財　1973年



1 岩野原遺跡　2 朝日遺跡　3 藤橋遺跡　4 馬高・三十稲場遺跡

第1図　遺跡位置図　（1：50000長岡）

2．グリッドの設定（第2図）

今回の調査は日本道路公団が本遺跡を含む台地全体の土砂採取を行うことに起因しているため，遺跡全体が対象地となった。本遺跡は縄文時代集落のA地区と土師器が採集されたB地区にわかれている。

調査は遺跡の範囲をより明確にするため，まず試掘調査を全域に行い，その後に発掘調査を実施した。このため，調査はA地区・B地区とそれぞれ単独に行うことはせず，岩野原遺跡という大きなワクの中で実施することにした。

発掘調査のグリッドは遺跡全体を覆うように設定した。グリッド基本線は方位にとらわれることなく，地形を考慮して日本道路公団が沖積地から山側にむかって10mおきに設置した工事用の基本杭を利用した。グリッドの原点は図上でA地区をとおる工事用の基本杭から北東へ200mのところにおき，原点から南西をX軸，北西をY軸とした。グリッドの区画は20×20mを大グリッド，大グリッドをさらに2×2mの区画に分けて小グリッドとした。グリッドの名称は大グリッドのX軸を1・2……n，Y軸をA・B……Z，小グリッドのX軸をⅠ・Ⅱ……X，Y軸をa・b……jの記号をつけ，8K－Ⅵ，dなどと呼称した。

このうち，試掘調査は10×10mの区画で2×4mのグリッドを原則として行い，発掘調査は試掘調査の結果をもとに第2図で示した範囲で実施した。（駒形敏朗）

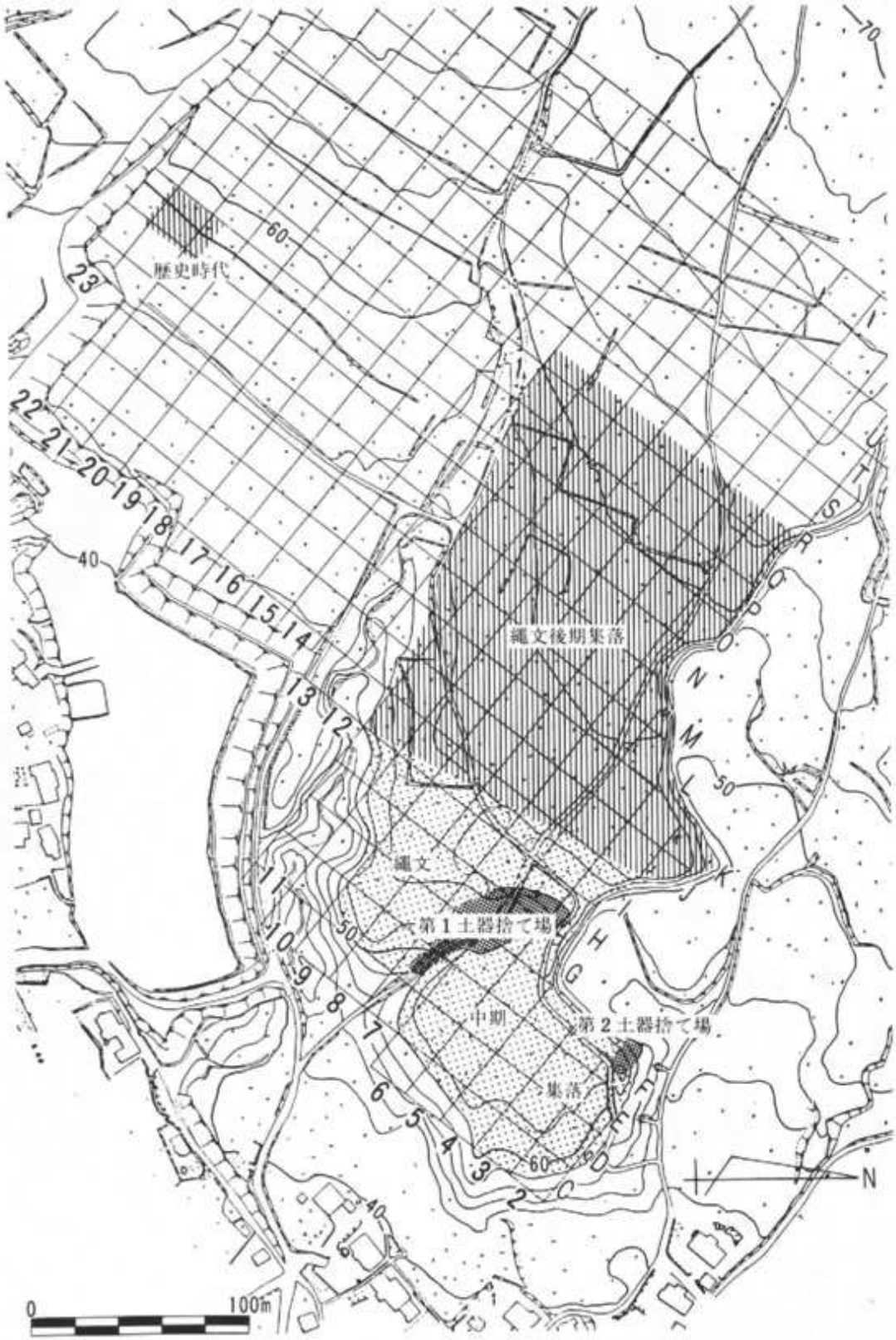
3．土層（第3図）

本遺跡における基本層序は第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ層からなっており，第Ⅴ層は沢筋及び斜面にのみ認められた。

A地区では地山面はほぼ北西～南東方向に傾斜し，Iライン以西の後期のエリアでは8・9Pを中心として黒色土が厚く堆積していた。遺物包含層（以下第Ⅱ層とする）も明確に認められ，一括土器をはじめとした多くの遺物が第Ⅱ層中より出土した。また第4号・第16号住居跡の炉跡（石囲い炉），敷石住居跡（第34号住居跡），9Pの礫群なども第Ⅱ層中より検出され，10O－L140も同層中より掘り込まれていることから後期の生活面の存在が第Ⅱ層中にうかがえる。Iライン以東の中期エリアでの黒色土の堆積は北側の2～6C～F付近ではうすく，南側の9－11D－G付近では比較的厚かった。しかし第Ⅱ層は明確には把握されず，断片的に認められたのみであった。遺物も地山面に掘り込まれた住居跡等の遺構，又は沢及び斜面を利用した土器捨て場から主に出土し，第Ⅰ－第Ⅲ層中からの出土は少量であった。

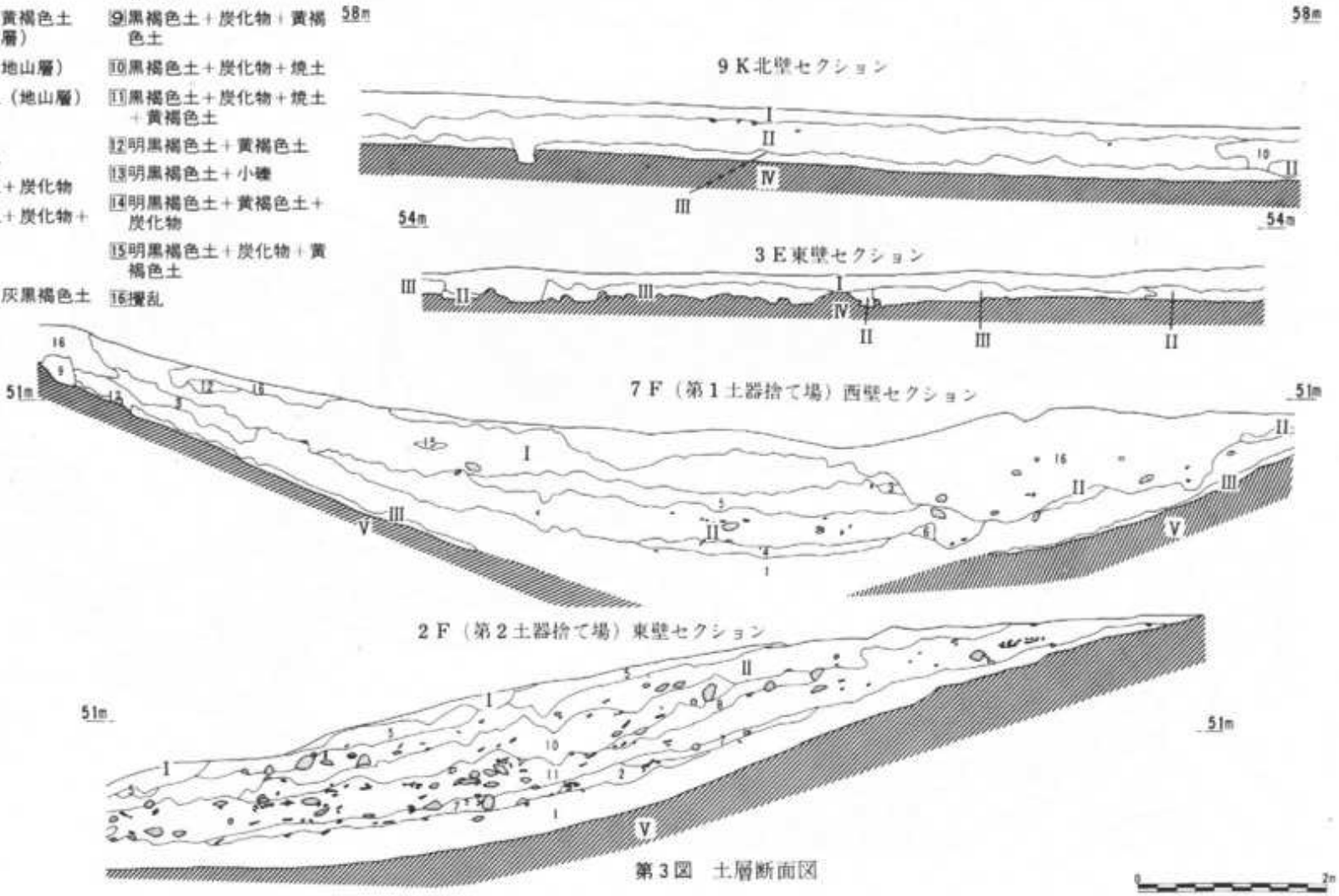
B地区では第Ⅱ層はほとんど見られず，建物跡が発見された箇所にわずかに認められた。

（寺崎裕助）



第2図　グリッド設定図

Ⅰ明黒褐色土（表土）
Ⅱ黒褐色土＋炭化物（遺物包含層）
Ⅲ黒褐色土＋黄褐色土（地山漸移層）
Ⅳ黄褐色土（地山層）
Ⅴ黄黒褐色土（地山層）
1黒色土
2暗黒褐色土
3暗黒褐色土＋炭化物
4暗黒褐色土＋炭化物＋焼土
5黒褐色土
6黒褐色土＋灰黒褐色土
7黒褐色土＋黄褐色土＋礫
8黒褐色土＋黄褐色土＋炭化物
9黒褐色土＋炭化物＋黄褐色土
10黒褐色土＋炭化物＋焼土
11黒褐色土＋炭化物＋焼土＋黄褐色土
12明黒褐色土＋黄褐色土
13明黒褐色土＋小礫
14明黒褐色土＋黄褐色土＋炭化物
15明黒褐色土＋炭化物＋黄褐色土
16攪乱



第3図　土層断面図

第Ⅲ章　縄文時代

第1節　遺　　構

本遺跡の集落を構成する遺構に，中期は住居跡が82基・袋状ピット・楕円形で浅いピット・柱穴と思われるピットそれに沢や斜面を利用した土器捨て場など，後期は敷石住居跡を含む住居跡が81基・大ピット・柱穴と思われる小ピットなどがある。ピットの種類はこの他にも分類されるかもしれない。また，現状では各ピットの数量について充分につかめない。

なお，遺構の記述及び図示については下記の方法をとっている。

○住居跡　住居跡番号は遺跡全体における一連番号で，頭に「H」をつけて図示した。敷石住居跡も他の住居跡と同じように扱い，H34は敷石住居跡である。

○ピット　ピット番号は大グリットにおける一連番号で，ピット番号の前に大グリット名をつけた。また，ピット番号の頭に袋状ピットは「F」，楕円形で浅いピットは「G」，大ピットは「L」，その他は全て「P」をつけて記述及び図示した。

例．袋状ピット……8G－F1

楕円形で浅いピット……4E－G11

大ピット……10M－L5

その他のピット……9K－P4

○実測図　・礫……目の細かいドット

・焼土……目の粗いドット

・土器……平面図「P」

断面図…黒ベタ

・袋状ピット（遺構位置図を除く）

開口部の上端……1点鎖線

底面の下端……実線

底面にあるピット……実線

ただし，住居跡実測図中の袋状ピットは，開口部を1点鎖線，底面の下端及びピットは2点鎖線で図示した。

・断面図の土層説明　住居跡は各実測図の中に，ピットは45ページに示した。

・断面図の数字は標高を示し，単位はメートルである。

○遺物について　遺構出土の遺物で土器以外の主たるものは各遺構の項目中に記述した。

（駒形敏朗）

1．縄文中期の遺構

（1）住居跡

○第5号住居跡（第4図）

位　置：9F－II～IV，c～eに所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約490cmを測る。

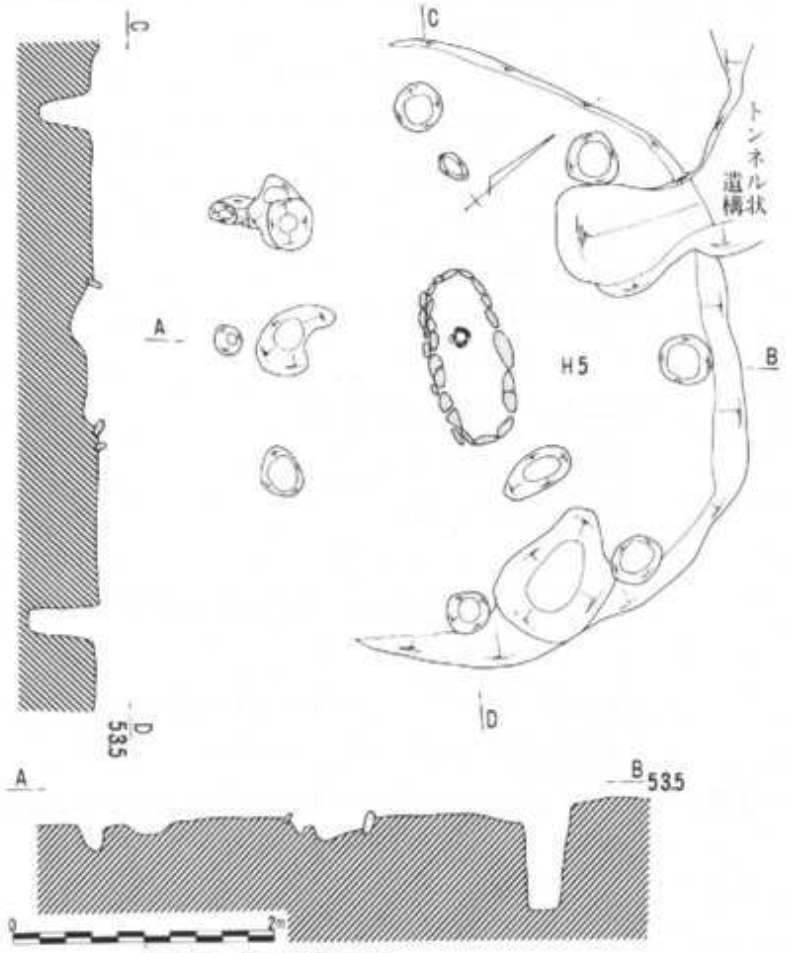
壁　：南東～北西にかけて認められた。約45度～約80度の角度で立ち上がっており，壁高は床面より約5cm～約10cmである。

炉　：長径約140cm，短径約60cmを測る楕円形の石囲い炉であり，炉内中央よりやや西よりの箇所に埋甕が認められた。

柱　穴：主柱穴は8本と考えられる。

遺　物：土器以外に石皿3点，磨石2点，凹石1点，打製石斧1点，磨製石斧1点等が出土している。

その他：北東部分に認められたトンネル状遺構の上には貼り床が認められ，この住居跡よりも古い時期の所産と考えられる。周溝は発見されず，なかったものと判断される。



第4図　第5号住居跡

○第6号住居跡（第5図）

位　置：9G－VI～VIII，a・bに所在する。

プラン：柱穴の位置関係から楕円形ではないかと推測される。

炉　：長径約120cm，短径約40cmの長円形の石囲い炉が黒色土中より検出された。

柱　穴：主柱穴は９～10本と考えられる。

遺　物：土器以外に石皿１点，凹石１点，打製石斧１点，磨製石斧１点，フレイク５点等が出土している。

その他：黒色土中に構築された住居跡であったため床及び周溝は確認できず，規模及び壁は不明である。

○第98号住居跡（第６図）

位　置：６Ｈ－Ⅷ～Ｘ，ｈ・ｉに所在する。

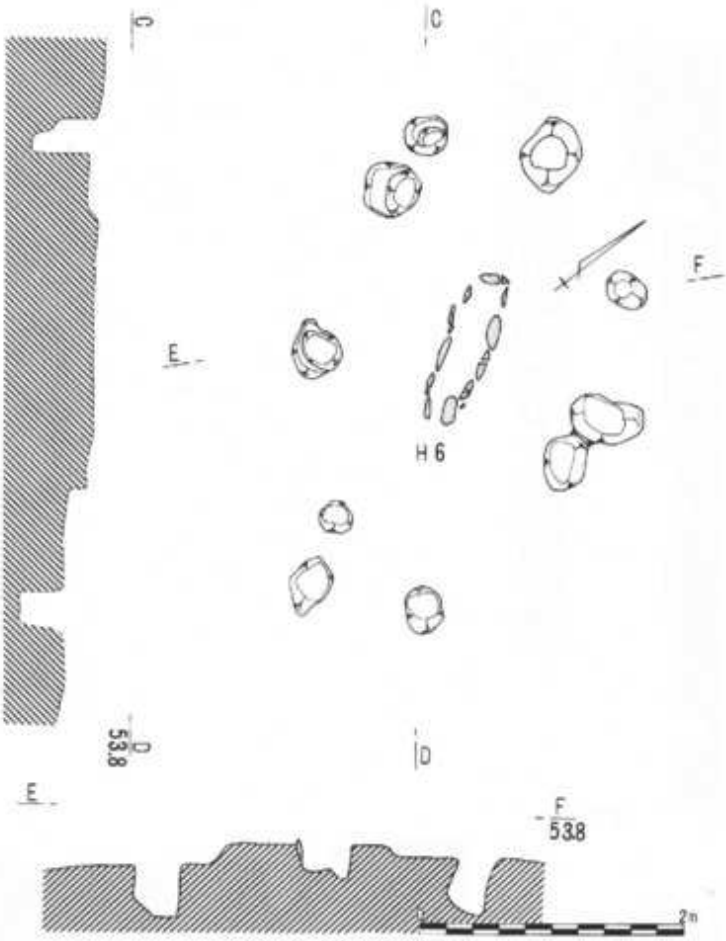
壁　：南西側の一部分にのみ認められた。立ち上がりは明確ではなく，テラス状遺構から，だらだらと立ち上がっている。

炉　：長辺約140cm，短辺約50cmの長方形の石囲い炉であり，炉内のほぼ中央には埋甕が認められた。炉跡西側と東側に隣接する床面上に焼土が散布している。

柱　穴：主柱穴は８本と考えられ，床面からテラス状遺構への立ち上がり部分にそってめぐっている。

遺　物：土器以外に石皿１点，凹石１点，打製石斧１点，磨製石斧１点，フレイク５点等が出土している。

その他：床面からの高さ約20cmを測るテラス状遺構が東側と南西側に認められた。プラン及び規模は不明であり，周溝は確認されず，なかったものと判断される。



第５図　第６号住居跡

○第100号住居跡（図版第9図　第7図）

位　置：7H－Ⅵ～X，a～eに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約700cm，短径約600cmを測る。

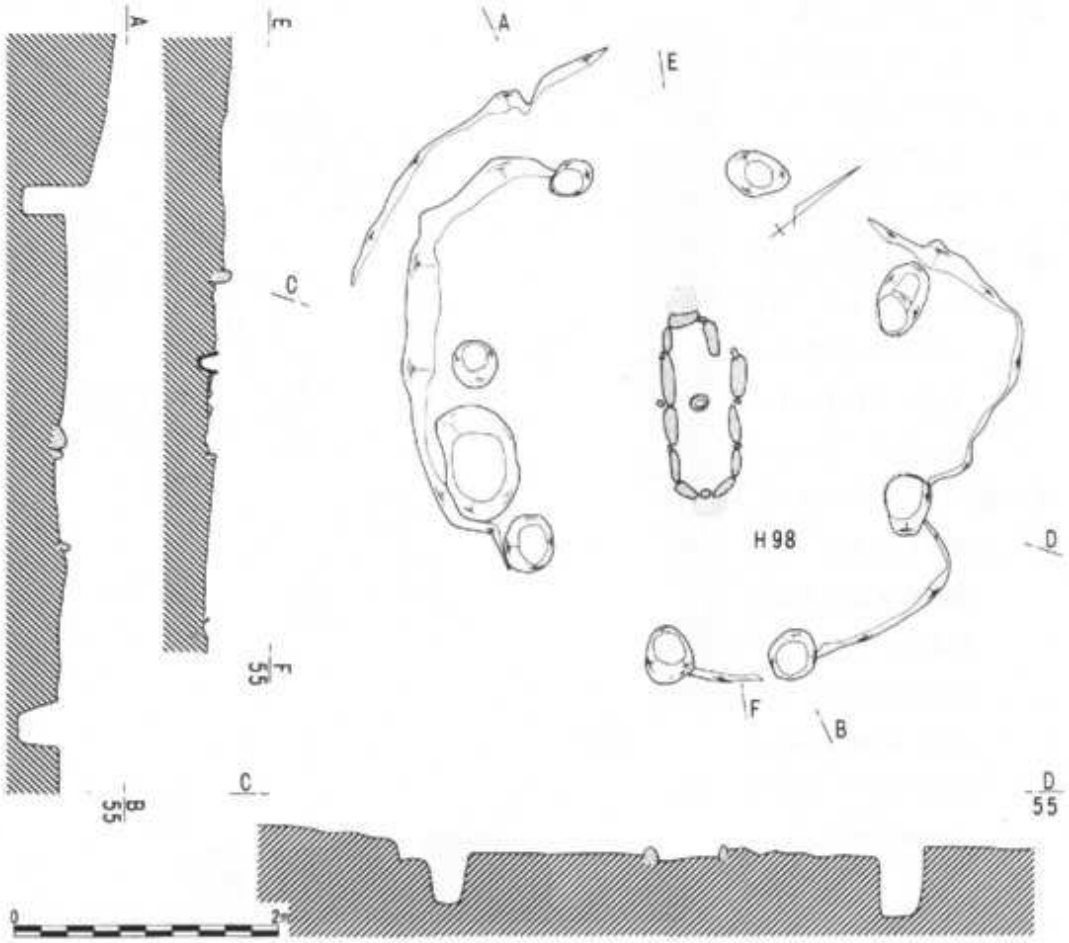
壁　：ほぼ全周にわたって確認された。約30度～約70度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約15cm～約25cmである。

周　溝：南側・北側及び西側の一部分に認められた。幅約20cm～約70cm，確認面からの深さ約10cm～約40cmである。

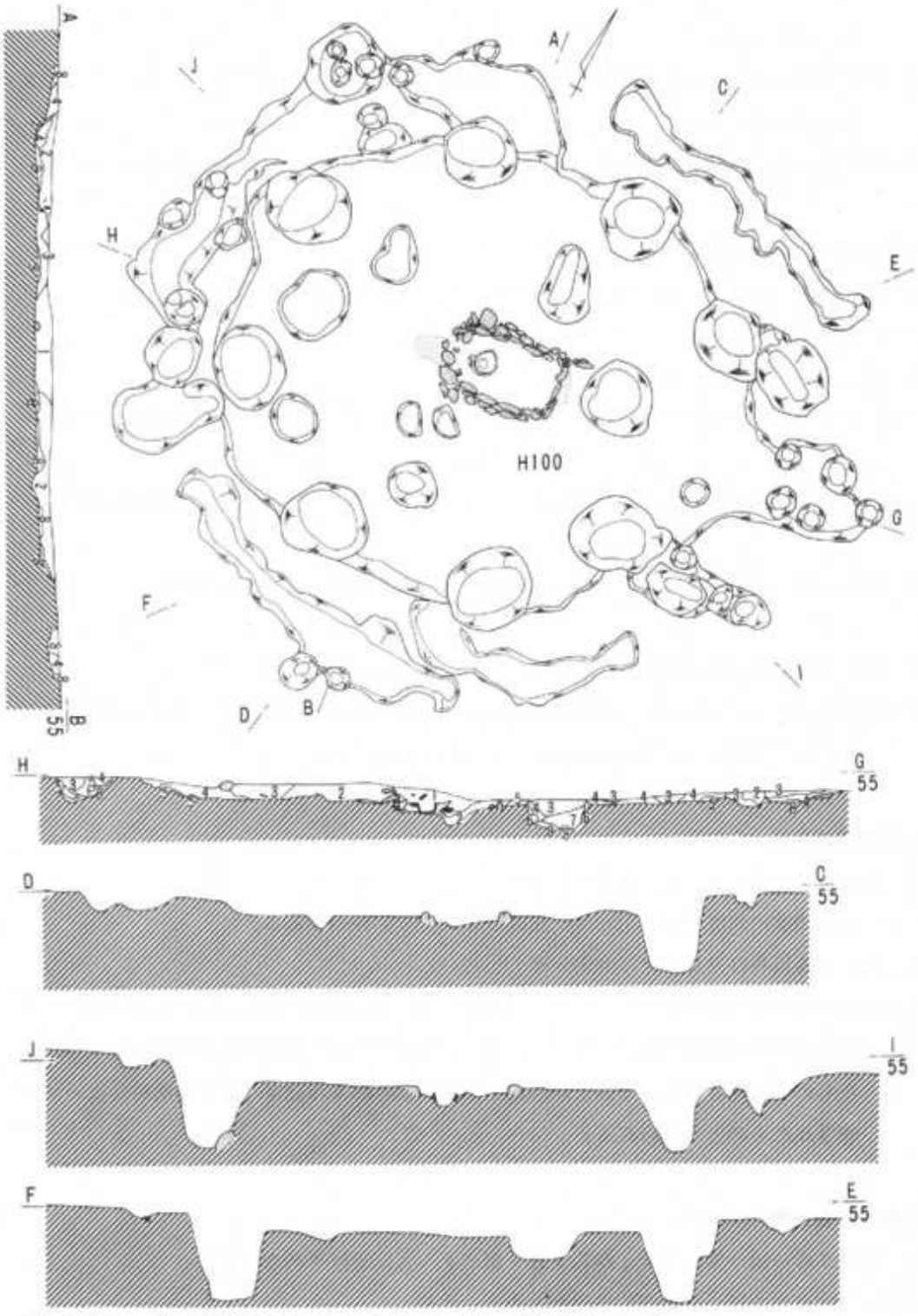
床　：炉の西側及び東側に隣接する箇所に焼土が散布している。

炉　：長辺約110cm，短辺約60cmの石囲い炉であり，炉内西側には埋甕が認められた。炉内全体からよく焼けて固まった焼土が検出された。

柱　穴：主柱穴は8本と考えられ床面からテラス状遺構への立ち上がりの箇所にめぐっている。主柱穴直径約60cm～約70cm，間隔約90cm～約150cmである。主柱穴間隔は東側部分のみ約200cmを測り，その部分から東方へ小ピットがのびており入口部分ではない



第6図　第98号住居跡



第7図　第100号住居跡

かと考えられる。

遺　物：土器以外に石皿1点，凹石1点，磨石6点，石錘1点，石匙2点，フレイク3点等が出土している。

その他：幅約20cm～約60cm，床面からの高さ約15cmを測るテラス状遺構が認められた。

○第101号住居跡（第9図）

位　置：7H－Ⅸ・Ⅹ，b～dから8H－Ⅰ，b～dにかけて所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約530cmを測る。

壁　：北・南・西側に認められた。約30度～約60度で立ち上がり，壁高は床面より約30cmである。

炉　：長辺約100cm，短辺約40cmの長方形の石囲い炉であり，炉内中央には埋甕が認められた。

柱　穴：主柱穴は7本と考えられる。床面からテラス状遺構へ立ち上がる箇所にそってめぐっている。

遺　物：土器以外に磨石2点，凹石3点，軽石1点等が出土している。

その他：幅約60cm，床面からの高さ約10cm～約20cmを測るテラス状遺構が南側と北側に認められた。周溝は発見されず，なかったものと判断される。

○第104号住居跡（第8図）

位　置：7H－Ⅳ・Ⅴ，a～dに所在する。

壁　：約45度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cmである。

遺　物：土器以外にフレイク1点等が出土している。

その他：幅約50cm～約80cmを測るテラス状遺構が北西部に認められる。東側では第105号・第111号住居跡と切り合っている。プラン及び規模は不明であり，周溝は確認されずなかったものと判断される。なお，炉跡は第105号住居跡または第111号住居跡によって破壊されたものと考えられる。

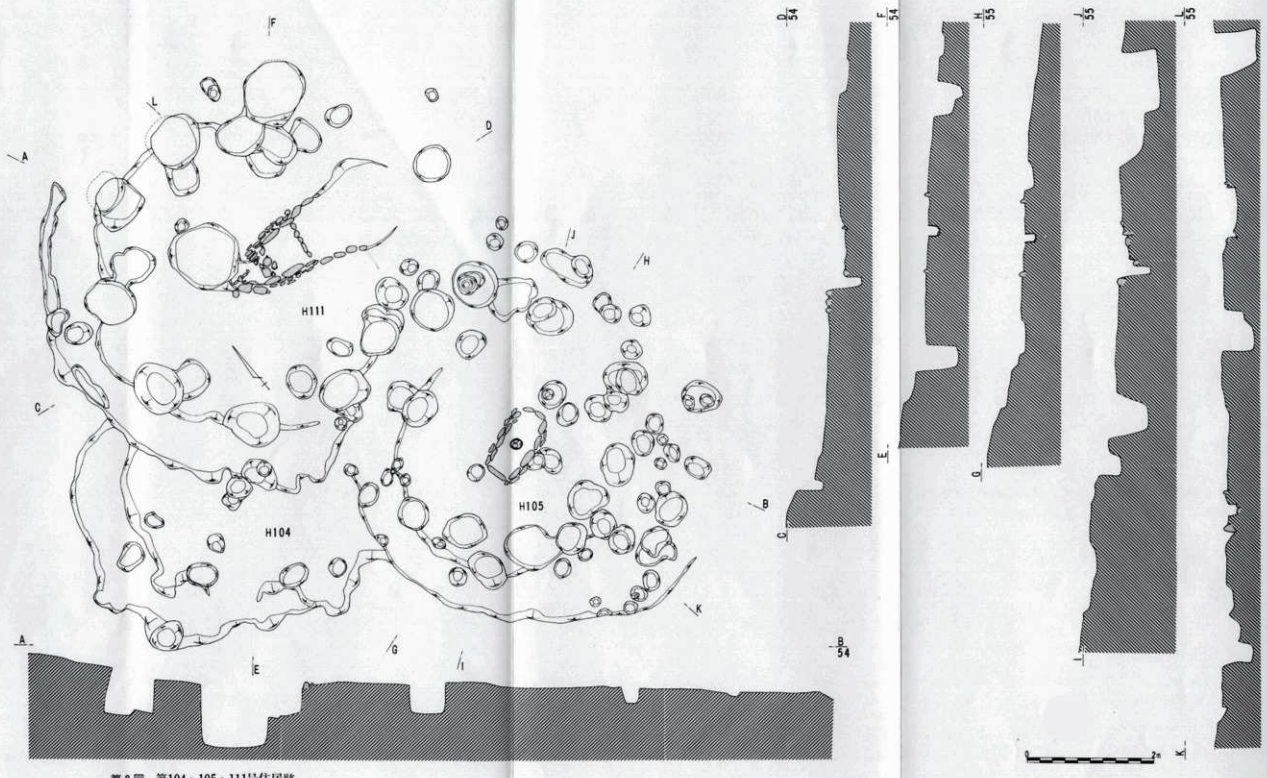
○第105号住居跡（第8図）

位　置：7G－Ⅲ～Ⅴ，i・jから7H－Ⅲ～Ⅴ，aにかけて所在する。

プラン：残存する壁から推測して円形と考えられる。

規　模：直径約600cmを測る。

壁　：西側にのみ認められた。約45度の角度で立ち上がり壁高は床面より約30cmである。



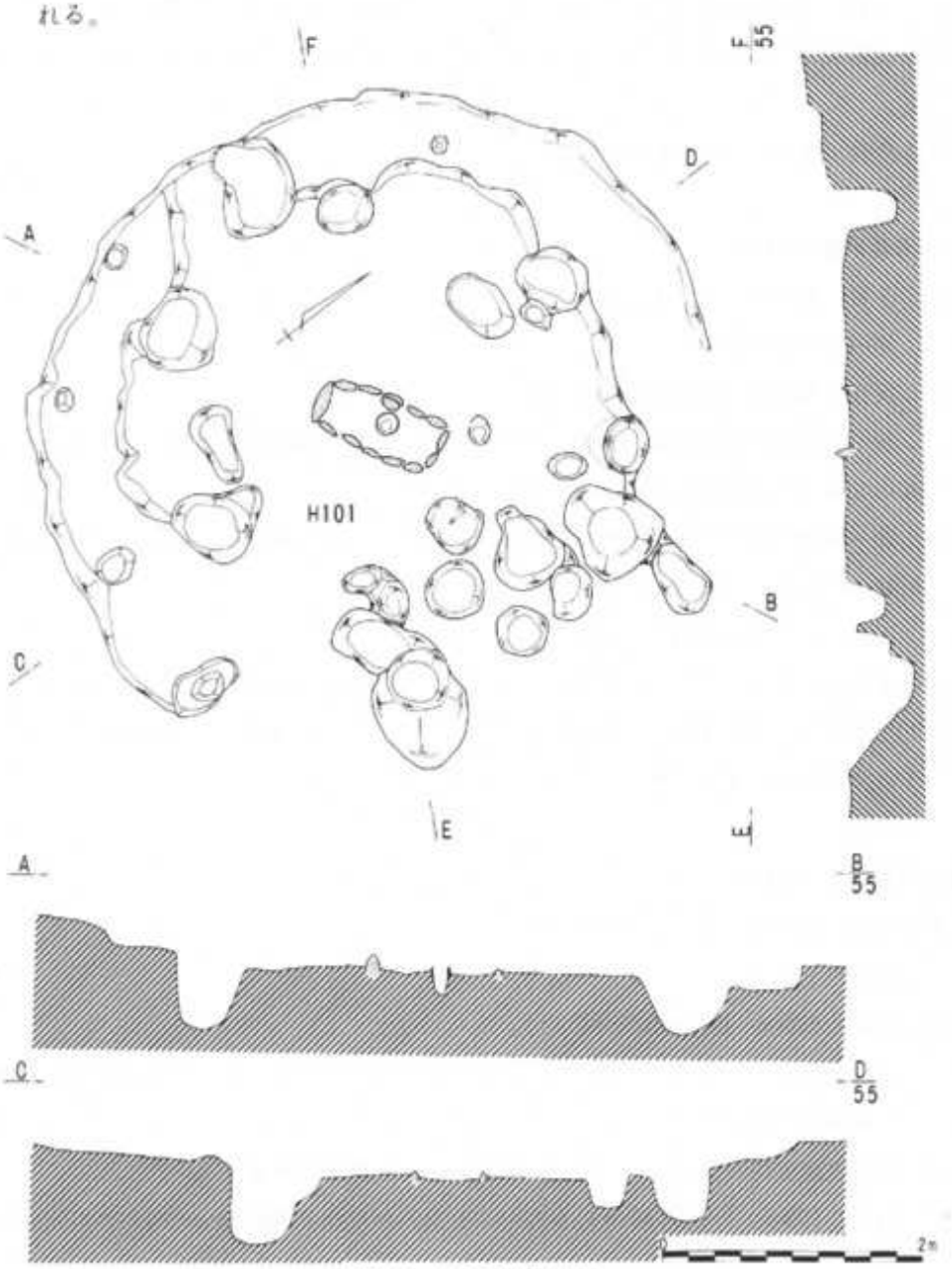
第8図　第104・105・111号住居跡

炉　：長辺約100cm，短辺約50cmの長方形の石囲い炉であり，炉内中央に埋甕をもっている。埋甕中には拳大の礫が数個認められた。

柱　穴：主柱穴は床面からテラス状遺構へ立ち上がる箇所にめぐっており，10本と考えられる。

遺　物：土器以外に凹石1点，石錘1点，フレイク1点等が出土している。

その他：西側に幅約50cm～約60cm，床面からの高さ約10cmを測るテラス状遺構が認められた。北側は第111号住居跡と切り合っている。周溝は確認されず，なかったものと判断される。



第9図　第101号住居跡

○第111号住居跡（第8図）

位　置：7H－I～Ⅳ，a～cに所在する。

プラン：残存する壁，主柱穴の配列から推測して，楕円形と考えられる。

規　模：長径約770cm，短径約700cmを測る。

壁　：西側にのみ認められた。ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は床面より約40cmである。

周　溝：北西側にのみ残存し幅約20cm，確認面からの深さ約40cmである。

炉　：A字形の石囲い炉であり，住居跡中央よりやや東側に位置している。

柱　穴：主柱穴は9本と推測され，床面からテラス状遺構へ立ち上がる箇所にめぐっている。

遺　物：土器以外に石皿3点，磨石2点，凹石3点，石錘2点，黒曜石1点等が出土している。

その他：南側は第105号住居跡と切り合っている。

○第106号住居跡（第10図）

位　置：7H－II～Ⅳ，e～hに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約730cm，短径約540cmを測る。

壁　：谷への傾斜が始まる東側を除く全てに認められた。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約20cm～約50cmである。

周　溝：北～西側にかけてと南側の一部分に認められた。幅約20cm～約40cm，深さ約20cm～約40cmである。

炉　：石囲い炉であるが道路で半壊している。

柱　穴：主柱穴は7本と考えられ床面からテラスへ立ち上がる箇所にめぐっている。

遺　物：土器以外に土偶1点（図版第22図1），凹石1点，石錘2点，石鏃1点，打製石斧1点，磨製石斧1点，フレイク3点等が出土している。

○第107号住居跡（第10図）

位　置：7H－II－Ⅳ，h～jに所在する。

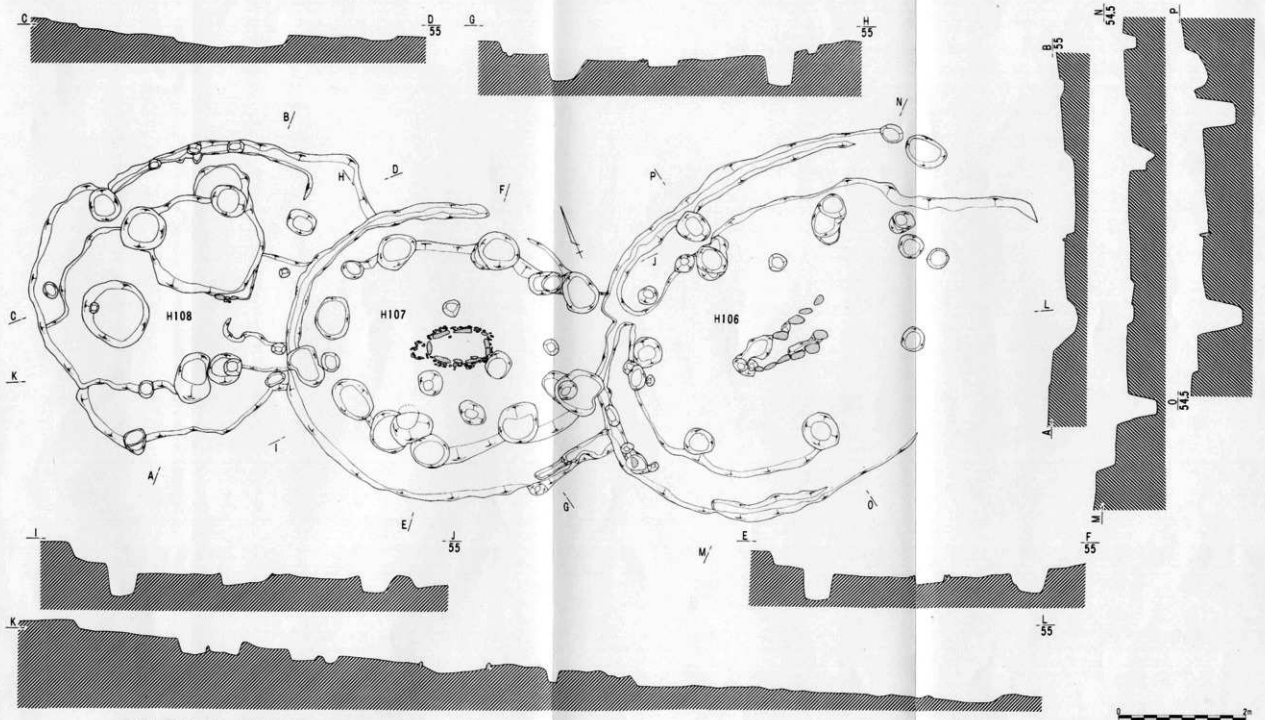
プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約520cm，短径約470cmを測る。

壁　：ほぼ全周にわたって認められた。約70度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約50cmである。

周　溝：北西と南東の一部に認められた。幅約20cm～約30cmである。

炉　：長辺約100cm，短辺約40cmの長方形の石囲い炉及び直径約30cmの円形の石囲い炉か



第10図　第106・107・108号住居跡

らなっている。

柱　穴：主柱穴は9本と考えられ，床面からテラスへ立ち上がる箇所にめぐっている。

遺　物：土器以外に土偶1点（図版第22図18），石皿2点，凹石2点，石錘1点，打製石斧1点，磨製石斧2点，磨石2点，石槍1点（図版第27図4），フレイク7点，石匙1点等が出土している。

その他：東側は第106号住居跡と切り合っている。

○第108号住居跡（第10図）

位　置：7H－II－Ⅳ，jから7I－II－Ⅳ，a・bにかけて所在する。

壁　：東側を除くほぼ全周で認められた。約30度～約45度で立ち上がり，壁高は床面より約5cm～約10cmである。

炉　：石囲い炉の残欠らしき石組が認められた。しかし，後世に掘り込まれたピットにより大半が破壊されており詳細は不明である。

遺　物：土器以外に磨石1点等が出土している。

その他：東側が第107号住居跡によって立ち切られており，プラン・規模・主柱穴は不明である。また，周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第109号住居跡（第12図）

位　置：8G－I－Ⅳ，i・jから8H－I－Ⅳ，a・bにかけて所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約750cm，短径約630cmを測る。

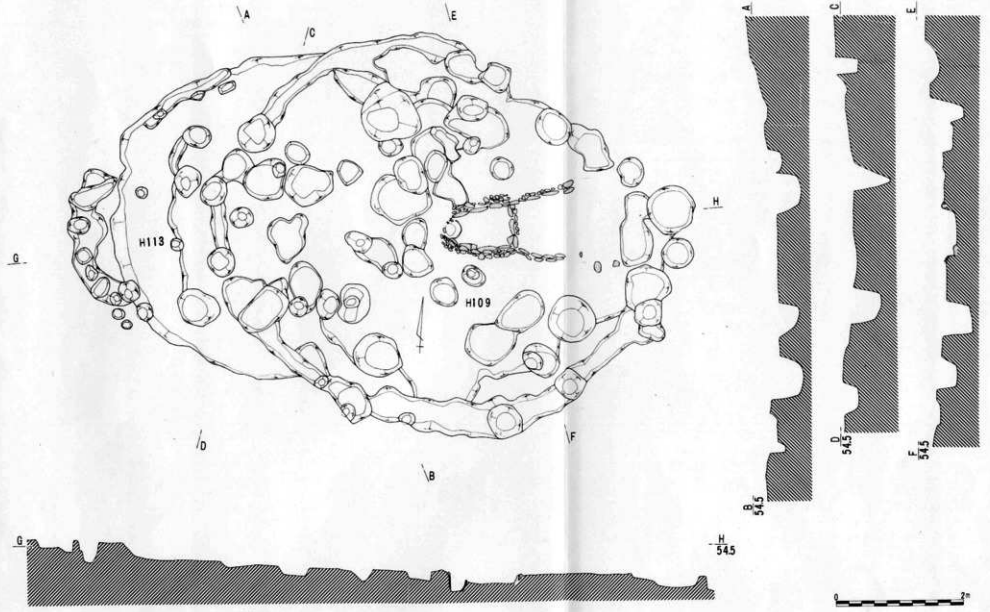
壁　：全周で認められた。約60度～約90度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

周　溝：東側を除く全ての箇所で認められた。幅約20cm～約60cm，確認面からの深さ約10cm～約20cmである。

炉　：住居跡内の中央よりやや東側に位置している。A字形の石囲い炉であり西端には埋甕が認められた。

遺　物：土器以外に凹石1点，磨石1点，石錘1点，フレイク2点等が出土している。

その他：南側2箇所に幅約20cm～約40cm，床面からの高さ約10cm～約20cmを測るテラス状遺構が認められた。西側では第113号住居跡と切り合っている。主柱穴は不明であった。



第12図　第109・113号住居跡

○第113号住居跡（第12図）

位　置：8H－I～Ⅳ，a～cに所在する。

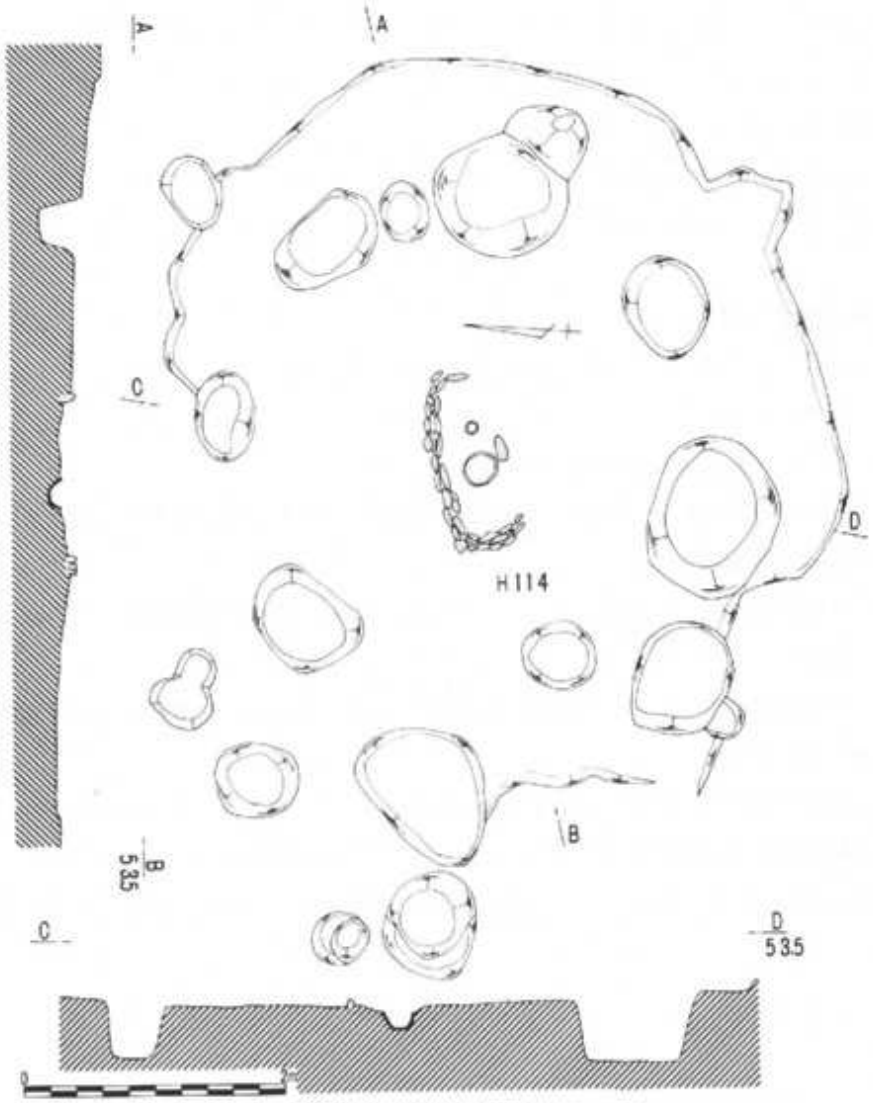
プラン：円形又は楕円形と考えられるが東側で第109号住居跡と切り合っているため詳細は不明である。

壁　：西側と北側に認められた。約30度～約90度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

周　溝：北側の一部分に認められた。幅約20cmである。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：西側に床面からの高さ約10cmを測るテラス状遺構が認められた。規模は不明であり，炉跡は第109号住居跡によって破壊されている。



第11図　第114号住居跡

○第114号住居跡（第11図）

位　置：８Ｇ－Ⅱ～Ⅴ，ｆ－ｈに所在する。

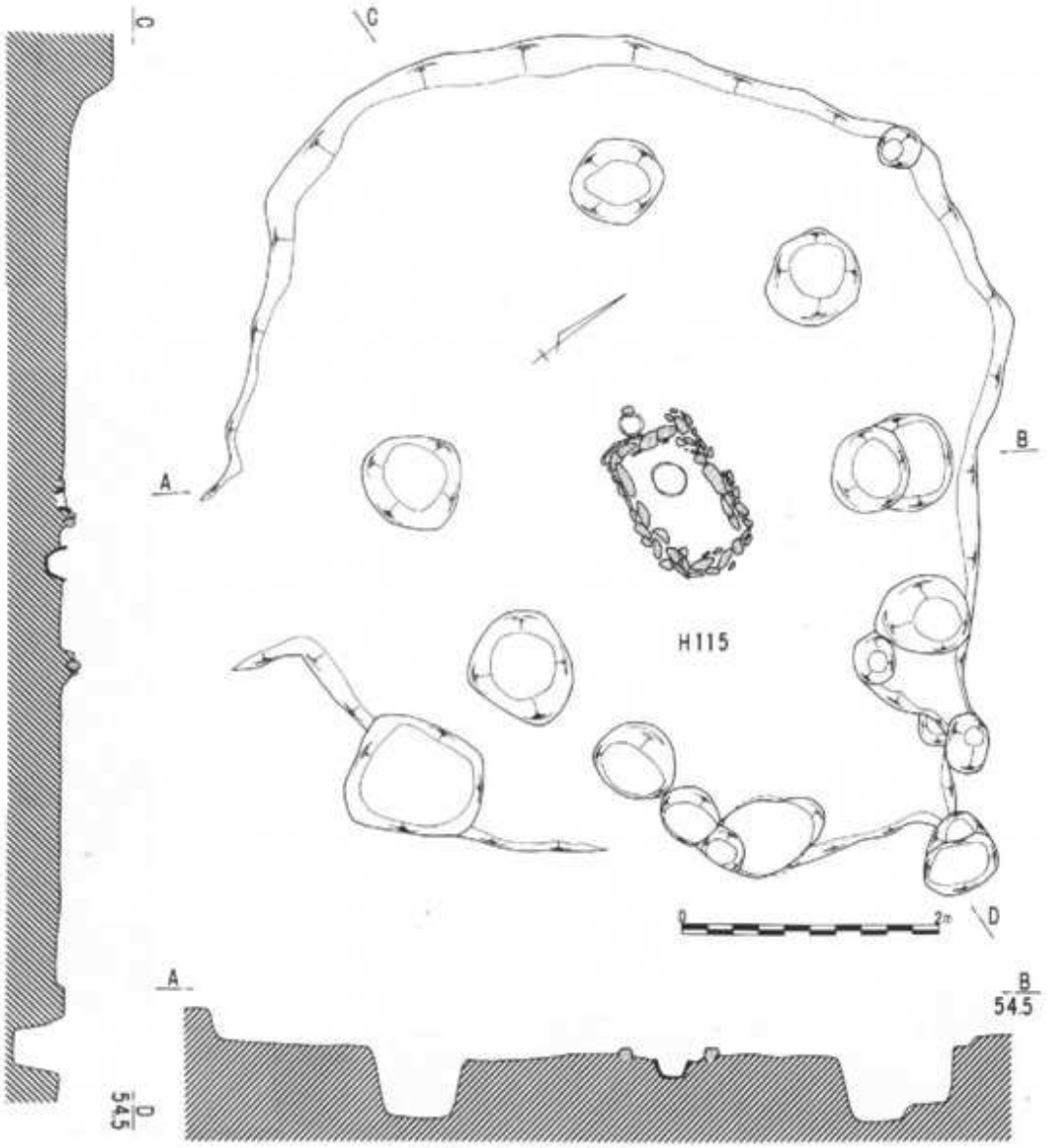
プラン：円形を呈する。

規　模：直径約560cmを測る。

壁　：北西側を除く全ての箇所で認められた。約45度～約70度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cmである。

炉　：長辺約150cm，短辺約60cmの長方形の石囲い炉で，炉内中央と東側に埋甕が認められた。

柱　穴：主柱穴は約８本と考えられる。



第13図　第115号住居跡

遺　物：土器以外に三角形土製品１点，凹石１点，磨製石斧１点，フレイク１点等が出土している。

その他：周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第115号住居跡（第13図）

位　置：８Ｇ－Ⅶ～Ⅹ，ｆ～ｈに所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約600cmを測る。

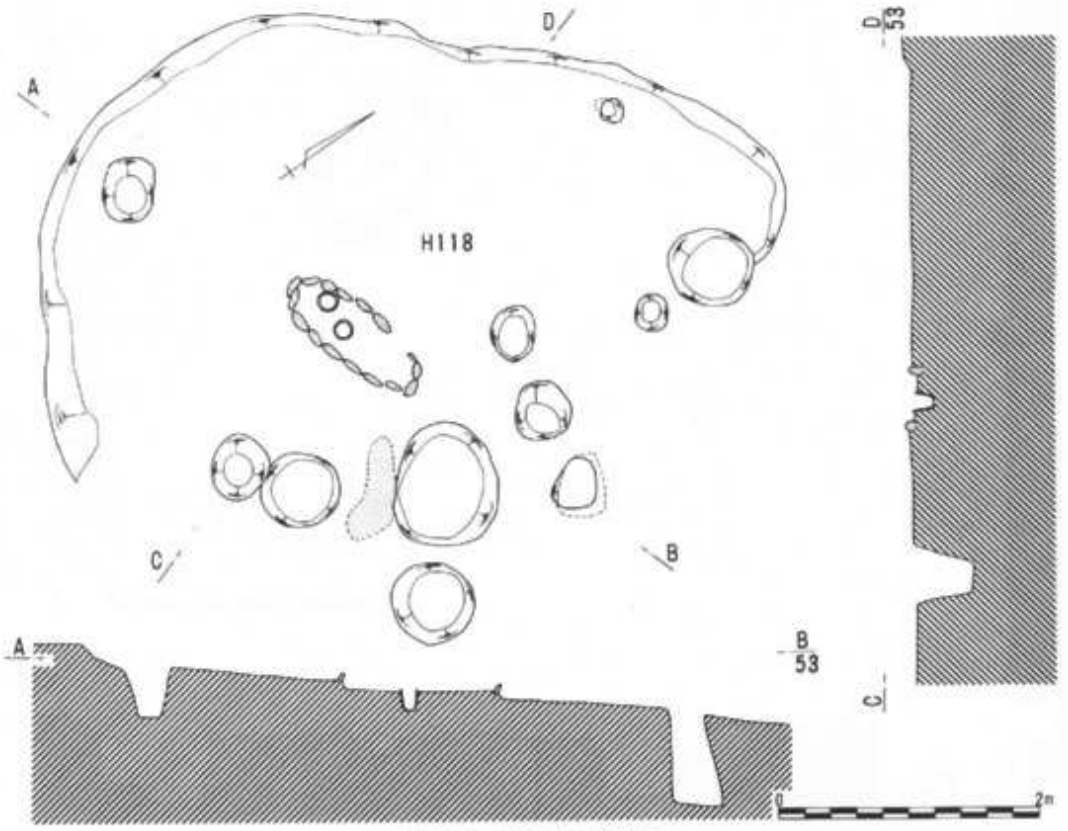
壁　：ほぼ全周にわたって認められた。約50度～約70度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約30cmである。

炉　：長辺約120cm，短辺約80cmの長方形の石囲い炉で炉内中央よりやや西側の箇所と炉の西側に隣接する床面上に埋甕が認められた。

柱　穴：主柱穴は８本と考えられる。

遺　物：土器以外に石皿１点，砥石１点，石錘１点，フレイク１点，原石１点等が出土している。

その他：周溝は確認されず，なかったものと判断される。



第14図　第118号住居跡

○第118号住居跡（第14図）

位　置：8Ｆ－Ⅳ，ａ・ｂに所在する。

壁　：東側を除いた全てに認められた。約45度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cmである。

炉　：長径約120cm，短径約60cmの長円形の石囲い炉，炉内の西側と北側の2箇所に埋甕が認められた。

遺　物：土器以外に打製石斧1点，磨製石斧1点等が出土している。

その他：南東の床面上に約80cm×約30cmの範囲で焼土が認められた。柱穴は不明であり，東側の壁が確認されなかったため，プラン及び規模も明らかにならなかった。

○第119号住居跡（第15図）

位　置：8Ｅ－Ⅷ～Ｘ，ｊから8Ｆ－Ⅷ～Ｘ，ａ～ｃにかけて所在する。

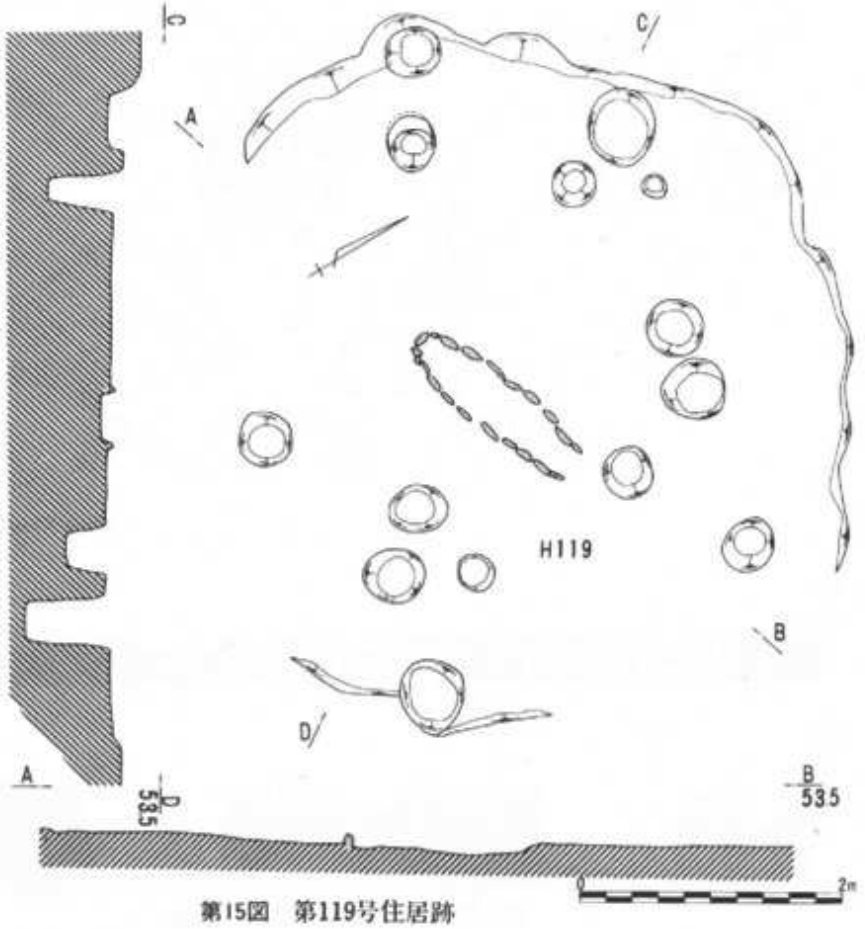
プラン：円形を呈する。

規　模：直径約530cmを測る。

壁　：北・西・南側で認められた。約45度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

炉　：長径約160cm，短径約40cmの長円形の石囲い炉である。

遺　物：土器以外に石皿1点，磨石1点等が出土して



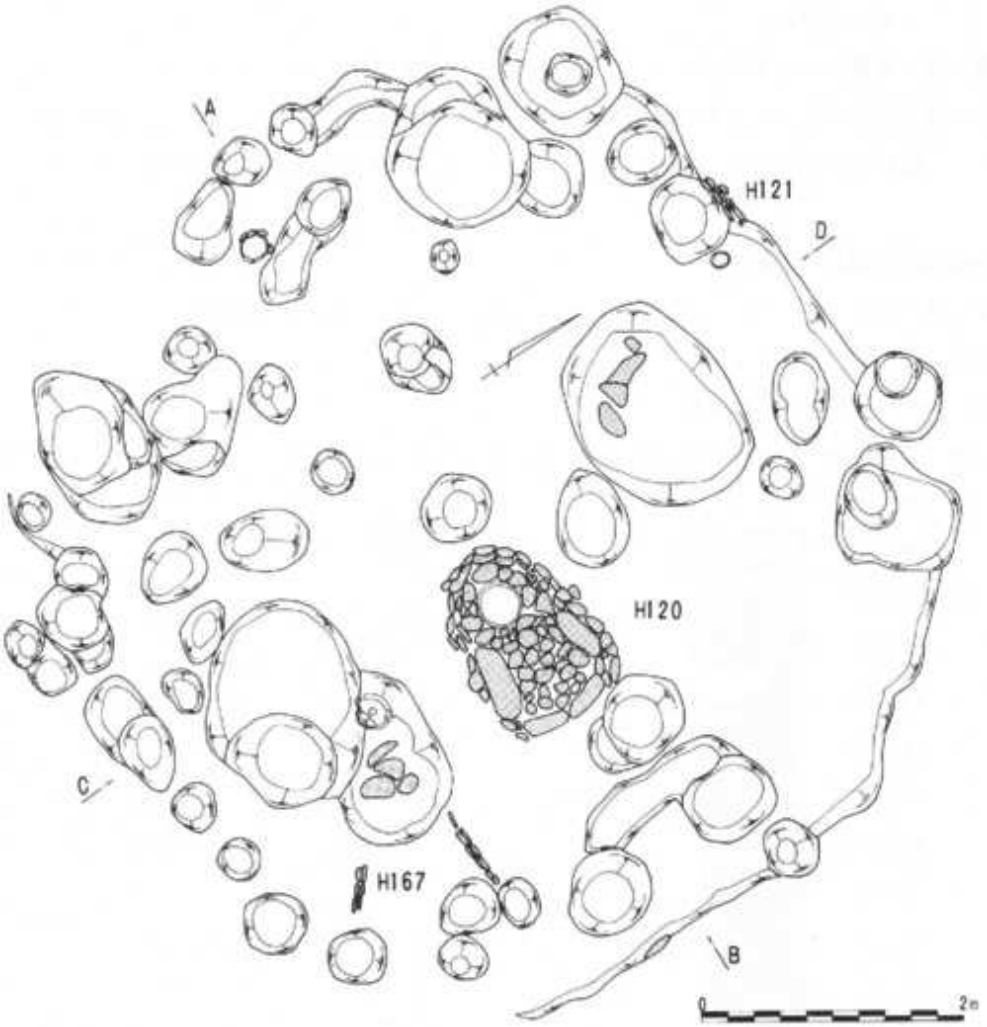
第15図　第119号住居跡

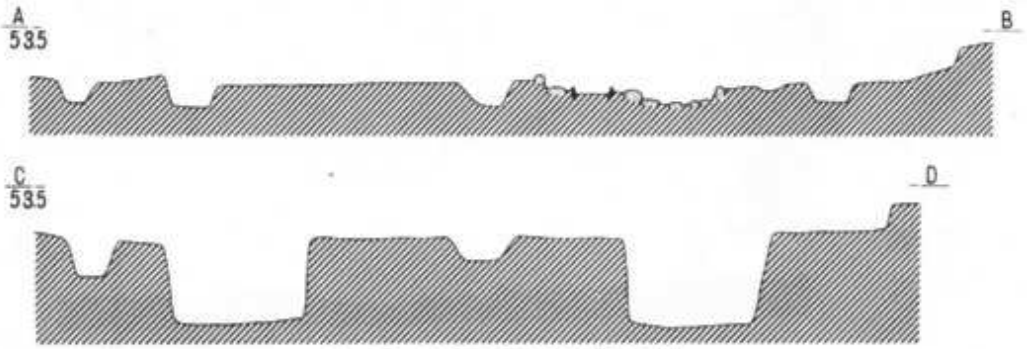
いる。

その他：主柱穴は不明であり，周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第120号住居跡（図版第10図　第16図）

位　置：５Ｇ－Ⅷ～Ⅹ，ｄ～ｇに所在する。





第16図　第120・121・167号住居跡

プラン：方形と考えられる。

規　模：長辺約700cm，短辺約600cmと推測されるが，壁が全体にわたっては認められず詳細な規模は不明である。

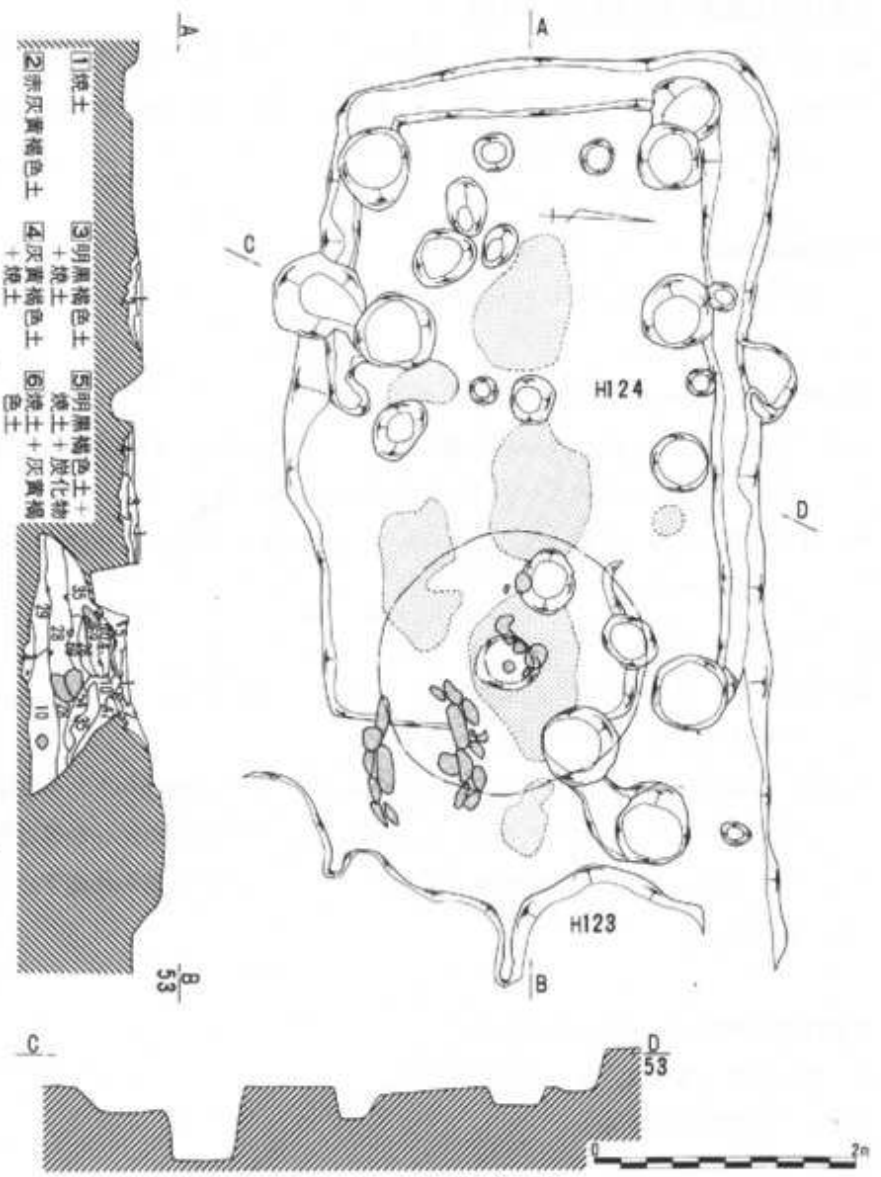
壁　：北側と東側で認められた。約60度～約80度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約20cm～約40cmである。

炉　：住居跡内中央よりやや東側に位置し，A字形の石囲い炉の変形と考えられる。炉内一面に直径約5cm～約15cmの礫がしきつめられ，炉内中央よりやや東側に埋甕が認められた。炉内の石は焼けていたが，焼土は検出されなかった。

柱　穴：主柱穴らしきピット4基と南側に壁柱穴らしきピット群が認められた。

遺　物：土器以外にフレイク1点，骨片1点等が出土している。

その他：西端に直径約5cmあまりの礫4個で囲まれた埋甕が検出されたが，これは切り合っている他の住居跡の炉の



第17図　第124号住居跡

残欠ではないかと考えられる。東壁付近の覆土の中には焼土塊が多く認められた。周溝は確認されず，なかったものと判断される。第121号住居跡，第167号住居跡と切り合っている。

○第121号住居跡（図版第10図　第16図）

遺　物：土器以外に砥石1点，原石1点等が出土している。

その他：第120号住居跡の北壁付近に石囲い炉の残欠と埋甕が残されているのみであり，規模・プラン・壁等は不明である。

○第167号住居跡（図版第10図　第16図）

遺　物：土器以外に凹石1点，フレイク1点，骨片1点等が出土している。

その他：第120号住居跡の南側のすみに埋甕を伴う石囲い炉の残欠が認められるのみで，規模・プラン・壁等は不明である。

○第124号住居跡（図版第10図　第17図）

位　置：6F－I～III，b～dに所在する。

プラン：方形を呈する。

規　模：長辺約480cm，短辺約310cmを測る。

壁　：東側の一部を除いたほぼ全周にわたって認められた。約45度～約80度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

周　溝：北側・西側及び南西側に認められた。幅約30cm～約60cm，確認面からの深さ約10cm～約30cmである。

柱　穴：主柱穴は8本と考えられる。

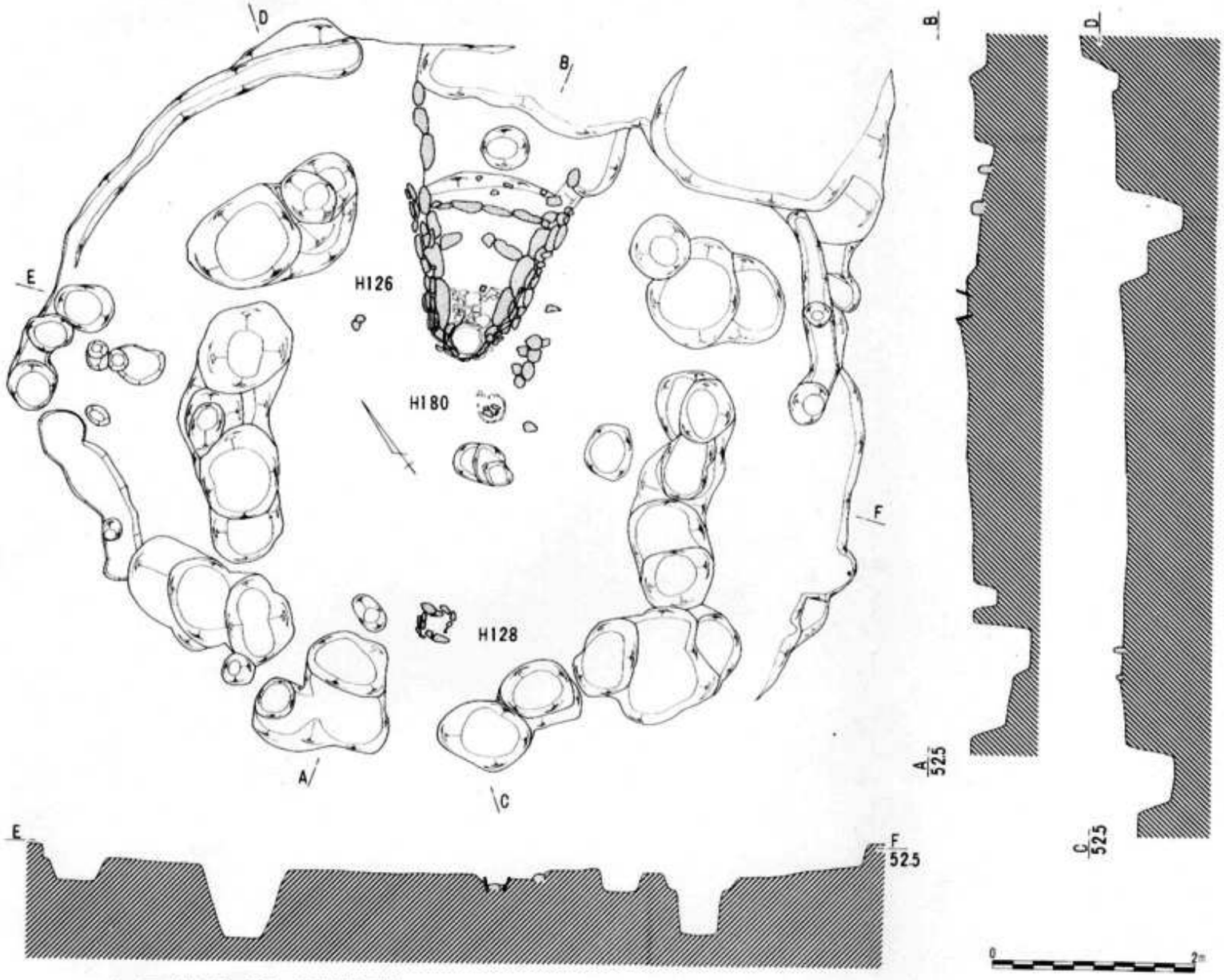
遺　物：土器以外に石皿1点，磨石1点，凹石1点，砥石1点，打製石斧1点，石棒1点，石鏃1点，骨片1点等が出土している。

その他：約20cm四方～約80cm×約120cmの範囲をもつ焼土（地床炉？）が住居跡内6ヵ所，住居跡の東側に隣接する箇所に1ヵ所確認されたのみで石囲い炉等は発見されなかった。東端では第123号住居跡と切り合っており，また東側の床面下にFピット1基が所在する。

○第126号住居跡（図版第11図　第18図）

位　置：6F－VI～IX，a～dに所在する。

プラン：楕円形を呈する。



第18図　第126・128・180号住居跡

第20図　第129・169号住居跡

規　模：長径約860cm，短径約750cmを測る。

壁　：北側と東側に認められた。約80度～約90度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

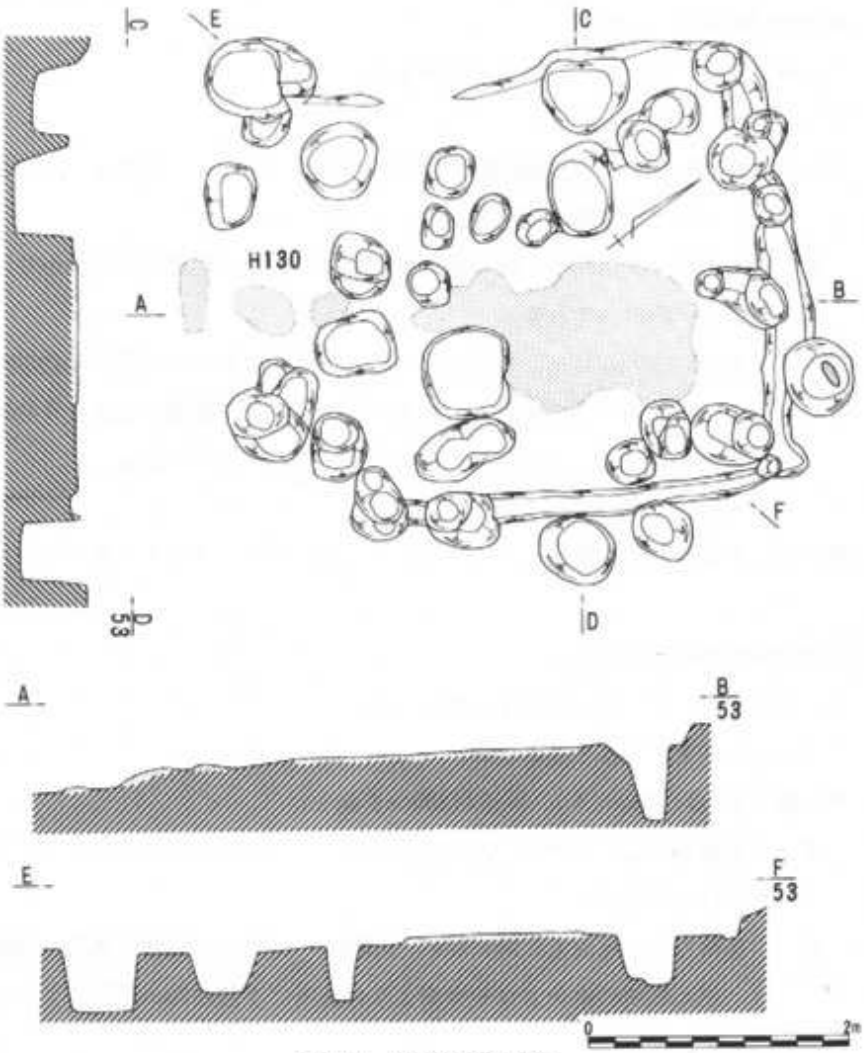
周　溝：北側及び西・東側の一部分に認められる。幅約20cm～約50cm，確認面からの深さ約40cmである。

炉　：炉内の南西部には土器片が敷きつめてあり，南西端には埋甕が認められる。A字形の石囲い炉である。住居跡の中央部よりかなり北東よりに位置しており，前庭部は壁付近までのびている。

柱　穴：主柱穴は10本余りと考えられる。

遺　物：土器以外に三角形土製品1点(図版第23図3)，凹石1点，黒曜石1点，打製石斧2点，磨製石斧4点（図版第25図5），石鏃1点，石錐2点，フレイク5点，原石1点，骨片2点，植物遺体1点等が出土している。

その他：第180号住居跡と重複し，南西側では第128号住居跡と北東壁付近ではFピットとも切り合っている。第180号住居跡の炉は第126号住居



第19図　第130号住居跡

跡の床面下より出土し，同炉の検出された床の部分は黒褐色土と黄褐色土が混在しており，堅さ及びしまりも他の箇所に比べて軟弱であった。

○第128号住居跡（第18図）

第126号住居跡の南西端に1辺約30cmの正方形の石囲い炉が確認されたのみであり，プラン・規模等は不明である。なお，この炉跡は第126号住居跡の床面よりも約10cm余り高い位置で確認された。

○第180号住居跡（第18図）

埋甕をもつ石囲い炉の残欠が第126号住居跡の炉の下に重さなるような形で検出されたのみで，プラン・規模は全く不明である。

○第130号住居跡（第19図）

位　置：6E－Ⅵ～Ⅷ，c～fに所在する。

プラン：方形と考えられる。

規　模：長辺約500cm，短辺約350cm余りと考えられるが，南側はプランがはっきりつかめなかったため詳細は不明である。

壁　：南東側～北西側にかけて認められた。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

周　溝：東側に認められた。幅約20cm～約40cm，確認面からの深さは約20cmである。

炉　：4ヵ所で焼土（地床炉？）が認められた。焼土範囲は北側より約220cm×約100cm，約20cm×約30cm，約40cm×約30cm，約60cm×約20cmである。

柱　穴：主柱穴は不明であった。

遺　物：土器以外に耳飾り1点，石皿1点，砥石1点，フレイク1点等が出土している。

○第129号住居跡（第20図）

位　置：6E－Ⅴ～Ⅶ，f～jに所在する。

プラン：方形を呈すると思われる。

規　模：長辺約670cm(？)，短辺約300cmを測る。

壁　：東側及び北・西側の一部に認められた。約40度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cmである。

炉　：長軸方向の床面上に約480cm×約40cm～約90cmの範囲で焼土（地床炉？）が確認され，焼土範囲の中央よりやや南よりの箇所に1辺約70cm四方（？）の方形の石囲い炉

が半壊の状態で発見された。

遺　物：土器以外に耳飾り1点，骨片1点等が出土している。

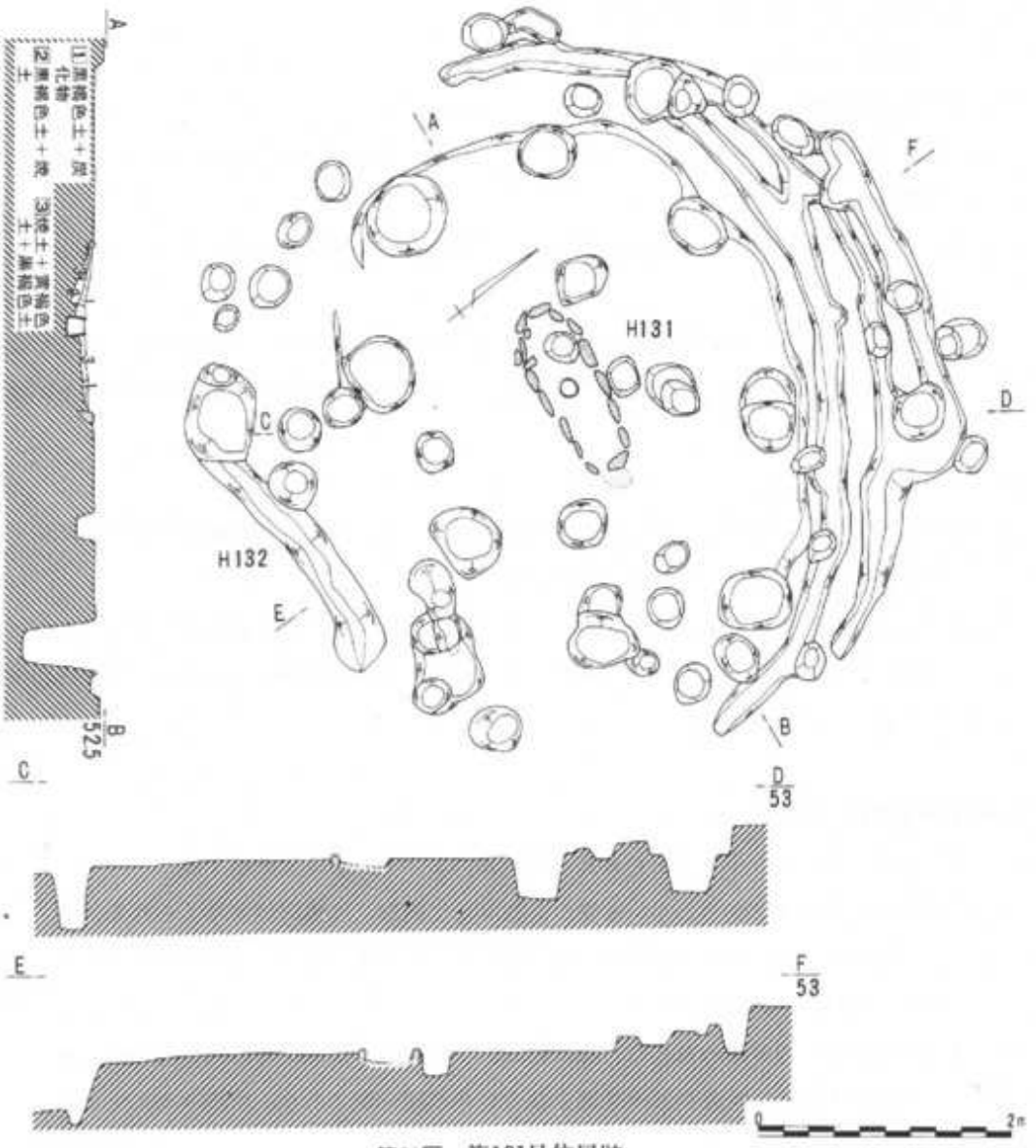
その他：南西側で第169号住居跡と北東側では第147号住居跡と切り合っている。主柱穴は不明であり，周溝も確認されず，なかったものと判断される。

○第169号住居跡（第20図）

位　置：6E－Ⅵ－Ⅷ，f～jに所在する。

プラン：方形を呈する。

規　模：長辺約580cmを測るが短辺は不明である。



第21図　第131号住居跡

壁　：西側及び北・南側の一部で認められた。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cmである。

炉　：床面上に約230cm×約100cmの焼土（地床炉？）が1箇所，約30cm～約50cm四方の焼土（地床炉？）が3箇所確認された。

遺　物：土器以外に磨製石斧1点，フレイク2点等が出土している。

その他：東側は第129号住居跡と切り合っている。主柱穴は不明であり，周溝も確認されず，なかったものと判断される。

○第131号住居跡（図版第9図　第21図）

位　置：6E－Ⅵ－Ⅷ，a－eに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約570cm，短径約500cmを測る。

壁　：北半分と南側の一部分に認められた。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。

周　溝：北半分と南側の一部分に認められた。幅約20cm～約30cm，深さ約5cm～約10cmである。

炉　：長径約150cm，短径約50cmを測る。長円形の石囲い炉であり，炉内中央に埋甕が認められた。埋甕を中心にして焼土が分布し，炉東側に隣接する床面部分にも焼土が散布している。

柱　穴：主柱穴は8本と考えられる。

遺　物：土器以外に石皿1点，凹石2点，石錐1点，打製石斧1点，磨製石斧2点，フレイク6点，黒曜石1点，原石1点等が出土している。

その他：北半分と南側の一部分に幅約10cm～約50cm，床面からの高さ約10cmを測るテラス状遺構が認められた。北側には一部が二重になっている幅約20cm～約30cm，深さ約25cm～約40cmの壁外周溝が巡っている。

○第132号住居跡（第22図）

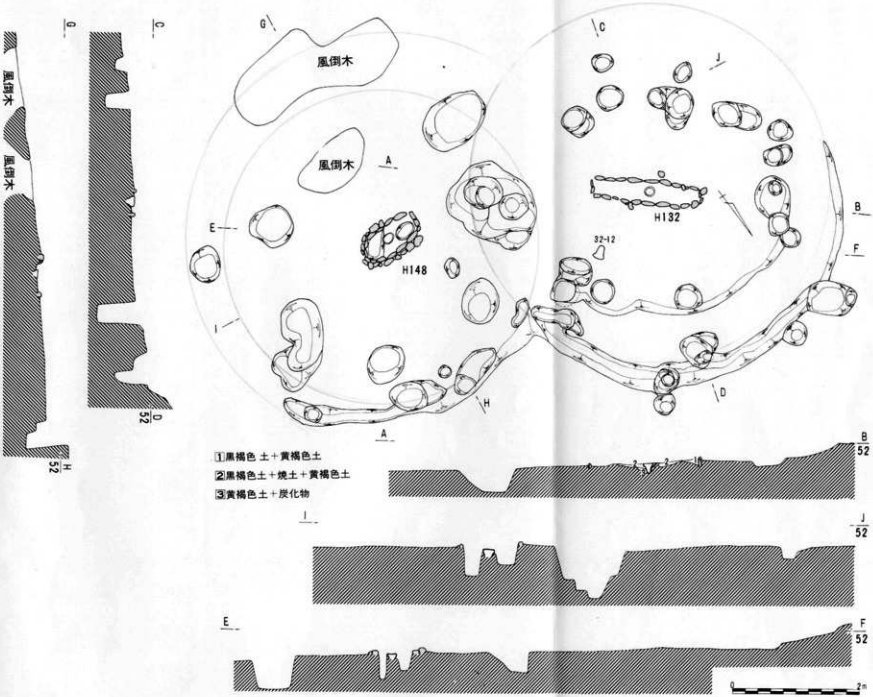
位　置：6D－Ⅶ－Ⅸ，i・jから6E－Ⅶ－Ⅸ，a・bにかけて所在する。

プラン：柱穴の配置及び残存している壁から推測して円形又は楕円形と考えられる。

壁　：北半分に認められるのみであった。約40度～約50度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約30cm～約40cmを測る。

周　溝：北東部分にのみ認められた。幅は約25cm～約40cm，床面からの深さ約30cmである。

炉　：長辺約160cm，短辺約35cmを測る長方形の石囲い炉であり，炉内中央にキャリパー



第22図　第132・148号住居跡（H132の「32－12」は第32図12の土器である）

形を呈する深鉢の埋甕が認められた。埋甕を中心に焼土が散布していた。

柱　穴：主柱穴は7本と考えられる。

遺　物：土器以外に土偶1点（図版第22図30），打製石斧1点等が出土している。

その他：北東部分に幅約50cm～約90cm，床面からの高さ約5cm～約10cmを測るテラス状遺構が認められた。南東側は第148号住居跡と切り合っている。

○第148号住居跡（第22図）

位　置：6D－Ⅶ～Ⅸ，g～iに所在する。

プラン：残存している壁・柱穴の配置から推測して円形又は楕円形と考えられる。

壁　：北側に若干認められるのみであった。ほぼ垂直に近い角度で立ち上がり，壁高は床面より約35cmである。

周　溝：北側に若干残存するのみである。

炉　：長辺約90cm，短辺約55cmを測る長方形の石囲い炉，炉内中央にキヤリバー形を呈する深鉢の埋甕が認められた。

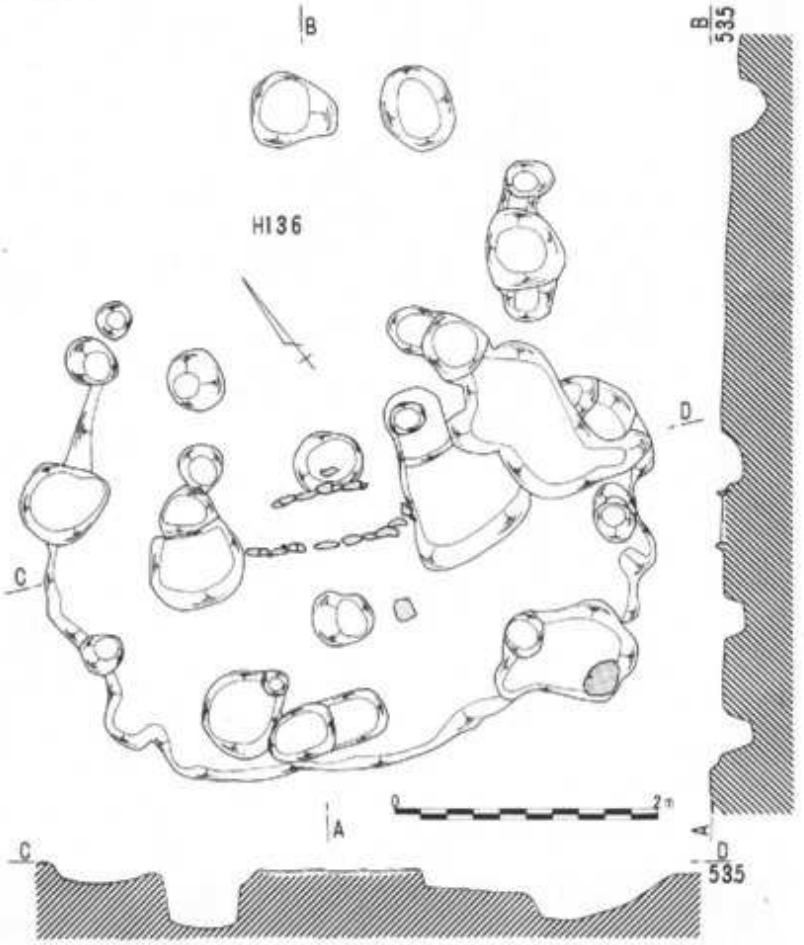
柱　穴：主柱穴は8本と考えられる。

遺　物：土器以外に土偶1点，打製石斧1点等が出土している。

その他：第132号住居跡と切り合い南側に風倒木が認められた。規模は不明である。

○第136号住居跡（第23図）

位　置：3F－1～Ⅲ，i・jか



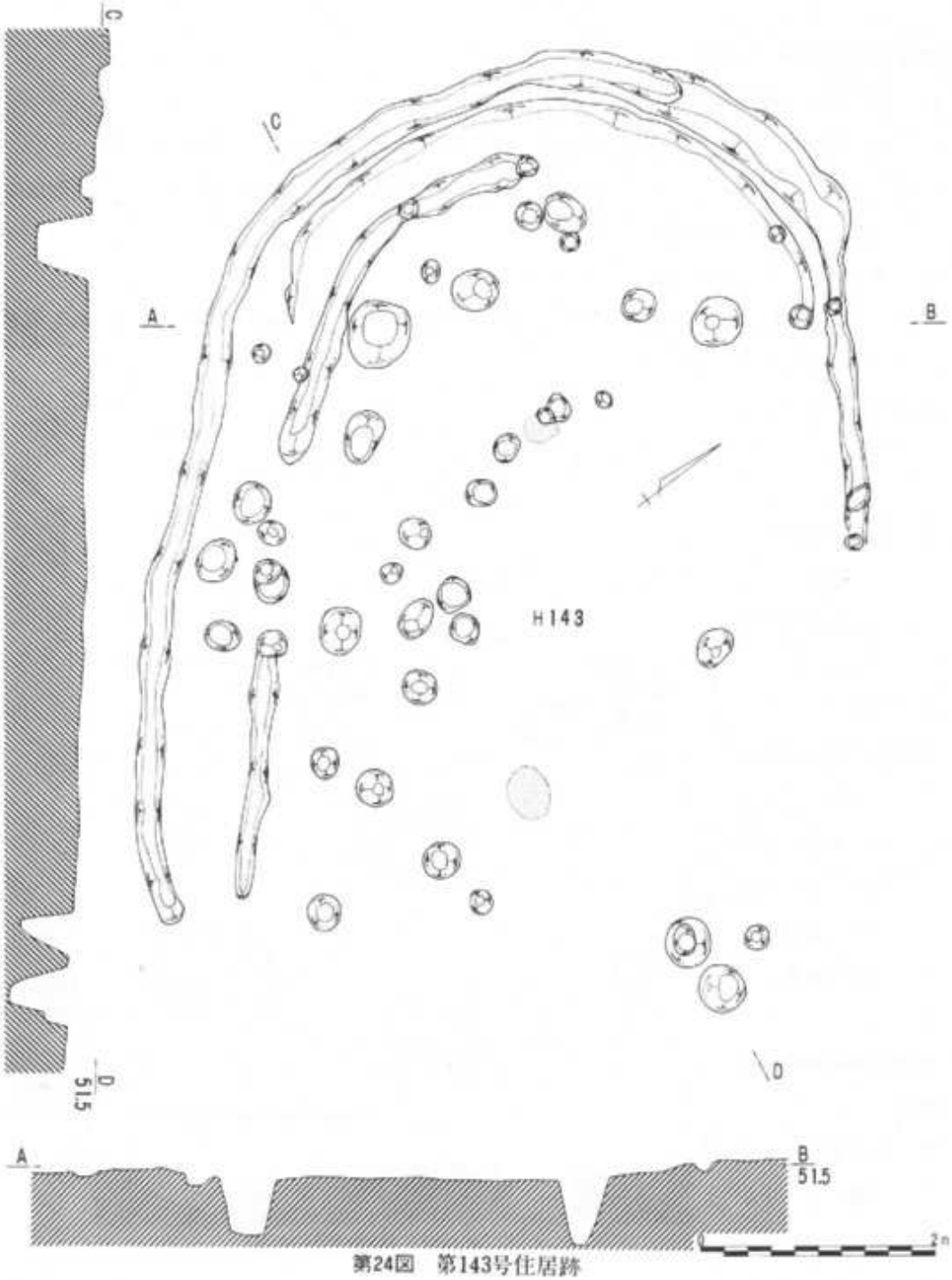
第23図　第136号住居跡

ら3G－I・II，a・bにかけて所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約450cmを測る。

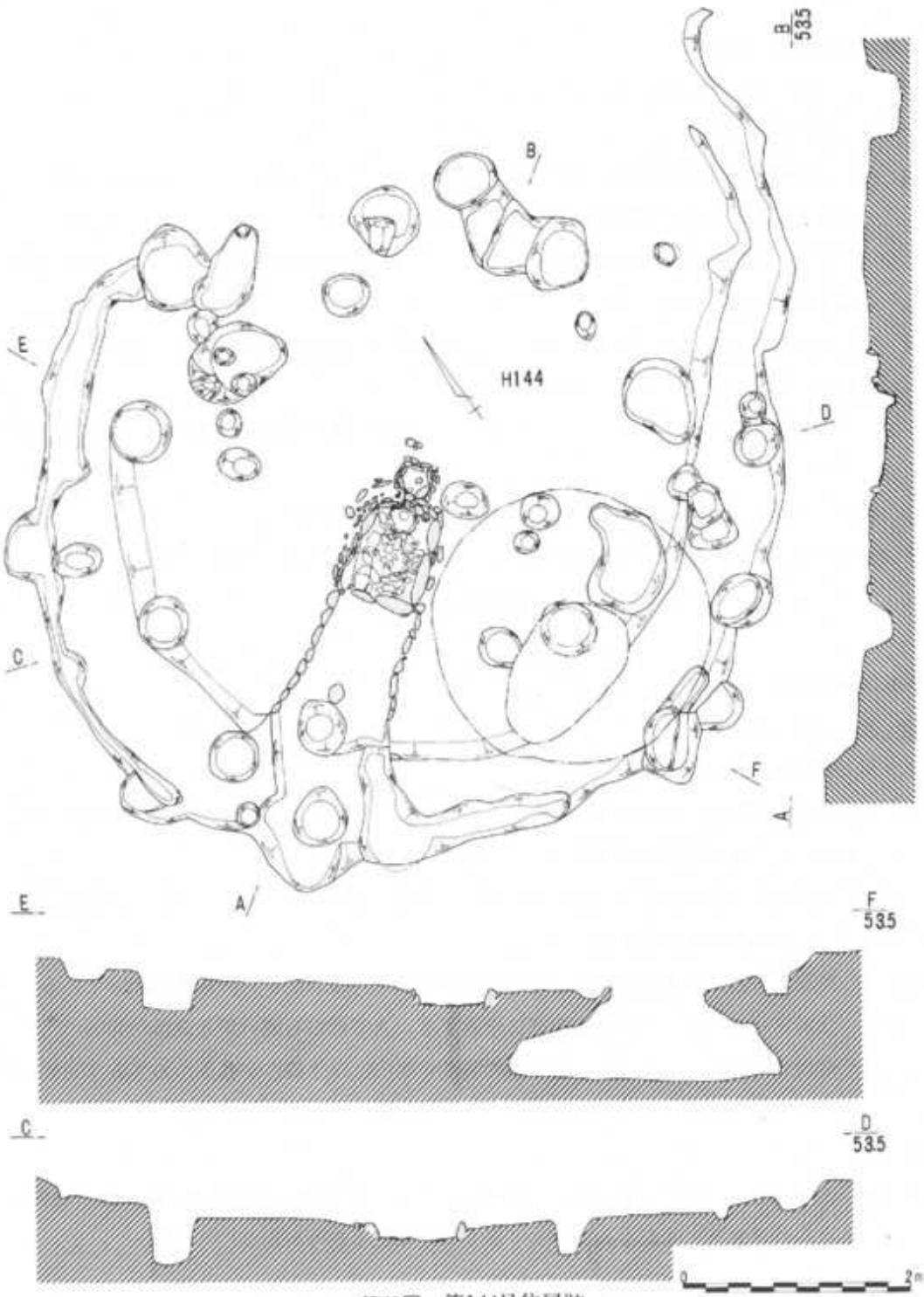
壁　：西・南・東側で認められた。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約20cmである。



第24図　第143号住居跡

炉　：残されている石列から，長円形又は長方形の石囲い炉と推定されるが，後世にほりこまれたピットにより東側が破壊されており詳細は不明である。

遺　物：土器以外にフレイク2点等が出土している。



第25図　第144号住居跡

その他：ほぼ真上にA字形の石囲い炉をもつ第161号住居跡が重なっていた。覆土は薄く，特に北側部分では堆積はほとんど見られなかった。主柱穴は不明であり，周溝も確認されず，なかったものと判断される。

○第143号住居跡（第24図）

位　置：２Ｃ－Ⅶ～Ⅸ，ｂ～ｅに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：東側部分には風倒木等があり，明確なる規模は不明である。しかし，短径約600cm，長径約800cmを越す大型住居跡であったと考えられる。

壁　：北東～南西側にかけて認められた。約45度～約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約15cmである。

周　溝：北東～南西側にかけて確認されたが，西側では二重にめぐっている。幅約20cm～約40cm，確認面からの深さは約５cm～約20cmである。

炉　：西側及び南東側床面上に，直径約20cm～約40cmの範囲で焼土（地床炉？）が認められた。

遺　物：土器以外に石皿１点，磨石４点，原石１点等が出土した。

その他：北西側の周溝に隣接する住居跡内に，幅約５cm～約15cm，床面からの高さ約10cmの土手状の高まりが認められた。主柱穴は不明であった。

○第144号住居跡（図版第11図　第25図）

位　置：２Ｆ－Ⅸ・Ⅹ，ｂ～ｅから３Ｆ－Ⅰ～Ⅳ，ｂ～ｅにかけて所在する。

プラン：楕円形と考えられる。

規　模：長径約750cm，短径約650cm余りと考えられるが，北側部分のプランが明確につかめなかったため詳細なる規模は不明である。

壁　：北側を除く全ての箇所で認められた。約80度あまりの角度で立ち上がり，壁高は床より約20cm～約40cmである。

周　溝：西側と南西側に認められた。幅約20cm～約40cm，確認面からの深さ約20cmである。

炉　：住居跡の中心部よりやや南西側に位置する。A字形の石囲い炉と直径約40cmの円形の石囲い炉からなっている。A字形の石囲い炉内には土器片が敷きつめてあり北東の端には埋甕が認められた。前庭部はテラス状遺構への立ち上がり箇所までのびている。

柱　穴：主柱穴は７～８本と考えられる。

遺　物：土器以外に三角形土製品1点(図版第23図４)，凹石３点，石皿２点，磨石４点，石鏃１点，石斧６点，骨片１点，フレイク８点，原石１点等が出土している。

その他：幅約40cm，床面からの高さ約20cmを測るテラス状遺構が西側と東側に認められた。周溝及びテラス状遺構は南西部でと切れており，その箇所は床面と同レベルで壁まで続いている。また，その箇所はA字形の石囲い炉からの延長線上にも位置している。南側部分はFピットと切り合っている。

○第146号住居跡（第26図）

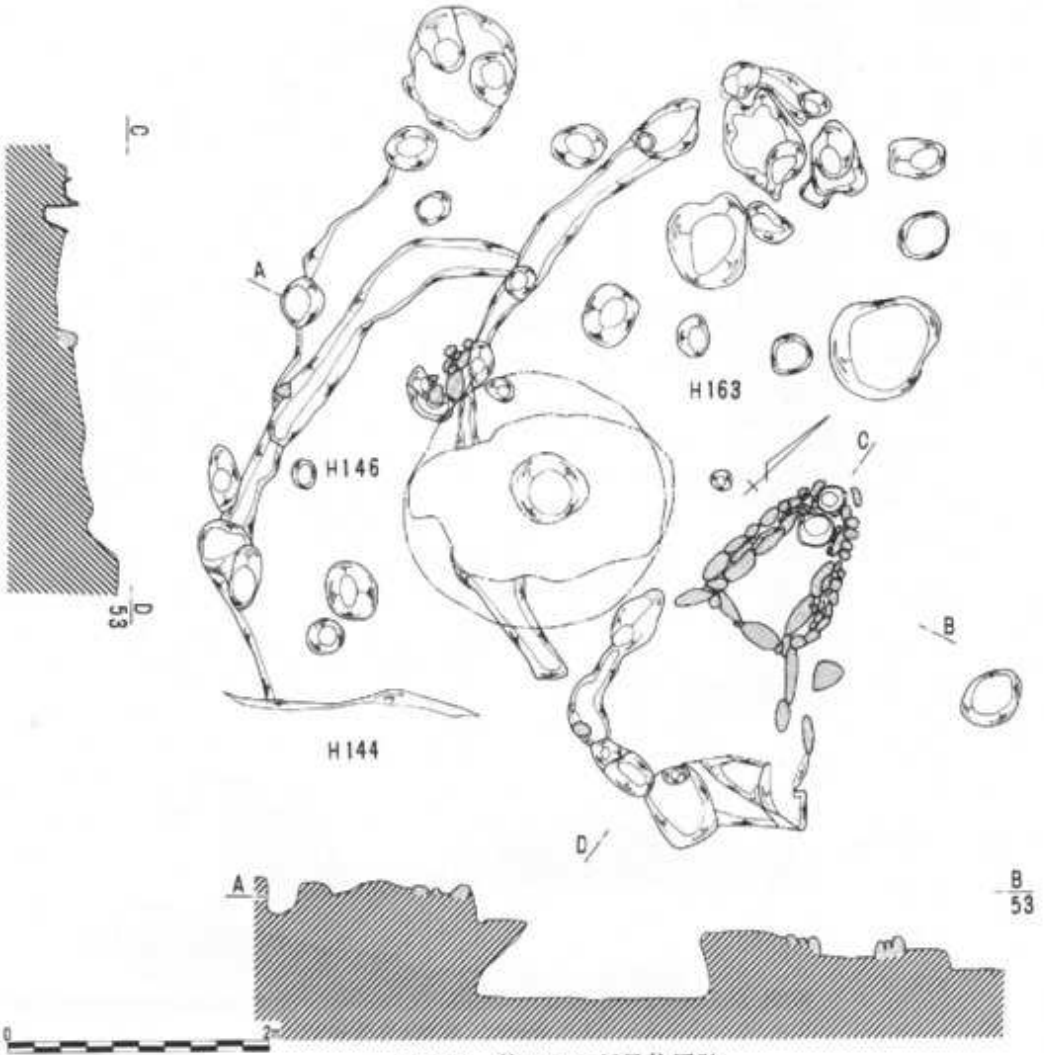
位　置：２Ｆ－Ｘ，ｄ－ｇから３Ｆ－１，ｅ－ｇにかけて所在する。

周　溝：西側にのみ確認された。幅約20cm～約40cm，確認面からの深さ約30cmである。

炉　：南西側に認められた石組が炉と思われる。しかし，第163号住居跡で破壊されているため詳細は不明である。

遺　物：土器以外に石錘１点，フレイク２点，骨片１点，原石１点等が出土している。

その他：東側は第163号住居跡によって立ち切られているため，プラン・規模・壁・主柱穴



第26図　第146・163号住居跡

は不明である。北西～南西にかけての覆土中に焼土が多く認められた。

○第163号住居跡（第26図）

位　置：２Ｆ－Ⅸ・Ⅹ，ｄ・ｅに所在する。

周　溝：北西～南側にかけて認められた。幅約10cm～約30cm，確認面からの深さ約20cmである。

炉　：Ａ字形の石囲い炉であり炉内先端部に埋甕が２個認められた。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

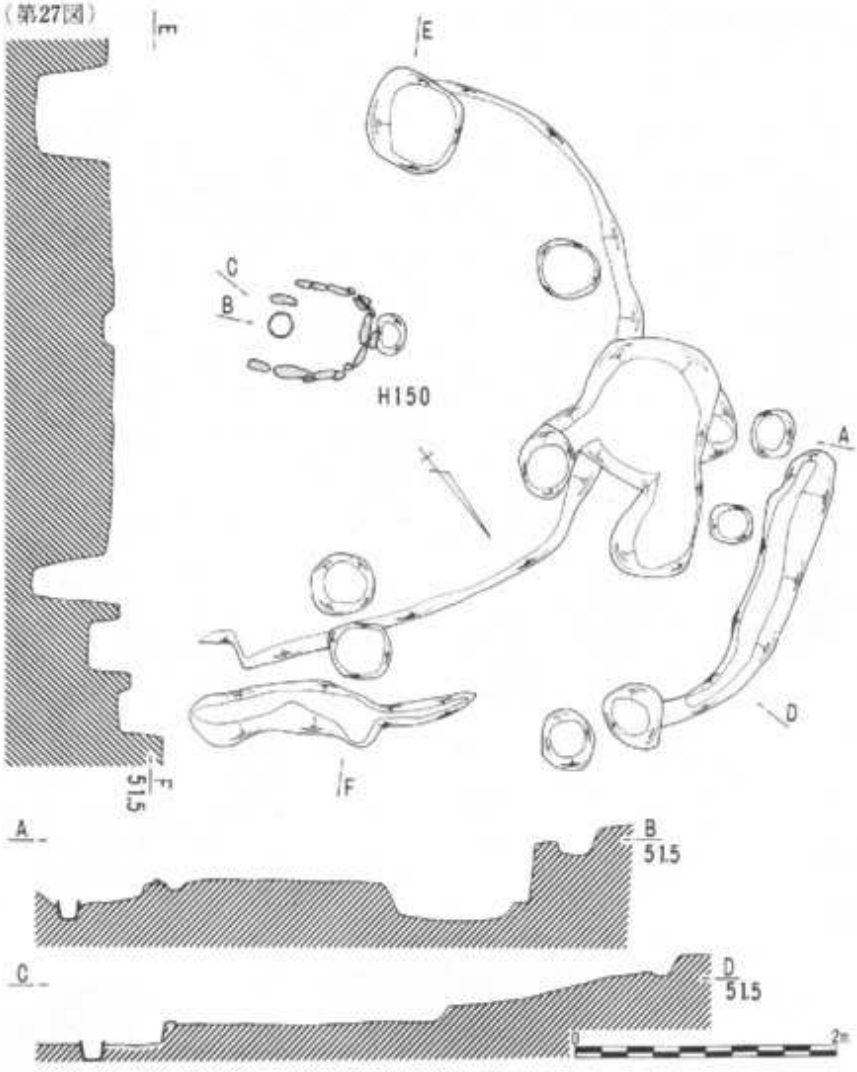
その他：南西側で第146号住居跡，南側で第144号住居跡と切り合い，南西側の周溝部分にはＦピットが存在する。プラン・規模・壁は不明である。周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第150号住居跡（第27図）

位　置：６Ｄ－Ⅳ～Ⅶ，ｄ～ｆに所在する。

プラン：主柱穴の配列，壁の残存から推測して円形又は楕円形と考えられる。

壁　：北側に認められるのみで



第27図　第150号住居跡

あった。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約50cmである。

周　溝：北側に残存するのみである。幅約20cm～約40cm，確認面からの深さ約20cmである。

炉　：長方形の石囲い炉と考えられるが，半壊のため詳細は不明である。炉内中央には埋甕が認められた。

柱　穴：現存する主柱穴は4本である。

遺　物：土器以外に土偶1点，砥石1点，石鏃1点，打製石斧2点，磨製石斧1点等が出土している。

その他：北半分に幅約20cm～約150cm，床面からの高さ約10cm～約30cmを測るテラス状遺構が認められた。段丘崖の近くに位置するため南側半分が崩落している。

○第152号住居跡（第28図）

位　置：5D－V－Ⅶ，c～eに所在する。

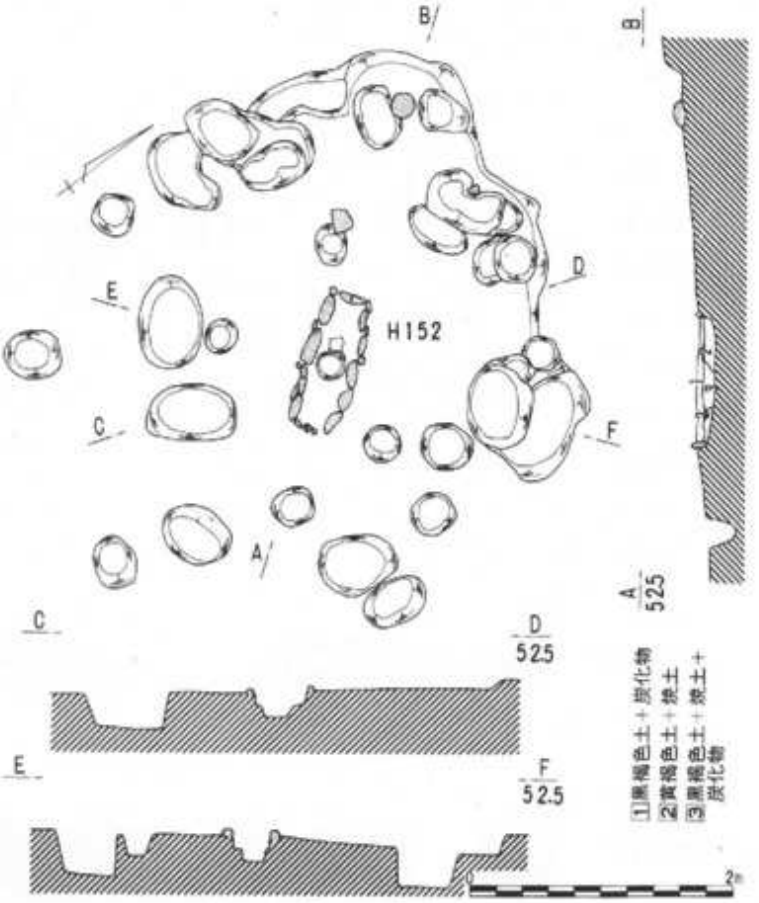
壁　：北側部分に認められるのみであった。約45度－約70度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約15cmであるが，テラス状遺構への立ち上がりとも考えられる。

炉　：長辺約110cm，短辺約30cmを測る長方形の石囲い炉であり炉内中央に直径約25cmのピットが認められた。炉内全体に焼土が散布していた。

柱　穴：主柱穴は7本と考えられる。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：プラン・規模は不明であり，周溝も確認されず，なかったものと判断される。



第28図　第152号住居跡

○第157号住居跡（第29図）

位　置：5D－Ⅲ・Ⅳ，

e・fに所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約550cmを測る。

壁　：全周で認められた。約60度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cmである。

炉　：長径約70cm，短径約50cmの楕円形の石囲い炉。炉内の南すみに埋甕が認められ，炉内には土器片が敷きつめてあった。

床　：炉の南側に接する箇所には直径50cmの焼土が半円状に散布している。

柱　穴：主柱穴は9本と考えられる。

遺　物：土器以外に凹石1点等が出土している。

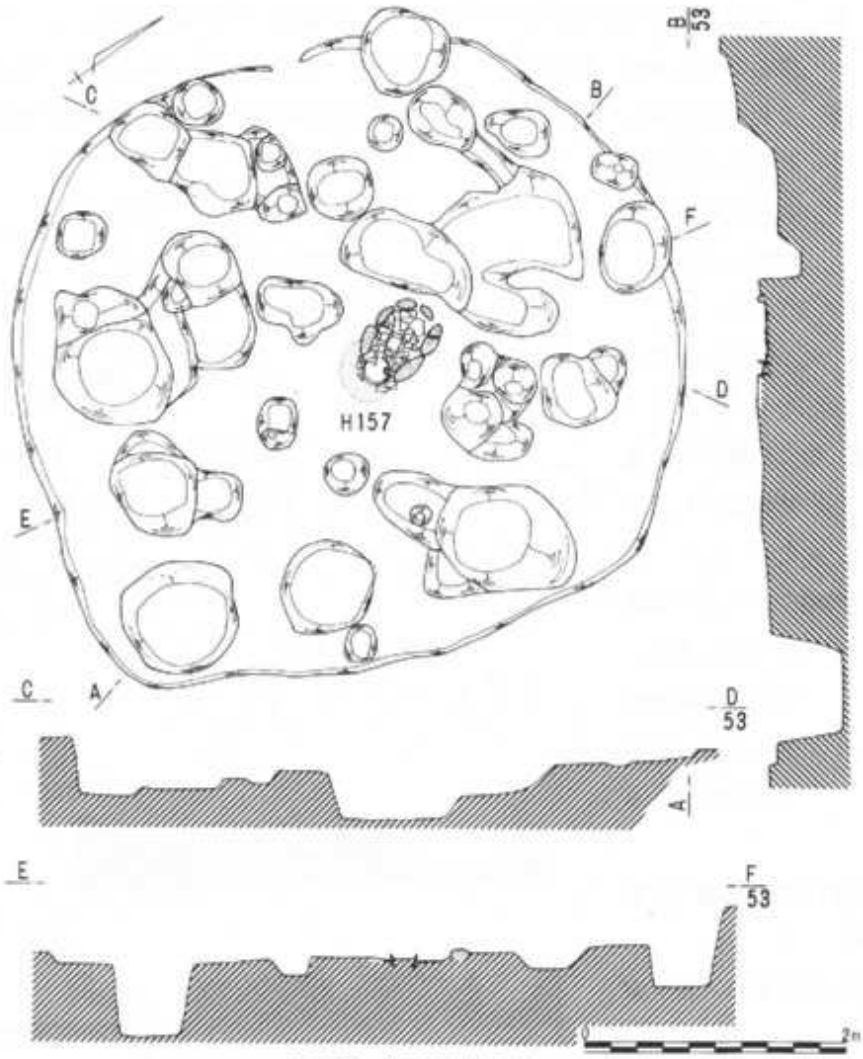
その他：周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第160号住居跡（第30図）

位　置：2F－Ⅲ－V，a・bに所在する。

プラン：円形又は楕円形と考えられる。

壁　：北～北東側にかけて認められた。約45度の角度で立ち上がり，壁高は



第29図　第157号住居跡

床面より約10cm～約20cmである。

炉　：長辺約120cm，短辺約30cmの長方形の石囲い炉。炉内中央に埋甕が認められ，炉内全体に焼土が散布している。

遺　物：土器以外にフレイク1点等が出土している。

その他：南側が農道で半壊，西側は土壙で立ち切られており，規模・主柱穴は不明である。周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第170号住居跡（第31図）

位　置：6F－Ⅶ～Ⅸ，h～jに所在する。

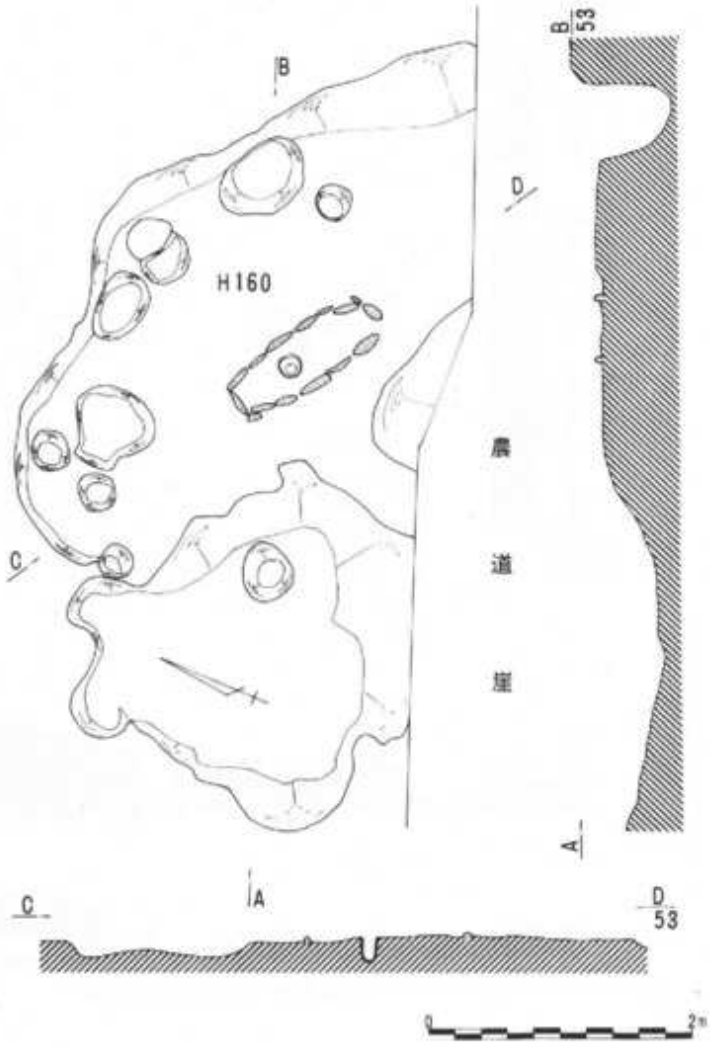
壁　：南側及び北側に認められた。約80度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約20cmである。

周　溝：南壁と北側の一部に認められ，幅約20cm～約40cm，深さ約5cm～約10cmである。

炉　：約29cm～約60cmと約130cm～約60cmの範囲を持つ地床炉（？）が確認された。

遺　物：土器以外に石皿1点，凹石11点，磨石2点，砥石1点，打製石斧4点，磨製石斧2点，石鏃2点（図版第27図18）フレイク1点，原石2点，骨片1点等が出土している。

その他：東側はFピットによって立ち切られており，プラン・規模等の詳細は不明である。床の西側部分は埋没した沢の上につくられているため貼り床になっていた。



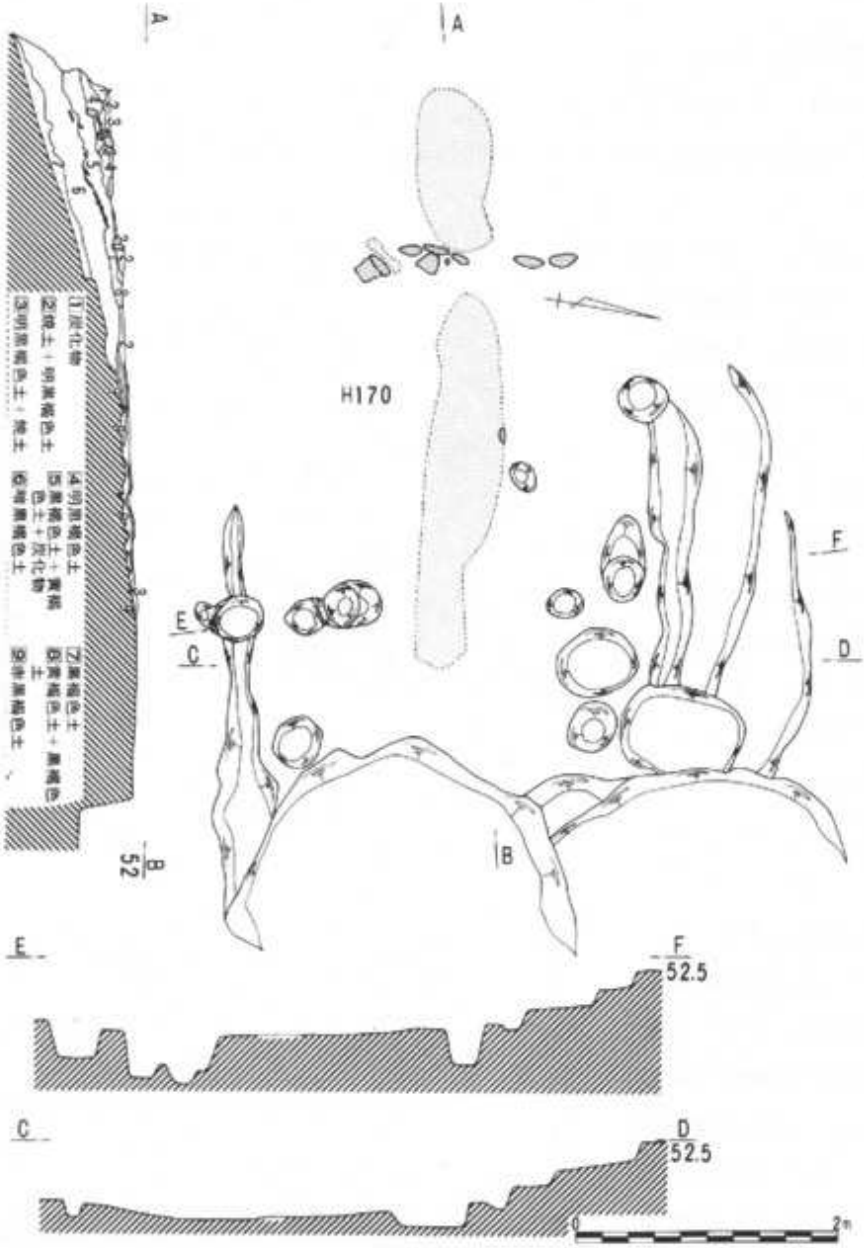
第30図　第160号住居跡

○第172号住居跡（第32図）

位　置：6F－Ⅲ～Ⅵ，h～jに所在する。

プラン：方形と考えられる。

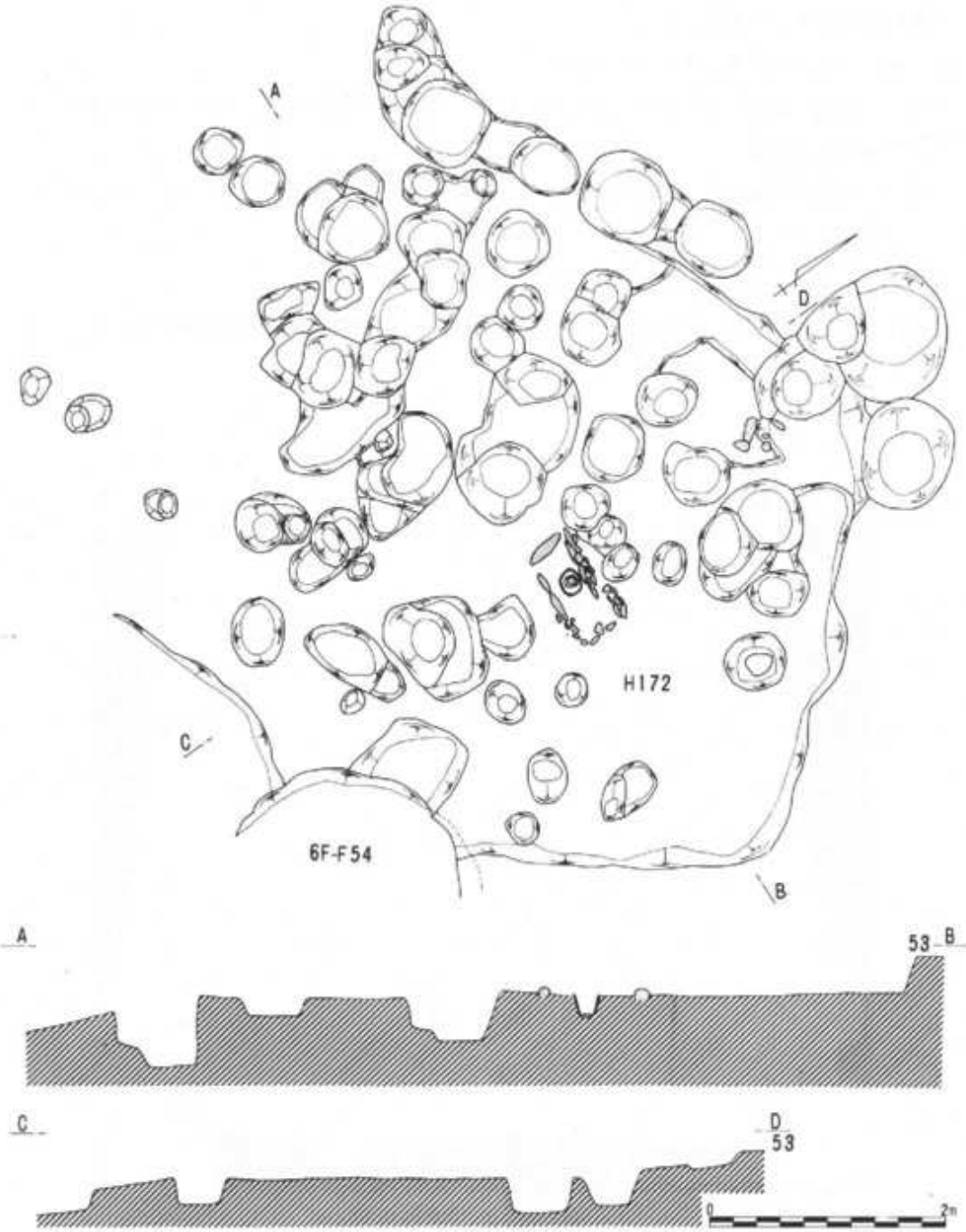
規　模：長辺約600cm，短辺約480cm以上と考えられるが，西側ではプランが明確につかめなかったため詳細は不明である。



第31図　第170号住居跡

壁　：東側部分にのみ認められた。約50度～約80度の角度で立ち上がり，壁高は床面より約10cm～約30cmである。

炉　：長辺約100cm，短辺約40cmの長方形の石囲い炉である。炉内中央よりやや西側に埋甕が認められた。埋甕は底部がぬいてあり，その箇所に直径約５cmの礫が置かれていた。



第32図　第172号住居跡

遺　物：土器以外に石皿1点，凹石1点，打製石斧2点，小型磨製石斧1点(図版第25図7)フレイク2点等が出土している。

その他：南側では6F－F54（Fピット）と切り合っている。主柱穴は不明であり，周溝は確認されず，なかったものと判断される。

○第178号住居跡（第33図）

位　置：7G－Ⅵ・Ⅶ，f・gに所在する。

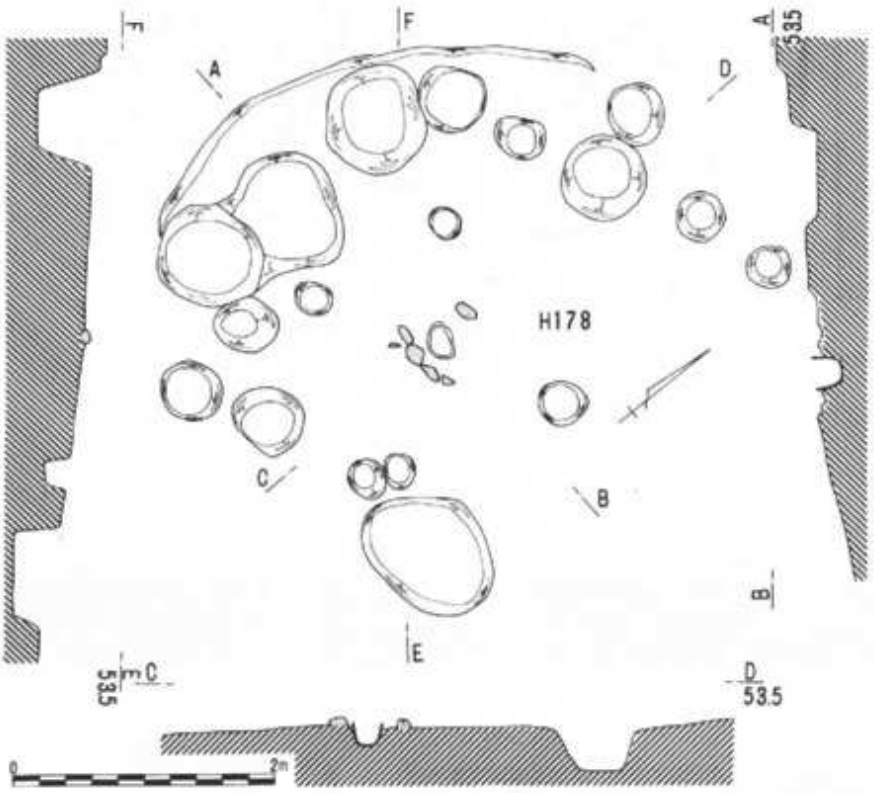
壁　：西側に認められたのみである。約45度の角度で立ち上がっている。壁高は床面より約5cmである。

炉　：埋甕と石組が確認されたことから炉内に埋甕をもつ石囲い炉ではなかったかと考えられる。しかし，破壊が著しいため詳細は不明である。

遺　物：土器以外に石錘1点等が出土している。

その他：保存状態が悪いため平面形態・規模・柱穴は不明である。周溝は確認されず，なかったものと考えられる。

（寺崎裕助）



第33図　第178号住居跡

F・G・Lピット土層断面凡例

1層－黒色土＋黄褐色土
2層－黒色土＋炭化物
3層－黒色土＋炭化物＋黄褐色土
4層－黒褐色土
5層－黒褐色土＋黄褐色土
6層－黒褐色土＋黄褐色土＋灰黄褐色土
7層－黒褐色土＋黄褐色土＋礫
8層－黒褐色土＋黄褐色土＋小礫
9層－黒褐色土＋黄褐色土＋焼土
10層－黒褐色土＋黄褐色土＋炭化物
11層－黒褐色土＋黄褐色土＋炭化物＋礫
12層－黒褐色土＋黄褐色土＋炭化物＋焼土
13層－黒褐色土＋灰黒褐色土＋炭化物
14層－黒褐色土＋灰黄褐色土
15層－黒褐色土＋灰黄褐色土＋黄褐色土
16層－黒褐色土＋灰白色粘土
17層－黒褐色土＋灰黄色粘土＋小礫
18層－黒褐色土＋礫
19層－黒褐色土＋礫＋炭化物
20層－黒褐色土＋小礫
21層－黒褐色土＋小礫＋黄褐色土
22層－黒褐色土＋小礫＋焼土
23層－黒褐色土＋小礫＋炭化物
24層－黒褐色土＋小礫＋炭化物＋焼土
25層－黒褐色土＋砂＋炭化物
26層－黒褐色土＋焼土
27層－黒褐色土＋焼土＋炭化物
28層－黒褐色土＋焼土＋炭化物＋黄褐色土
29層－黒褐色土＋炭化物
30層－黒褐色土＋炭化物＋灰黒褐色土
31層－黒褐色土＋炭化物＋黄褐色土
32層－黒褐色土＋炭化物＋黄褐色土＋焼土
33層－黒褐色土＋炭化物＋礫
34層－黒褐色土＋炭化物＋小礫
35層－黒褐色土＋炭化物＋焼土
36層－黒褐色土＋炭化物＋灰白色粘土＋黄褐色土
37層－黒褐色土＋炭化物＋小礫＋黄褐色土
38層－黒褐色土＋炭化物＋焼土＋黄褐色土
39層－灰黒褐色土＋黄褐色土
40層－灰黒褐色土＋黄褐色土＋炭化物
41層－灰黒褐色土＋黄褐色土＋小礫＋焼土
42層－灰黒褐色土＋炭化物
43層－灰黒褐色土＋炭化物＋黄褐色土
44層－黄褐色土
45層－黄褐色土＋黒褐色土
46層－黄褐色土＋黒褐色土＋小礫
47層－黄褐色土＋黒褐色土＋炭化物
48層－黄褐色土＋黒褐色土＋炭化物＋礫
49層－黄褐色土＋黒褐色土＋炭化物＋小礫
50層－黄褐色土＋小礫
51層－黄褐色土＋小礫＋黒褐色土
52層－黄褐色土＋焼土
53層－黄褐色土＋炭化物
54層－灰黄褐色土
55層－灰黄褐色土＋黒褐色土＋黄褐色土
56層－赤黒褐色土
57層－赤黒褐色土＋小礫＋炭化物
58層－赤褐色粘土
59層－灰褐色粘土
60層－灰黄色粘土
61層－灰黄色粘土＋黒褐色土
62層－灰黄色粘土＋黄褐色土
63層－灰黄色粘土＋灰白色粘土
64層－灰白色粘土
65層－灰白色粘土＋黒褐色土
66層－灰白色粘土＋黄褐色土
67層－小礫＋黒褐色土
68層－焼土
69層－焼土＋黒褐色土
70層－炭化物
71層－炭化物＋黒褐色土
72層－炭化物＋焼土＋黒褐色土

（白ぬきは攪乱，a・b・cは明→暗のように暗さの度合いを表わす。）

（2）Fピット

○2F－F3（第34図）

位　置：X，e・fから3F－I，e・fにかけて所在する。

規　模：基底部直径約150cm，深さ約100cmを測る。

覆　土：中層の南・北壁付近に黄色土ブロックが認められる。

遺　物：土器以外に打製石斧1点，磨石1点，軽石1点，原石1点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約60cm，深さ約5cm～約6cmの浅い皿状のピットが認められる。

○3E－F8（第34図）

位　置：Ⅵ・Ⅶ，i・jに所在する。

規　模：基底部直径約180cm，深さ約123cmを測る。

覆　土：上～中層には黒色土と黄色土が混在，下層は主に黄色土が堆積している。

遺　物：土器以外に打製石斧1点，フレイク1点，原石1点等が出土している。

その他：基底部の壁付近からは偏平の礫が多く検出され，中央には直径約40cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○3F－F1（第34図）

位　置：Ⅶ・Ⅷ，d～fに所在する。

規　模：基底部直径約260cm，深さ約125cmを測る。

遺　物：土器以外に石皿1点等が出土している。

その他：基底部から偏平な礫が多く検出され，中央には直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

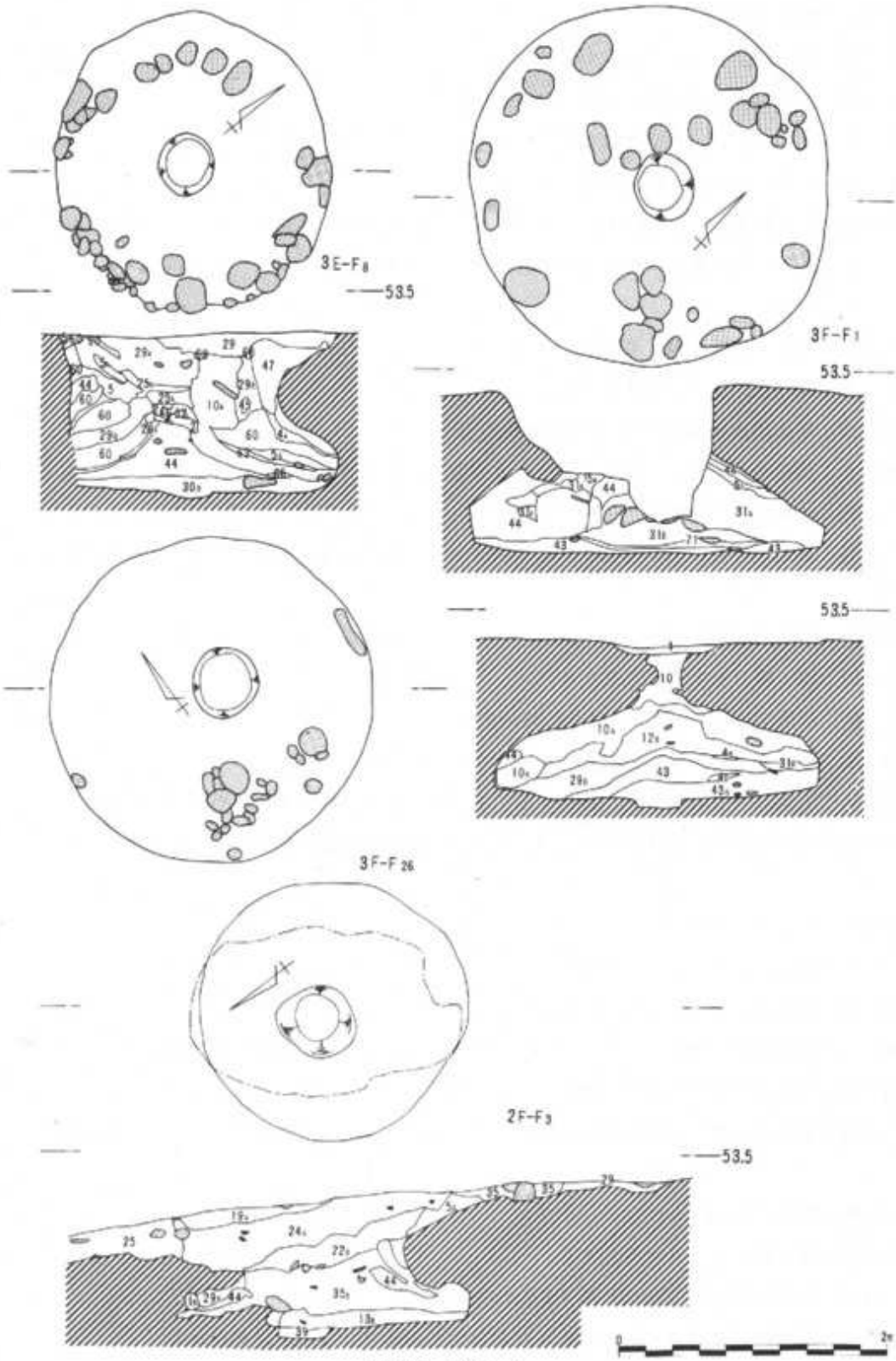
○3F－F26（第34図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，d・eに所在する。

規　模：開口部直径約78cm，基底部直径約241cm，深さ約122cmを測る。

覆　土：黒色土が基調となっているが，下層には灰黒色土が多く堆積している。

遺　物：土器以外に砥石1点，凹石1点，磨石1点，打製石斧2点，フレイク1点，原石1点等が出土している。



第34図　Fピット

○3F－F42（第35図）

位　置：Ⅳ・Ⅴ，b・cに所在する。

規　模：基底部直径約210cm，深さ約84cmを測る。

覆　土：全体にわたって小規模な黄色土ブロックが混入している。

遺　物：土器以外に凹石等が出土している。

その他：基底部中央に直径約30cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。
　　基底部の北～西～南壁付近に多量の礫が検出された。

○5E－F2（図版第12図　第35図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，g～iに所在する。

規　模：基底部直径約202cm，深さ約97cmを測る。

覆　土：黒色土が混在しており，黄色土は南壁及び北壁付近に若干認められるのみである。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5F－F4（第35図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，b・cに所在する。

規　模：基底部直径約200cm，深さ約81cmを測る。

覆　土：中～下層にかけて黄色土のブロックが認められる。

遺　物：土器以外に石皿1点，磨石1点，フレイク2点，原石1点が出土している。

その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5F－F7（第35図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，h～jに所在する。

規　模：基底部直径約175cm，深さ約76cmを測る。

覆　土：東壁付近に黄色土ブロックが認められるのみで，他は黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外に凹石1点，磨製石斧1点等が出土している。

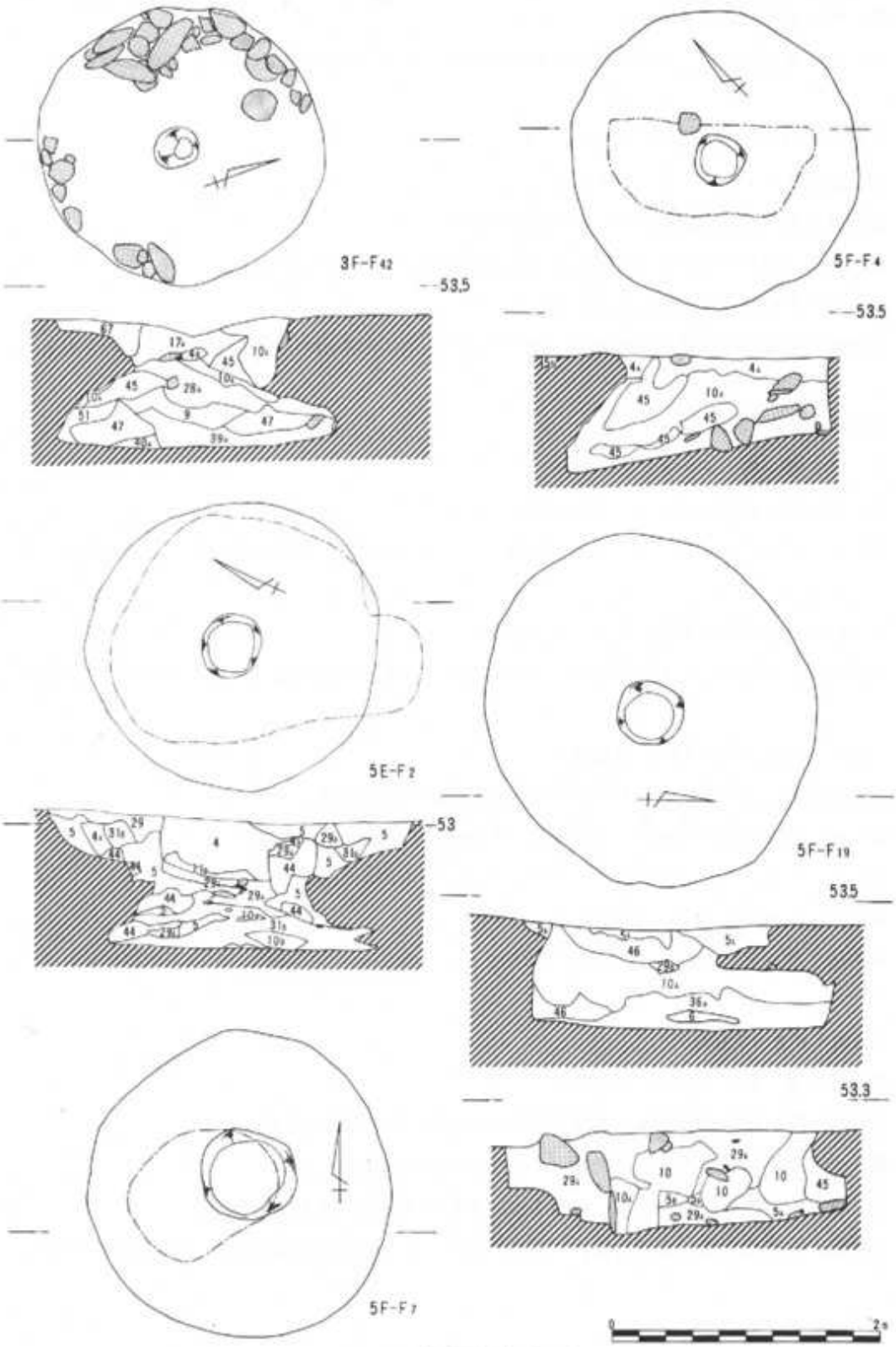
その他：基底部中央に直径約70cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5F－F10（第36図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，c・dに所在する。

規　模：基底部直径約 180cm，深さ約74cmを測る。

覆　土：南壁付近には天井部と考えられる黄色土の大ブロックが認められる。



第35図　Fピット

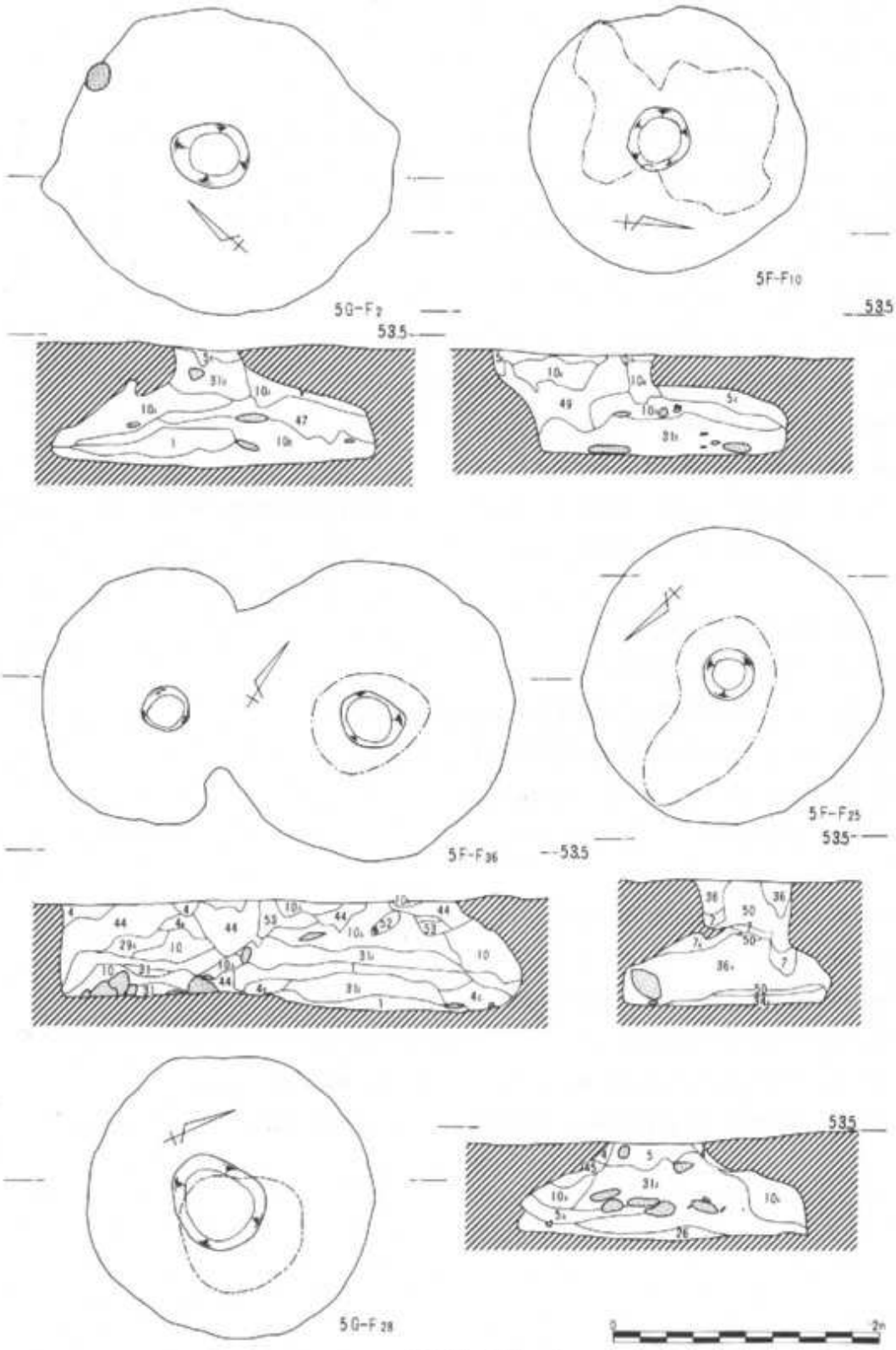
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。
その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5F－F19（図版第12図　第35図）
位　置：Ⅴ・Ⅵ，ｉ・ｊに所在する。
規　模：基底部直径約218cm，深さ約75cmを測る。
覆　土：上層に天井部と考えられる大きな黄色土ブロックが認められる。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。
その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5F－F25（第36図）
位　置：Ⅷ・Ⅸ，ｅ・ｆに所在する。
規　模：開口部直径約74cm，基底部直径約150cm，深さ約94cmを測る。
覆　土：上層には天井部と考えられる黄色土の大ブロックが残り，中・下層には黄色土の小ブロックが認められる。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。
その他：基底部中央に直径約40cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5F－F36（図版第12図　第36図）
位　置：Ⅹ，ｆ・ｇから6Ｆ－Ⅰ，ｆ・ｇにかけて所在する。
規　模：開口部直径約90cm，基底部直径約220cm，深さ約81cmを測る。
覆　土：上層に若干の黄色土ブロックが認められるのみで他は黒色土である。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。
その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○5G－F2（第36図）
位　置：Ⅶ・Ⅷ，ｂ～ｄに所在する。
規　模：開口部直径約49cm，基底部直径約241cm，深さ約89cmを測る。
覆　土：中層の東壁付近～中央部にかけては黄色土が堆積している。
遺　物：土器以外に石皿1点，凹石1点，打製石斧1点，原石2点等が出土している。
その他：基底部中央に直径約60cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。



第36図　Fピット

○5G－F28（第36図）

位　置：Ⅴ・Ⅵ，d・eに所在する。

規　模：開口部直径約71cm，基底部直径約217cm，深さ約73cmを測る。

覆　土：中層の南壁付近に黄色土ブロックが認められる他は黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外に打製石斧1点，フレイク1点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約70cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○6F－F1（図版第12図　第37図）

位　置：Ⅰ，d・eから5F－X，d・eにかけて所在する。

規　模：基底部直径約204cm，深さ約93cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外に磨石1点等が出土している。

その他：基底部からは偏平な礫が多く検出され，中央には直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○6F－F16（図版第13図　第37図）

位　置：Ⅰ～Ⅲ，e・fに所在する。

規　模：開口部直径約57cm，基底部直径約185cm，深さ約90cmを測る。

覆　土：中層に天井部の崩落痕と思われる黄色土の大ブロックが認められる。

遺　物：土器以外に凹石1点，打製石斧2点，磨製石斧1点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約70cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○6F－F25（図版第13図　第37図）

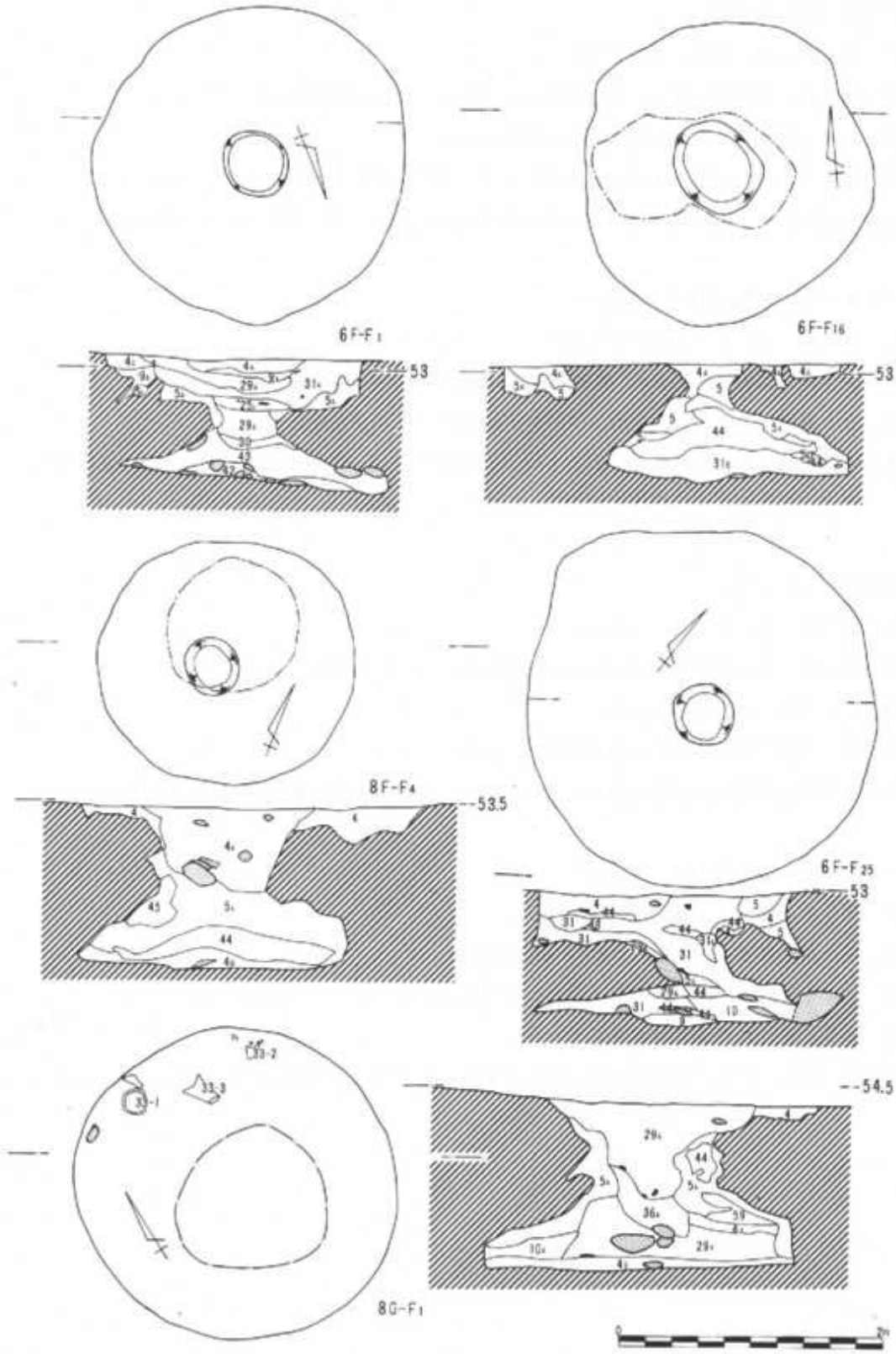
位　置：Ⅳ・Ⅴ，e・dに所在する。

規　模：基底部直径約210cm，深さ約100cmを測る。

覆　土：全体にわたって黄色土の小ブロックが混在している。

遺　物：土器以外に凹石2点，磨石2点，フレイク1点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。



第37図　Fピット（8G－F1の「33－1」「33－2」「33－3」は，第32図1～3の土器）

○8F－F4（第37図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，d・eに所在する。

規　模：開口部直径約57cm，基底部直径約185cm，深さ約90cmを測る。

覆　土：下層に黄色土の大ブロックが認められる。

遺　物：土器以外に凹石1点，打製石斧2点，磨製石斧1点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約70cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○8G－F1（図版第13図　第37図）

位　置：Ⅳ・Ⅴ，i・jに所在する。

規　模：開口部直径約110cm，基底部直径約235cm，深さ約123cmを測る。

覆　土：東壁付近に黄色土ブロック及び灰褐色土ブロックが認められる。

遺　物：土器以外に石皿1点，凹石1点，打製石斧2点，骨片2点等及び基底部の北壁付近より耳飾り2点（図版第23図18）が出土している。

○8G－F2（第38図）

位　置：Ⅳ・Ⅴ，d・eに所在する。

規　模：開口部直径約100cm，基底部直径約192cm，深さ約92cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外に石錘1点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○8G－F4（図版第13図　第38図）

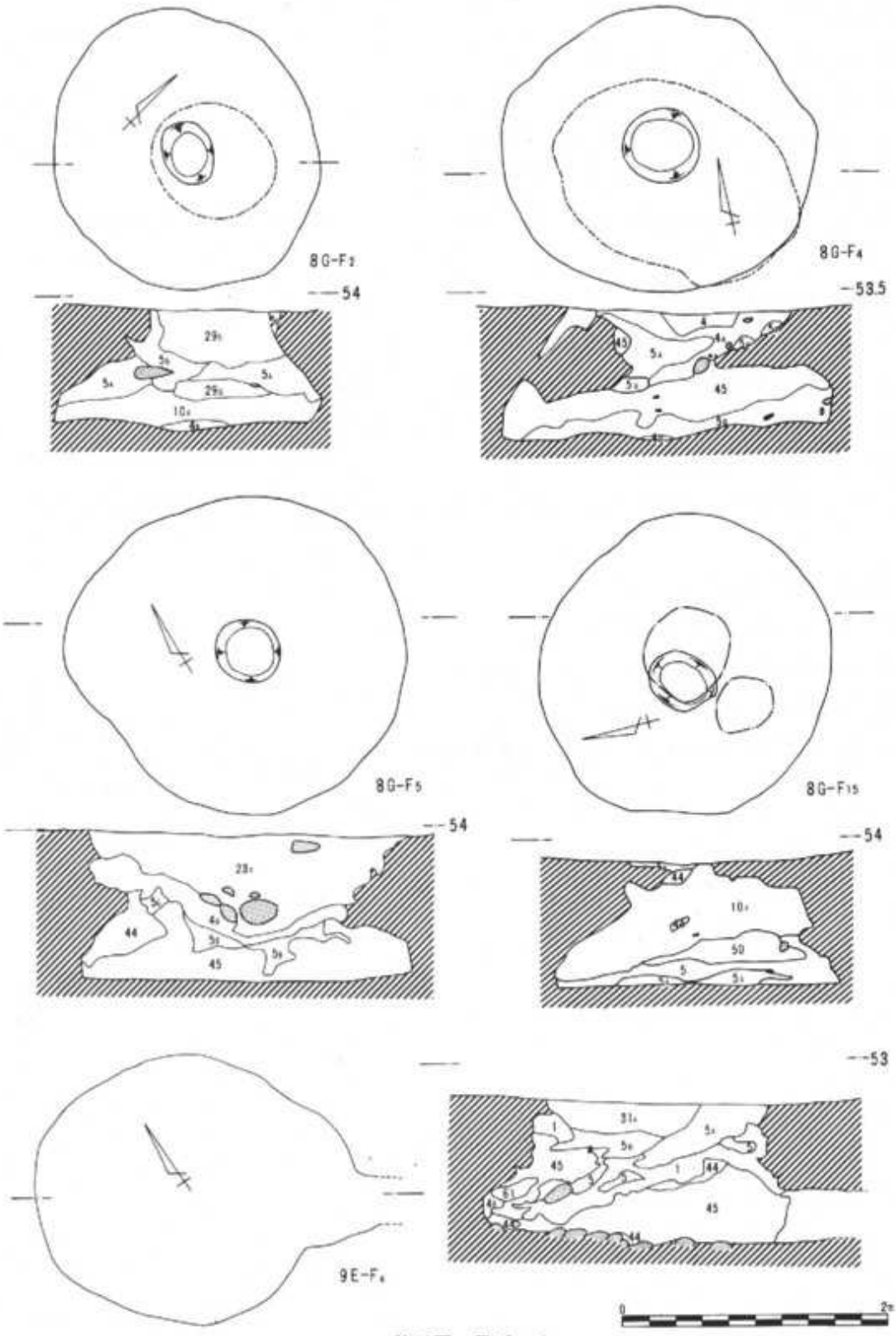
位　置：Ⅰ・Ⅱ，a・bに所在する。

規　模：基底部直径約248cm，深さ約98cmを測る。

覆　土：中層に天井部の崩落痕と思われる厚い黄色土ブロックが堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：基底部中央に直径約60cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。



第38図　Fピット

○8G－F5（第38図）

位　置：Ⅵ・Ⅶ，c・dに所在する。

規　模：基底部直径約256cm，深さ約110cmを測る。

覆　土：上層には黒色土，下層には黄色土が堆積している。

遺　物：土器以外にフレイク2点等が出土している。

その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○8G－F15（第38図）

位　置：Ⅰ・Ⅱ，f・gに所在する。

規　模：開口部直径約63cm，基底部直径約215cm，深さ約93cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積しているが中層と開口部付近に黄色土ブロックが認められる。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：基底部中央に直径約50cm，深さ約3cm～約5cmの浅い皿状のピットが認められる。

○9E－F4（第38図）

位　置：Ⅳ・Ⅴ，c・dに所在する。

規　模：基底部直径約255cm，深さ約108cmを測る。

遺　物：遺物は出土していない。

その他：基底部の東壁部分にトンネル状遺構が認められた。

（寺崎裕助）

（3）Gピット

○3E－G2（第39図）

位　置：II，c・dに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約150cm，短径約130cm，深さ約26cmを測る。

覆　土：黒色土が基本であるが，下層の北壁部分に少量の黄色土が認められる。

遺　物：土器以外にフレイク1点が出土したのみである。

その他：北壁下層付近に小礫が1個認められた。

○3E－G37（第39図）

位　置：X，e・fに所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約110cm，深さ約48cmを測る。

覆　土：黒色土が入り混じって堆積している。

遺　物：土器以外に石錘1点が出土したのみである。

その他：上層部に径約15cmの礫1個及び小礫4個が認められた。

○3E－G38（第39図）

位　置：IX，e・fに所在する。

プラン：不定形を呈する。

規　模：最大径約200cm，深さ約29cmを測る。

覆　土：上層には黒色土が堆積し，下層には黄色土ブロックが認められる。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：東側に径約10cm～約25cmの礫5個及び小礫2個が認められた。

○4D－G1（第39図）

位　置：II，i・jに所在する。

プラン：不定形を呈する。

規　模：最大径約130cm，深さ約40cmを測る。

覆　土：黒色土が混在している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：上層～中層にかけて土器片が出土している。

○4E－G2（図版第14図　第39図）

位　置：Ⅰ・Ⅱ，e・dに所在する。

プラン：不定形を呈する。

規　模：最大径約196cm，深さ約44cmを測る。

覆　土：2層からなり，黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外に磨石1点が出土したのみである。

○4E－G3（第39図）

位　置：Ⅰ・Ⅱ，d・eに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約115cm，短径約88cm，深さ約47cmを測る。

覆　土：5層からなっており，上層は黒色土，下層は黄色土が堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：上層から中層にかけて土器片が出土している。

○4E－G4（図版第14図　第40図）

位　置：Ⅱ，g・hに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約180cm，短径約140cm，深さ約25cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積している。

遺　物：硬玉製大珠（図版第30図1）が基底部付近より出土している。

その他：4E－G11と切り合っている。

○4E－G5（図版第14図　第40図）

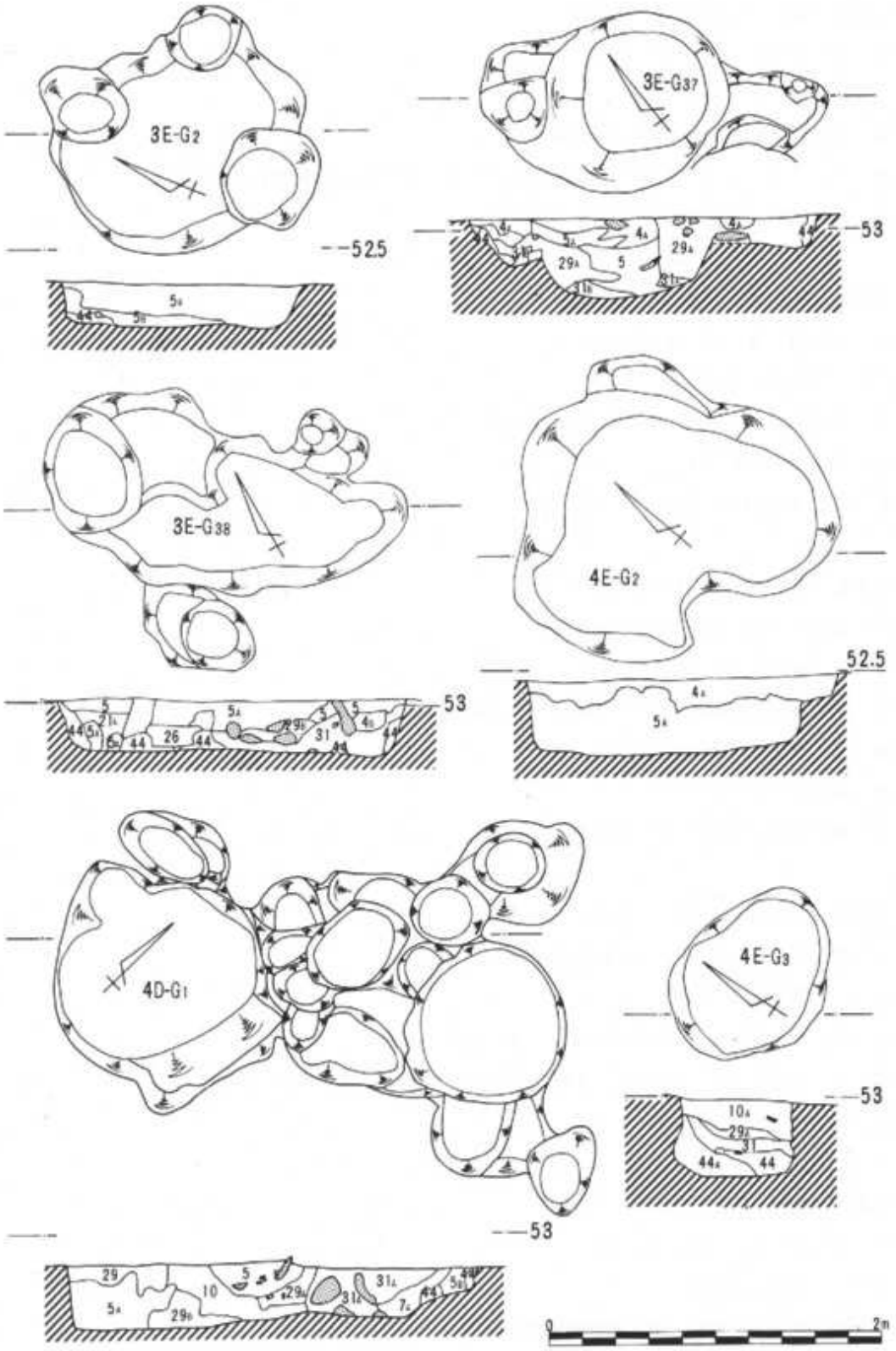
位　置：Ⅰ・Ⅱ，h・iに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約220cm，短径約110cm，深さ約38cmを測る。

覆　土：北壁部分に黄褐色土ブロックが認められる他は黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。



第39図　Gピット(中期)

○4E－G8（図版第14図　第41図）

位　置：II・III，bに所在する。

プラン：不定形を呈する。

規　模：最大径約115cm，深さ約30cmを測る。

覆　土：上層部に黒色土及び灰黒色土が混在し，基底部には黄褐色土が堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

○4E－G9（図版第14図　第41図）

位　置：IV・V，a・bに所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約100cm，深さ約47cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

○4E－G11（図版第14図　第40図）

位　置：I・II，g・hに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約180cm，短径約140cm(？)，深さ約25cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積している。

遺　物：出土していない。

その他：中層に小礫1個が認められた。4E－G4と切り合っている。

○4E－G15（図版第14図　第41図）

位　置：IV・V，f・gに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約175cm，短径約121cm，深さ約49cmを測る。

覆　土：3層からなっており，上層に黒色土，下層には黄色土が不規則に混入している。

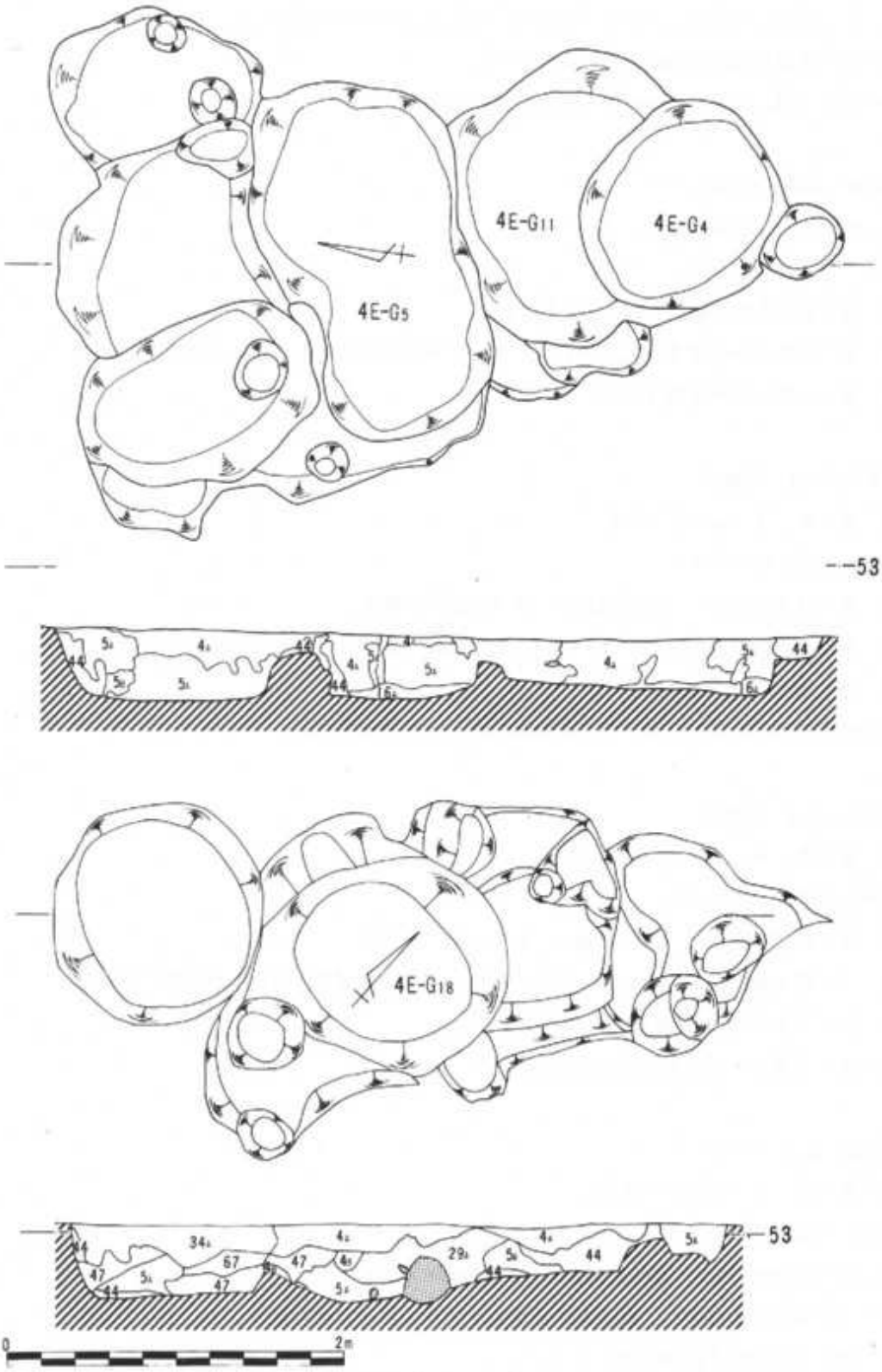
遺　物：出土していない。

○4E－G18（第40図）

位　置：III・IV，dに所在する。

プラン：円形を呈する。

規　模：直径約130cm，深さ約46cmを測る。



第40図　Gピット(中期)

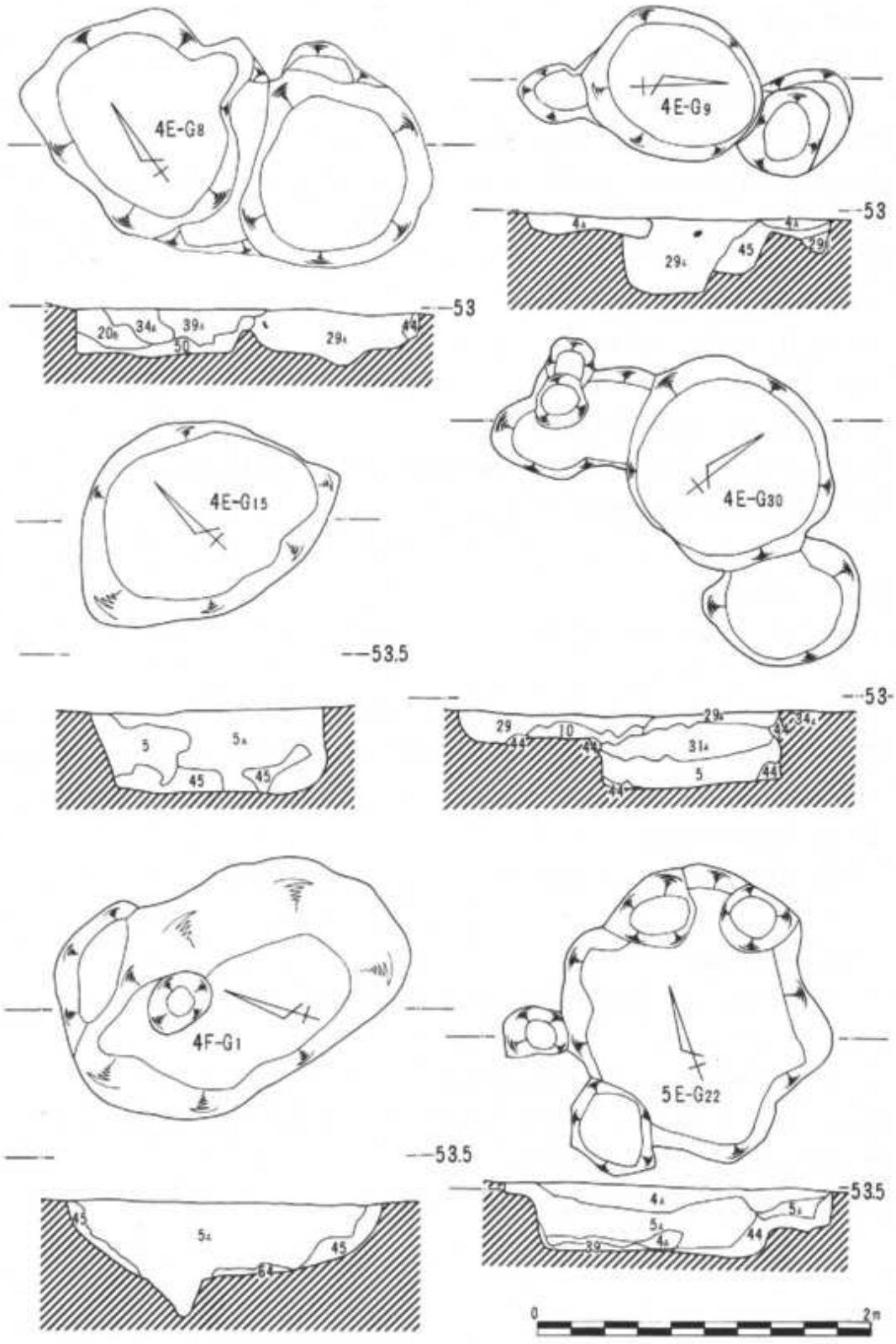
覆　土：中層に黄褐色土ブロックが認められる他は黒色土が堆積している。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。
その他：下層に直径約30cmの礫と小礫2個が認められる。

O4E－G30（第41図）
位　置：Ⅷ，aに所在する。
プラン：円形を呈する。
規　模：直径約130cm，深さ約45cmを測る。
覆　土：黒色土がほぼ水平に堆積しており，基底部には黄色土ブロックが認められる。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

O4F－G1（第41図）
位　置：X，d・eに所在する。
プラン：楕円形を呈する。
規　模：長径約212cm，短径約128cm，深さ約48cmを測る。
覆　土：壁面に黄色土ブロック，底面に灰白色土ブロックが認められる他は黒色土である。
遺　物：出土していない。
その他：底部に直径約41cm，深さ約24cmのピットが認められる。

O5E－G5（第42図）
位　置：Ⅲ・Ⅳ，e・fに所在する。
プラン：楕円形を呈する。
規　模：長径約195cm，短径約120cm，深さ約45cmを測る。
覆　土：最上層には黒色土がレンズ状に堆積し，中・下層では黒色土が混在している。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。
その他：上層に小礫1個が認められた。

O5E－G8（第42図）
位　置：Ⅳ，c・dに所在する。
プラン：楕円形を呈する。
規　模：長径約175cm，短径約135cm，深さ約44cmを測る。
覆　土：黒色土が混在し，基底部に黄褐色土ブロックが認められる。
遺　物：土器以外の遺物は出土していない。



第41図　Gピット(中期)

○5E－G18（第42図）

位　置：Ⅰ，b・cに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約135cm，短径約110cm，深さ約41cmを測る。

覆　土：黒色土がほぼ水平に堆積しているが，最下層に黄色土ブロックが認められる。

遺　物：出土していない。

○5E－G22（第41図）

位　置：Ⅸ，d・eに所在する。

プラン：不定形を呈する。

規　模：最大径約185cm，深さ約40cmを測る。

覆　土：黒色土がほぼ水平に堆積し，下層には黄色土ブロックが認められる。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

○5E－G24（第42図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，b・cに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約178cm，短径約113cm，深さ約38cmを測る。

覆　土：中層部と基底部に黄褐色土ブロックが認められる他は黒色土が3層にわたって堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

その他：基底部に直径約24cmと約14cmの小ピットが2基認められる。

○5E－G63（第42図）

位　置：Ⅸ・Ⅹ，jから5D－Ⅸ・Ⅹ，aにかけて所在する。

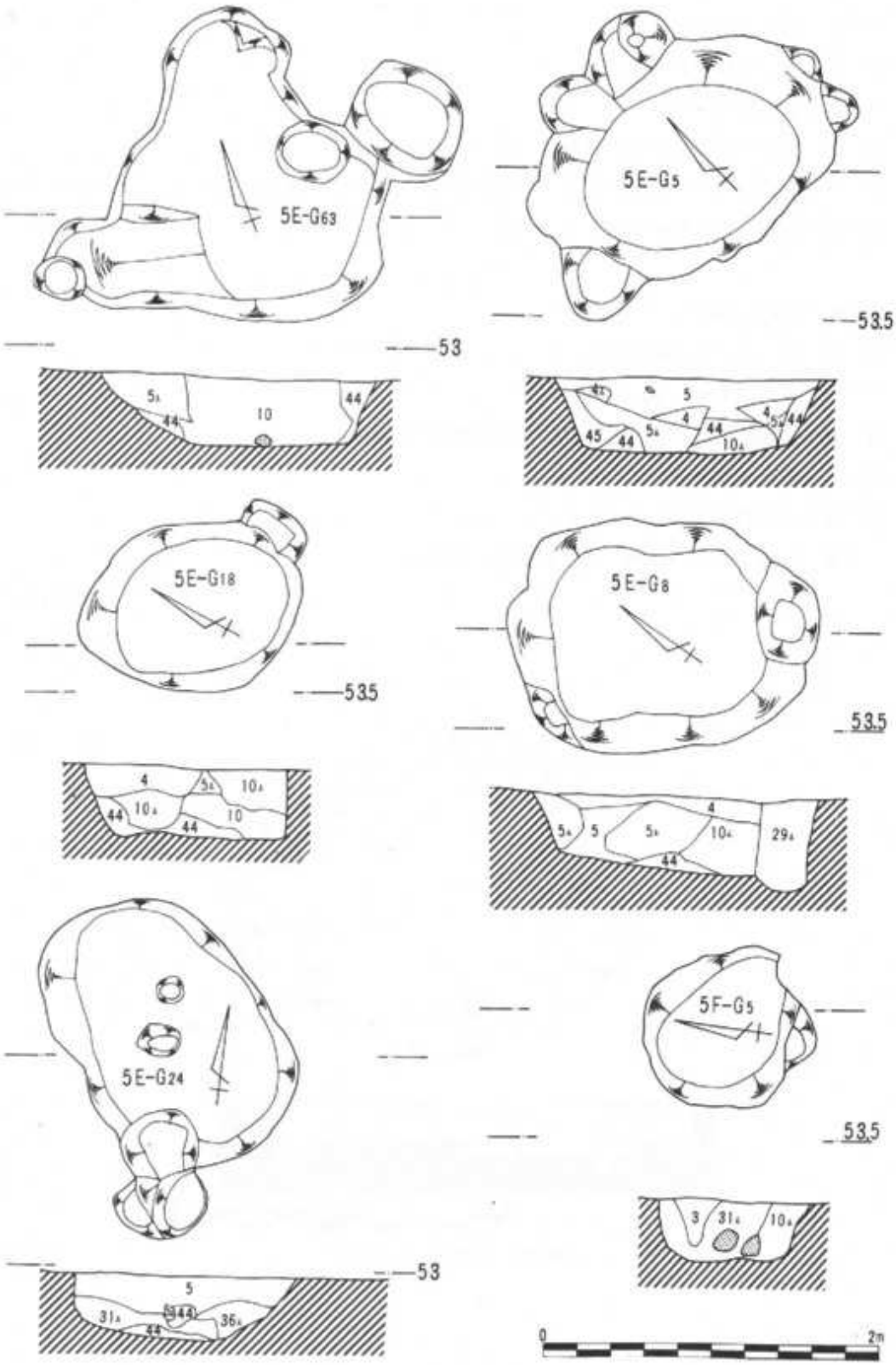
プラン：不定形を呈する。

規　模：最大径約220cm，深さ約40cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積しており，東壁及び基底部付近には黄色土ブロックが認められる。

遺　物：土器以外に耳飾りが1点出土している。

その他：基底部中央付近に直径約10cmの礫が1個認められる。



第42図　Gピット(中期)

○5E－G21（第43図）

位　置：Ⅸ，eに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

規　模：長径約130cm，短径約100cm，深さ約30cmを測る。

覆　土：西壁付近に黄褐色土ブロックが認められる以外は黒色土がほぼ水平に堆積している。

遺　物：土器以外の遺物は出土していない。

○5F－G5（第42図）

位　置：Ⅷ・Ⅸ，aに所在する。

プラン：楕円形を呈する。

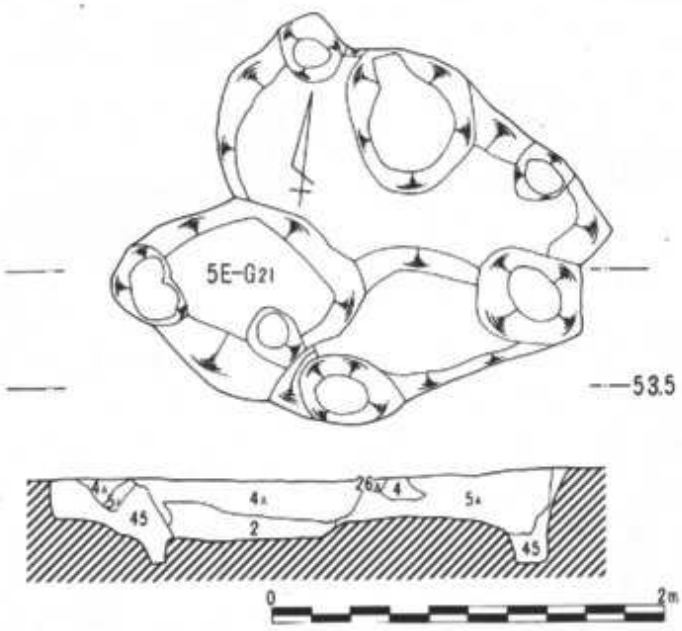
規　模：長径約105cm，短径約95cm，深さ約37cmを測る。

覆　土：黒色土が堆積している。

遺　物：土器以外に原石1点が出土したのみである。

その他：下層に直径約15cmの礫が2個認められる。

（寺崎裕助）



第43図　Gピット（中期）

（4）土器捨て場

○第1土器捨て場（図版第15図，図版第16図　第2図，第3図）

6F－H，7E－Gに位置し，埋没途中の沢を利用しておびただしい遺物が捨てられていた。なお，この地点は発掘調査以前より，遺物が多く出土する場所として地元研究者等に知られていた。沢の開口部付近での堆積は約180cmであり，地表面から約50cmあまりは攪乱及び表土層で遺物の出土量は少なかった。5・II・4層の間には多くの炭化物及び人頭大の礫が多量に混在すると同時に，下記に示すような大量の遺物も出土した。最下層には粘性に富んだ黒色土が堆積しており，遺物は上部から若干出土したのみである。地山層も段丘上の黄褐色土とは異る黄黒褐色土であり，場所によって段丘礫（？）と思われる小礫が混入していた。7F－I・II，c－gの下層からは長径約50cm，短径約30cmの楕円形の礫20数個を沢沿いに弧を描くように並べた石列（図版第16図上）が検出された。この石列下の7G－II，cからは埋甕が2個（図版第16図下）出土した。これらの埋甕はともに縄文が施された深鉢であるが東側の埋甕は口縁部が打ち欠かれ，西側の埋甕（図版第39図9）は底部が抜かれ，偏平な礫が底部付近に置かれていた。出土した遺物はおおよそ次のようである。

土器片約1882袋，復元可能と思われる土器約654点，完形土器17点，ミニチュア土器6点，土偶18点，（図版第22図5・7－9・11・14－16・20－28・31），耳飾り約13点（図版第23図16・17・21・23・24），土版1点（図版第23図13），土製品4点，石斧約183点，磨石約225点，凹石約126点，叩き石3点，石皿約90点，砥石約21点，石鏃約16点（図版第27図14・16・19－21），ナイフ2点（図版第27図1・5），石匙約8点，石錘約47点，石棒7点，原石約145点，軽石8点，フレイク約138点，珪化木2点，骨片約11点，植物遺体3袋（図版第30図13－32），アスファルト1点。

○第2土器捨て場（第2図，第3図）

2F・Gに位置しており，段丘崖の斜面に遺物が捨てられていた。堆積の厚さは約50cm～約150cmを測り，遺物は主にII・10・11・2・7層中より大量に出土しているが，第1土器捨て場よりは少なかった。また，これらの層序中には拳大～人頭大の礫及び炭化物が多量に混在し，最下層には第1土器捨て場と同じく第1層が堆積していた。出土した遺物の主なものは次のようである。

土器片約1663袋，復元可能と思われる土器約120点，完形土器2点，土偶約5点（図版第22図12・13・17・29・32・33），耳飾り2点（図版第23図15），石斧約29点，磨石3点，凹石2点，石皿4点，砥石1点，石匙2点，石錘3点，フレイク約15点，軽石1点。

（寺崎裕助）

2．縄文後期の遺構

（1）住居跡

○第2号住居跡（図版第17図　第44図）

位　置：9O－Ⅸ・X，i・j，10O－Ⅰ・Ⅱ，i・j，9P－Ⅸ・X，a，10P－Ⅰ・Ⅱ，a。

プラン：ほぼ円形。

規　模：長軸5ｍ×短軸4.8m

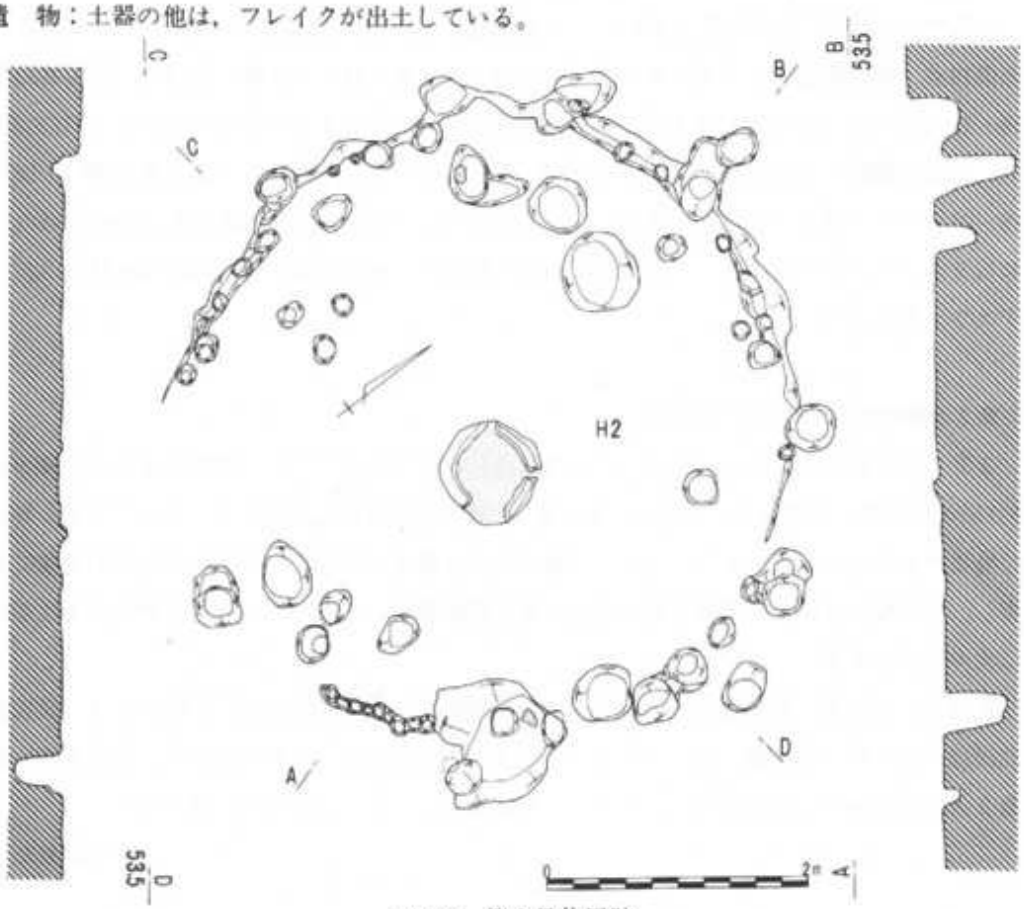
壁　：壁は地山面が南東側に傾斜しているため，9・10Pの北西側にのみ追求できた。深いところで，掘り込み確認面からの深さは約25cmであった。

周　溝：と切れながらも，壁柱穴を結ぶように北西側に周溝がめぐっている。

炉　：直径約80cmの焼土部分を砂質土で断面がカマボコ状に盛りあげて囲んでいる。石は使用していない。

柱　穴：周溝部分に壁柱穴が多くある。壁柱穴は径10～20cm，深さ10～20cmを測り，ほぼ環状にめぐっている。住居跡内には径18～60cm，深さ15～25cmの柱穴が10基以上あるが，主柱穴の区別はつかない。

遺　物：土器の他は，フレイクが出土している。



第44図　第2号住居跡

○第３号住居跡（第45図）

位　置：10O－Ⅸ・X，d～f。

プラン：円形。

規　模：長軸3.8m×短軸3.5m。

壁　：地山面が傾斜しているため，壁は南東側にやっと追求できた程度である。壁が明確な北西側は深いところで20cmの掘り込みを確認した。北側は風倒木と思われる攪乱を受け，壁を確認できなかったが，壁柱穴と思われる小ピットで範囲を推定した。

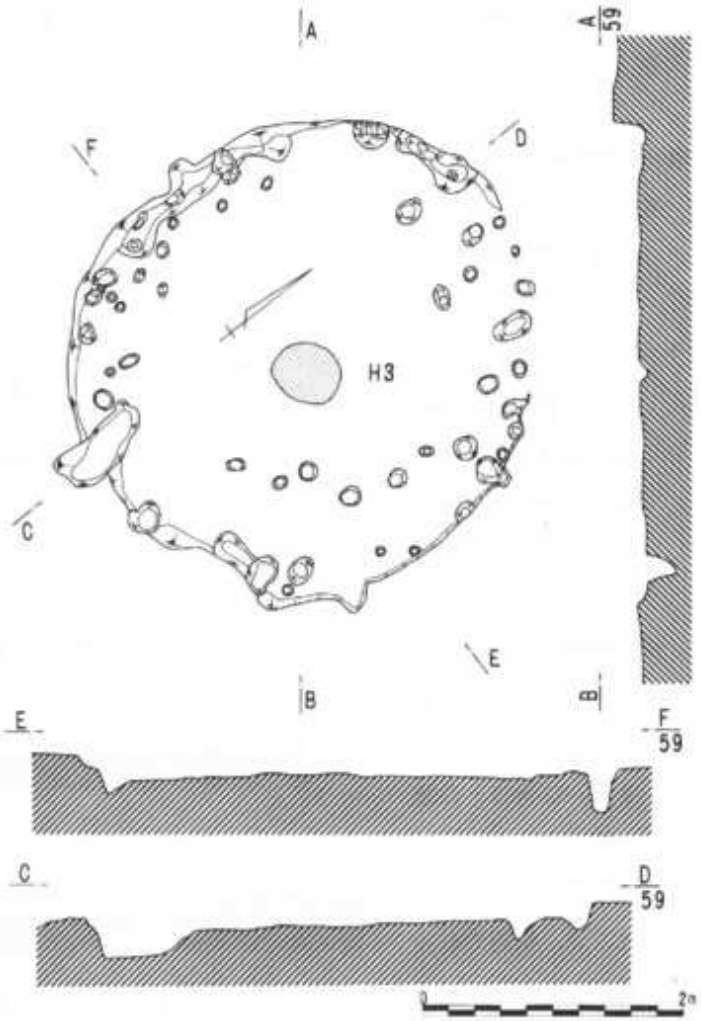
周　溝：西と北側の一部に幅20cm，深さ10cmの周溝が確認された程度である。

床　：硬く岩のようにしまった状態で検出された。

炉　：住居跡のほぼ中央に直径50cmの焼土があった。石や第２号住居跡の炉のような土帯は見られなかった。いわゆる地床炉であろう。

柱　穴：壁柱穴と思われる直径10～20cm，深さ８～25cmのピットが，壁際をめぐっていた。主柱穴と思われる規模の大きな柱穴は検出されなかった。

遺　物：土器の他に，石皿２点，石錘１点，凹石１点などが出土している。



第45図　第３号住居跡

○第9号住居跡（第46図）

位　置：10N－Ⅷ～X，i・j，10O－Ⅷ～X，a・b。

プラン：円形に近い。東側が若干狭くなっている。

規　模：長軸4.3m×短軸4m。

壁　：南東側で一部確認できなかった。残りの部分は12～17cmの深さで平均化していた。

炉　：住居跡の中央部で地山への掘り込み面が焼けている部分を炉とした。直径約50cmである。炉のまわりに径2～4cm，深さ3～5cmの小ピットがある。炉を囲った石の痕跡であろうか。

柱　穴：直径4cm前後，深さ10～25cm位のピットが多数検出された。壁柱穴と思われるものもあるが，多くは不規則に掘られていた。

遺　物：土器の他，磨製石斧3点，石錘4点をはじめ，石錐（図版第27図26）・石鏃（図版第27図11）が各1点，それに石棒が2点出土している。図版第29図1は本住居跡出土の石棒で，乳棒状石斧のように細かくたたいて作り出している。

その他：北東部が，第10号住居跡と重なりあっていた。

○第10号住居跡（第47図）

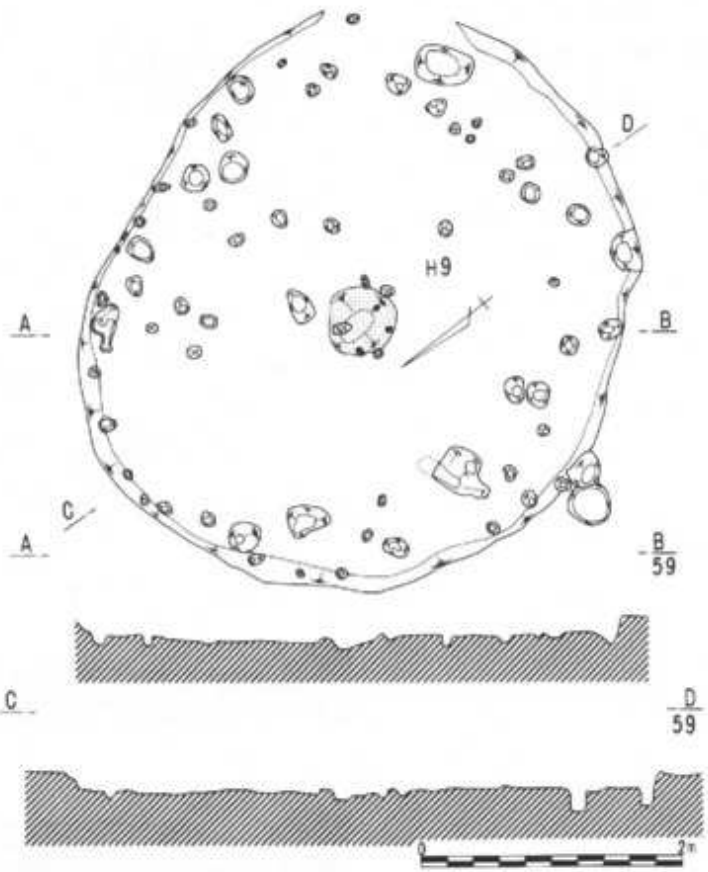
位　置：10N－Ⅶ～Ⅸ，j，10O－Ⅶ～Ⅸ，a・b。

プラン：ほぼ円形になるものと思われる。南西部が第9号住居跡と重なっているため，全体プランを確認できなかった。

規　模：長軸4.3m（？）。

壁　：第9号住居跡と複合しない北側で，深さ7～13cmほどの壁が残っていた。

床　：北部だけに確認されるが，軟弱であった。



第46図　第9号住居跡

炉　：径60～70cmの石囲炉である。

柱　穴：住居跡の外周をめぐるように径10～20cm，深さ4～11cmの壁柱穴が並んでいた。

遺　物：土器の他に，石匙1点（図版第27図28）と石錘1点が出土している。

その他：本住居跡は第9号住居跡と重なりあっていた。本住居跡と第9号住居跡の前後関係は，第9号住居跡の北東側の壁が，本住居跡の石囲炉を取り除いた下に位置していることなどから，第9号住居跡の埋没後に，本住居跡がつくられたものと考えられる。このことから，本住居跡の南西部の床が貼り床ではないかと思い，調査を進めたが確認することはできなかった。

○第12号住居跡（第49図）

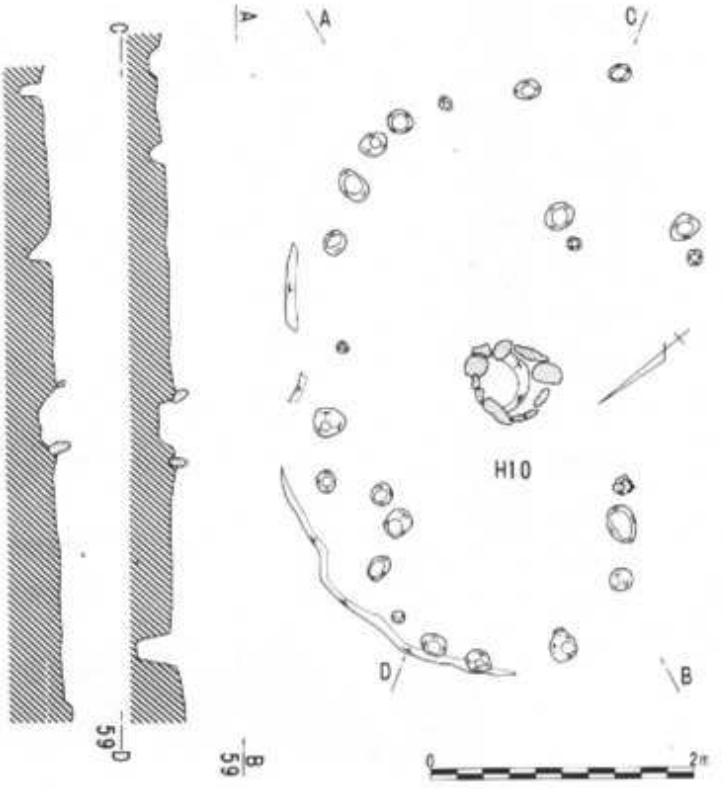
位　置：9O－Ⅲ～Ⅵ，e～h。

プラン：P1・P5を頂点とした南北に長い六角形を呈する。P6はこのプランの内側に入りこみ，規模等が他の柱穴とは異なるため，ここでは除外して考えることにしたが，あるいは補助柱である可能性がある。

規　模：長軸（P1－P5）6.2m，短軸（P2－P9，P3－P8，P4－P7）3.7m等間隔である。各柱間寸法は根固め石の状況（第49図右）から，P1－P2及びP1－P9が約2.3m，P5－P4及びP5－P7が約2.2m，その他P2－P3－P4及びP7－P8－P9が約1.9m等間隔であった。

柱　穴：径60～80cm，深さ80～90cmの柱穴で，根固め石が各柱穴に見られる。

遺　物：少量の土器と打製石斧1点，凹石2点などが柱穴から出土している。



第47図　第10号住居跡

その他：本住居跡は９０グリッド付近の根固め石の入った柱穴で住居跡と想定した。このため，壁・炉・周溝等の竪穴式住居跡に普遍的な施設は確認されなかった。本住居跡は規模――特に，柱間寸法に一定の法則が見い出されるなど，歴史時代の掘立柱建物跡をほうふつさせるものがある。なお，根固め石の保存状態のよいＰ１・Ｐ４・Ｐ９から本住居跡の柱材は径20cmのものを使っていたのではないかと思われる。

○第13号住居跡（図版第17図　第48図）

位　置：９Ｌ－Ｖ～Ⅶ，ａ～ｃ。

プラン：楕円形。

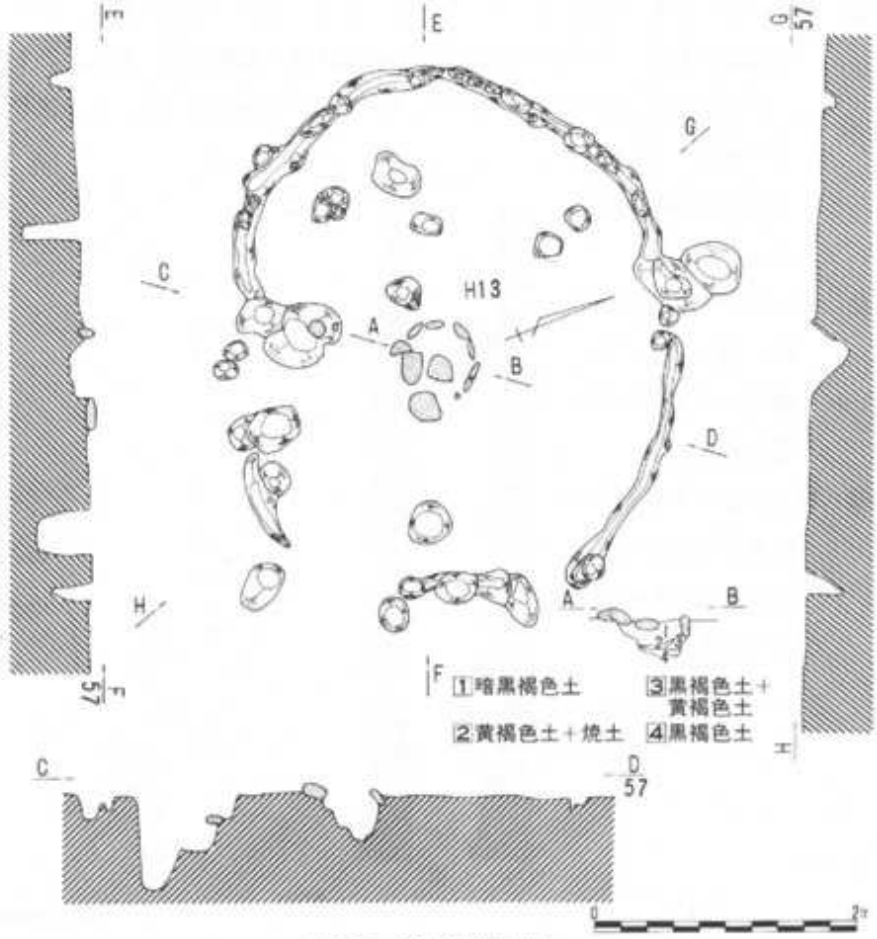
規　模：長軸4.2m×短軸3.4m。

壁　：確認されなかった。おそらく，第Ⅱ層黒褐色土中に存在したものと思われる。

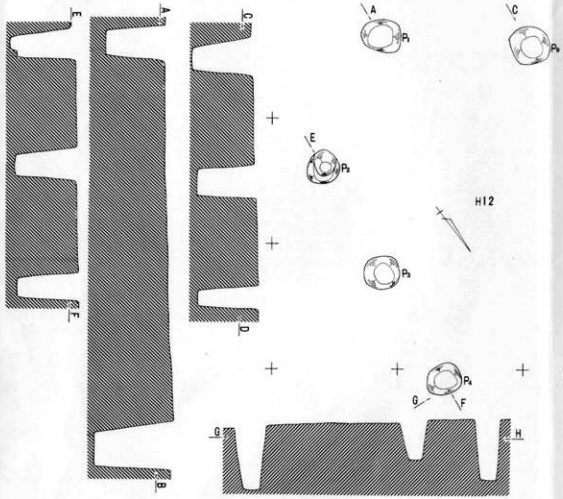
周　溝：南東側の一部を欠くが，幅15～18cm，深さ５～18cmの溝がめぐっていた。周溝内には，径４×12cm，深さ13～20cmの壁柱穴が西側に多くみられた。

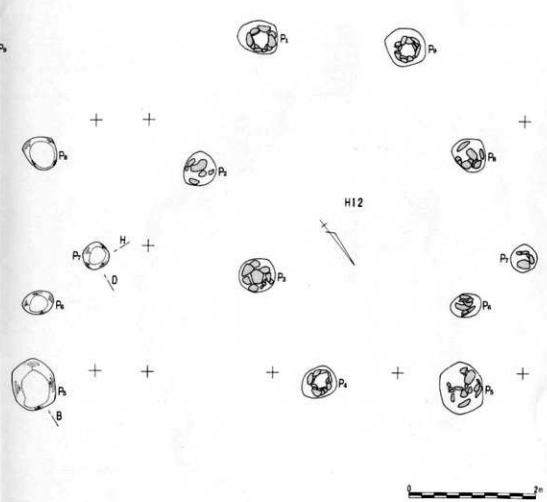
炉　：65×80cmの石囲炉である。ピットのように掘り込んでいた。焼土はほとんどない。

柱　穴：壁柱穴以外には径30～50cm，深さ20～65cmの柱穴が住居跡内にあるが，主柱穴を判断することはできなかった。



第48図　第13号住居跡

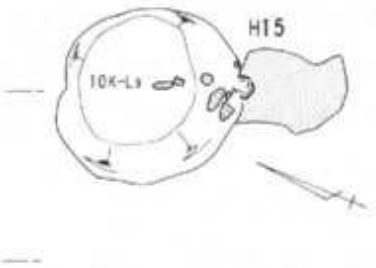




第49図　第12号住居跡　（右のH12は根固め石の状況図）

遺　物：覆土の確認ができないため，床面及び柱穴の土器以外には遺物の出土は見なかった。土器は少量である。

その他：地山に発見された石囲炉と，柱穴の回りをめぐる周溝とで住居跡と判断した。



○第15号住居跡（第50図）

位　置：10K－Ⅵ・Ⅶ，b・c。

炉　：埋甕炉で，南側に60cm×80cmの方形の焼土があった。焼土は地山が皿状に凹んでいるところにつまっていた。

第50図　第15号住居跡

その他：本住居跡は地山面にある埋甕炉でもって住居跡とした。このため，壁・周溝等の内部施設は不明である。炉は後に掘り込まれた10K－L9によって埋甕部分がこわされている。10K－L9の壁にはりついている土器や底面の土器が埋甕と接合された。

○第18号住居跡（第51図）

位　置：11I－Ⅲ，b。

炉　：一辺60cmの方形を呈する石囲炉で，石囲内と西辺外に埋甕がある。炉内には焼土がつまっていた。

その他：地山面にある石囲炉で住居跡とした。壁・周溝・柱穴等は不明である。

○第17号住居跡（第52図）

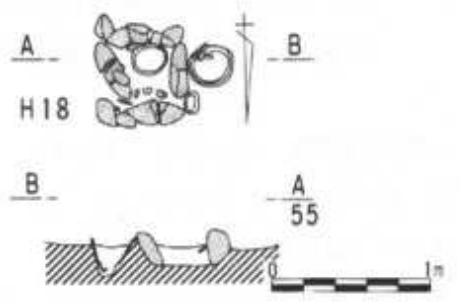
位　置：9O－Ⅵ～Ⅷ，j，9P－Ⅵ～Ⅷ，a・b。

プラン：壁柱穴と思われるピットの状態からほぼ円形を呈するものと思われる。

規　模：上記のプランから，直径約5mか。

炉　：70cm×80cmの石囲炉。

柱　穴：西側に径12～40cm，深さ20～50cmの柱穴が壁柱穴のように並んでいる。他に径20～40cm，深さ15～40cmの柱穴が他の方向にみられた。



第51図　第18号住居跡

遺　物：土器が少量出土している。

その他：地山面で石囲炉を発見し，それを中心に半径 2.5m 前後の位置にある柱穴をもって住居跡とした。柱穴の多くは本住居跡のものと異なるかもしれない。本住居跡西側は第33号住居跡と切り合っており，若干第33号住居跡より床面が低い。

○第33号住居跡（第52図）

位　置：9 P－Ⅵ～Ⅷ，b～e。

プラン：柱穴の位置から円形と思われる。

炉　：60cm×80cmの地床炉。炉は皿状にくぼんでいた。

柱　穴：柱穴は径20～50cm，深さ15～50cmのピットが，炉から半径 3 m内外に位置している。炉の南側に径20cm，深さ30cmの小ピットがかたまっており，本住居跡の壁柱穴かとも思われる。

遺　物：土器の他に磨製石斧が 1 点出土している。

その他：第17号住居跡と同じく，地床炉とそれを取り囲む柱穴でもって住居跡と判断した。壁・周溝・規模などは不明である。

○第29号住居跡（第53図）

位　置：9 K－Ⅵ～Ⅹ，f～j。

プラン：楕円形か。

規　模：長軸 8 m×短軸 4 m。

炉　：径40cmの円形を呈する地床炉。炉内に土器片がしかれていた。

柱　穴：径12～20cm，深さ 9 ～40cmの柱穴が，壁柱穴のように炉から半径 3 ないし 4 mの位置をめぐっている。

遺　物：少量の土器以外は，炉内から骨片が出土しただけである。

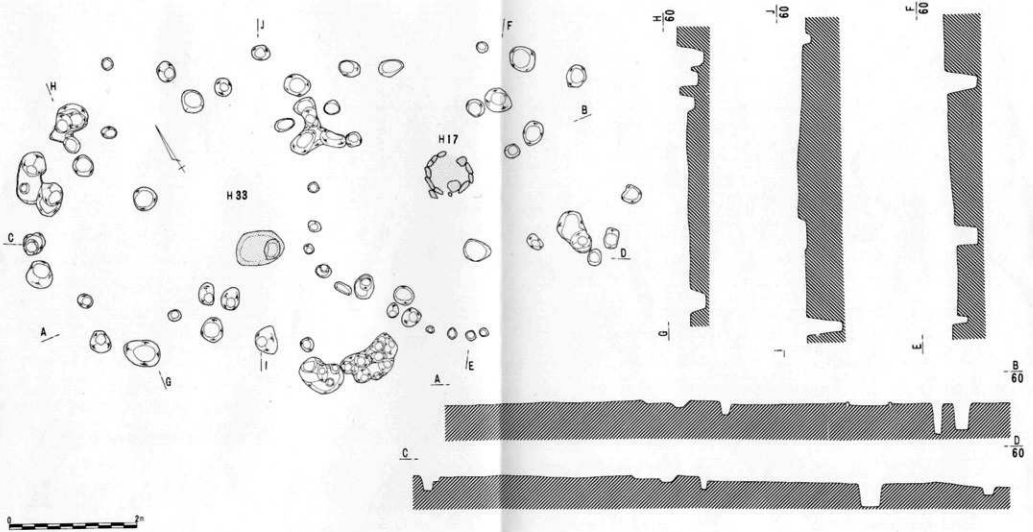
その他：南側に 9 K－L49・L87のLピットがあった。本住居跡は地山面にある炉を中心に床面を精査していったところ，図中の壁柱穴と思われるピットより外側の地山面が軟らかくなり，このため地山面が硬くて壁柱穴に囲まれた範囲を住居跡として考えた。周溝らしい幅20cm前後の溝が炉の西側にみられる他は，壁等の施設は不明である。

○第32号住居跡（図版第18図　第54図）

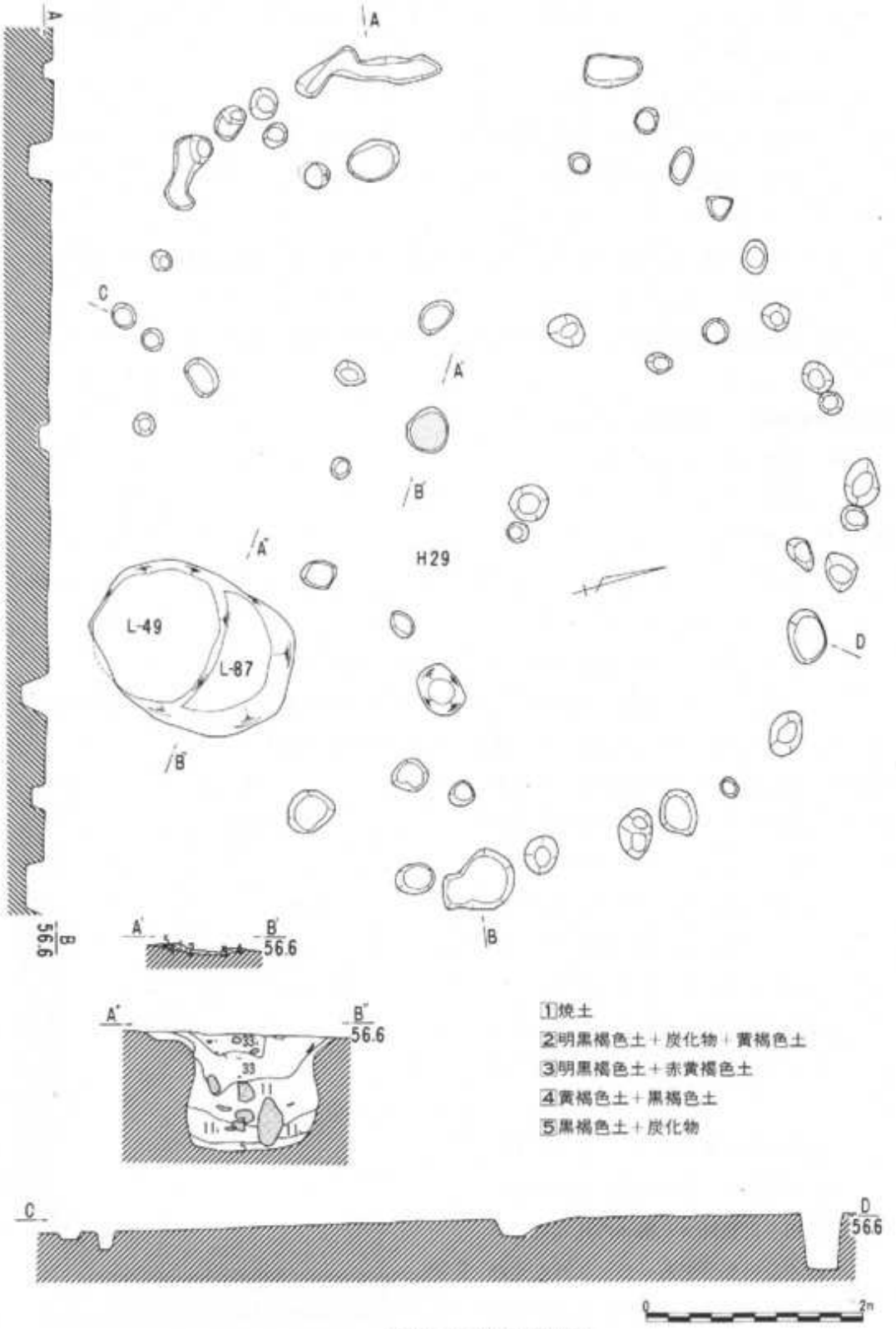
位　置：9 P－Ⅳ～Ⅵ，h～j。

プラン：楕円形。

規　模：長軸2.9m×短軸2.7m。



第52図　第17・33号住居跡



第53図　第29号住居跡

壁　：南西部のピットで一部切られているが，他は3～8cmの深さでほぼ垂直に近い立ちあがりの壁がめぐっている。

炉　：ほぼ中央部に径40cmの石囲炉がある。

柱　穴：径25cm，深さ7～20cmの壁柱穴らしいものが4基と，南西部に径80cm，深さ15cmのピットと径24cm，深さ11～16cmの柱穴が4基ならんでいた。その他小ピットが内部にみられた。

遺　物：炉の北東側で石皿が床面から出土。その他，石鏃・板状石器・打製石斧各1点などが土器といっしょに出土した。

その他：周溝は発見されなかった。後期の中で，本住居跡は保存状態がよい方である。

○第34号住居跡（図版第18図　第55図）

位　置：9M－Ⅸ・Ⅹ，f－h。

プラン：円形。

規　模：直径約2.2m。

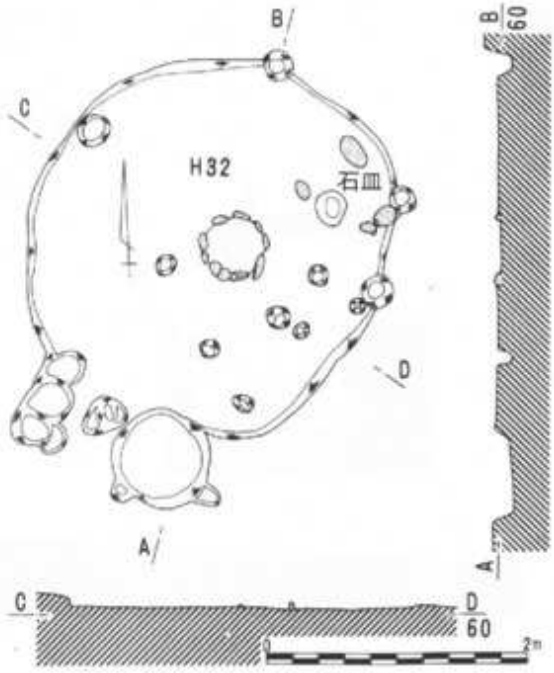
壁　：敷石の縁辺部に，とぎれながらも15～40cmの石を立てている。また，炉の東側の縁には25cm×65cmの大きな石を立てている。

床　：8cm×10cm～25cm×40cm内外の偏平な河原石を敷きつめている。

炉　：中央部からやや東寄りの位置に，石で囲まれた30cm×40cmの方形の焼土帯がある。

遺　物：土器が敷石の間から出土した。また，板状石器が1点出土している。

その他：本住居跡は岩野原遺跡唯一の敷石住居跡である。第Ⅱ層黒褐色土上面に床が位置していた。このため掘り込みの深さや柱穴は確認できなかった。炉の西側に径30～40cmの石が敷かれていない部分が2ヵ所あり，柱穴の位置かとも思われるが，掘り込みが確認できないため，積極的に柱穴とすることはできない。また，炉の東側縁に横たわっている大きな石の南側に8～10cm×20～30cmの立石で囲った径16cm×20cmの柱穴らしい石のない部分があった。これも先の2例と同じように柱穴と断定するに



第54図　第32号住居跡

はいたらず，可能性があるに，とどめておいた。

○第48号住居跡（第56図）

位　置：7Q－Ⅷ－X，b－d。

プラン：南半分が不明であるが，残存部分から楕円形を呈するものと思われる。

規　模：長軸4.2m×短軸3.8m（残存部分で計測）。

壁　：北半分と南側に一部が残っている。深さ2～12cmである。

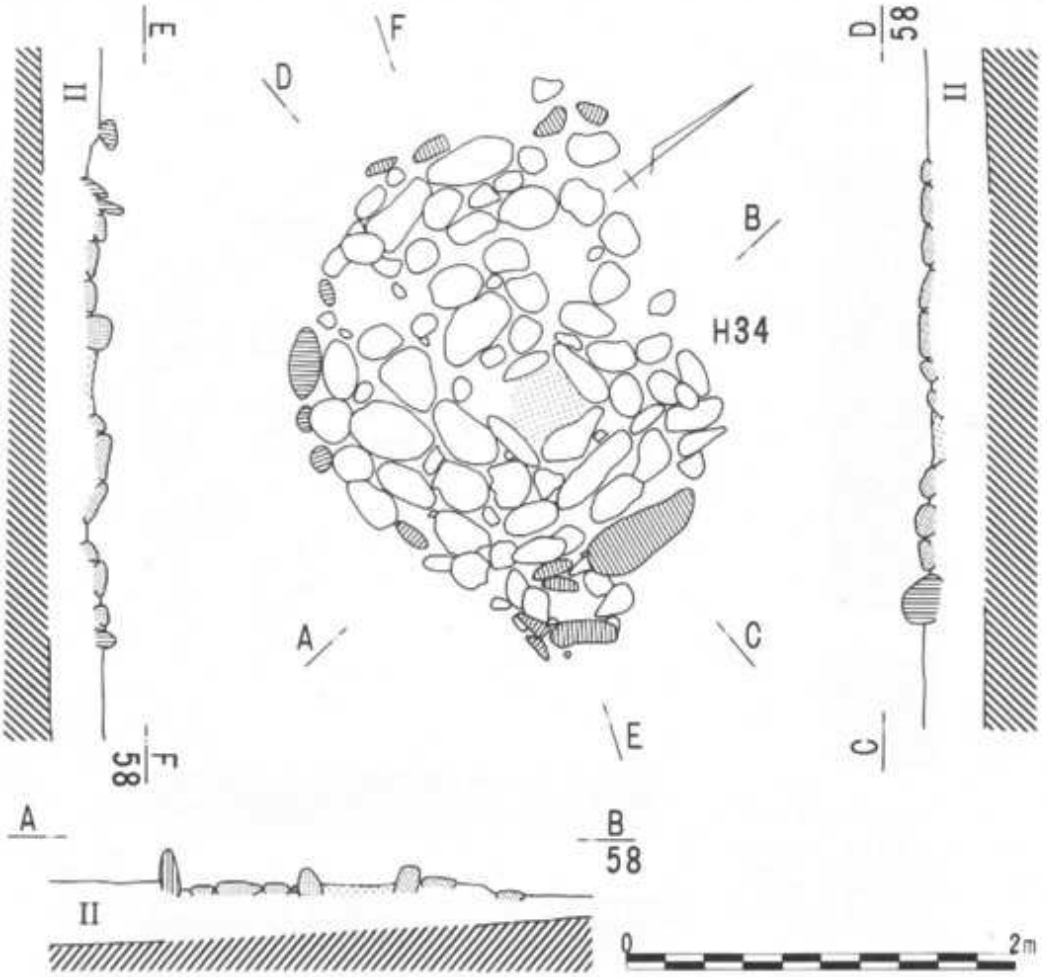
周　溝：確認できなかった。

床　：地山面に掘り込まれているが，床には小砂利がみられた。

炉　：住居跡のほぼ中央に60cm×100cmの範囲に焼土が広がっており，焼土の南に18cm×30cmの礫が1個だけ残っていた。また焼土が，北と東の2ヵ所にみられた。

柱　穴：北側の残存部に径30～44cm，深さ11～78cmの6本の柱穴が壁の内側を回っていた。

遺　物：土器の他，石錘が1点出土している。



第55図　第34号住居跡　（図の縞線は立石）

その他：本住居跡の南側半分に後世の人為的な痕跡がみられた。

○第49号住居跡（図版第19図　第57図）

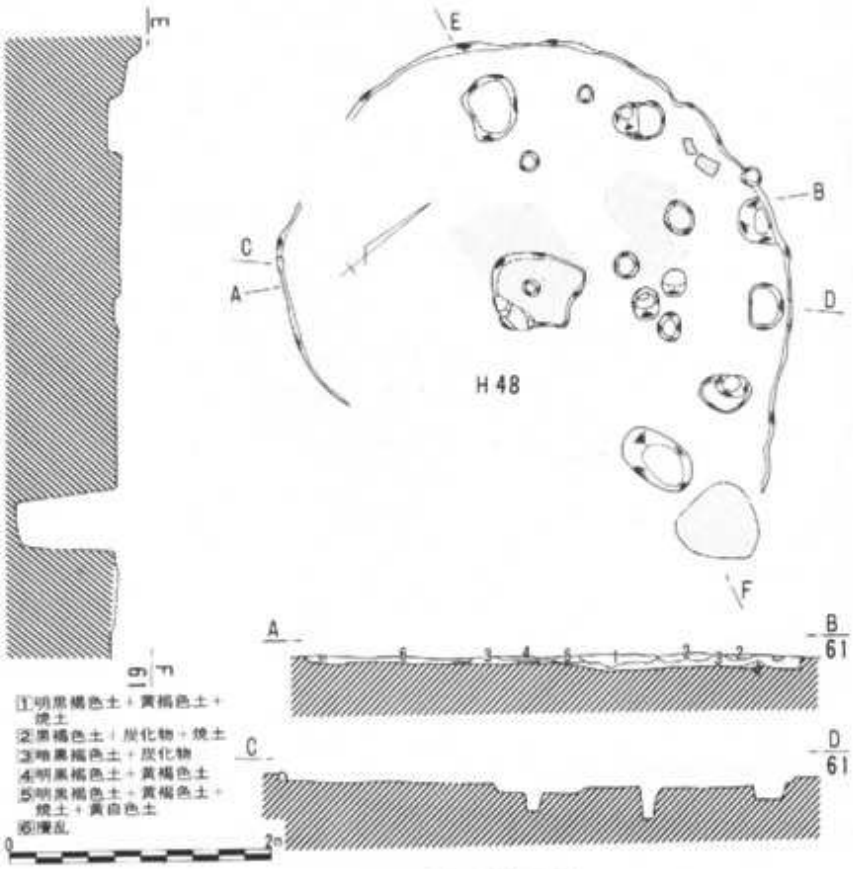
位　置：７Ｏ－Ⅸ・Ｘ，ｈ～ｊ，８Ｏ－Ⅰ・Ⅱ，ｈ～ｊ。

プラン：Ｐ１－Ｐ４を長軸とした六角形を呈する。

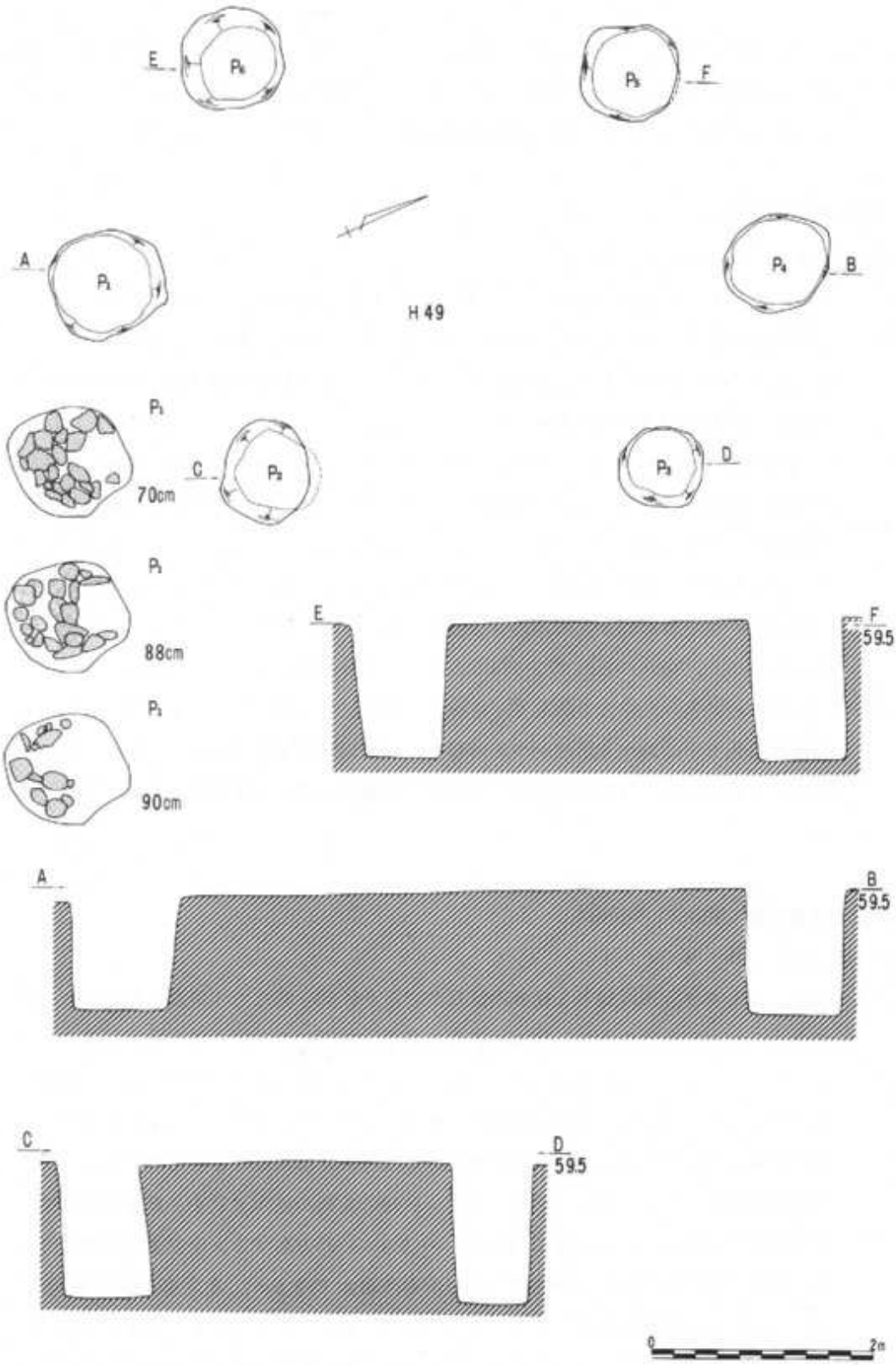
規　模：長軸（Ｐ１－Ｐ４）は 5.8m，短軸（Ｐ２－Ｐ６・Ｐ３－Ｐ５）は 3.6m等間隔である。柱間寸法は長軸の頂点のＰ１－Ｐ２・Ｐ１－Ｐ５，Ｐ４－Ｐ３・Ｐ４－Ｐ５が約 2.2mの等間隔で，Ｐ２－Ｐ３及びＰ５－Ｐ６は約 3.5m等間隔である。

柱　穴：径80～100cm，深さ100～128cmの柱穴が６本ある。いずれも根固め石が入っていた。第57図にＰ１の根固めの状況を図示しておいたが，図中の70cm・88cm・90cmはいずれも確認面から根固め石底面の平均値である。これによれば，柱穴底部は根固め石がまばらで，上にいくにつれ，密となっていることがわかる。石は10～20cmのものを使用していた。石の入り方はまるでコンクリートを埋め込んだようであり，発掘には困難をきわめた。

遺　物：遺物の出土はない。



第56図　第48号住居跡



第57図　第49号住居跡

（Ｐ１の右下の数字は柱穴確認面から礫底面までの深度の平均値）

その他：本住居跡は第12号住居跡と同じく根固め石の入った柱穴を結んで住居跡とした。本住居跡は柱穴を地山面で確認したため，炉などの施設は確認されなかった。なお，P1の根固め石の状況から，柱材は径40cm前後のものを使用したと思われる。

○第50号住居跡（第58図）

位　置：8O－II～IV，f～h。

プラン：P1及びP5を長軸の頂点とした場合，南北に長い六角形を呈する。

規　模：長軸（P1－P5）5.2m，短軸はP2－P9が3.5m，P4－P6が3.6mである。柱間寸法はP2－P1－P9が2m，P4－P5－P6が2.1m，P2－P4及びP6－P9が3.1mの等間隔である。

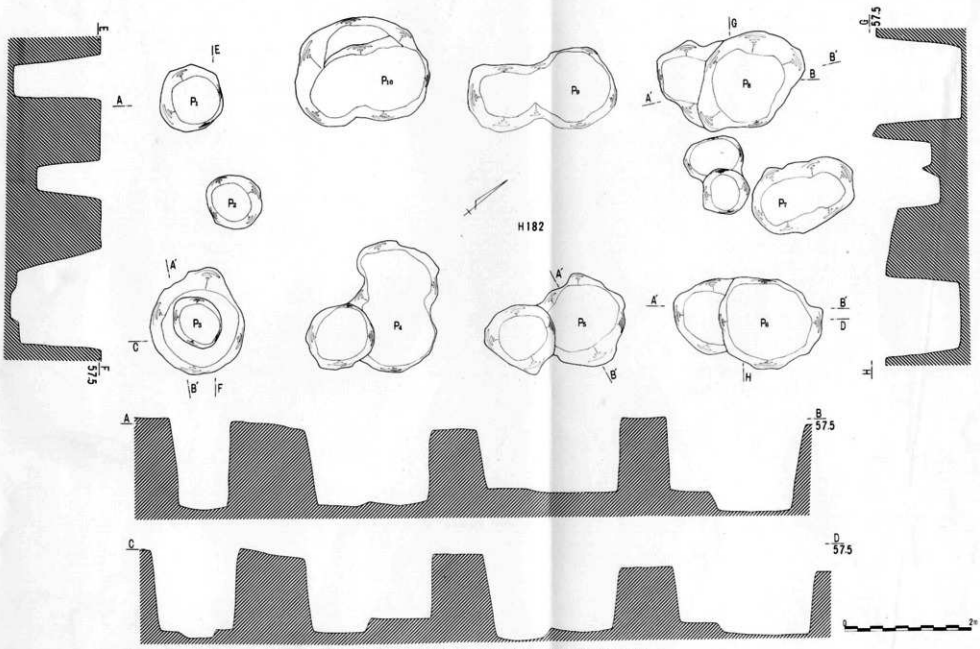
柱　穴：9本の柱穴に根固め石がいずれもつまっていた。柱穴の規模は径60～90cm，深さ70～118cmである。P3・P7・P8は，P2－P4及びP6－P9を結ぶ線より外側に位置し，柱間寸法がこのP3・P7・P8を入れることにより，一定の寸法でなくなることもあり，第50号住居跡を主として構成する柱穴とは考えにくく，補助的なものではないかと思われる。根固め石は径10～15cmの石を使い，コンクリートを埋め込むのと同じく，棒状のもので突いて入れたと思われるほどぎっしりとつまっていた。

その他：根固め石の入った柱穴を結んで，住居跡と想定した。柱穴が地山面で確認され，第II層黒褐色土中における状況がつかめ得ず，柱穴以外の施設は確認できなかった。
また，本住居跡から遺物が出土したか否かは，遺物整理が完全でないため，不明である。

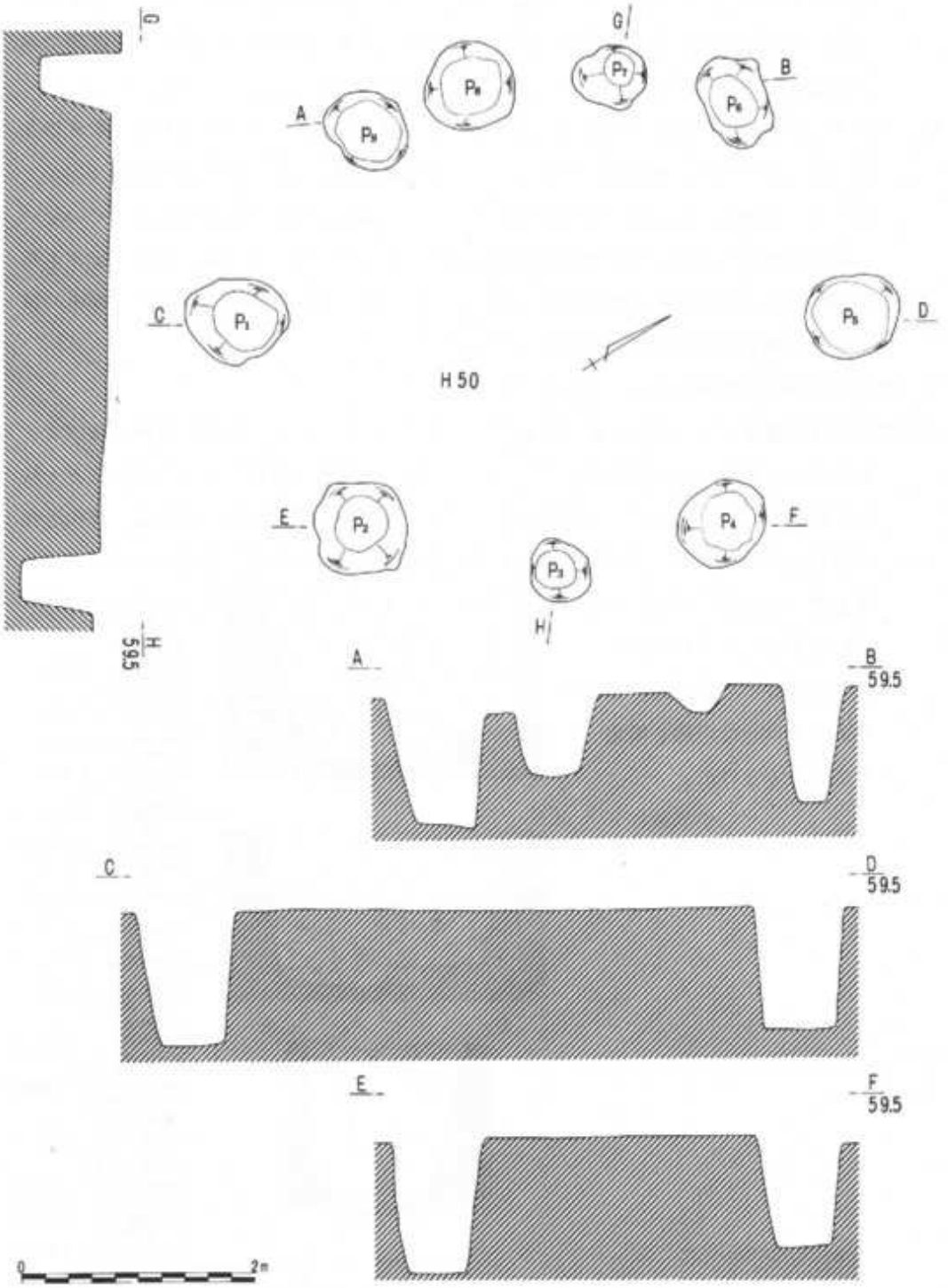
○第182号住居跡（第59図，第60図）

位　置：7L－II～VII，c～f。

プラン・規　模：本住居跡は掘方と柱痕の区別ができる柱穴を結んで住居跡と想定したものである。9本の柱穴のうち，P4～P6・P8－P10の6本は2本の柱穴が切りあっていた。切りあっている6本の柱穴を加えると本住居跡は16本の柱穴によって構成されていたことになるが，これを第12号・第49号・第50号住居跡のように，柱間寸法に法則を見い出して分解すれば，次の2棟分の住居跡に分けることも可能である。つまり1棟はP4・P5・P6・P8・P9・P10の北側の柱穴とP1・P3の8本で，桁行3間（約9m）×梁行1間（約3.6～3.8m）の方形プランを呈する住居跡である。柱間寸法は桁行約3m等間隔，梁行が南西妻が約3.6m，北東妻が約3.8mを測る。これを仮に第182号Aとする。もう1棟は，P4・P5・P6・P8・P9・P10の南側の柱穴とP2・P7を結ぶ，第12号住居跡と同様の南北に長い六角形を呈す



第60図　第182号住居跡(柱穴断面図は第59図参照　なお，柱穴断面図はA´ B´ を切断したものである)



第58図　第50号住居跡

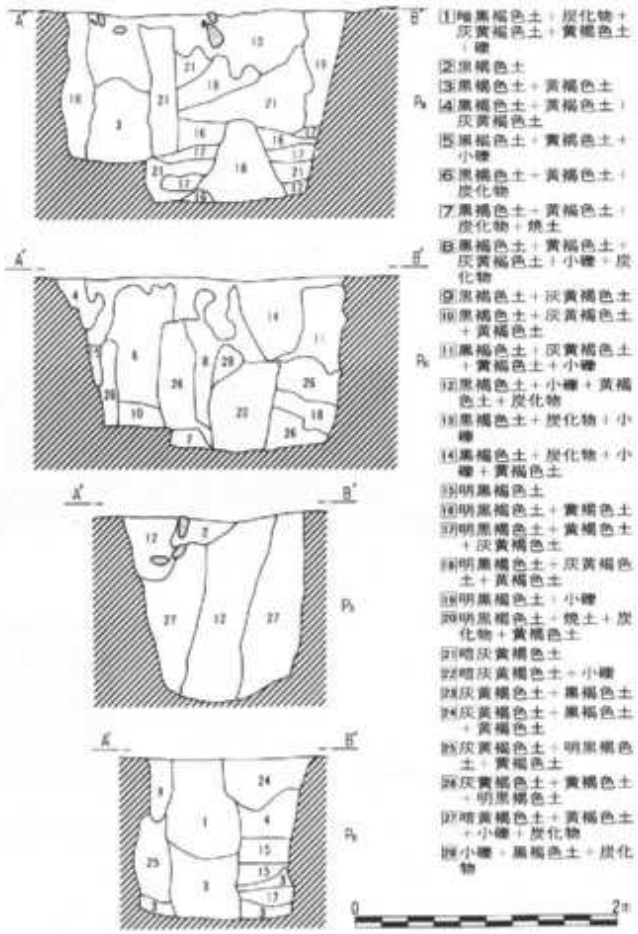
る住居跡である。柱間寸法は，P10－P2－P4が約 2.6m，P6－P7－P8が約 2.5mの等間隔で，P4－P5－P6及びP8－P9－P10は約 2.8mの等間隔で前の第182号Aよりは規模が小さく，形態も異なっている。これを第182号Bとする。

柱　穴：Aの柱穴は，径100 ～ 150cm，深さ100 ～ 140cmを測り，P5及びP6・P8の北側の掘方は下部が，版築状に埋土をしている（第59図）。Bの柱穴は径90 ～ 100cm，深さ90～ 100cmとAに比べてひとまわり小さく，掘方の埋土が版築状を呈していない（第59図P6・P8）など第182号Aとの違いがでている。A・Bいずれの柱穴も第59図中における柱痕の土砂は第1・3・6・10・12・18・20層で，一見して掘方の埋土とは識別できるほど黒色味をおびていた。

遺　物：土器が柱穴内から出土しただけである。

その他：本住居跡はピットを地山面で確認した段階では，Lピットと思われる程平面プランが大きく，Lピットの例にならいピットを半截して覆土を観察したところ，掘方と柱痕が区別された。このような柱穴列をもって，住居跡を想定したのである。本住居跡は柱間寸法などから，2棟に分解される可能性をもっているが，縄文時代において，第12号・第49号・第50号それに本例のような住居跡の報告例を聞かないため，積極的に2棟の住居跡と断定することをさけた。

（駒形敏朗）



第59図　第182号住居跡柱穴断面図

（2）Lピット

開口部直径・深さとも1m以上のピットを原則としてLピットとした。

○5K－L4（第61図）

位　置：5K－Ⅰ・Ⅱ，a・b。

規　模：開口部直径225cm，基底部直径125cm，深さ135cm。

覆　土：4層に分けられ，レンズ状を呈している。北壁に黄色土が堆積している。

遺　物：石斧2点，磨石4点，石錘2点等が出土。

その他：小ピットが開口部の周囲にある。開口部は朝顔状に開いている。直径15～20cmの礫や小礫が覆土中層に多くみられた。

○5K－L3（第61図）

位　置：5K－Ⅳ，a・b。

規　模：開口部直径145cm，基底部直径100cm，深さ130cm。

覆　土：9層に分けられる。黒色土を中心に両壁に，黄褐色土の強い土層が入り，中層に炭化物が混入した黄褐色土が堆積していた。

遺　物：土器と石皿6点，凹石2点，石錘2点などが出土。

その他：開口部の周囲に直径20cm前後の小ピットが検出された。20～25cmの礫が多く上層から下層に入っていた。

○5J－L1（第61図）

位　置：5J－Ⅴ，b・c。

規　模：開口部直径100cm，基底部直径95cm，深さ132cm。

覆　土：3層に分けられ，黄褐色土のブロックが中層から下にみられた。

遺　物：中層から土器片が出土し，その他は凹石1点，石錘2点，板状石器2点がある。

その他：ピットは中央より下位が，直径150cmと大きくふくらんでいた。20～25cmの礫が底面近くに多くあり，上層部に15cmの礫が数個検出された。

○6I－L1（第61図）

位　置：6I－Ⅵ・Ⅶ，f・g。

規　模：開口部直径113cm，基底部直径95cm，深さ113cm。

覆　土：3層に分けられ，東にかたむくようにレンズ状に堆積していた。

遺　物：土器片が上層より少量出土した。

その他：北側に傾くように掘り込まれていた。

○6K－L7（第62図）

位　置：6K－Ⅳ・Ⅴ，g・h。

規　模：開口部直径135cm，基底部直径96cm，深さ108cm。

覆　土：5層に分けられる。底部に炭化物がつまった黒褐色土があり，中層より上層にかけての両壁に黄褐色土がみられる。

遺　物：石皿2点，石錘2点，磨石2点が出土している。

その他：東壁に新たなピットが掘り込まれ，図版第42図6の土器が埋設されていた。この土器の中には20cm前後の礫が数個入っていた。また，北にもピットが掘り込まれていた。

○6K－L45（第62図）

位　置：6K－Ⅷ，a。

規　模：開口部直径135cm，基底部直径100cm，深さ103cm。

覆　土：黒褐色土を4層に分けることができる。

遺　物：土器以外の遺物は出土しない。

その他：南西壁に深さ24cm，推定直径100cmのピットが掘り込まれていた。ピット底面近くに30cm前後の礫が落ち込んでいた。

○7H－L3（第62図）

位　置：7H－Ⅱ・Ⅲ，b・cで第111号住居跡の炉辺に位置していた。

規　模：開口部直径112cm，基底部直径82cm，深さ104cm。

覆　土：黒褐色土と黄褐色土がほぼ交互に堆積するレンズ状を呈し，5層に分けられる。

遺　物：土器片が出土したのみ。

その他：中期の住居跡内に位置しており，あるいは住居跡の一施設かと思われる。また，出土土器が細片のため，時期を決定することができない。しかし，規模や覆土の堆積状態及び15～20cmの礫が入り込むことなどでは後期のLピットの要素を示していた。

○7I－L1（第62図）

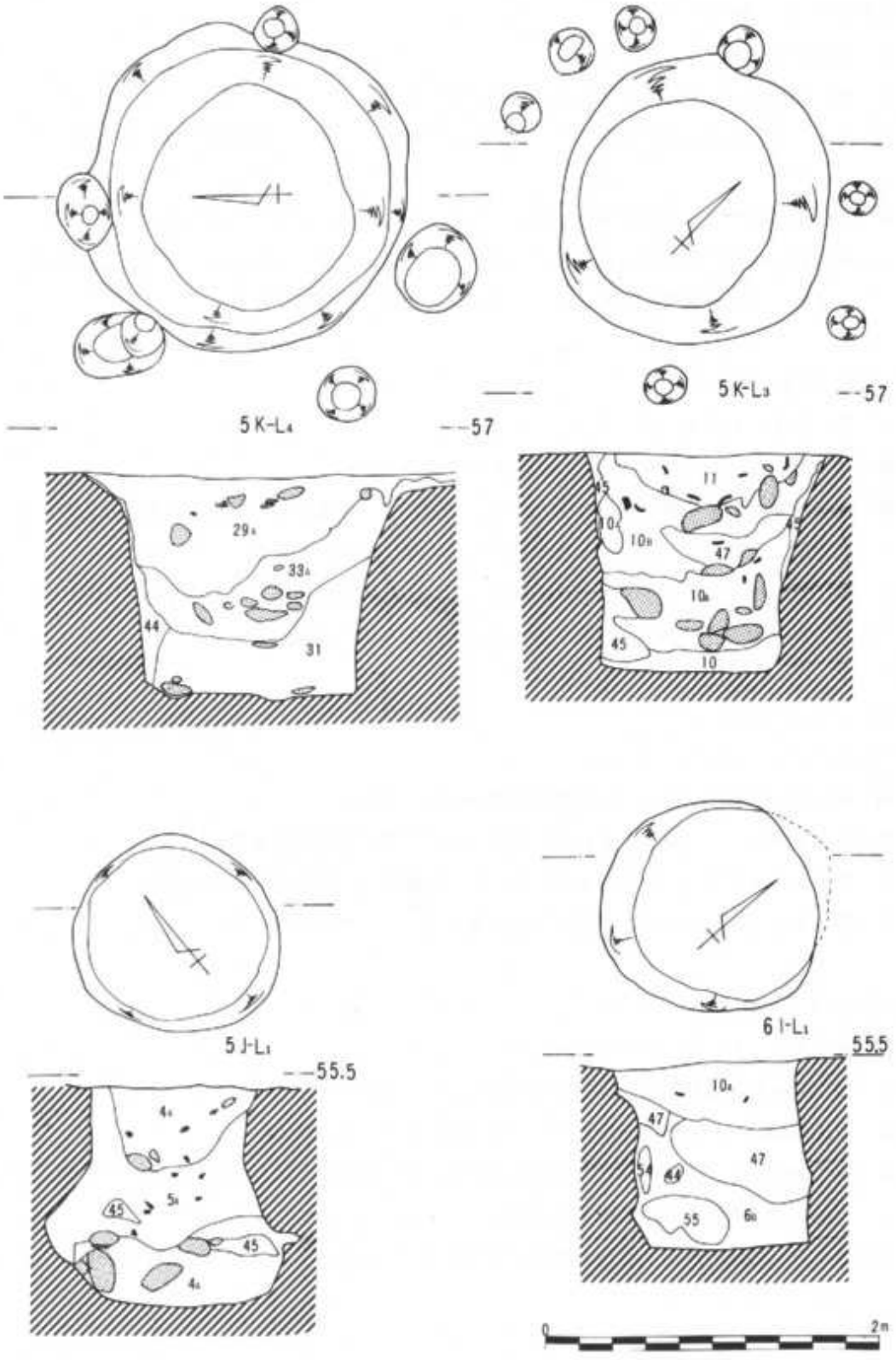
位　置：7I－Ⅶ・Ⅷ，i・j。

規　模：開口部直径126cm，基底部直径95cm，深さ72cm。

覆　土：黒褐色土を基本に3層に分けられる。覆土上層は炭化物を多く含んでいた。

遺　物：土器が上層から出土。その他に凹石1点，石錘1点が出土した。

その他：開口部及び底部の直径が1m前後であるのに比して，深さが77cmと他のLピットよりは浅く，Gピットかと思われるが一応Lピットの仲間にした。


5K-L4
57
5K-L3
57
29A
33A
44
31
11
10A
10B
47
10A
45
10
5J-L1
55.5
4A
5A
45
45
4A
6I-L1
55.5
10A
47
47
54
44
55
6B
0
2m

第61図　Lピット

○７Ｉ－Ｌ２（第62図）

位　置：７Ｉ－Ⅸ，ｊ。

規　模：開口部直径95cm，基底部直径63cm，深さ77cm。

覆　土：黒褐色土が５層に分かれてレンズ状に堆積していた。上層は炭化物が多く混入していた。

遺　物：土器片が，上層と下層に分かれて出土。その他，石錘が１点出土した。

その他：15cm前後の礫が底面近くにあった。このＬ２は７Ｉ－Ｌ１と同じく浅いが，Ｌピットとしては全体的な規模が小さくまとまったものと判断される。

○７Ｉ－Ｌ３（第63図）

位　置：７Ｉ－Ⅵ・Ⅶ，ｇ・ｈ。

規　模：開口部直径150cm，基底部直径120cm，深さ134cm。

覆　土：黒褐色土を基調に10層に分かれる。下層の壁に黄褐色土のブロックがみられた。また第５層中に炭化物の入った土層がレンズ状に堆積していた。

遺　物：土器が上層から中層にかけて散乱していた。打製石斧が１点と骨片が少し出土した。

その他：10cm未満の小礫が，中層から上層にかけて入っていた。

○７Ｉ－Ｌ４（第63図）

位　置：７Ｉ－Ⅳ・Ⅴ，ｉ・ｊ。

規　模：開口部直径190cm，基底部直径130cm，深さ84cm。

覆　土：黒褐色土で４層に分かれる。上層へいくに従って炭化物が多い。

遺　物：土器が中層より上位に出土している。石錘１点，板状石器１点が出土。

その他：25cmの礫が底面及び中層にみられる。落ちこんだのであろうか。

○７Ｊ－Ｌ５（第63図）

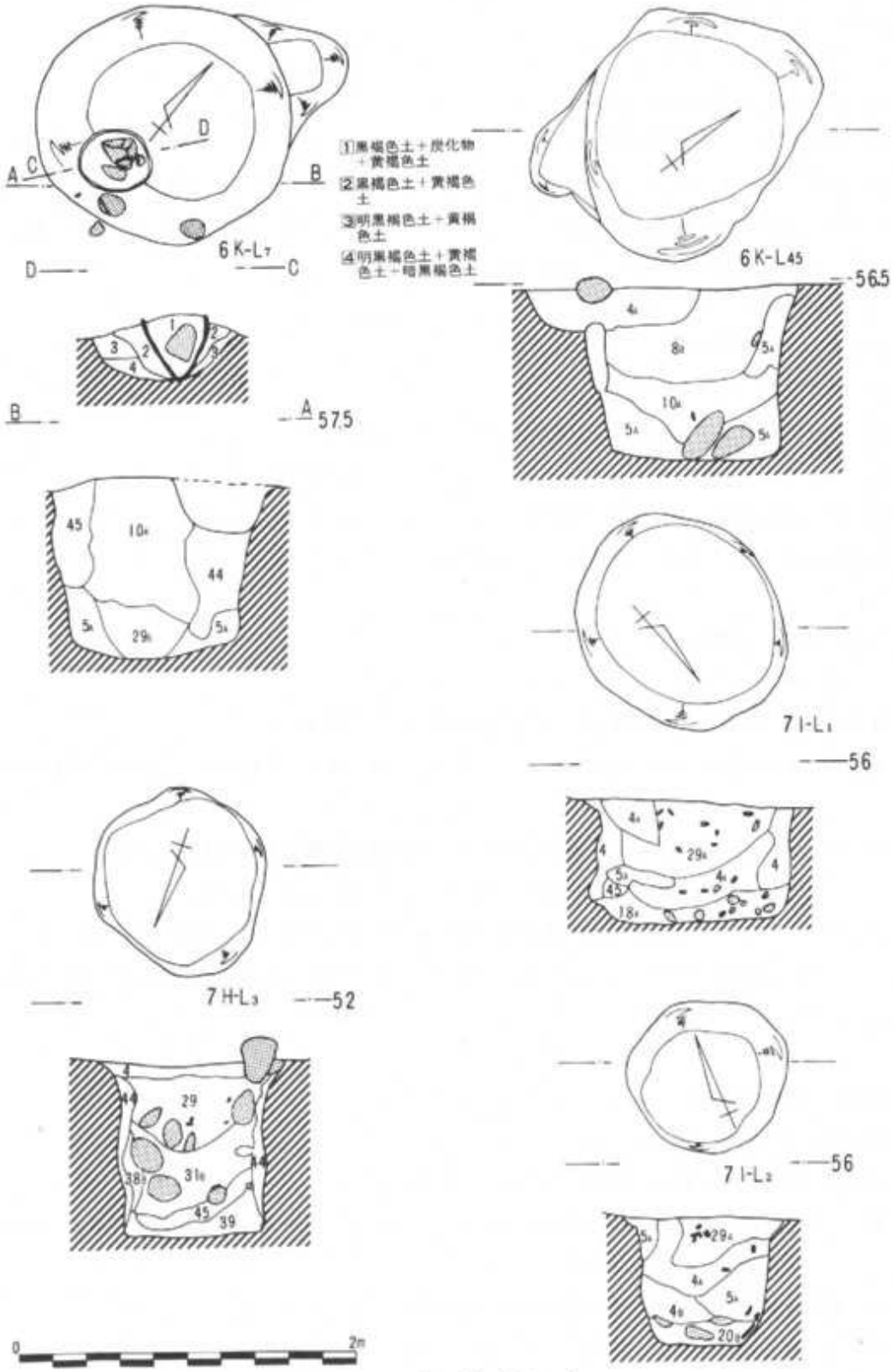
位　置：７Ｊ－Ⅱ・Ⅲ，ｂ・ｃ。

規　模：開口部直径160cm，基底部直径127cm，深さ115cm。

覆　土：黒褐色土が３層に分かれる。上層は炭化物を含み，暗い。

遺　物：中層より上位にかけて，土器片が中央に落ち込むようにしてみられた。その他，石皿１点，凹石１点，石錘４点が出土している。

その他：20～30cmの礫が上層から底面に多く混入している。本ピットの周辺には小ピットがめぐっていた。


1黒褐色土＋炭化物＋黄褐色土
2黒褐色土＋黄褐色土
3明黒褐色土＋黄褐色土
4明黒褐色土＋黄褐色土＋暗黒褐色土
6K-L7
6K-L45
56.5
57.5
7I-L1
56
7H-L3
52
7I-L2
56
0
2m

第62図　Lピット

○7J－L3（第63図）

位　置：7J－II・III，g・h。

規　模：開口部直径82cm，基底部直径62cm，深さ118cm。

覆　土：黒褐色土を2層に分けられる。

遺　物：土器が礫といっしょに入りこんでいた。石皿3点，磨石1点，石錘1点が出土した。

その他：平面形態に比較して，掘り込みが深く縦に細長いLピットである。15－30cmの礫が上層・中層下位に多く入っていた。

○7J－L8（第63図）

位　置：7J－I・II，b・c。

規　模：開口部直径150cm，基底部直径100cm，深さ100cm。

覆　土：4層に分けられる。底面に近くなるほど，炭化物を多く含み，暗くなる。

遺　物：土器の他は凹石1点，石錘1点，板状石器1点が出土している。

その他：15～18cmの礫が中層上位から下層底面にかけて入り込んでいた。

○8I－L1（第64図）

位　置：8I－VI・VII，i・j，8J－VI・VII，a。

規　模：開口部直径310×256cm，基底部直径145cm，深さ143cm。

覆　土：基本的には4層に分けられる。上層は炭化物を含み，下層にいくにつれて黄褐色土を多く混入していた。

遺　物：土器の多くは上層から出土している。第5層Bの堆積状態と土器片の傾斜が，よく似ている。石皿2点，凹石2点，板状石器1点等が出土している。

その他：このピットは地山面での確認時に住居跡と見まちがうほど，開口部が広い。特に，開口部北側は朝顔状に大きく開いている。覆土下層から底面にかけて，20～35cmの礫がゴロゴロしていた。

○8I－L4（第64図）

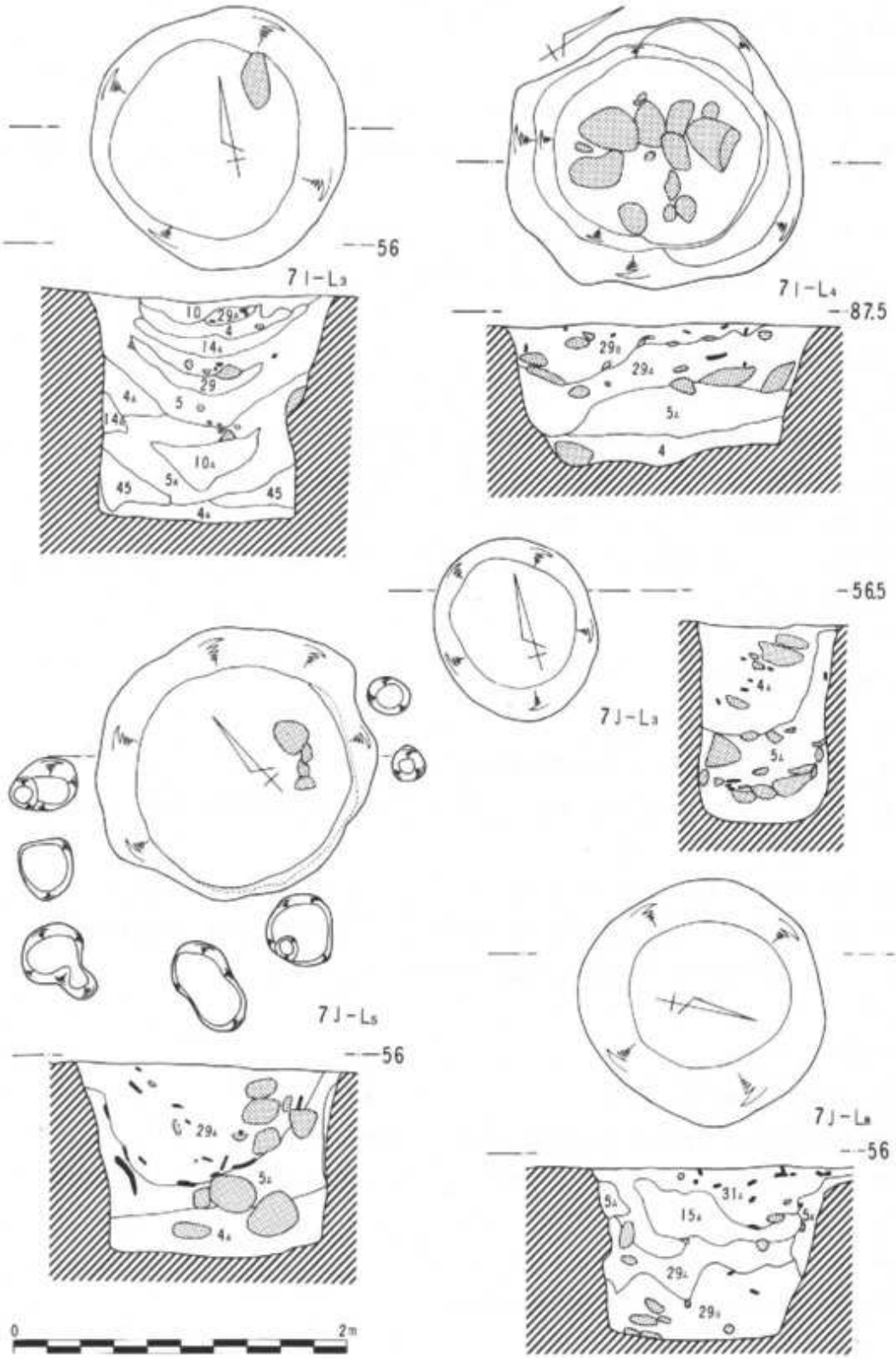
位　置：8I－VIII・IX，c・d。

規　模：開口部直径95cm，基底部直径75cm，深さ104cm。

覆　土：基本的に3層に分けることができる。上層は炭化物が入った黒褐色土である。壁の上層に黄褐色土がへばりついている。

遺　物：土器が少量出土しているのみで，石器等は出土しなかった。

その他：東と南に新たに，浅いピットが掘り込まれている。



第63図　Lピット

○８Ｉ－Ｌ５（第64図）

位　置：８Ｉ－Ⅳ・Ⅴ，ｃ・ｄ。

規　模：開口部直径110cm，基底部直径75cm，深さ131cm。

覆　土：黒褐色土が３層に分けられ，レンズ状に堆積している。壁に黄褐色土のブロックがへばりついていた。

遺　物：中層から土器が出土した。他にフレイクが２点ある。

その他：縦に細長いＬピットで，15～25cmの礫が中層に多く入っていた。

○８Ｉ－Ｌ６（第64図）

位　置：８Ｉ－Ⅱ・Ⅲ，ｂ・ｃ。

規　模：開口部直径206cm，基底部直径110cm，深さ150cm。

覆　土：７層に分けられる。壁は黄褐色土が，中央部は黒褐色土が堆積している。

遺　物：土器の他にはフレイクが２点出土しただけである。

その他：ピットの南西壁が若干ふくらんでいる。20～30cmの礫が上層に，下層は10cm以下の小礫が入っている。

○８Ｉ－Ｌ２（第65図）

位　置：８Ｉ－Ⅸ・Ⅹ，ｉ・ｊ。

規　模：開口部直径216cm，基底部直径76cm，深さ166cm。

覆　土：レンズ状に４層に分けられる。下層が黄色味を帯びた灰黒色土である。いずれも炭化物を少量含んでいる。

遺　物：土器が中層から上層にかけてまんべんなく出土した。他に石錘が２点出土している。

その他：８Ｉ－Ｌ１と同じく，規模の非常に大きいＬピットで，開口部が朝顔状に開いている。20～30cmの礫が中層から底面にかけて多く入っていた。

○８Ｊ－Ｌ１（第65図）

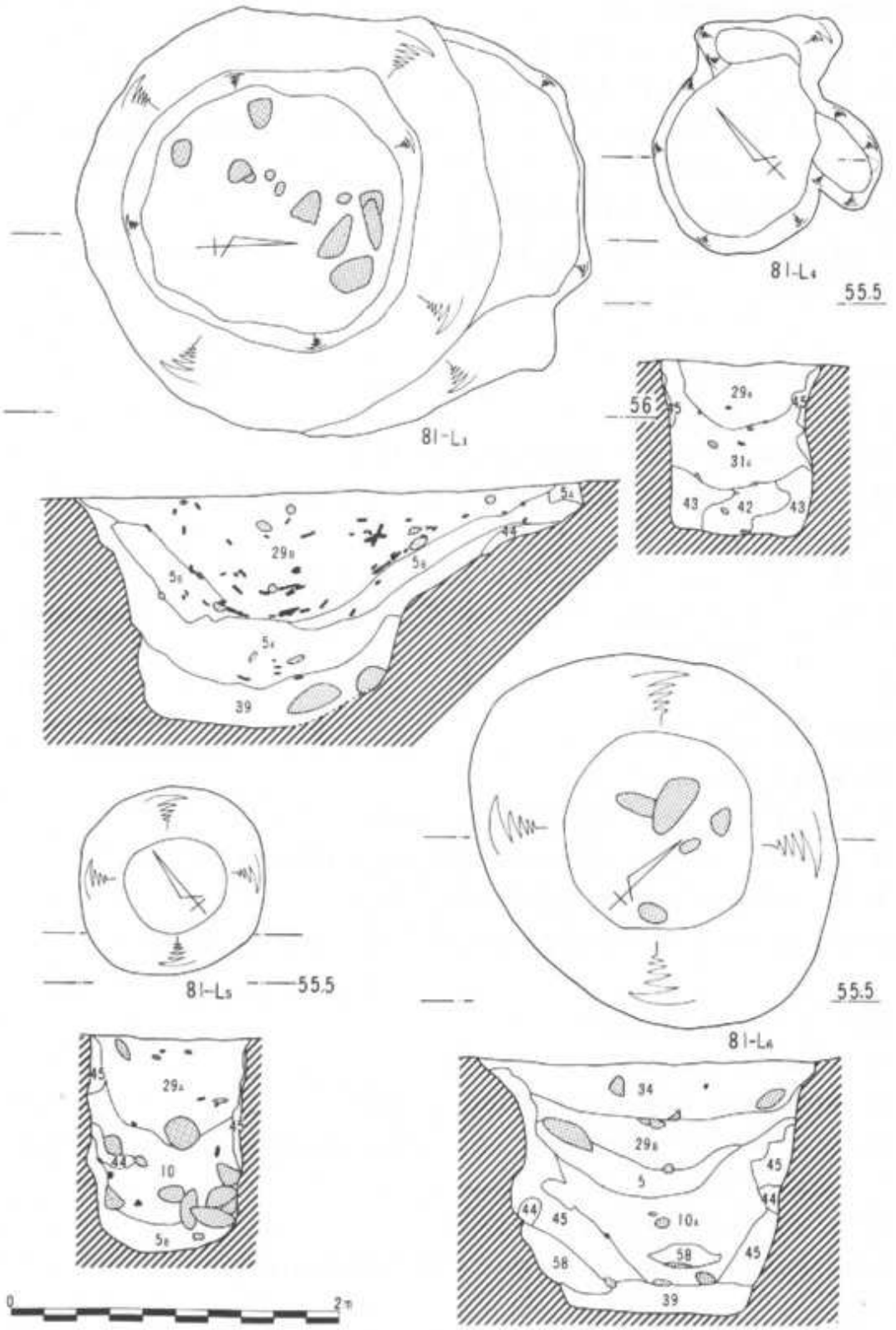
位　置：８Ｊ－Ⅶ，ｂ・ｃ。

規　模：開口部直径116cm，基底部直径71cm，深さ115cm。

覆　土：黒褐色土を３層に分けた。下層にいくにつれ，明るくなる。上層に炭化物が多くみられた。

遺　物：土器と板状石器が１点出土している。

その他：細身のピットである。礫の混入は少ない。


81-L4
55.5
56
29A
45
31A
43
42
43
81-L1
5A
44
29B
5B
5B
5A
39
81-L5
55.5
55.5
81-L6
45
29A
45
44
10
5B
34
29B
5
45
44
44
45
10A
58
58
45
39
0
2m

第64図　Lピット

○9H－L4（図版第20図　第65図）

位　置：9H－Ⅸ・X，j，9I－Ⅸ・X，a。

規　模：開口部直径124cm，基底部直径85cm，深さ108cm。

覆　土：4層に分けられる。中層から上は炭化物を含んで暗い。第34層Aに小礫が入っていた。下層に黄褐色土のブロックが入っていた。

遺　物：土器と石皿2点，磨石1点が出土している。

その他：平面形態はやや方形を呈し，南が朝顔状に開いている。15～20cmの礫が少量混入していた。

○9I－L1（第65図）

位　置：9I－Ⅸ・X，h・i。

規　模：開口部直径163cm，基底部直径138cm，深さ128cm。

覆　土：上から下まで小礫を含む黒褐色土が堆積しており，下層と北西の隅に黄褐色土のブロックが入っていた。

遺　物：土器が上層から少量出土している。他に凹石1点，磨石1点が出土している。

その他：ピットは壁が中央部でつづみ状にせり出し，底面が広くなっていた。礫の混入は少しあった程度である。

○9I－L2（第65図）

位　置：9I－Ⅸ・X，g。

規　模：開口部直径134cm，基底部直径99cm，深さ69cm。

覆　土：4層に分けられる。中層から上層には炭化物が含まれていた。

遺　物：少量の土器と石皿1点，磨石1点が出土している。

その他：平面形態が広いのに掘り込みが浅い。45cmの礫が，中層下位に横たわっていた。

○9I－L4（図版第20図　第66図）

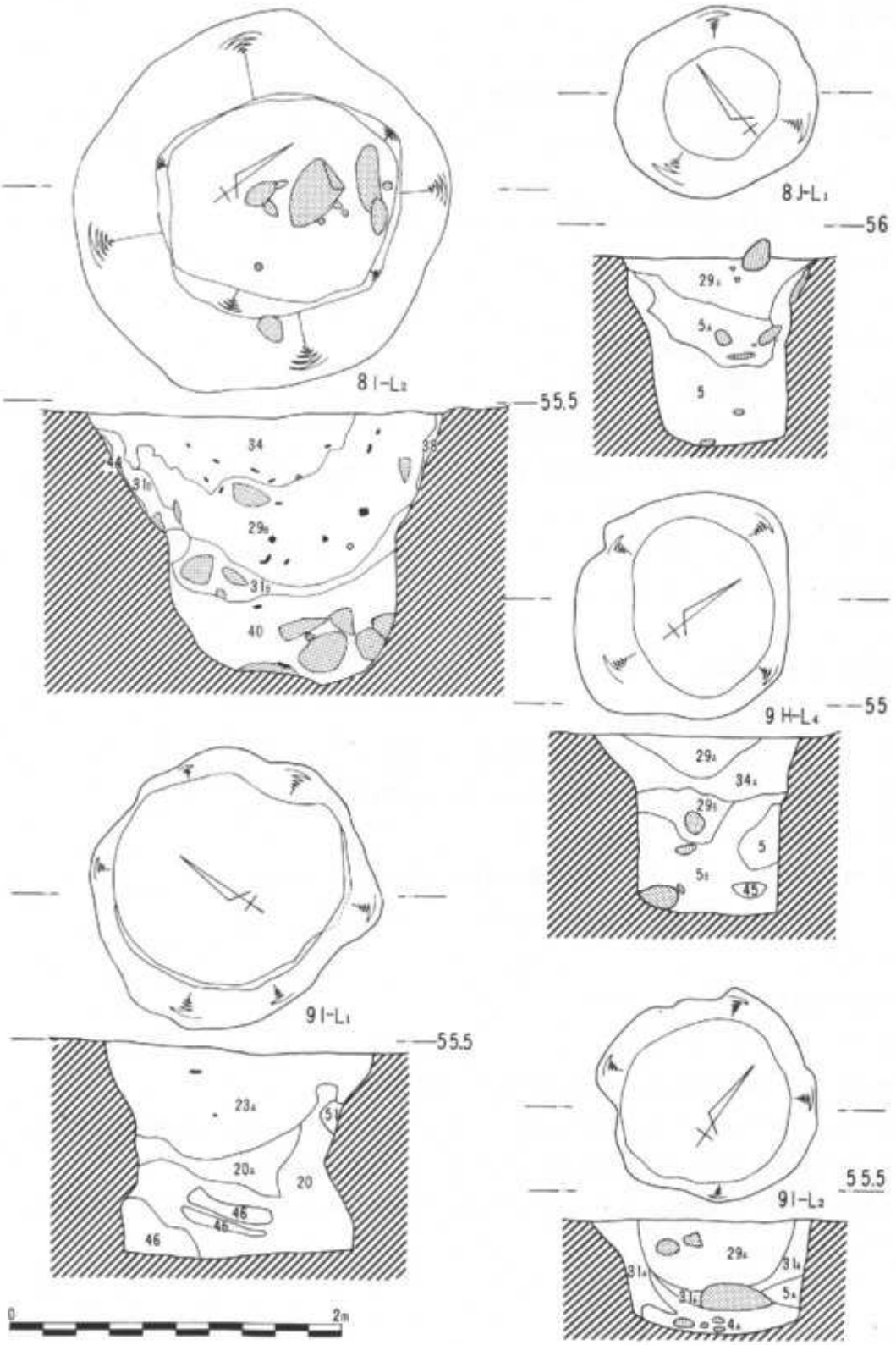
位　置：9I－Ⅱ・Ⅲ，h・i。

規　模：開口部直径153cm，基底部直径111cm，深さ120cm。

覆　土：炭化物を含んでいる黒褐色土で，大きく2層に分けられる。下層にいくにつれ黄色味を帯びている。

遺　物：土器と石皿2点，磨石1点が出土している。

その他：開口部が東西に開いている。覆土にあまり変化がみられなかった。


8 I-L2
55.5
34
38
44
31B
29B
31B
40
8 J-L1
56
29A
5A
5
9 H-L4
55
29A
34A
29B
5
5B
45
9 I-L1
55.5
23A
51
20A
20
46
46
46
9 I-L2
55.5
29A
31A
31A
31B
5A
4A
0
2m

第65図　Lピット

○9J－L8（第66図）

位　置：9J－Ⅶ・Ⅷ，f・g。

規　模：開口部直径120cm，基底部直径80cm，深さ120cm。

覆　土：黒褐色土で，レンズ状にきれいに堆積していた。色調・含有物などの混入の度合で6層に分けられる。

遺　物：土器が少量出土している他は，石皿9点，磨石2点がある。

その他：礫がピット内に多く入り込んでいた。

○9J－L9（図版第20図　第66図）

位　置：9J－Ⅷ・Ⅸ，g・h。

規　模：開口部直径164cm，基底部直径111cm，深さ132cm。

覆　土：上層から下層まで黒褐色土が堆積しており，上層に炭化物と礫を含み，下層にいくにしたがって黒味をます。

遺　物：土器だけしか出土していない。

その他：小礫が上層に入っている。

○9J－L20（第66図）

位　置：9J－Ⅳ，f・g。

規　模：開口部直径105cm，基底部直径75cm，深さ151cm。

覆　土：炭化物を含む覆土が上層にあり，下層は色調が明るくなる。

遺　物：遺物は土器だけである。

その他：浅くて細長いピット（平面200×110cm，深さ25cm）が埋没したのちに，新たにこのL20を掘り込んだと思われる。20cmの礫が下層に入っている。

○9J－L10（図版第20図，第67図）

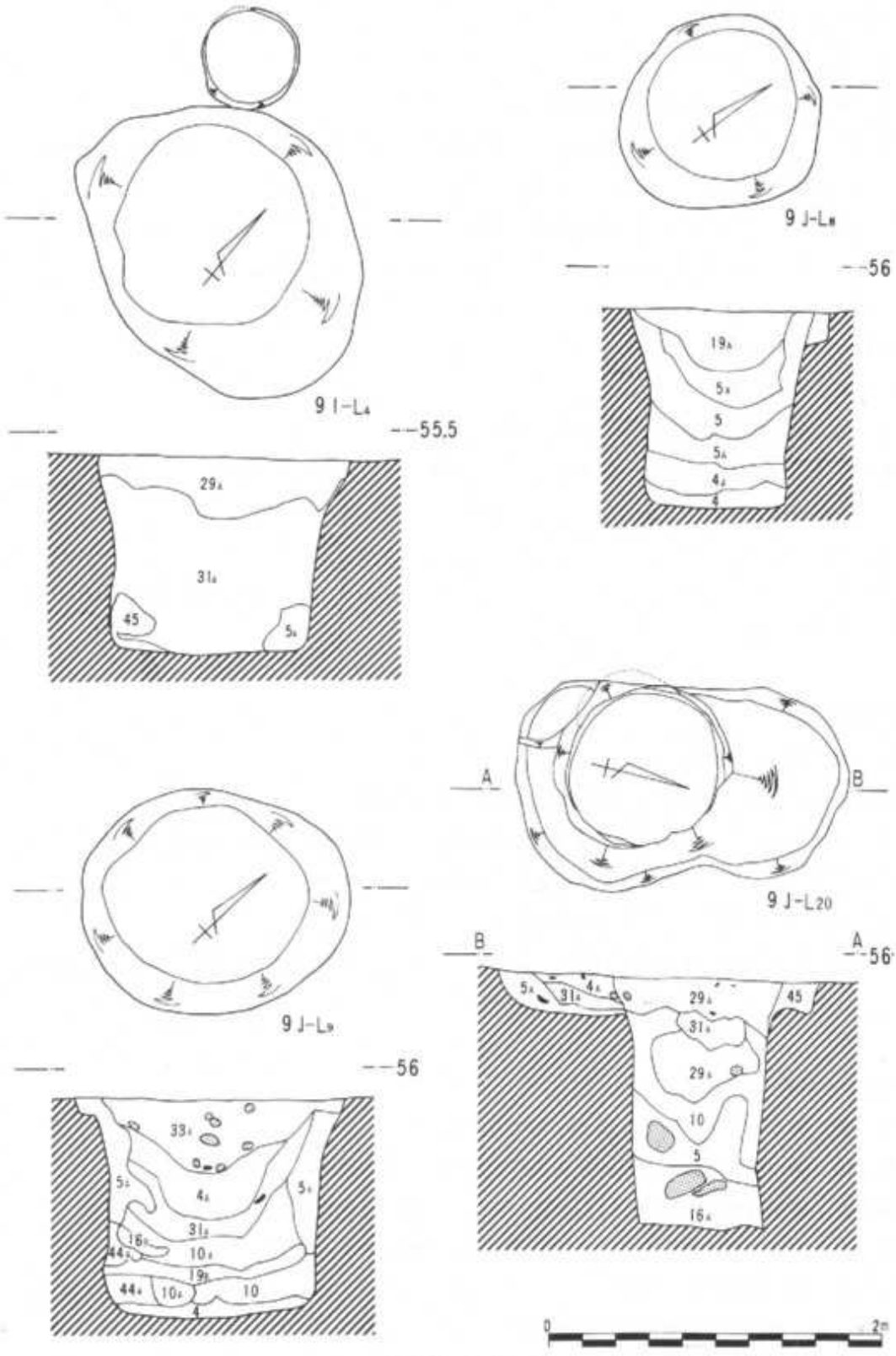
位　置：9J－Ⅸ・Ⅹ，g。

規　模：開口部直径135cm，基底部直径90cm，深さ87cm。

覆　土：4層に分けられる。中層は小礫と若干の炭化物を含み，上層は炭化物を含んでいる。

遺　物：土器と石皿2点，磨石1点が出土している。土器は上層に多い。

その他：北壁がL10の他にピットがあったらしく，段状に掘り込まれていた。20cmの礫が出土している。


9 I-L4
55.5
9 J-L18
56
19A
5A
5
5A
4A
4
29A
31A
45
5A
9 J-L20
A
B
9 J-L19
56
33A
5A
4A
5A
31A
16A
44A
10A
19A
44A
10A
10
4
5A
4A
31A
29A
45
31A
29A
10
5
16A
0
2m

第66図　Lピット

○9K－L14（第67図）

位　置：9K－Ⅶ・Ⅷ，d・e。

規　模：開口部直径180cm，基底部直径95cm，深さ118cm。

覆　土：5層に分けられる。中層から上層は黒褐色土が堆積し，下層に黄褐色土と黒褐色土が堆積している。上層は炭化物と小礫が入りまじっている。

遺　物：土器片が上層にみられる他は，打製石斧1点，石錘2点，石皿2点等が出土した。

その他：ピット中央部が若干張り出している。15～20cmの礫が中層以下にあった。

○9K－L1（第67図）

位　置：9K－Ⅴ・Ⅵ，b・c。

規　模：開口部直径200cm，基底部直径87cm，深さ203cm。

覆　土：上部に焼土を含んだ第69層が入っている他は，黒褐色土を基調とした土層で，7層に分けられる。覆土はレンズ状に堆積していた。

遺　物：土器の他に石鏃1点，凹石1点，石錘1点等が出土している。

その他：このL1は壁に小さなテラスがいく段にもなっていた。また，15～20cmの礫が中層から下層にかけて多くみられる。

○10J－L5（第67図）

位　置：10J－Ⅵ・Ⅶ，i・j。

規　模：開口部直径168cm，基底部直径80cm，深さ197cm。

覆　土：7層に分けられる。上層は炭化物が混入した黒褐色土で，とくに上面へ行くにつれ暗くなっていた。下層には黄褐色土が堆積していた。

遺　物：土器片の他に打製石斧1点が出土している。

その他：上層に15～20cmの礫が落ちこんでいた。また，L5が埋没したのちに，深さ20cm未満のピットがL5の東に掘りこんでいる。

○10J－L6（第68図）

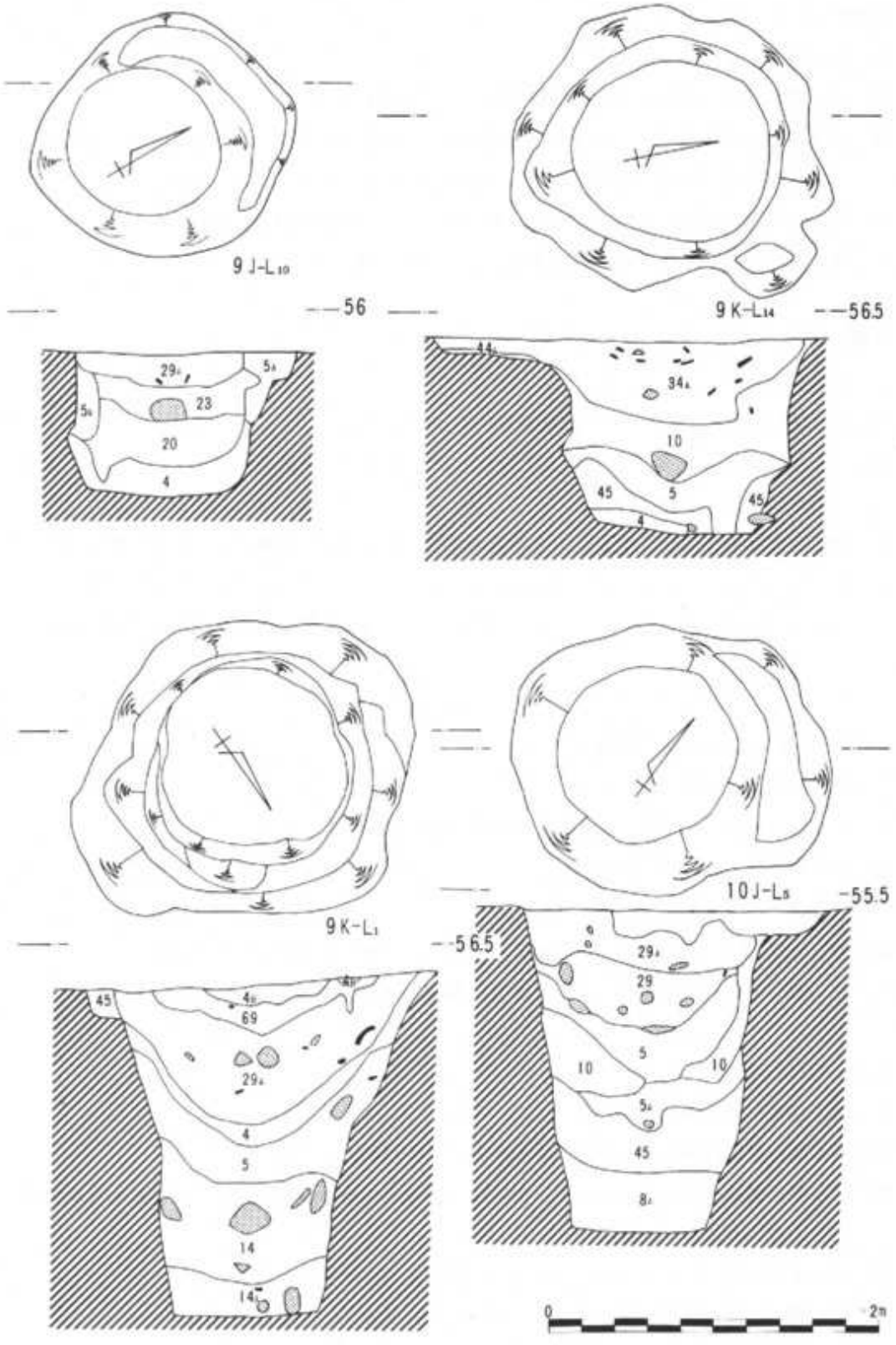
位　置：10I－Ⅴ・Ⅵ，j，10J－Ⅴ・Ⅵ，a。

規　模：開口部直径210×174cm，基底部直径75cm，深さ165cm。

覆　土：黒褐色土を5層に分けられる。中層に小石と炭化物を含んだ土層がみられる。

遺　物：土器の他は凹石1点，石皿4点，それに磨石が1点出土している。

その他：20～30cmの深さをもつ広いピットがあったのを，L6が新たに掘りこんだと思われる。開口部は直角に近い角度をもって開いている。


9J-L10
56
9K-L14
56.5
29A
5A
5A
23
20
4
44A
34A
10
45
5
4
45A
9K-L1
56.5
10J-L5
55.5
45
4B
6B
29A
4
5
14
14
29A
29
5
10
10
5A
45
8A
0
2m

第67図　Lピット

○10K－L 1（図版第21図　第68図）

位　置：10K－Ⅲ，a・b。

規　模：開口部直径158cm，基底部直径115cm，深さ155cm。

覆　土：黒褐色土が堆積しているが，上層は炭化物を含み，下層は暗くなるなどの要素から7層に分けられる。中層の第4層は大きなかたまりのようであった。

遺　物：中層に土器片が集中していた。他に凹石1点，石皿4点等がある。

その他：25～30cm大の礫が中層及び下層に入っていた。

○10K－L 5（第68図）

位　置：10K－Ⅴ・Ⅵ，d・e。

規　模：開口部直径205cm，基底部直径100cm，深さ130cm。

覆　土：黒褐色土を基調とし，上層は炭化物が入り，中層に炭化物及び礫が入っていた。基本的には3層に分けられる。

遺　物：土器片が上層から出土し，その他の遺物に石棒1点，石錘1点，凹石3点等がある。

その他：L 5の東壁に残存部直径 140cm，深さ45cmのピットらしい段がみられ，このピットの埋没後にL 5が掘りこんだものと思われる。15cm前後の礫が上層から下層にかけて入っていた。

○10K－L 2（図版第21図　第68図）

位　置：10K－Ⅲ・Ⅳ，c・d。

規　模：開口部直径210cm，基底部直径90cm，深さ155cm。

覆　土：黒褐色土が4層に分けられ，レンズ状に堆積していた。上層から中層にかけて炭化物を含んだ土層がみられる。

遺　物：土器の他に土偶が1点，凹石2点，石皿・石錘が各1点出土している。

その他：ピット底部の壁が張り出し，そこに25～30cmの礫が多く落ちこんでいた。

○10K－L 12（第69図）

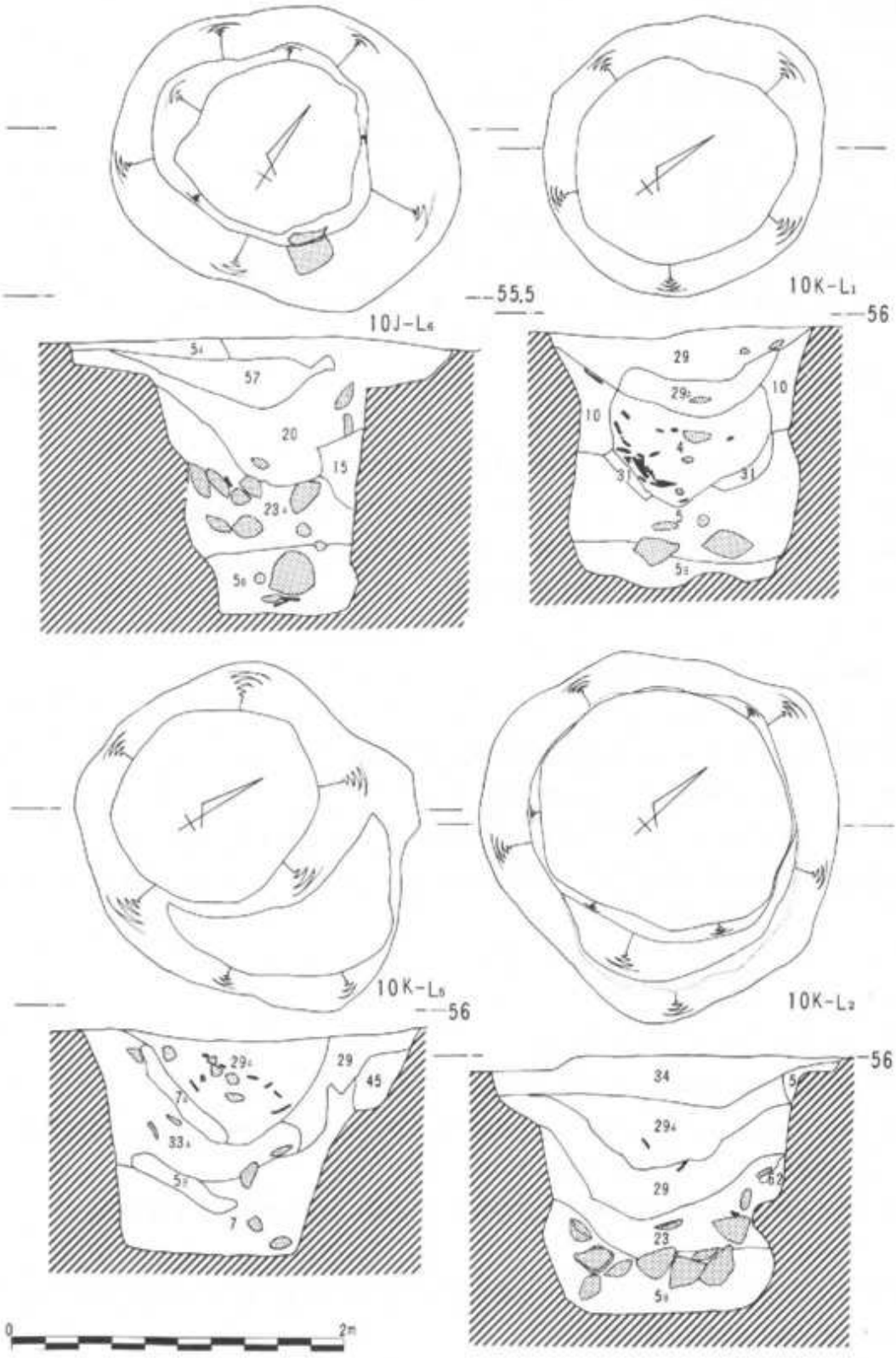
位　置：10K－Ⅵ・Ⅶ，d。

規　模：開口部直径140cm，基底部直径90cm，深さ110cm。

覆　土：壁に黄褐色土がへばりつき，中央は黒褐色土の堆積がみられる。いずれも炭化物を含んでいた。

遺　物：土器の他に，凹石1点，石皿5点，磨石2点が出土している。

その他：覆土に20cm前後の礫が入り込んでいた。



第68図　Lピット

○10K－L13（第69図）

位　置：10K－V・Ⅵ，g・h。

規　模：開口部直径153cm，基底部直径90cm，深さ143cm。

覆　土：ピット南西側より黄褐色土が流れこみ，他方向からは黒褐色土が流れこんでいるように観察された。上層は炭化物を含んでいた。

遺　物：土器片の他，石皿4点，磨石3点，凹石1点が出土している。

その他：ピット北壁はほぼ垂直に掘られているのに対し，他の面は底部近くにテラスをもつように2段に掘られていた。Lピットの重なりであろうか。

○10L－L17（第69図）

位　置：10L－Ⅵ・Ⅶ，i・j。

規　模：開口部直径128cm，基底部直径91cm，深さ102cm。

覆　土：黒褐色土がきれいなレンズ状を呈して堆積していた。上層に小礫がみられる。

遺　物：石皿5点，凹石1点等が土器と一諸に出土した。

その他：このL17は各種のピットを分類した中で，Lピットらしいピットである。

○10M－L1（図版第21図　第69図）

位　置：10M－Ⅳ，h。

規　模：開口部直径126cm，基底部直径134cm，深さ105cm。

覆　土：いずれも黒褐色土で，炭化物を含んでいた。

遺　物：土器の他に，石皿3点，磨石3点，凹石1点，板状石器1点が出土している。

その他：断面が台形を呈するように，底部が開口部より広くなっていた。15～20cmの礫が中層から下層にかけて入っていた。

○10M－L5（第70図）

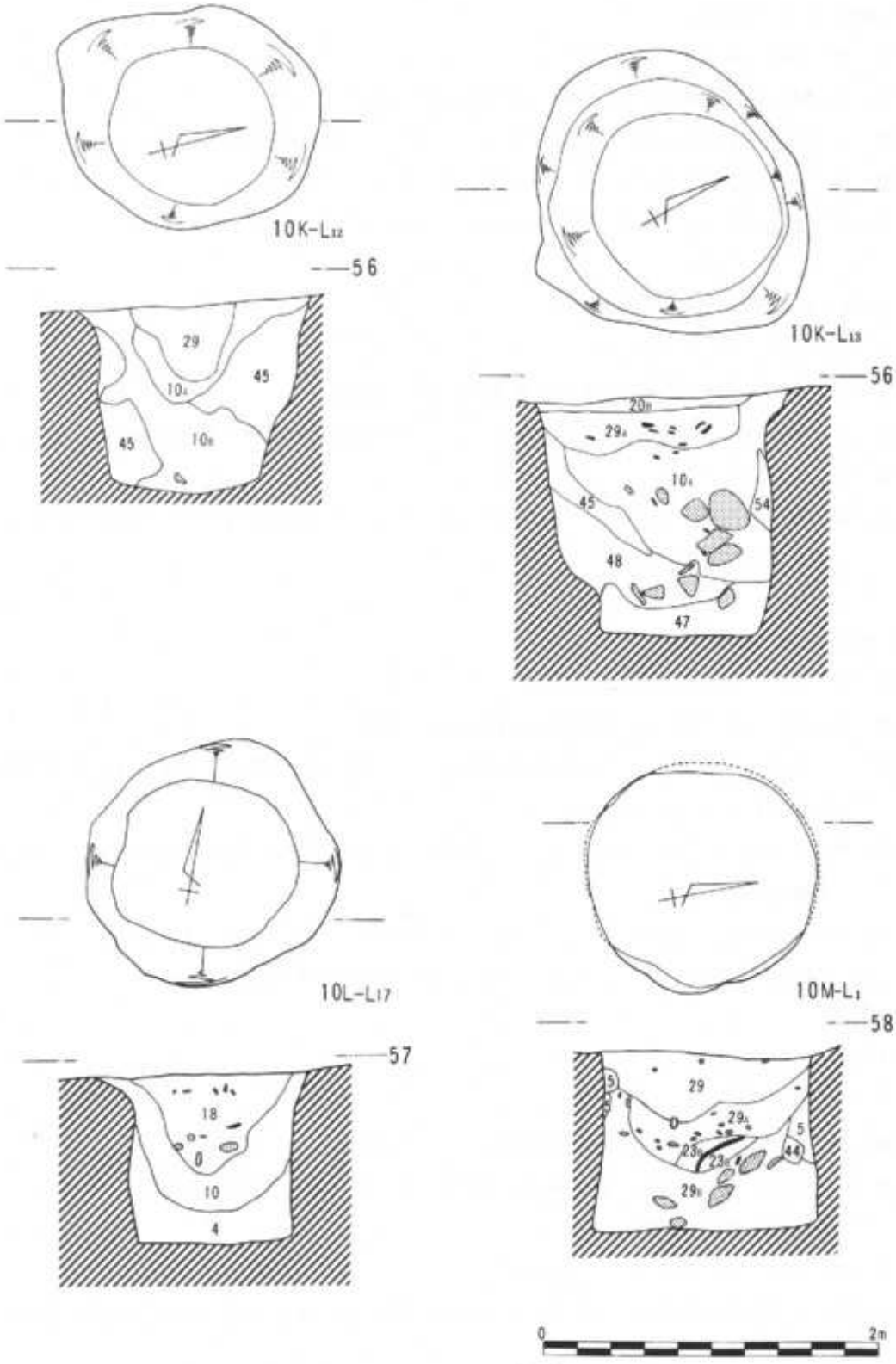
位　置：10M－Ⅳ，j，10N－Ⅳ，a。

規　模：開口部直径120cm，基底部直径100cm，深さ102cm。

覆　土：3層に分けられる。黒褐色土を基調とするが，上層は炭化物が入り暗く，中層は黄褐色土が混じり若干明るくなっていた。

遺　物：土器は上層から多く出土した。石鏃2点，石錘・石皿・磨石が各1点ずつ出土している。

その他：ピットの北壁に新たなピットの掘り込みが見られた。15～20cmの礫が上層から下層まで少しずつ入っていた。


10K-L12
56
29
10A
45
45
10B
10K-L13
56
20B
29A
10A
45
54
48
47
10L-L17
57
18
0
10
4
10M-L1
58
5
29
29A
5
23B
23C
44
29B
0
2m

第69図　Lピット

○10N－L 3（第70図）

位　置：10N－Ⅸ，d。

規　模：開口部直径103cm，基底部直径70cm，深さ148cm。

覆　土：黒褐色土を含有物等の要素で3層に分けた。上層は炭化物を含んでいた。

遺　物：土器が少量出土した。他に，石皿2点，凹石1点がある。

その他：細身のピットである。25～30cmの礫が下層にかたまって見られた。

○10N－L 7（図版第21図　第70図）

位　置：10N－Ⅴ，e・f。

規　模：開口部直径168cm，基底部直径105cm，深さ120cm。

覆　土：黒褐色土を2層に分けた。下にいくにつれて黄褐色土の粒を多く含み明るくなる。

遺　物：土器の他は石鏃が1点出土している。

その他：掘り込みが2段にわたっているのであろうか，壁に屈曲が見られた。40cmの大きな礫が下層に落ちていた。

○10N－L26（第70図）

位　置：10N－Ⅲ・Ⅳ，c・d。

規　模：開口部直径175cm，基底部直径97cm，深さ138cm。

覆　土：3層に分けられる。いずれも黒褐色土で，上層には炭化物が，下層には地山の黄褐色土の粒が含まれている。

遺　物：土器が上層に多く分布していた。石鏃（図版第27図17）・板状石器・凹石が各1点，石錘2点等が出土した。

その他：先に掘られた西壁の小ピットを新たにL26が掘り込み，小ピットをこわしている。底部は急に幅が狭くなっており，そこに15～25cmの礫が多く入っていた。

○11M－L 7（第71図）

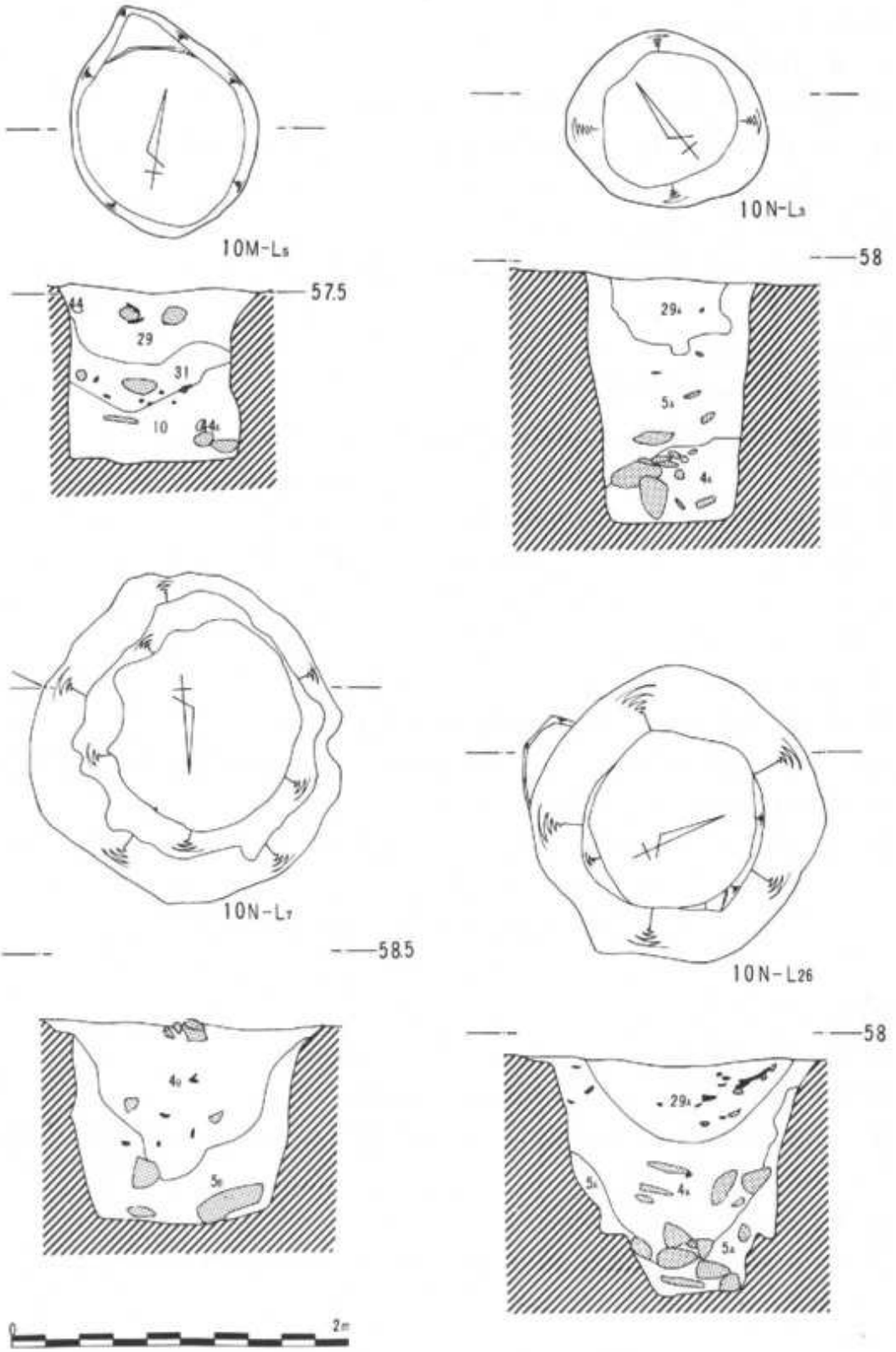
位　置：11M－Ⅸ・Ⅹ，i・j。

規　模：開口部直径160cm，基底部直径90cm，深さ120cm。

覆　土：3層に分けられる。最下層は灰黒褐色土を呈し，上・中層は黒褐色土で，いずれも炭化物を含んでいた。

遺　物：土器の他に遺物の出土はなかった。

その他：L 7の掘り込みは，テラス状に屈曲する壁面が見られた。30～50cmの大きな礫が底部に多くあった。


10M-L5
57.5
44
29
31
10
44a
10N-L3
58
29a
5a
4a
10N-L7
58.5
10N-L26
58
4a
5a
29a
4a
5a
0
2m

第70図　Lピット

○11O－L 1（第71図）

位　置：11O－V・Ⅵ，a・b。

規　模：開口部直径158cm，基底部直径80cm，深さ115cm。

覆　土：2層に分けられる。上層は炭化物を含んでいた。下層は灰白色粘土が混じっており，色調が明るくなっていた。

遺　物：土器以外の遺物は出土しなかった。

その他：開口部は大きく朝顔状に開く。20－30cmの礫が多く混入していた。

○12N－L 4（第71図）

位　置：12N－Ⅲ・Ⅳ，c・d。

規　模：開口部直径110×90cm，基底部直径80×55cm，深さ113cm。

覆　土：最下層に黄褐色土が堆積し，その上層は全て黒褐色を基本とした土層である。

遺　物：凹石と磨石が各1点ずつ土器に伴出している。

その他：平面プランが楕円形を呈する細身のLピットである。礫の混入は見られなかった。

○12K－L 1（第71図）

位　置：12K－Ⅵ，a・b。

規　模：開口部直径167cm，基底部直径142cm，深さ186cm。

覆　土：上面から小砂利が多くつまり，断面観察用にピットを半截することができなかった。

遺　物：少量の土器が出土している。

その他：A地区とB地区を地理的に区分する沢の中に位置していた。覆土に小砂利が多く混入しているのも沢に位置していたためであろう。また，遺物は極端に少ない。他のLピットの要素とは若干異っており，井戸のような感を調査中に受けた。

○7Q－L 1（第72図）

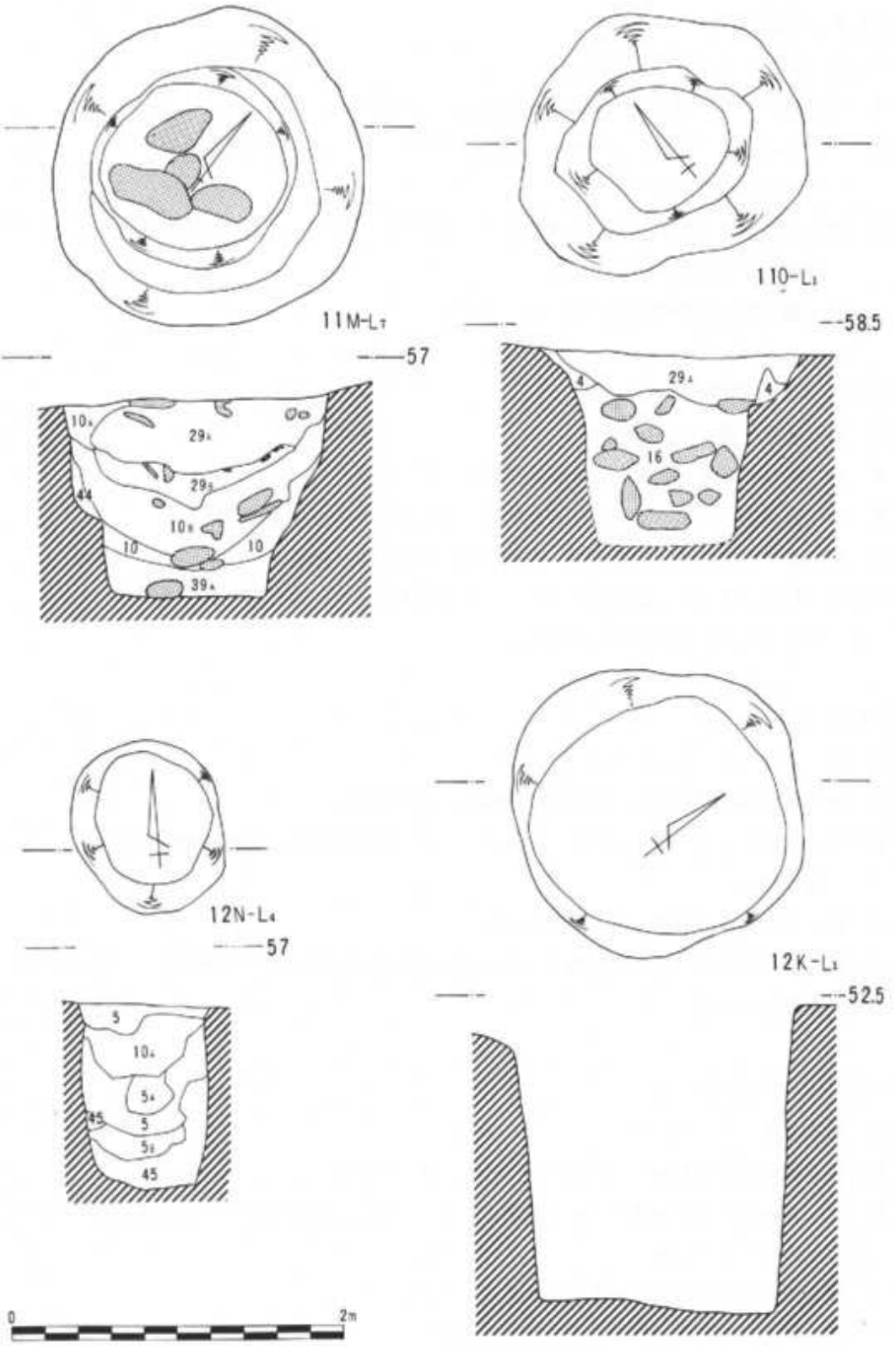
位　置：7Q－Ⅸ・X，i・j。

規　模：開口部直径160cm，基底部直径80cm，深さ130cm。

覆　土：覆土が黒褐色を呈する土砂で，上層は炭化物を含み，下層上面には黄褐色土の堆積が見られる。

遺　物：土器の他に磨石が1点出土している。

その他：上層部が朝顔状に開き，屈折点に稜が見られた。15～30cmの礫と50cm位の礫が底部に落ち込んでいた。


11M-L7
57
10-L1
58.5
10A
29A
29B
44
10B
10
10
39A
4
29A
4
16
12N-L4
57
12K-L1
52.5
5
10A
5A
45
5
5B
45
0
2m

第71図　Lピット

○8P－L69（第72図）

位　置：8P－V・Ⅵ，h・i。

規　模：開口部直径170cm，基底部直径70cm，深さ140cm。

覆　土：3層に分けられる。中層から上は炭化物を含み，さらに中層に焼土粒が入っていた。下層は赤味をおびていた。

遺　物：土器が多く出土した。その他には，石皿10点，凹石・石錘・磨石が各2点，それに打製石斧が1点出土している。

その他：20～30cmの礫が下層に多く入っていた。

○8P－L67（第72図）

位　置：8P－Ⅷ，g・h。

規　模：開口部直径160cm，基底部直径95cm，深さ113cm。

覆　土：黒褐色を呈する土層を，炭化物等の含有物でもって4層に分けた。

遺　物：土器の他には，石皿5点，石錘1点，石鏃1点，凹石2点等が出土している。

その他：L67の周囲には直径30cmの小ピットが4基あった。開口部は朝顔状に開いている。土器は上・中層に集中していた。

○8Q－L1（第72図）

位　置：8Q－Ⅸ・X，c・d。

規　模：開口部直径170cm，基底部直径95cm，深さ131cm。

覆　土：黒褐色土が堆積している。下層にいくにつれ暗くなる。壁に黄褐色土のブロックが見られる。

遺　物：土器以外の遺物は出土しなかった。

その他：L1の周囲－東・西・南の三方向に直径30cm前後の小ピットがある。上層部で大きく朝顔状に開く。

○8R－L1（第73図）

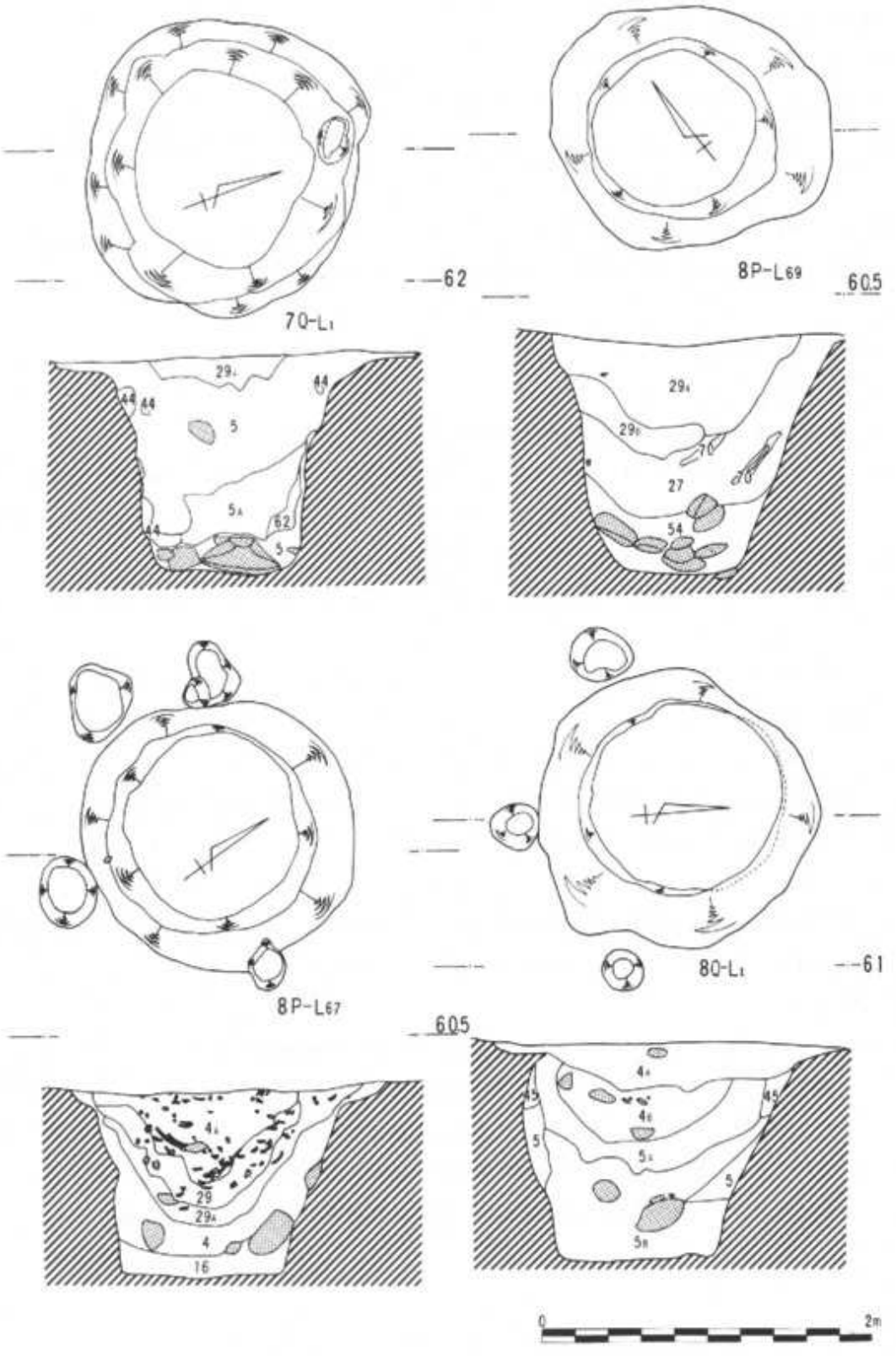
位　置：8R－Ⅰ・Ⅱ，e。

規　模：開口部直径145cm，基底部直径83cm，深さ158cm。

覆　土：基本的には黒褐色を呈する土層である。上層は小石が混じり，最下層には灰白色粘土が混入している。

遺　物：土器の他には石皿が3点出土している。

その他：30～45cm前後の礫が上層下位から底部にかけて入っていた。



第72図　Lピット

○8R－L2（第73図）

位　置：8R－I・II，a・b。

規　模：開口部直径110cm×85cm，基底部直径105cm，深さ105cm。

覆　土：4層に分けられる。いずれも色調は黒褐色を基本としている。上層は砂利が混じっていた。

遺　物：凹石2点，石皿・磨石各1点だけで，土器は出土しなかった。

その他：きれいな掘り込みではなく，断面が不定形で，底面が広がっていた。

○7P－L9（第73図）

位　置：7P－IV・V，d・e。

規　模：開口部直径100cm，基底部直径105cm，深さ85cm。

覆　土：下層に小砂利が入り，上・中層には炭化物が混入していた。特に中層東側には炭化物が層をなしていた。

遺　物：土器の他に，石皿4点，凹石1点が出土している。

その他：ピット東壁に別のピットが掘り込まれた痕跡が観察された。10～25cmの礫が散乱していた。

○10O－L140（第73図）

位　置：10N－V・VI，j，10O－V・VI，a。

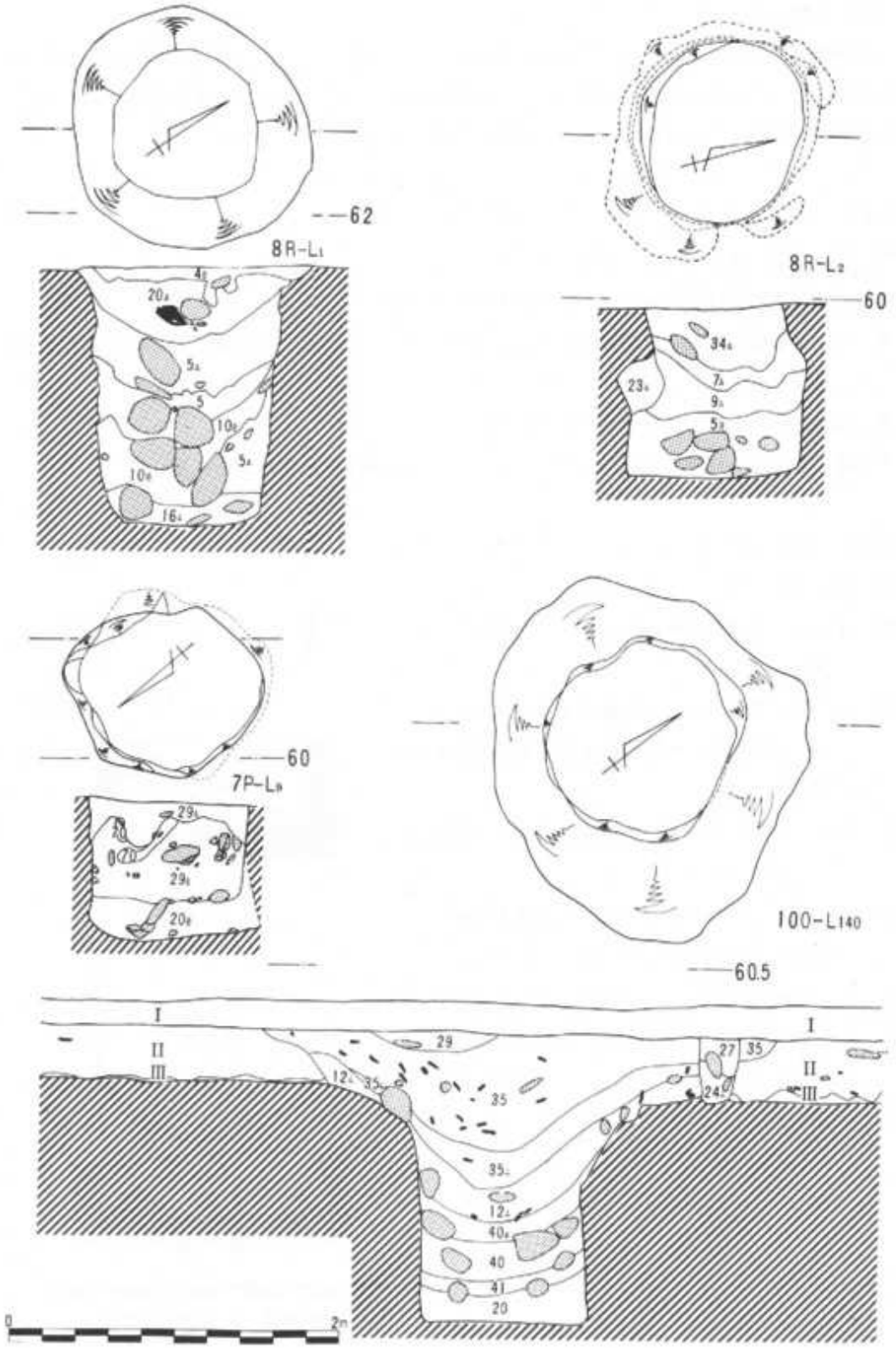
規　模：確認面での開口部直径210×190cm，基底部直径100cm，確認面からの深さ136cm。

覆　土：下層に灰黒褐色土があり，他は黒褐色を基調とした土層で，レンズ状に堆積していた。

遺　物：土器の他に，土偶1点（図版第22図40），石錘3点などが出土している。図版第43図3の土器には，図版第31図1～4の滑車形土製耳飾り（4）と骨（1～3）が入っていた。

その他：このL140は10Nと10Oの境で発見され，偶然に土層観察用のベルトにかかった。表土からの土層を観察すると，礫及び土器がピット中央部へ向って傾斜していることや，土砂がピット内からレンズ状に第II層上面まで堆積していることが判断される。このことからL140は表土下18cmの第II層上面から掘り込まれた可能性が高いことがいえる。これは第34号住居跡の敷石住居跡が第II層中に作られたことと一致している。

（駒形敏朗）



第73図　Lピット

（3）Gピット

後期集落のGピットについては充分に検討をつくしておらず，ここでは円形プランで深さが50cm以内と浅い8Kの2基のピットだけを取りあげてみた。今後，図面を整理していく過程で後期のGピットが確認されることが多いと思われる。

○8K－G1（第74図）

位　置：7K－X，e・f，8K－I，e・f。

規　模：開口部直径118cm，基底部直径110cm，深さ50cm。

覆　土：炭化物が混入した黒褐色土で，下層が暗くなっていく。北東側に炭化物と焼土が層をなしていた。

遺　物：三十稲場式の土器が多く出土した。

その他：Lピットの覆土に混入していたような大きな礫は検出されなかった。

○8K－G2（第74図）

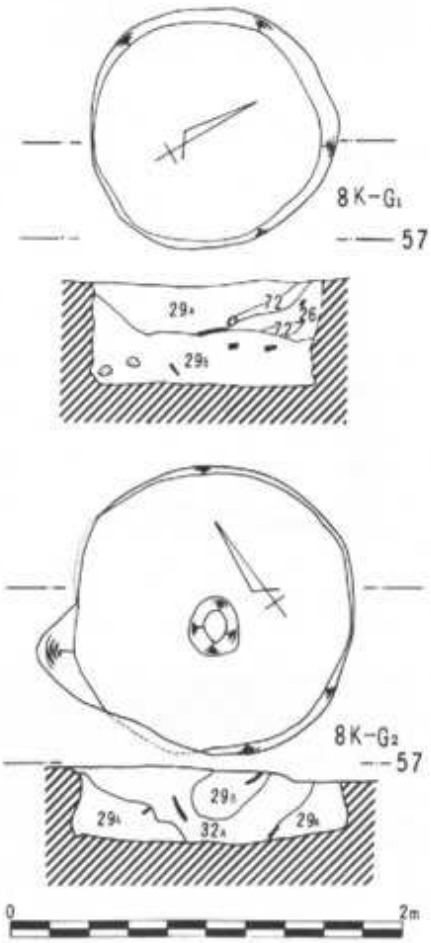
位　置：8K－IX・X，h・i。

規　模：開口部直径139cm，基底部直径138cm，深さ38cm。

覆　土：炭化物が混入した黒褐色土で，焼土の入っている第32層と焼土を含まない第29層に大別される。

遺　物：三十稲場式の土器の他に，石片が少し出土した程度である。

その他：G1も同様であるが開口部と底面の直径が近似した数値を示している。これはLピットには見られないことである。このG2の底面に直径25×30cm，深さ10cmを測る皿状のピットが見られた。（駒形敏朗）



第74図　Gピット（後期）

第2節　遺　　物

1．縄文中期の遺物

本遺跡の縄文中期のエリアからは前葉～末葉（大木7b式併行～大木9式併行）の土器が大量に出土している。特に第1・第2土器捨て場からは前葉～後葉の復元可能な一括土器が多量に発見された。また，末葉の一括土器や特徴的な破片は主に住居跡の覆土中より出土している。それゆえ前葉～後葉は土器捨て場の土器，末葉は住居跡覆土の土器を中心として分類を行った。

分類はまず，前葉・中葉・後葉・末葉の4期に時期区分し，次に器形で大別を行い，最後に文様で細別を施した。本文中のⅠ・Ⅱ……は1が前葉，Ⅱが中葉，Ⅲが後葉，Ⅳが末葉を指し，A・B・Cは各葉共通で，Aは深鉢，Bは浅鉢，Cは台付土器を示す。例えばⅡ－A－第5類土器は中葉の深鉢第5類土器のことである。しかし分類の対象となった土器は本遺跡の主体的な土器であり，それ以外の土器は遺構出土土器の箇所で，個々に説明を行った。

なお，石器，土製品等は「遺構」及び「その他の遺物」の箇所で説明を行った。

1．前葉の土器

A．深鉢

第1類土器（図版第33図8～10等）　平口縁，4単位の波状口縁又は1単位の突起を口縁部にもち，胴部がやや張り出す土器。口縁部には沈線で直線文又は工字状文が描かれている。胴部は全面に縄文が施されているか，縄文地上に半截竹管で懸垂文等が描かれている。

第2類土器（図版第33図11～13等）　4単位の波状口縁もしくは1単位の小突起を口唇部にもつ土器，器面全体に縄文が施文され，口縁部には東北地方の大木7b式土器の影響を受けたと考えられる撚糸圧痕が施されている。

第3類土器（第84図5，第85図3）　広義の蓮華文が施されている土器。

第4類土器（第82図11～21等）　広義の爪形文が施されている土器。

B．浅鉢

第1類土器（図版第33図16）　東北地方南半に分布する大木7b式土器で，ゆるやかに内彎する口縁部に2形態4単位（a＋b＋a＋b＋a＋b＋a＋b），合計8個の小突起がつけられている。口縁部には2条の撚糸圧痕でゆるやかな連弧状文が，胴部には縄文地上に撚糸圧痕をもちいて4単位の曲線文及び渦巻文が描かれている。なお，胴部文様は動物意匠（？）を表出しているようにも見うけられる。

II．中葉の土器

A．深鉢

第1類土器（図版第34図5～9等）　いわゆる火焔型土器のグループで，頸部がややしまったキャリパー形の土器。口唇部には4単位の鶏冠状把手が対峙してつけられており，それらの間の空白部分は鋸歯状の小突起で満たされている。口縁部には袋状突起，頸部には橋状把手がそれぞれ4箇所につけられている。文様構成は頸部の隆起線によって上・下に2分され，文様は器面全体に隆起線及び半隆起線で渦巻文，曲線文，横S字状文，三角形陰刻文，逆U字状文等が描かれている。

第2類土器（図版第34図10・11，図版第35図1～3・6等）　4単位の波状口縁をもつ，いわゆる王冠型土器のグループである。口縁部又は頸部には袋状突起もしくは橋状把手がつけられており，隆起線及び半隆起線で器面全体に渦巻文，曲線文，逆U字状文等が描かれている。文様帯は第1類土器（火焔型土器）と同じく頸部の隆起線で上下に2分される。なお，この土器は後葉にも認められる。

第3類土器（図版第35図4・5）　器形及び口縁部文様はいわゆる王冠型土器と同じであるが，胴部に地文の縄文が施され，半隆起線で懸垂文が描かれている。

第4類土器（図版第35図7～9）　平口縁で，口縁部に袋状突起及び橋状把手をもち，頸部がややくびれるキャリパー形の土器。器面全体に隆起線及び半隆起線で渦巻文，逆U字状文等が描かれている。文様構成は火焔型土器（第1類），王冠型土器（第2類）と同じく頸部の隆起線によって上・下に2分される。

第5類土器（図版第36図5・6）　東北地方の大木8a式土器の影響を受けたと考えられる土器。口縁は水平もしくは1単位の突起をもち，頸部がややくびれ，胴部は円筒形を呈する。縄文が地文として器面全体に施され，文様帯は頸部を巡る直線文によって上・下に2分される。文様は半截竹管により描かれた懸垂文及び鉤の手状の文様を基本とし，そこから枝状に渦巻文又は曲線文が派生している。

第6類土器（図版第36図10・12・13）　小波状口縁をもち胴部がやや張り出す土器。波頂部に渦巻文が施され，頸部には平行沈線文及び波状沈線文が巡り，胴部全体には縄文が地文されている。

B．浅鉢

第1類土器（図版第37図4等）　口縁部には1～2条の沈線が巡り，胴部全体に縄文が施されている。なお，胎土中に雲母（？）を混入させている。

C．台付土器

第1類土器（図版第35図10・12・13）　カップ形を呈する土器。器面全体に隆起線及び半隆起線で渦巻文，曲線文，三角形陰刻文，逆U字状文等が描かれている。

Ⅲ．後葉の土器

A．深鉢

第1類土器（図版第38図1等）　いわゆる火焔型土器である。しかし中葉の火焔型土器と比較して次のような相違点が認められる。

a．鶏冠状把手は縦にのびて大きく，器形は頸部がくびれ，整ったキャリパー形を呈する。

b．文様は全て半隆起線によって描かれ，文様構成は口縁部文様帯及び胴部文様帯とも鶏冠状把手を中心とした4単位で割り付けられている。

第2類土器（図版第38図2・4・6－10）　東北地方の大木8b式土器の影響を受けたと考えられる土器。器形はキャリパー形を呈し，平口縁，4単位の小波状口縁又は1単位及び2単位の把手をもつものが認められる。文様は頸部で口縁部文様帯と胴部文様帯に2分される。口縁部には縄文地上に隆起線で4単位の剝先文等が描かれているものと隆起線で剝先文等を施文した後，空白部を細い綾杉状の沈線あるいは直沈線で満たしているものとが認められる。胴部は縄文を地文とし，頸部からのびる懸垂文で4区画に割り付けられ，それらの中には渦巻文，剝先文等が配されている。

第3類土器（図版第38図12・13等）　波状口縁をもち，頸部がややしまり，胴部は若干張り出している。口縁の各波頂部には渦巻文がみられ，頸部には数条の平行直線文が巡っている。胴部は縄文が地文として施され，頸部からのびる懸垂文によって区画された内に渦巻文，懸垂文等が描かれている。なお，文様の施文には半截竹管及び沈線が用いられている。東北地方の大木8b式土器の影響を受けたと考えられる土器である。

第4類土器（図版第38図14等）　口縁に2単位ずつ4個の把手（a＋b＋a＋b）をもち，胴部下半が張り出す土器。口縁部にはX字状の橋状把手がつけられ，頸部に数条の平行直線が巡っている。胴部は頸部からのびる垂下渦巻文と懸垂文で4区画に割り付けられ，それらの区画内には渦巻文，剝先文等が配され，文様間の空白部分は綾杉状沈線又は縄文で満たされている。なお，文様の施文には隆起線又は半隆起線が用いられている。

第5類土器（図版第32図2，図版第33図3等）　4単位の波状口縁もしくは2単位の把手をもち，胴部が円筒形を呈する土器。文様，文様構成，施文技法は第4類土器

と同じである。

第6類土器（第76図35，第79図5等）　いわゆる栃倉II式[21]と考えられる土器である。

Ⅳ．末葉の土器

A．深鉢

第1類土器（第83図5～9等）　縄文を地文として隆起線で文様が描かれている土器。

第2類土器（第77図22～24等）　縄文を地文として沈線及び刺突で文様が描かれている土器。

第3類土器（第77図25～28等）　平口縁又は波状口縁をもつ土器。口縁部には押圧痕又は刻み目のある隆帯で渦巻文，直線文等が描かれ，胴部には縄文が施されている。

第4類土器（図版第32図6等）　4単位の波状口縁をもつ土器である。口縁部には隆帯で2単位の渦巻文がつけられ，その間には2条のゆるやかな波状沈線が巡っている。胴部には縄文が地文として施されており，上半部には口縁部の波状沈線文から4単位の懸垂文がのび，そこから釣針状の文様が対峙して派生している。

第5類土器（第78図31・32等）　条線又は波状条線文が施されている土器。

第6類土器（図版第32図8等）　平口縁で頸部が若干しまり，胴部がやや張り出す土器。口縁部には数条の平行沈線がめぐり，その下には沈線で3単位の楕円形状の文様が描かれ，その接点部分には棒状工具による刺突又は沈線が施されている。胴部は全面に縄文が施文されている。

（1）住居跡出土の土器。

○第5号住居跡出土土器（図版第32図1・2　第75図1～19）

後葉の土器が主体を占めている。図版第32図1，10～13はIII－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，図版第32図2，8はIII－A－第5類土器，1－3はII－A－第2類土器の口縁部破片，4～7はIII－A－第1類土器の胴部破片と考えられる。なお，図版第32図1は炉の埋甕に使用されていた。9は半隆起線を用いて曲線文と渦巻文が描かれている深鉢の口縁部破片，14・15は撚糸，16～19は縄文が施されている深鉢の口縁部・胴部破片である。

○第6号住居跡出土土器（第75図20－25）

後葉の土器が主体を占めている。20～24はIII－A－第2類土器の頸部・胴部破片と考えられる。なお24にはII－A－第5類土器的な文様が認められる。25は縄文が施された深鉢の胴

第75図　住居跡出土土器(中期)

部破片である。

○第98号住居跡出土土器（第75図26～30）

後葉の土器が主体を占めている。26はⅢ－A－第6類土器の胴部破片，27はⅢ－A－第5類土器の頸部破片，28～30はⅢ－A－第2類土器の口縁部・頸部破片と考えられる。

○第100号住居跡出土土器（第75図31～35）

末葉の土器が主体を占めている。31・32はⅣ－A－第1類土器の胴部破片，33はⅣ－A－第3類土器の口縁部破片，35はⅣ－A－第5類土器の胴部破片と考えられる。34は胴部がやや張り出す深鉢の胴部破片であり，器面には棒状工具で刺突が施されている。

○第101号住居跡出土土器（第76図1～10）

後葉の土器が主体を占めている。2～4はⅢ－A－第2類土器の胴部破片，5・6はⅢ－A－第5類土器の口縁部破片，7はⅢ－A－第4類土器の胴部破片と考えられる。1はⅢ－A－第2類土器と同じ器形及び文様構成をもつが，撚糸を地文として施している。8・9は撚糸，10は縄文が施されている深鉢の胴部破片である。

○第105号住居跡出土土器（第76図11～18）

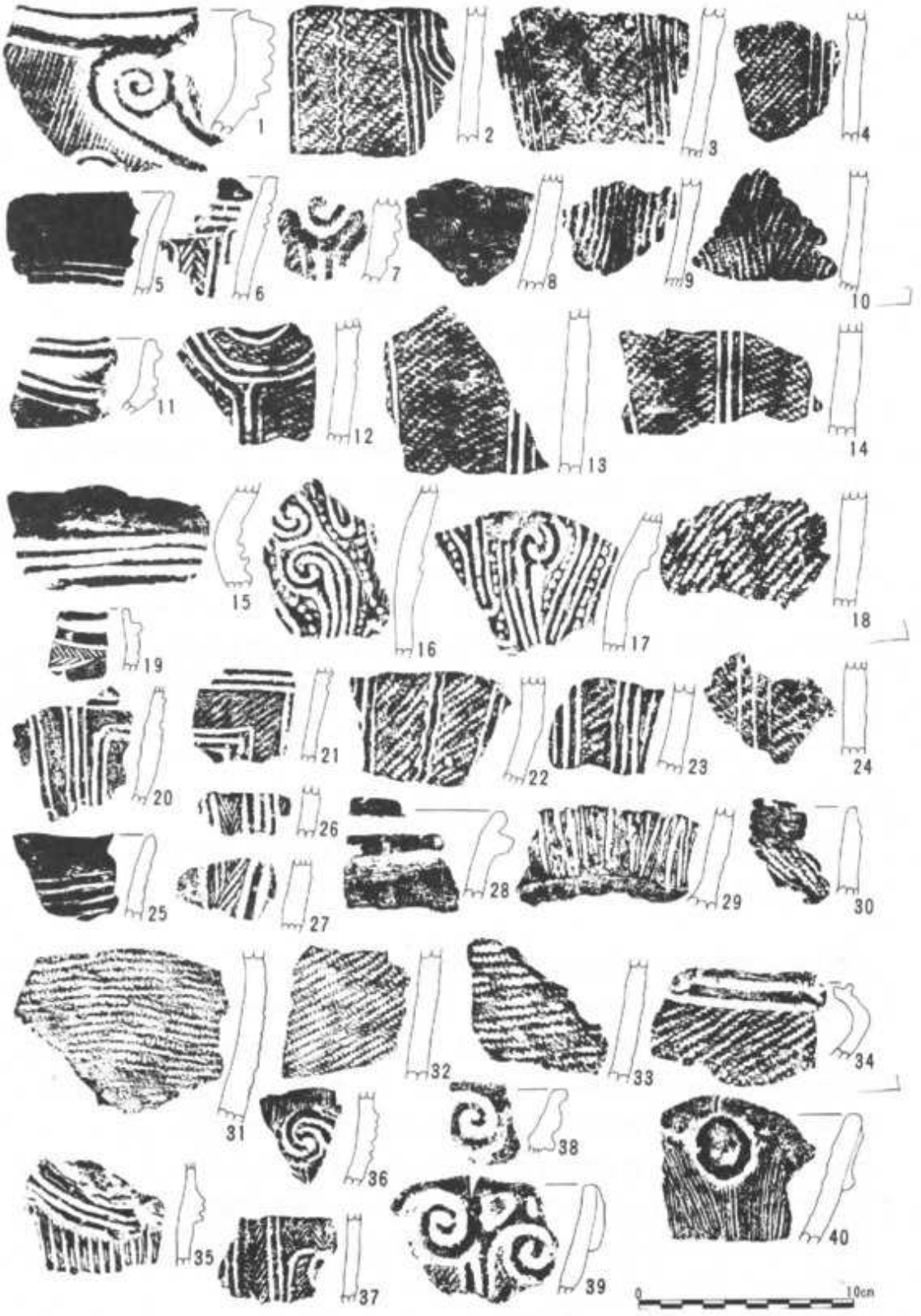
後葉の土器が主体を占めている。11～14はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，15はⅢ－A－第5類土器の頸部破片と考えられる。16・17は半隆起線で渦巻文・曲線文が描かれ，文様間には棒状工具で刺突が施されている深鉢の胴部破片，18は縄文が施されている深鉢の胴部破片である。なお，12・13・14及び16・17は同一個体である。

○第106号住居跡出土土器（図版第32図3　第76図19～34）

後葉の土器が主体を占めている。19～24はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，25～27はⅢ－A－第5類土器の口縁部・胴部破片，34はⅡ－B－第1類土器の口縁部破片と考えられる。28は波状口縁の深鉢，29は粗い条線が施文されている深鉢の胴部破片，30～33は縄文が施してある深鉢の口縁部・胴部破片である。図版第32図3はⅢ－A－第1類土器のミニチュアと推測される。

○第107号住居跡出土土器（第76図35－40，第77図1－7）

後葉及び末葉の土器が認められる。35・36はⅢ－A－第6類土器の胴部破片，37はⅢ－A－第5類土器の胴部破片，38・39はⅣ－A－第1類土器の口縁部破片，40・1・2はⅣ－A



第76図　住居跡出土土器(中期)

－第５類土器の口縁部破片と考えられる。３－７は縄文が施された深鉢である。なお，38・39及び１・２は同一個体と思われる。

○第108号住居跡出土土器（第77図８－14）

末葉の土器が出土している。８－10はⅣ－Ａ－第４類土器と推測される。11・13は縄文の施された深鉢の口縁部破片，12は縄文を地文とし，口縁部に２条の平行線がめぐり，胴部にも沈線で文様が描かれていることがうかがえる深鉢の口縁部破片である。14は口縁部が外反し小波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片であり，口縁部には半隆起線で波状文及び直線文が，胴部には撚糸文が施されている。なお，８－10は同一個体と思われる。

○第109号住居跡出土土器（図版第32図４　第77図15－17）

末葉の土器が主体を占めている。図版第32図４，第77図15・16はⅣ－Ａ－第１類土器の口縁部・底部破片，17はⅣ－Ａ－第５類土器の胴部破片と考えられる。

○第111号住居跡出土土器（第77図18－28，第78図１－４）

末葉の土器が主体を占めている。第77図18－21はⅣ－Ａ－第１類土器の口縁部破片，22－24はⅣ－Ａ－第２類土器の口縁部・胴部破片，25－28はⅣ－Ａ－第３類土器の口縁部破片，第78図１はⅣ－Ａ－第５類土器の胴部破片と考えられる。２－４は縄文が施された深鉢の口縁部・胴部破片である。

○第114号住居跡出土土器（第78図５－10）

後葉の土器が主体を占めている。５・６はⅢ－Ａ－第２類土器の口縁部破片，７・８はⅢ－Ａ－第５類土器の胴部破片，９・10はⅢ－Ａ－第１類土器の底部破片と考えられる。

○第115号住居跡出土土器（図版第32図６　第78図11－32）

前葉・後葉・末葉の土器が出土している。11－14はⅠ－Ａ－第６類土器の口縁部破片，16はⅡ－Ａ－第２類土器の口縁部破片，17・18はⅢ－Ａ－第２類土器の口縁部・胴部破片，19・20はⅢ－Ａ－第５類土器の胴部破片，25－27はⅣ－Ａ－第１類土器の口縁部破片，28－30はⅣ－Ａ－第３類土器の口縁部破片，31・32はⅣ－Ａ－第５類土器の胴部破片と考えられる。図版第32図６はⅣ－Ａ－第４類土器で，主柱穴と思われるピットより出土している。15は頸部に平行沈線文をめぐらし胴部には細い沈線が施されている深鉢の頸部破片である。21は口縁部に隆起線で渦巻文，直線文等が描かれ，隆起線で楕円形に区画された中に縦引きの沈線が充塡され，胴部が無文の浅鉢の口縁部破片である。

第77図　住居跡出土土器(中期)

22～24は縄文が施されている深鉢の口縁部破片である。第78図12～14は同一個体と思われる。

○第118号住居跡出土土器（図版第32図5　第79図1－6）

後葉の土器が出土している。図版第32図5，第79図1～3はⅢ－A－第5類土器，4はⅢ－A－第4類土器の胴部破片，5はⅢ－A－第6類土器の胴部破片と考えられる。なお，図版第32図5は炉の埋甕に使用されていた。6は縄文の施された深鉢の口縁部破片である。2・3は同一個体と思われる。

○第119号住居跡出土土器（第79図7～9）

7はⅢ－A－第5類土器の口縁部破片と考えられる。8・9は縄文の施された深鉢の胴部破片である。

○第120号住居跡出土土器（第79図10～20）

末葉の土器が出土している。10～13はⅣ－A－第1類土器又はⅣ－A－第4類土器の口縁部破片，19はⅣ－A－第3類土器の胴部破片と推測される。14～18は磨消縄文が施されている深鉢の胴部破片である。20は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片で，ゆるやかな波状沈線文等が描かれている。なお，14－16及び17・18は同一個体と思われる。

○第124号住居跡出土土器（第79図21～30）

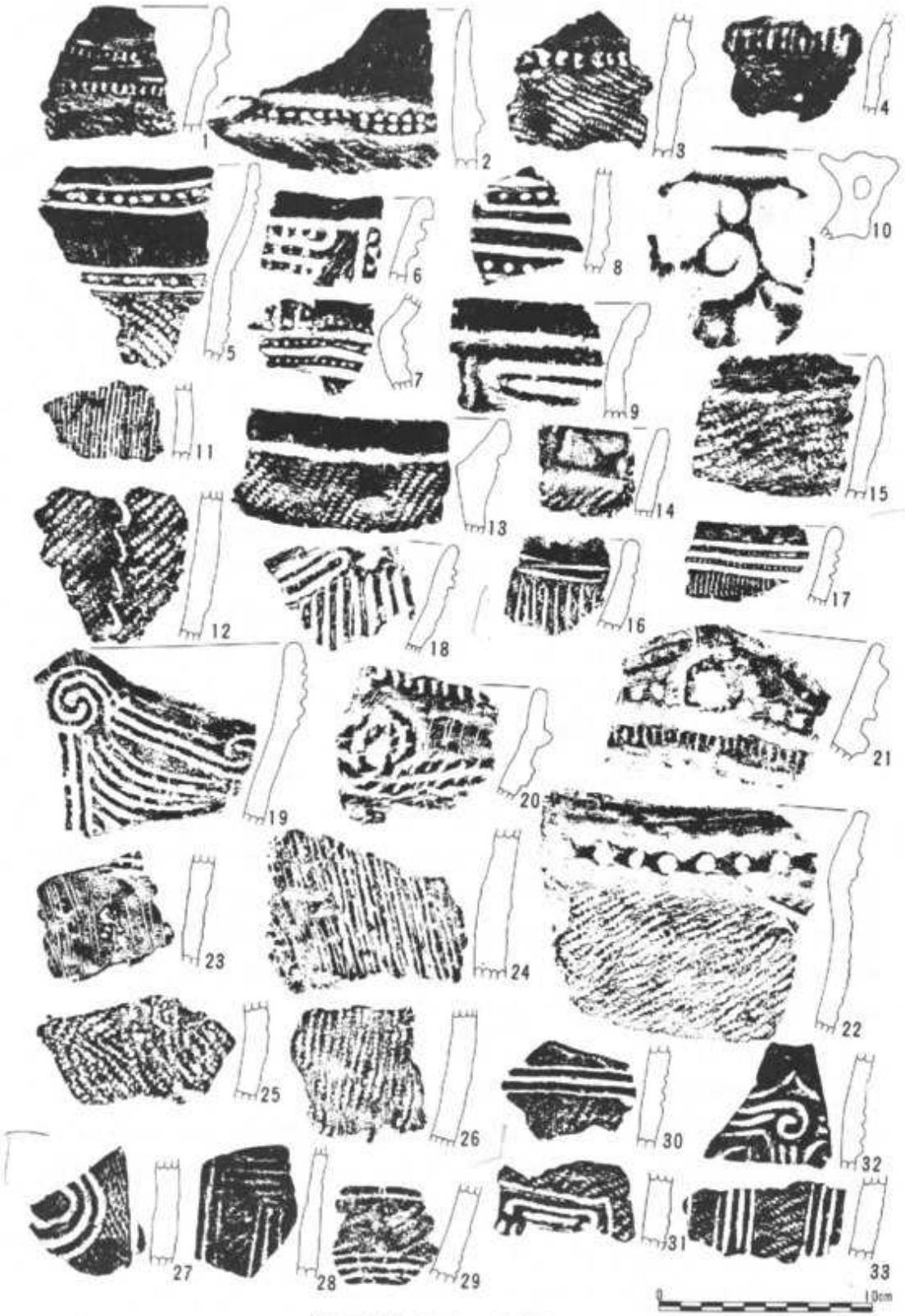
27・28はⅣ－A－第5類土器の口縁部・胴部破片と考えられる。21は波状口縁をもち，撚糸を地文とし，口縁に撚糸圧痕が施してある小形の深鉢の口縁部破片，22はⅡ－A－第1類土器又はⅢ－A－第1類土器など器面全体を隆起線もしくは半隆起線で飾られている土器の胴部破片，23は縄文地上に沈線で文様が描かれている深鉢の胴部破片である。24・25は半隆起線で描かれた文様の空白部に綾杉状の沈線を満たした深鉢の胴部破片であるが，これらはⅢ－A－第4・5類土器とは異なる土器であろうと推測される。26は口縁が外反する深鉢の口縁部破片であり，折り返した口縁部には刻み目がつけられ，その下部には2条の平行沈線がめぐっている。29は2条の刺突が施されている隆帯がめぐる深鉢の口縁部破片，30は縄文が施文されている深鉢の胴部破片である。なお，24・25は同一個体と考えられる。

○第126号住居跡出土土器（第79図31－38，第80図1～15）

末葉の土器が主体を占めている。31～35はⅣ－A－第1類土器の口縁部破片，36～38，1～4はⅣ－A－第3類土器の口縁部・胴部破片，5～8はⅣ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，9はⅣ－A－第6類土器の口縁部破片，11はⅣ－A－第5類土器の胴部破片と考え

第78図　住居跡出土土器(中期)

第79図　住居跡出土土器(中期)



第80図　住居跡出土土器(中期)

られる。10は橋状把手をもち、最大径が胴部上半に位置する深鉢の口縁部破片で，微隆起線で渦巻文等が描かれ，朱が塗布されている。12は縦回転の結束縄文，14は縄文が施されている深鉢の口縁部・胴部破片である。15は縄文が施されている深鉢であるが，口縁部にはⅠ－A－第2類土器のような撚糸圧痕が認められる。

○第129号住居跡出土土器（第80図16～26）

末葉の土器が主体を占めている。20～22はⅣ－A－第3類土器の口縁部破片と考えられる。16・17は口縁に2～3条の平行沈線がめぐり，撚糸が地文として施されている深鉢の口縁部破片である。18・19は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片であり同一個体と思われる。波頂部には渦巻文がつけられ，そこから沈線がのび，途中から曲沈線文が派生している。25～26は縄文が施されている深鉢の胴部破片である。

○第130号住居跡出土土器（第80図27～33，第81図1・2）

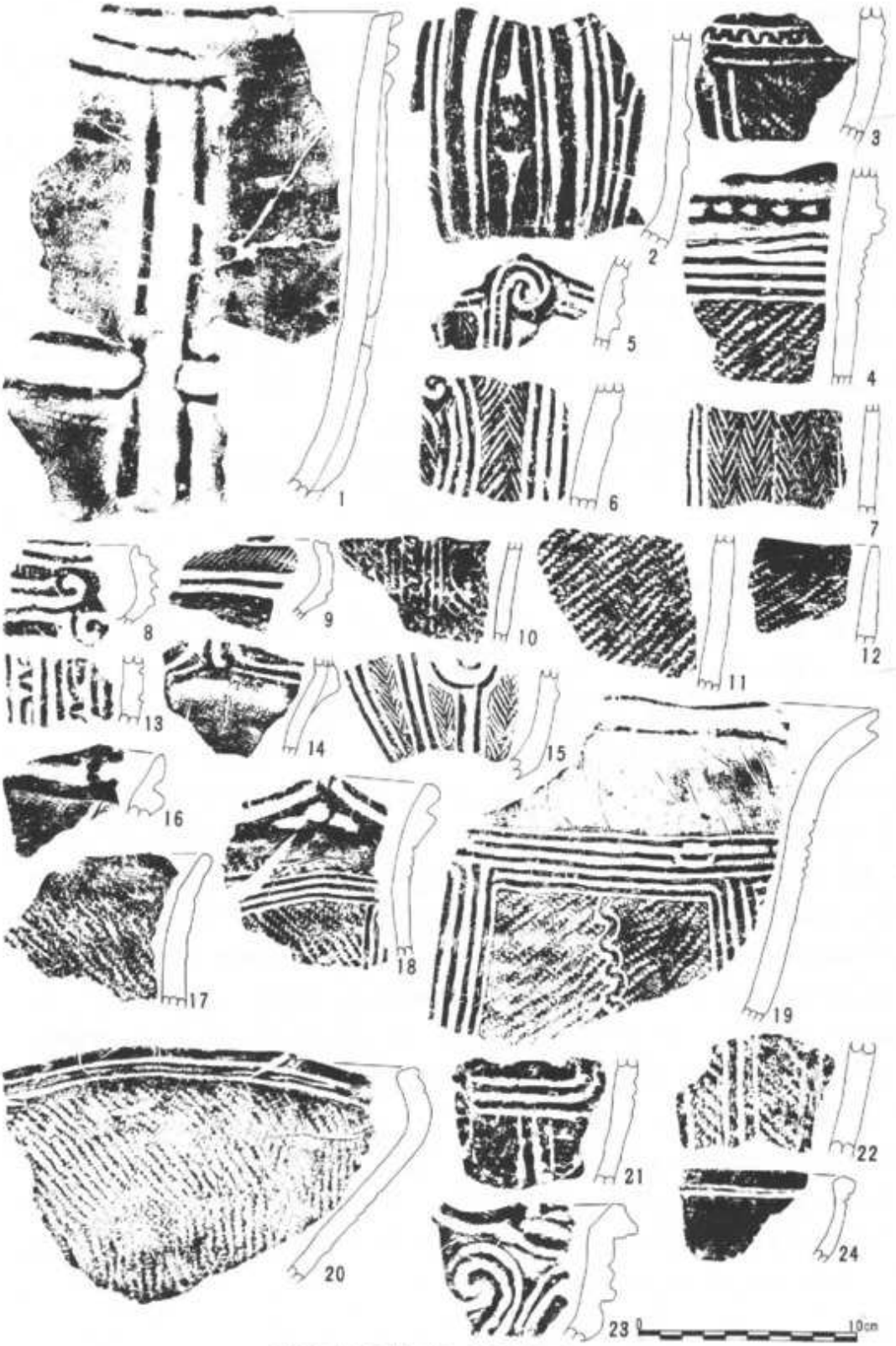
中葉・後葉の土器が出土している。28はⅡ－A－第5類土器の胴部破片，29・30・33はⅢ－A－第2類土器の頸部・胴部破片，31・32はⅢ－A－第5類土器の頸部・胴部破片と考えられる。27は撚糸を地文とし，沈線で渦巻文が描かれている深鉢の胴部破片，2は半隆起線で器面が飾られ，玉だき三叉文が認められる深鉢形土器の胴部破片である。1は樽形を呈する深鉢であり，口縁部には2条の微隆起線がめぐり，そこから胴部へと2条1組の微隆起線がのび，下半部にも2条1組の微隆起線がめぐっている。

○第131号住居跡出土土器（図版第32図7　第81図3～12）

中葉・後葉の土器が出土している。第81図3はⅡ－A－第5類土器の口縁部破片，第81図5～7はⅢ－A－第5類土器の頸部・胴部破片，8～10はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片と考えられる。4は刺突が施された隆帯と5条の平行沈線が頸部にめぐり，胴部には縄文が施されている深鉢の胴部破片，図版第32図7，第81図11・12は縄文が施されている深鉢である。図版第32図7は炉の埋甕に使用されていた。

○第132号住居跡出土土器（図版第32図10・12　第81図13～19）

後葉の土器が主体を占めている。10・12・14はⅢ－A－第2類土器，13はⅢ－A－第1類土器の胴部破片，15はⅢ－A－第4類土器の胴部破片，18はⅢ－A－第3類土器の口縁部破片と考えられる。10は炉の埋甕に使用され，12は床面直上より出土している。16・17は縄文が施された深鉢の口縁部破片であり，16は波状口縁の波頂部に渦巻文を有している。19はⅢ－A－第3類土器に類似するが，区画内に波状懸垂文が配されている。



第81図　住居跡出土土器(中期)

○第136号住居跡出土土器（第81図20～24）

中葉・後葉の土器が出土している。20はII－B－第1類土器，21はII－A－第5類土器の胴部破片，22はIII－A－第2類土器の胴部破片，23はII－A－第1又は第2類土器の口縁部破片と考えられる。24は浅鉢の口縁部破片であり，口縁に2条の平行沈線がめぐるほかは無文である。

○第143号住居跡出土土器（第82図1－10）

前葉・後葉の土器が出土している。3はI－A－第4類土器の口縁部破片，4はI－A－第1類土器の頸部破片，6はIII－A－第2類土器の口縁部破片，8はIII－A－第6類土器の胴部破片と考えられる。1・2は斜位格子目文が施されている深鉢の口縁部破片，5は隆起線間に条線が認められる深鉢の胴部破片，7は沈線間にハの字状の文様が充填されている深鉢の胴部破片，9は縄文地上に押圧痕のある隆帯を口縁にめぐらす深鉢の口縁部破片，10は縄文地上に隆起線が施してある深鉢の胴部破片である。

○第144号住居跡出土土器（第82図11～45，第83図1－17）

前葉～末葉までの土器が出土している。第82図11－26はI－A－第6類土器，27・28はI－A－第1類土器の頸部破片と考えられる。29は縄文が施されている深鉢であり，口縁部にはI－A－第2類土器のような撚糸圧痕文が認められる。31・38・39はII－A－第1・2類土器又はIII－A－第1類土器の口縁部・胴部破片と推測される。30は縄文が施され，口縁に2条の沈線がめぐる深鉢の口縁部破片，32・33は樽形を呈する有孔鍔付土器，34は全面に縄文が施され，口縁部に沈線で渦巻文等が描かれている深鉢の口縁部破片である。36はIII－A－第2類土器の胴部破片，37はIII－A－第5類土器の口縁部破片と思われる。35は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片，40は口縁に沈線がめぐる深鉢の口縁部破片であり，ともに器面全体に縄文が施されている。第83図4～9はIV－A－第1類土器の口縁部・胴部破片，第82図41～43・46，第83図1はIV－A－第2類土器の口縁部破片，3はIV－A－第6類土器の口縁部破片，10・11はIV－A－第3類土器口縁部破片，13～15はIV－A－第5類土器の胴部破片と考えられる。45は波状口縁をもち最大径が胴部に位置する深鉢であり，口縁部の文様はIV－A－第2類土器に類似し，胴部には縄文が施されている。2は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片である。文様はIV－A－第6類土器に類似するが波頂部に隆起線で円形の区画がなされている。16は縦回転の結束縄文が施されている深鉢の胴部破片，17は2段の刻み目が施され，その下には2条の平行沈線がめぐり，内に沈線の刻み目が満たされている深鉢の口縁部破片である。なお，5～9は同一個体と思われる。

第82図　住居跡出土土器(中期)

○第146号住居跡出土土器（第83図18～28）

前葉・後葉の土器が出土している。21～23はⅠ－A－第6類土器の口縁部・頸部破片，24はⅡ－A－第2類土器の口縁部破片，25・26はⅢ－A－第2類土器の口縁部破片と考えられる。18・19は口縁部に1条の沈線がめぐり，その下に横「ハ」の字状沈線が施されている深鉢の口縁部破片である。20は格子目文が施されている深鉢の胴部破片，27は刻み目を施した隆帯が口縁部にめぐり，その間に沈線で渦巻文が描かれている深鉢の口縁部破片，28は隆帯にて楕円形状の区画がなされた深鉢の口縁部破片である。

○第148号住居跡出土土器（第83図29～32）

29・30は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片であり，29は波頂部に渦巻文が描かれ，30は胴部全体に縄文が施されている。31は太い条線が施された深鉢の胴部破片である。32は浅鉢の口縁部破片で，2条の隆起線がめぐり，その間に隆起線で渦巻文等が描かれている。

○第150号住居跡出土土器（図版第32図13　第83図33～44，第84図1～5）

前葉・後葉の土器が出土している。33はⅢ－A－第1類土器の頸部破片，図版第32図13，35～38はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，39～43，1はⅢ－A－第5類土器の胴部破片，44はⅢ－A－第4類土器の胴部破片と考えられる。34はⅢ－A－第2類土器と強い類似性を示すが，縄文地上の文様が粘土紐を貼付することによって描かれているという点において相違が認められる。2はⅠ－A－第1類土器の頸部破片，5はⅠ－A－第3類土器の口縁部破片と推測される。3は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片，4は折り返し口縁をもつ深鉢であり全面に縄文が施されている。

○第152号住居跡出土土器（第84図6～10）

6・7はⅠ－A－第1類土器の口縁部・頸部破片と考えられる。8・9は文様がⅢ－A－第2類土器に類似し，胴部が張り出すキャリパー形の深鉢の頸部・胴部破片，10は口縁部に2条の隆帯がめぐる浅鉢と推測される。なお，8・9は同一個体の可能性がうかがえる。

○第157号住居跡出土土器（第84図11～24）

後葉・末葉の土器が出土している。11はⅢ－A－第2類土器の口縁部破片，13はⅢ－A－第1類土器の胴部破片と考えられる。12は数条の沈線が口縁にめぐる深鉢の口縁部破片であり，胴部文様はⅡ－A－第5類土器に共通性が認められる。14～17はⅣ－A－第1類土器の胴部破片，18・19はⅣ－A－第6類土器の口縁部破片，20・22はⅣ－A－第3類土器の口縁部・頸部破片，21はⅣ－A－第2類土器の胴部破片と思われる。23は口縁部に1条の沈線が

第83図　住居跡出土土器(中期)

めぐる深鉢の口縁部破片，24は深鉢の口縁部破片で，ともに全面に縄文が施されている。

○第160号住居跡出土土器（第84図25～30）

前葉・後葉の土器が出土している。25はⅠ－A－第2類土器の口縁部破片，26はⅠ－A－第4類土器の口縁部破片，27はⅢ－A－第1類土器の胴部破片，28～30はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片と考えられる。

○第163号住居跡出土土器（図版第32図11）

覆土中からは縄文が施されただけの少量の土器が出土したのみであった。11はA字形の石囲い炉の埋甕に使用されていた深鉢で，口縁上部と胴部下半は切断されていた。器形は崩れたキャリパー形を呈し，文様は頸部にめぐる1条の隆帯で口縁部文様帯，胴部文様帯に2分される。口縁部には縄文地上に隆起線で楕円形状の区画と渦巻文が配され，胴部の全面には縦方向の磨消縄文が施文されるなど関東地方の加曽利EⅡ式的な文様が認められる。また，この土器は本遺跡で1個体のみしか出土せず，胎土（細かい），色調（明灰褐色），焼成（良好）とも他の土器とは異なる点などから推測して，他地域からの搬入品の可能性がうかがえる。

○第170号住居跡出土土器（第85図，第86図，第87図1～13）

前葉－末葉までの土器が出土している。第85図2・4はⅠ－A－第6類土器の口縁部・胴部破片，3はⅠ－A－第5類土器の口縁部破片，7～9はⅠ－A－第2類土器の口縁部破片と考えられる。11は木目状撚糸文が施してある深鉢の胴部破片，5は口縁が外反し，口縁をめぐる2条の沈線間に刻み目が施されている深鉢の口縁部破片，6は縦引きの沈線間に刻み目が満たされている深鉢の胴部破片である。11・12はⅡ－A－第5類土器の胴部破片，15～20，第86図1～11はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，12～24・29はⅢ－A－第5類土器の口縁部・胴部破片と思われる。第85図10は口縁がやや内彎する深鉢で器面全体に隆起線及び半隆起線で渦巻文，交互刺突文，玉だき三叉文等が描かれている。13は波状口縁をもつ深鉢で口縁には沈線で渦巻が描かれ，頸部は縄文地上に沈線がめぐっている。14は深鉢の頸部破片で数条の平行沈線と波状沈線が描かれている。第86図25は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片，26は口縁上部がやや外反し，数条の沈線がめぐる浅鉢である。27・28はⅣ－A－第1類土器の胴部破片，第87図1はⅣ－A－第2類土器の口縁部破片，2はⅣ－A－第3類土器の口縁部破片と考えられる。3は第80図18・19（第129号住居跡出土土器）と同じタイプの深鉢の口縁部破片，4は刺突文の施された深鉢の胴部破片である。5は波状口縁をもつ深鉢で口縁に沿ってゆるやかな波状沈線がめぐり，胴部には縦引きの沈線が施されている。6は口縁に数条の沈線がめぐり，口唇部の内外に細い沈線が刻まれている深鉢の口縁

第84図　住居跡出土土器(中期)

第85図　住居跡出土土器(中期)

第86図　住居跡出土土器(中期)

部破片である。7・8は撚糸が施された深鉢の胴部破片，9～13は縄文が施された深鉢の口縁部破片で，9は波状口縁をもち口縁部に沈線がめぐり，13は頸部に隆起線がめぐっている。

○第172号住居跡出土土器（第87図14～18）

14はⅢ－A－第1類土器の胴部破片，17はⅢ－A－第2類土器の胴部破片と考えられる。15は縦方向に半隆起線が縦引きされ，その間に沈線が刻まれている深鉢の胴部破片，16・18は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片である。16は口縁部に橋状把手をもち，頸部の縄文地上には数条の沈線がめぐっている。18の口縁部にはゆるやかな波状隆帯がめぐり，胴部には縄文が施されている。

第87図　住居跡出土土器(中期)

○第178号住居跡出土土器（第87図19・20）

19は縄文が施された深鉢の口縁部破片であり，Ⅰ－A－第2類土器にみられるような撚糸圧痕が認められる。20はⅢ－A－第2類土器の胴部破片と考えられる。（寺崎裕助）

（2）Fピット出土の土器

○5G－F28出土土器（図版第32図9）

口唇部に2単位の小突起を持ち，厚い盤状の底部を持つ浅鉢。撚糸が地文として施され，口縁部には半截竹管にて工字状文，胴部には連弧状文が6単位づつ描かれている。

○6G－F9出土土器（図版第32図14）

口縁が外反し，胴部上半が若干張り出す深鉢。器面全体には縄文が施されており，口唇部には2単位づつ4個（a＋b＋a＋b）の小突起がつけられている。

○8G－F1出土土器（図版第33図1～3）

3個ともピットの基底部より出土している。1は異形土器と思われる。口縁部は破損し，不明であるが無文地に沈線で背中合わせの剣先文，上向きの剣先文が対峙して2単位づつ描かれており，剣先文の基部には円形の透し彫りが施されている。器台ではないかとの指摘もされている。2は波状口縁をもち頸部がややしまり，胴部が若干張り出すキャリパー形の小形深鉢。口縁部は無文で胴部全面には縄文が施されている。3はⅢ－A－第5類土器である。

○8G－F5出土土器（図版第33図4）

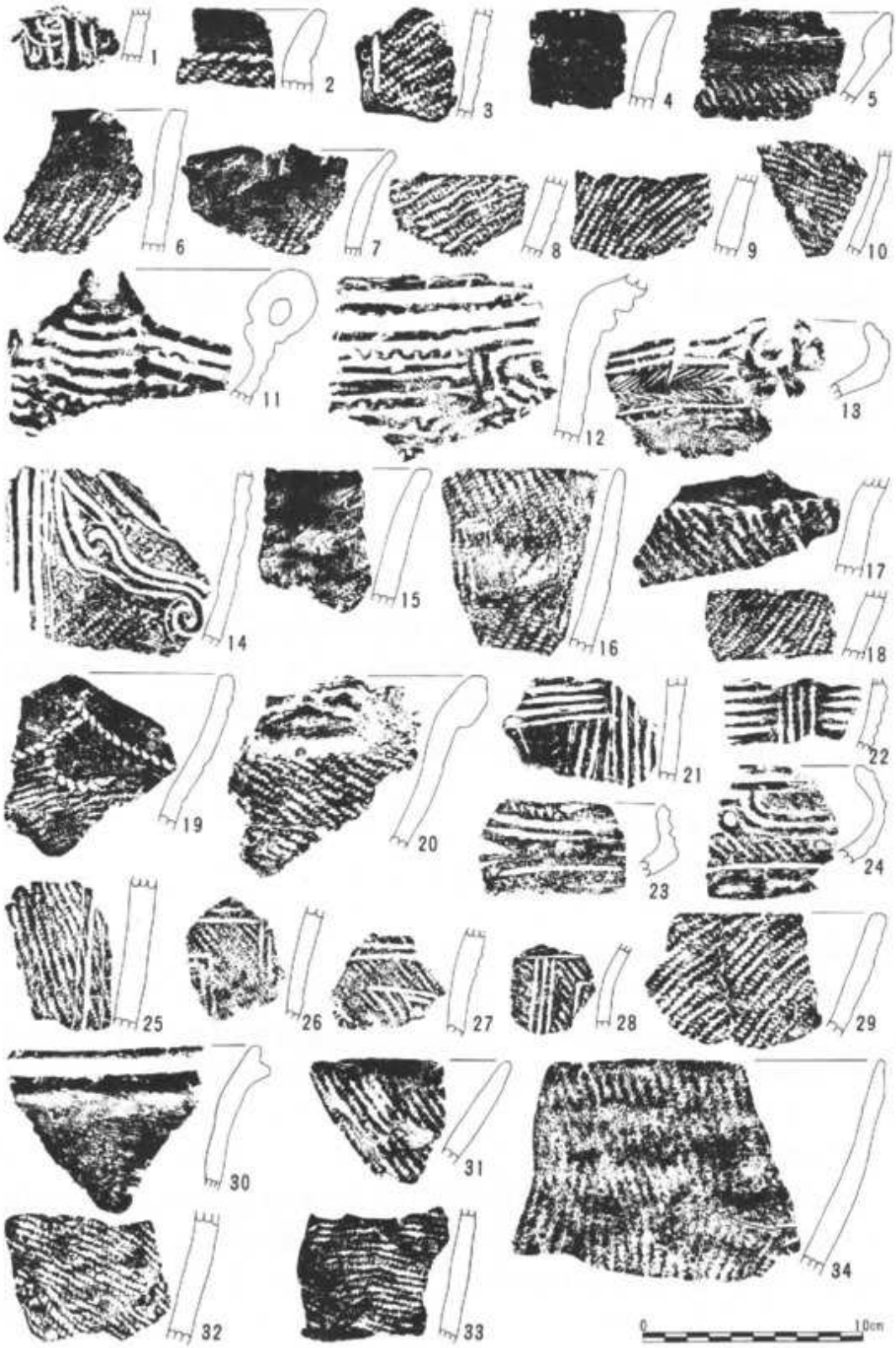
4はⅢ－A－第5類土器であり口縁部は破損している。

○3E－F8出土土器（第88図1～10）

前葉の土器が出土している。2はⅠ－A－第2類土器の口縁部破片，4～10は縄文が施されている深鉢の口縁部・胴部破片である。1は第83図20（第146号住居跡）と同タイプの土器，3は縄文地上に沈線で文様が描かれている深鉢の胴部破片と考えられる。

○3F－F1出土土器（第88図11～18）

13・14はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片，15～18は縄文が施された深鉢の口縁部・胴部破片である。11・12は同一個体と考えられ，口唇部に橋状把手をもつ深鉢の口縁部・頸部破片である。貼付された粘土紐で直線文，波状文等が描かれている。



第88図　Fピット出土土器(中期)

○3F－F26出土土器（第88図19～34）

前葉・後葉の土器が出土している。19・20はⅠ－A－第2類土器の口縁部破片，21・22はⅠ－A－第1類土器の頸部破片，23～28はⅢ－A－第2類土器の口縁部・胴部破片と考えられる。29は縦回転の結束縄文が施されている深鉢の口縁部破片，31～33は縄文が全面に施されている深鉢の口縁部・胴部破片である。なお，25～28は同一個体と思われる。

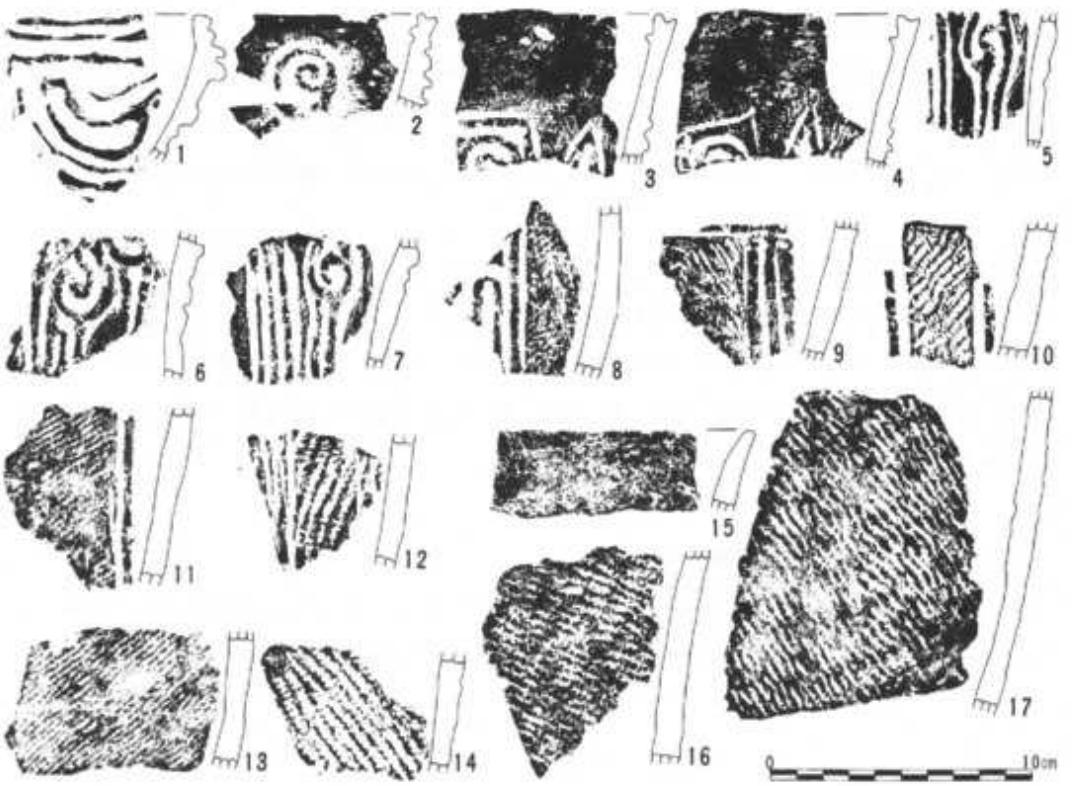
○3F－F42出土土器（第89図1～14）

後葉の土器が主体を占めている。1はⅢ－A－第1類土器，2～7はⅢ－A－第5類土器の口縁部・胴部破片，8～12はⅢ－A－第2類土器の胴部破片と推測される。13・14は縄文が施された深鉢の胴部破片である。

○6F－F16出土土器（第89図15－17）

15は深鉢の口縁部破片，16・17は縄文が施された深鉢の胴部破片である。

（寺崎裕助）



第89図　Fピット出土土器(中期)

（3）Gピット出土の土器

○4E－G4出土土器（図版第33図5）

2単位の波状口縁をもつ深鉢。波頂部には隆起線で渦巻文が描かれ，その間には2条の平行沈線がめぐっている。胴部は全面に縄文が施され，上半には波頂部の渦巻文から2条1組，2単位の沈線がのびている。

○3E－G2出土土器（第90図1・2）

1は波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片である。波頂部に渦巻文，胴部には縄文が施されている。2は縄文が施されている深鉢の胴部破片である。

○3G－G37出土土器（第90図3～10）

3・4はIII－A－第5類土器の胴部破片，6はIII－A－第2類土器の胴部破片と考えられる。5は縄文地上に刺先文が描かれている深鉢の胴部破片，7は撚糸を地文とし，懸垂文（？）が認められる深鉢の胴部破片，8～10は縄文が全面に施されている深鉢の口縁部・胴部破片である。

○4D－G1出土土器（第90図11－16）

11はII－A－第1類土器又はIII－A－第1類土器のように，器面全体が隆起線及び半隆起線で飾られている深鉢の胴部破片と考えられる。12は口縁に1条の沈線がめぐる深鉢の口縁部破片，13－16は縄文が器面全体に施されている深鉢の口縁部・胴部破片である。

○4E－G3出土土器（第90図17－24）

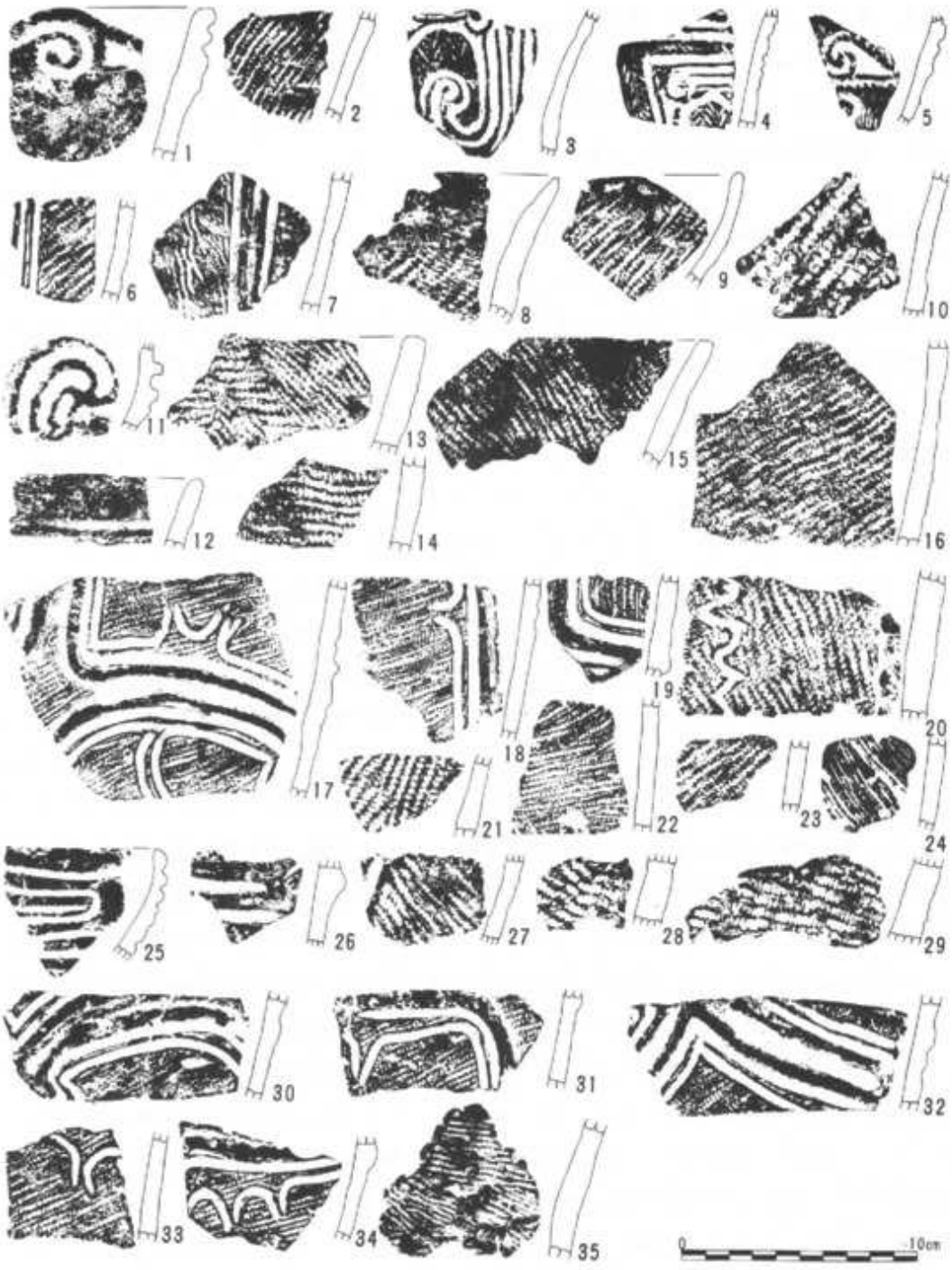
17～19は同一個体でIII－A－第2類土器に類似する土器の胴部破片である。しかし文様の施文には沈線のほかに断面三角形の隆起線が用いられている。20は縄文地上に沈線で波状懸垂文が描かれている深鉢の胴部破片，21－23は縄文が施されている深鉢の胴部破片，24は条線が施された深鉢の胴部破片である。

○4E－G8出土土器（第90図25－29）

25・26はIV－A－第6類土器の口縁部・頸部破片と推測される。27は縄文地上に沈線が認められる深鉢の胴部破片，28・29は縄文が施されている深鉢の胴部破片である。

○４Ｅ－Ｇ９出土土器（第90図30～35）

30～34は同一個体であり同図17～19（４Ｅ－Ｇ３）とも同一個体と考えられる。35は縄文が施されていた深鉢の胴部破片である。（寺崎裕助）



第90図　Ｇピット出土土器（中期）

（4）第1土器捨て場出土の土器（図版第33図6～16，図版第34図～図版第40図，図版第41図1～10）

前葉の土器（図版第33図6～16）

6・8～10はA－第1類土器，11～13はA－第2類土器，16はB－第1類土器である。7はA－第1類土器，15はA－第2類土器のミニチュアと考えられる。14は口唇部に1単位の山形突起をもつ台付土器で，突起には隆起線で渦巻がつけられ，そこから頸部まで2条の隆起線が垂れている。頸部には3条の半截竹管がめぐり，胴部全面には縄文が施されている。なお，器内には朱の付着が認められる。

中葉の土器（図版第34図～図版第37図1～11・13）

図版第34図5～9はA－第1類土器，図版第34図10・11，図版第35図1～3・6はA－第2類土器，図版第35図4・5はA－第3類土器，図版第35図7～9はA－第4類土器，図版第35図10・12・13はC－第1類土器，図版第36図4・5・6はA－第5類土器，図版第36図10・12・13はA－第6類土器である。図版第34図1は4単位の小波状口縁をもち，胴部には3個の小橋状把手がつけられ，底部が上げ底となる深鉢。胴部には隆起線によって渦巻文・曲線文等が描かれ，文様構成は3単位である。図版第34図2は頸部が若干くびれる深鉢。口縁部には橋状突起が4個つけられており，口唇部には鶏冠状把手を想起させるような低い横走りの把手が対峙して配され，それらの把手間は鋸歯状の小突起で満たされている。文様は器面全体に隆起線及び半隆起線で渦巻文，縦引きの直線文等が描かれている。なお，口縁上部の隆起線上には爪形文が施されている。図版第34図3は頸部に2個の小橋状把手をもつキャリパー形の深鉢。口縁部には横S字状文・三角形陰刻文等が，胴部には渦巻文・垂下渦巻文・縦引きの直線文等が隆起線及び半隆起線で描かれている。また胴部の直線文間の空白部分は横引きの細い沈線で満たされ，文様構成は口縁部・胴部とも2単位（a＋b＋a＋b）である。図版第34図4は頸部がややくびれるキャリパー形の深鉢。口唇部には4単位の鶏冠状把手が，頸部には4個のX字状突起がそれぞれ対峙してつけられている。文様は器面全体に隆起線及び半隆起線で渦巻文・曲線文・三角形陰刻文等が描かれている。文様帯は頸部の横走りする隆起線により口縁部文様帯と胴部文様帯に2分されるが，口縁部・胴部文様帯とも4単位である。図版第35図11は胴部が張り出し，2単位の波状口縁をもつ台付土器。口唇部には円形の透し彫りをもつ小突起と隆起線で描かれた渦巻文が2単位ずつ配されており，その間は細い沈線の刻み目で満たされている。波頂部の下には2個の袋状突起が対峙してつけられており，胴部には隆起線及び半隆起線で渦巻文・三角形陰刻文等が施文されている。図版第36図7は口唇部にそれぞれ異る2個の把手及び対峙する2単位の横S字文をもち，頸部がややしまるキャリパー形の深鉢。縄文が地文として施され，口縁部にはゆるやかな波状文，

胴部にはII－A－第5類土器と類似する文様がそれぞれ半截竹管で描かれている。文様帯は頸部で口縁部文様帯と胴部文様帯に2分される。図版第36図8は口唇部に横S字状の1単位の把手をもち，頸部がややくびれるキャリパー形の深鉢である。器面全体に撚糸が地文として施されており，口縁部には粘土紐で刺先文等が貼付され，頸部から胴上部にかけては6条の平行沈線と，1条の波状沈線がめぐっている。図版第36図9は口縁部に透し彫りのある1単位の把手をもち，頸部がくびれるキャリパー形の深鉢。口縁部には縄文地上に粘土紐の貼付で波状文，隆起線で曲線文等が描かれ，頸部は無文帯となっている。胴部にはII－A－第5類土器と類似する文様が半截竹管で施文されている。図版第36図11は口縁部に1単位の大きな橋状把手をもつほかはII－A－第6類土器と同じ器形である。胴部には縄文が地文として施され，上半には半截竹管で横引きされた6条の平行沈線と1条の波状文がめぐり，下半には2単位の渦巻文・懸垂文等が半截竹管で描かれている。図版第36図16は口縁部の内面に三角形陰刻文が印された小突起をもつ小形の深鉢。口縁部は沈線で7単位に区画され，交互刺突文と2条の平行沈線がめぐり，胴部全面には縄文が施されている。図版第36図17は口唇部1単位の小突起をもつ小形の深鉢。器面全体には縄文が施され，小突起の下には粘土紐によって渦巻文が貼付されている。口縁部には幅約2cmの輪づみ痕跡（？）が2段認められる。図版第37図1は外反し波頂部に刻み目を有する4単位の波状口縁をもち，最大径が胴部上半に位置する大形の深鉢。口縁部には4単位のX字状の橋状把手がつけられ，それらの把手間は断面三角形の隆起線で結ばれている。また，同じ隆起線で楕円形状の区画もなされ，その中及び隆起線間には波状沈線が描かれている。胴部上半には隆起線の渦巻文及び懸垂文状の文様がそれぞれ4単位ずつ縄文地上にのびているが下半は縄文が施されているのみである。図版第37図2は口唇部に4個別々の突起がつけられ，口縁が外反し，円筒形の胴部をもつ深鉢。口縁には「ハ」の字状の刻み目が印された直線文が1条めぐり，その下は半截竹管で4区画に分けられ，内には交互に三角形陰刻がなされている。胴部は頸部につけられた4単位のX字状の小突起からのびる2本1組4単位の隆起線によって4区画に割り付けられ，それぞれの区画内には一部に刻み目が印された半截竹管にて渦巻文・曲線文等が描かれている。文様帯は頸部にめぐる「ハ」の字状の刻み目が印された1条の直線によって口縁部文様帯と胴部文様帯に2分される。図版第37図3は口縁が内彎する浅鉢。口縁部には交互刺突が施された1条の半隆起線がめぐり，胴部には縄文が地文として施文され，口縁部から垂れる1単位の渦巻文が隆起線で描かれている。図版第37図5は口縁がやや内彎し，口唇部に2単位のS字状の小把手をもつ大形の浅鉢。器面全体には縄文が施され，口縁部には隆起線を用いた2単位（a＋b＋a＋b）の突起状の文様がつけられ，それらの間は半隆起線のゆるやかな波状文で結ばれている。なお，口縁部には2個の補修孔が認められ，底部は磨滅が著しく，胎土中には雲母を含んでいる。図版第37図6は口縁部に鶏冠状把手を想起させる横S字状の4単位の把手

をもち，底部が盤状に厚くなる浅鉢。把手は透し彫りが施され，半隆起線で飾られており，横方向にのびる半隆起線は把手の左右に対称の渦巻文を形づくっている。把手間には間に竹管が押し引きされている半隆起線で工字文状の文様が描かれている。胴部全体には縄文が施され，沈線で4単位の渦巻文が施文されている。図版第37図7は口縁が内彎する浅鉢の口縁部に注ぎ口がつけられた土器。口縁部には地文として縄文が施され，粘土紐によって剣先文等が貼付されている。胴部は無文であり，丁寧に整形されている。図版第37図8は円形の透し彫りが施されている把手及びS字状の突起を4単位ずつ有する台付土器。口縁には半隆起線と交互刺突が施されている半隆起線が1条ずつめぐり，その下には竹管文が縦引きされている。胴部には地文として縄文が施され，口縁部の把手及び突起より垂下する渦巻文が隆起線で描かれている。図版第37図9は口縁に鶏冠状把手を想起させる1単位の横S字状の把手及び3単位のX字状の小突起をもつ台付土器と考えられる。口縁上部には隆帯が2条めぐり，その間には同図8に見られるような縦引きの竹管文が施された後に4単位の渦巻文が配されている。口縁下部には1条の隆帯がめぐり，幅広の竹管が横引きされている。胴部全面には縄文が施され上半には波状沈線と隆帯が1条ずつめぐっている。図版第37図10・11・13は胎土・色調・焼成等において，他の土器とは異なることから別の地域からの搬入品ではないかと推定される土器である。10は口縁内側に玉だき三叉文が陰刻され，動物意匠を想定させるような4単位の波状口縁をもつ深鉢。口縁部には袋状及びS字状を呈する橋状把手が2単位ずつ対峙してつけられ，それらの間は連弧状の隆起線で結ばれている。頸部は無文帯になり，円筒形の胴部は文様で上・下に2分される。胴部上半には橋状突起を想起させる4単位の小突起がつけられ，そこから隆起線あるいは半隆起線を用いた流水文状の曲線文及び渦巻文が三角形陰刻文を伴いながら垂下している。胴部下半は縦引きの半隆起線で満たされている。色調は赤褐色を呈し，胎土は砂質で焼成良好である。11は東北地方南半に分布する大木8a式土器と考えられる。口唇部には透し彫りが施してある2単位ずつ合計4個の小把手（a＋b＋a＋b）をもち，頸部から口縁部にかけては朝顔状に開き，その下に円筒形の胴部がつけられている深鉢。口縁上部には4単位の小橋状把手がつけられており，それらの把手間は間に幅広の刻み目が施されている隆起線で結ばれている。口縁下部には縄文地上に沈線で8単位と推定される渦巻文及び懸垂文が描かれている。頸部には刻み目が1条めぐり，そこから鉤の手状の隆起線が胴部の縄文地上に描かれた渦巻状の隆起線へとのび，さらにこの渦巻状の隆起線を中心にして鉤の手状の隆起線が派生している。胎土は砂質，焼成は良好で色調は暗黒褐色を呈している。13は口縁が厚く胴部上半に最大径を有する浅鉢。口縁部から太い隆帯が胴部上半にのび，渦巻文・入組文風の文様を描いている。胴部下半は無文で，口縁から胴部上半及び内面にかけては朱が塗布されている。色調は明褐色を呈し，胎土は砂質，焼成は良好である。図版第36図1～3はA－第2類土器など器面全体を隆起線及び半隆起線で飾

る土器のミニチュア，図版第36図15はA－第5類土器のミニチュアと考えられる。図版第36図14は頸部がややしまるキャリパー形の深鉢のミニチュアであり，頸部には2条の隆起線がめぐり，そこから2条4単位の隆起線が垂れている。

後葉の土器（図版第37図12，図版第38図，図版第39図1～4，図版第41図9・10）

図版第37図12はA－第6類土器，図版第38図1はA－第1類土器，図版第38図2・4・6～10はA－第2類土器，図版第38図12・13はA－第3類土器，図版第38図14はA－第4類土器である。図版第38図3は器形及び口縁部文様はA－第2類土器と同じであるが，胴は縦引きの沈線にて12区画に割り付けられ，それらの中は綾杉状の沈線で満たされている。図版第38図5は胴が張り出すキャリパー形の器形を呈する他はA－第2類土器と同じである。図版第38図11は4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器であり，波頂部に渦巻文をもち，胴部全面には縄文が施されている。図版第39図1は頸部がくびれ，胴部が張り出す深鉢である。口縁部には透し彫りが施され，渦巻文で飾られた8個の把手がつけられている。把手間は隆起線で結ばれ，隆起線間の楕円形状の空白部分は細い縦引きの沈線で満たされている。胴部全面には地文として複節の縄文が施され，太い2条1組の隆起線で2単位の横S字状渦巻文，9単位の懸垂文等が描かれている。図版第39図2は口縁が外反し，円筒形の胴部をもつ深鉢。口縁部は無文である。胴部文様はA－第2類土器に類似し，縄文地上に縦引きされた3条の沈線で4区画され，それぞれの区画内には沈線で描かれた渦巻文及び懸垂文が配されている。図版第39図3は口唇部に渦巻の施された4単位の小把手をもち，頸部がややくびれ，胴部が丸く張り出す深鉢。口縁部には隆起線にて4単位の渦巻文が描かれ，渦巻文間の空白部には細い縦引きの沈線が施されている。頸部には4条の平行直線がめぐり，そこから胴部へ4単位の渦巻文が垂れている。胴部中央には波頂部に渦巻文が施されている波状文がめぐり，そこから懸垂文が胴部下半へとのびている。なお，頸部・胴部文様の施文には半截竹管が用いられている。図版第39図4は口縁がやや内彎する浅鉢。口縁部には縄文が地文として施され，2条1組の沈線が口縁上部と下部にめぐり，それらの間には沈線で4単位の玉だき三叉文風の文様が描かれている。胴部は無文である。図版第41図9は胴部が張り出すキャリパー形の深鉢のミニチュア，図版第41図10はA－第3類土器のミニチュアと考えられる。

その他の土器（図版第39図5～11，図版第40図，図版第41図1～8）

器形及び文様等に時期決定の明瞭なる特徴を見い出せなかった土器である。図版第39図6は口縁が外反し，1単位の小突起を有する小形の深鉢。口縁部は無文，頸部には2条の半截竹管がめぐり，胴部全面には縄文が施されている。図版第39図7は4単位の波状口縁をもち，円筒形の胴部がつけられている深鉢。器面全体には縄文が施され，口縁部には2条のゆるや

かな連弧状の文様，頸部には3条の平行直線がめぐり，そこから2条の直線文と1条の波状文が1組となった5単位の懸垂文が胴部にのびている。なお，文様は全て半截竹管にて描かれている。図版第39図5は口唇部に2単位の小突起をもつ深鉢。口縁部には押圧痕のある2条の隆帯がめぐり，隆帯間の1部には粘土紐が貼付され，胴部全面には縄文が施されている。図版第39図8は口唇部に4単位の小突起をもち，胴部上半がやや張り出す深鉢。口縁部には2条の断面三角形の隆帯がめぐり，その間に2条の半截竹管文が施されている。頸部には沈線にて一部分が区切られている4条の半截竹管文がめぐり，胴部全面には縄文が施されている。図版第39図9，図版第40図3・4は口唇部に2～4単位の小突起をもち，胴部上半が張り出す深鉢。器面全体に縄文が施されている。図版第39図10，図版第40図1・2は4単位の波状口縁をもつ深鉢であり，器面全体に縄文が施されている。図版第39図11は口唇部に小突起をもち，口縁部が外反し，胴部が張り出す深鉢。口縁部は断面三角形の隆帯が1条めぐる以外無文である。頸部には押圧痕の施された2条の隆帯がめぐり，胴部全面には縄文が施されている。図版第40図5は4単位の波状口縁をもち，円筒形の胴部がつけられている深鉢。波頂部には渦巻文がつけられ，胴部全面には縄文が施されている。図版第40図6・8は頸部がややしまり，キャリパー形を呈する深鉢。6の口縁部には4単位の粘土紐が貼付され，それらの間は1条の沈線で結ばれている。頸部～胴部全面にかけては縦回転の結束縄文が施されている。8は器面全体に縄文が施されている。図版第40図7は平口縁で，胴部がやや張り出す深鉢で，器面全体には縄文が施されている。図版第40図9は口唇部に1条の沈線がめぐり，口縁部が朝顔状にひらく小形の深鉢で，口縁部は無文，胴部全面には縄文が施されている。図版第40図10は口縁に無文帯を持つ他は全面に縄文が施されている浅鉢。図版第40図11，図版第41図1・4は口縁が内彎し，底部が盤状に厚くなる浅鉢。11は口縁部に2単位（？）の小突起をもち，突起間には「レ」状の列点の竹管文が施され，胴部全面には縄文が施文されている。1は口唇部に3個の小突起をもつ土器。口縁部には刻み目が施された隆起線により楕円形状の区画がなされ，その区画内には隆起線に沿って竹管が押し引きされている。胴部は無文で丁寧に整形されている。4は無文地の口縁に沈線で4単位の渦巻文状の文様が描かれている土器で，胴部全面には縄文が施されている。図版第41図2・3・5～8は深鉢（2・3・5・6・8），台付土器（7）のミニチュアである。2は口縁に2条の沈線がめぐり，胴部全面に縄文が施されている。3は有孔鍔付土器に似た器形で口縁部に9個の孔が穿かれている。5は口唇部に2単位の把手（a＋b＋a＋b）をもち，器面全体に沈線がめぐらされている土器。口縁部付近の沈線間には縦引きの刻み目，底部付近には3本1組6単位の縦引きの沈線が施されており，内面及び把手付近には朱が塗布されている。6は外反する無文の口縁をもつ土器で，胴部には半截竹管にて直線文，曲線文等が描かれている。7は無文の杯形台付土器，8は器面全体に細い沈線が縦引きされている。（寺崎裕助）

（5）第2土器捨て場出土の土器（図版第41図11～17）

11はII－A－第1類土器，12・13はIII－A－第1類土器である。14はII－A－第1類土器など隆起線及び半隆起線で器面全体が飾られる土器の胴部と考えられる。15は口唇部に2単位の小突起をもつ小形の台付土器と推測される。口縁部には2単位の橋状把手がつけられ，その間には交互刺突の施された1条の粘土紐が貼付され，その下には沈線で楕円形状の区画がなされている。胴部は無文である。16は口縁部が無文，胴部全面には縄文が施されている深鉢のミニチュアである。17は口縁が外反し胴部が若干張り出す小形の深鉢で，底状に内彎する口唇部には撚糸圧痕，胴部全面には縄文が施されている。

（寺崎裕助）

（6）その他の遺物

○土偶（図版第22図1～33）　遺構及びグリッドからかなりの数の土偶が発見されており，特に土器捨て場からの出土が目立っていた。しかし埋納施設をもつなど特異な出土例はなく，全てが廃棄されたと思われる出土状態を示していた。完形及び完形に近い形で出土したものは皆無で手・足・顔・胴などバラバラの状態で発見された。顔は9～12に認められるように円形又は逆三角形を呈し，目の下には2～3条の沈線もしくは竹管の押し引きで入れ墨等を想起させる直線文が施されているものが主体を占めていたが，8・13のような皿形状の頭部[註2]をもつものも数点認められた。手は3・5のように剝先文が描かれているものもみられるが，胴に比べて小さく，簡略化され，いづれも上向きにつけられていた。胴は板状を呈するものが多く，胸及び腰が強調され，脚が省略されているものがほとんどを占めており，7のように脚がはっきりしているものはまれであった。

○大珠（図版第30図1・2）　硬玉製の大珠がGピットの基底部より2点出土している。1は長さ約10cm，最大幅約4cmを測り，蛭節形を呈している。全面はよく研磨され，光沢を帯びている。直径約1.5cmの孔が中央よりやや上部に認められるヒビを中央にはさむように2ヵ所に穿かれている。2は長さ約6cm，最大幅約3cmを測り，洋梨形を呈している。三面に面取りされているが風化痕なども見受けられ，1ほど丁寧に整形はなされていなかった。中央部よりやや上には直径約1cm，断面逆三角形状を呈する孔が穿かれていた。（寺崎裕助）

註1．寺村光晴他「栃倉」栃尾市教育委員会　1960年

註2．三条商業高校社会科クラブ考古班「吉野屋遺跡」　1974年

2．縄文後期の遺物

本遺跡の後期集落地域からは，前葉の三十稲場式，中葉の三仏生式，後葉の称名寺式土器群に比定される土器が出土している。これらの土器は，器形・文様などからいくつかのタイプに分類される。しかし，この分類は完形土器を中心としており，全出土土器にあたったわけではなく，暫定的に分類したにすぎないことを付け加えておきたい。ここではまず，分類の基準について述べ，次に各遺構出土，その他グリッド等出土の土器についてふれていくことにした。なお，器面全体にわたって縄文などが施されているいわゆる粗製土器は，この分類には入れず，「粗製土器」として別にあつかった。また，所属時期の明確でない土器は「その他の土器」として分類した。

その他，石器・土製品等の遺物で遺構本文中に取りあげたもの以外は（6）で説明した。

○前葉の土器

第1類　口縁に沿って沈線文や刻目文あるいは同心円文等の文様を施す，いわゆる「縁帯文」の土器である。器形や胴部文様により細分した。

A．頸部がくびれ，胴部が張る深鉢形を呈し，胴部文様が垂線や斜線で，モチーフを構成しているものを第1類Aとした。

B．Bは胴部文様に肋骨文風のモチーフが描かれているもので，楕円や弧線などで構成している。器形は破片しか出土していないため，深鉢形を呈する他に詳細は不明である。

C．胴部文様に沈線で三角枠を基本としたモチーフを構成しているものを第1類Cとした。器形は第1類Aに近い深鉢形であろうか。

D．A～C以外の胴部文様をもつ縁帯文の土器を第1類Dとした。

第2類　刺突文が施された土器で，後期前葉の三十稲場式を代表する土器である。器形の変化により2種類に細分した。

A．橋状把手をもつ深鉢形土器で，頸部がくびれ，胴の最大直径が上部にあり，把手と把手を結ぶように，1本の隆帯が頸部をめぐっている。

B．平口縁で，頸部にくびれなどのないものを第2類Bとした。

第3類　第2類Aの橋状把手が平面的になり，「8」字や「S」あるいは「ノ」字状などの隆起線が4単位につけられている。口縁は隆起線の位置が波頂部になる波状口縁が多い。胴部文様は刺突文以外のものがつけられており，縄文がほとんどである。

第4類　渦巻文と三角文とを組合されたモチーフが沈線で描き出されているもので，器形により2種類に細分した。

A．頸部から大きく口縁が外反する鉢形土器をAとした。文様は胴部にあり，口縁は無文となっているものが多い。

B．Bは底部から直線的に立ちあがる深鉢形を呈する土器である。

第5類　指頭圧痕文もしくは縦長の刻目文が口縁をめぐる深鉢形土器で，波状口縁もある。胴部は無文あるいは縄文が施されていることが多い。

第6類　沈線で菱形文をモチーフとする深鉢形土器で，出土量は少ない。

第7類　胴上半部に文様をもつ鉢形土器である。第4類Aの鉢形よりは小形品である。

第8類　頸部が若干くびれる深鉢形土器で，胴上半部に渦巻文を横につなげている。

第9類　胴部が球形にふくらみ，口縁がすぼまる深鉢形土器で，胴の最大径より上位に文様を描いている。

第10類　注口土器を第10類とした。出土量は少なく，細分はしなかった。

第11類　第11類は蓋形土器のグループで，おそらく橋状把手あるいはそれが変化した第2類Aや第3類の深鉢形土器と組合わされるものであろうか。

○中葉の土器

第1類　底部から口縁にかけて開きながら立ちあがる深鉢形土器で，内面に平行沈線文などを施しているものを第1類とした。外面の文様により細分した。

A．Aは弧線等でつながった平行沈線文か，帯縄文を施しているもの。

B．横位の条線文を胴部に施しているものを第1類Bとした。

C．口唇部の内外面に刻目文をめぐらし，口縁が無文となっているものをこの仲間とした。

第2類　内面に文様がなく，外面に平行沈線文などが施された深鉢形土器で，頸部が若干くびれている土器もある。

第3類　頸部から口縁が大きく開く深鉢形土器で，胴部に帯縄文がみられるものを第3類とした。

第4類　深鉢形土器で，帯縄文が施されているものを第4類としたが，器形・文様等の詳細は不明である。

第5類　外面に平行沈線文を主体とした文様を描く鉢形土器の仲間である。

第6類　口縁内面に平行沈線文等を施した浅鉢形土器を第6類とした。外面に文様をもつか否かで，A・Bに細分した。

A．外面に平行沈線文等の文様を描き出している浅鉢形土器である。

B．外面が無文となっているものを第6類Bとした。

第7類　胴部がソロバン玉状を呈する壺形土器を第7類とした。壺形土器は文様によって細分されようが，出土量が少なく第7類として一括してあつかった。

第8類　注口土器を第8類とした。注口土器も出土量が少なく，細分はしなかった。

○後葉の土器

第1類　磨消縄文による入組文を構成している深鉢形土器を第1類とした。口縁の文様は口縁に沿って一定幅の縄文が残されていることが多い。磨消縄文の区画線のちがいにより，

2種類に分類した。

A．沈線で磨消縄文を区画したもの。

B．刻目のある平行沈線で区画しているものをBとした。

第2類　口縁が外反する深鉢形土器で，頸部に刻目文をめぐらすものを第2類とした。この第2類土器の詳しい器形や文様は不明である。

第3類　縄文を入組文風に磨消した文様をもつ浅鉢形土器を第3類とした。

第4類　入組文がみられる壺形土器を第4類とした。入組文は胴部に描き出されており，頸部から口縁にかけては横方向の磨消縄文が施されていることが多い。

第5類　注口土器を第5類とした。文様により次の2種類に細分した。

A．磨消縄文で入組文を施したものを第5類Aとした。

B．第5類Bは細隆線が施されているものである。

A・Bいずれも，胴部に主体的な文様が描かれており，口縁は第4類の壺形土器と同じく横方向の文様がみられる。

（1）住居跡出土の土器

前に見てきたように本遺跡で検出された住居跡は覆土が10cm内外と浅く，又は覆土が確認されない住居跡が多い。このため，その住居を使用していた時期のものとそれ以外の土器が明らかに入りまじっている可能性が高く，現実に混在して取りあげられたものがある。これは遺物の取りあげ方などに問題があると指摘されよう。しかし，限られた中で遺物を多く紹介したいこともあり，あえて遺物の袋詰めにしたがい，説明することにした。なお，住居跡以外の遺構——LピットやGピットなどでも明らかに混在している例がある。これはピットが複合していることなどから，誤って取りあげたものと思われる。

○第2号住居跡出土の土器（第91図）

前葉の土器（第91図8・15～19）

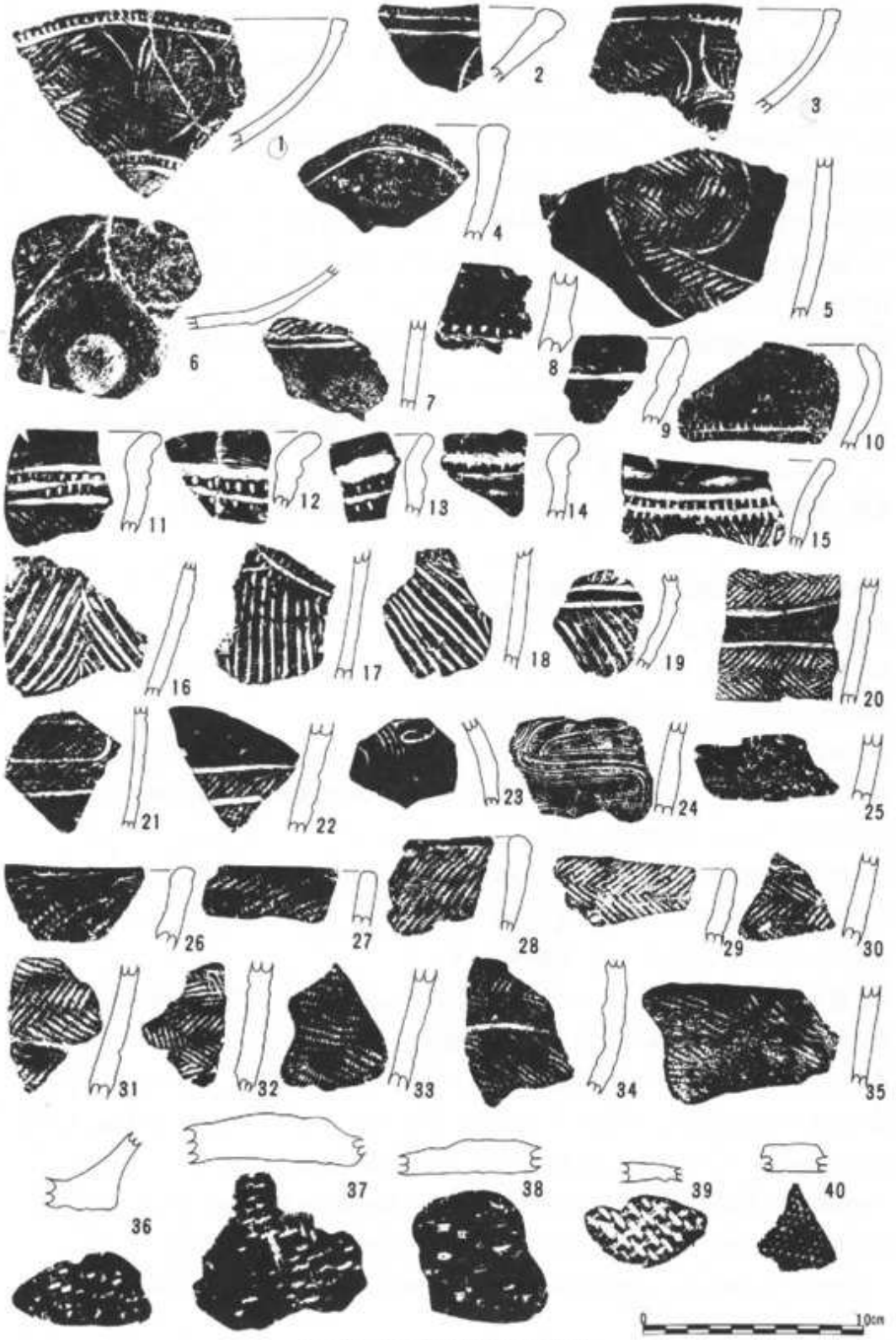
第1類A（第91図15～19）　15は波状口縁によって，横長の凹みがと切れながらもめぐっており，縁帯文系の土器かと思われる。また，15～18は口縁と胴部との文様区画は，刻目をもつ半截竹管文によっている。

第3類（第91図8）　列点文を加えた隆帯が頸部にまわり，胴部にかすかに縄文がみられるところから第3類とした。

中葉の土器（第91図20～23）

第4類（第91図20～22）　20は羽状縄文の帯縄文で，21は弧線で平行沈線をつないでいる。

第7類（第91図23）　小破片で，全体の器形は不明だが，おそらく，壺形土器の胴上半部の破片であろう。細い沈線で円や弧文を描き出している。



第91図　住居跡出土土器(後期)

後葉の土器（第91図1～7・11～14）

第1類A（第91図4・5・7）　4は波状口縁の破片で，口縁に沿って施された沈線と口唇部との間に縄文が施されている。5は羽状縄文の地文に入組文を描き出している。

第2類（第91図11～14）　頸部のくびれ部に2条の刻目が加えられた半截竹管文がめぐり，無文の口縁と縄文の胴部とを区画している。

第3類（第91図1～3・6）　同一個体かと思われる。口縁がやや内彎しながら立ちあがり，底部は小さい凹底を呈している。入組文は口縁と胴下半をめぐる刻目文によって区画された中に描き出されている。羽状縄文を地文としている。

その他の土器（第91図9・10）　10は内彎する口縁を持つ土器で，頸部をめぐる沈線に上下から交互に刻目を加えている。9・10ともに所属時期は明らかではない。

粗製土器（第91図24～35）　24は曲りくねった条線文を施し，25は条線を縦横に引いている。他は縄文が施文された土器で，26は口縁に無文帯がある。

底部（第91図36～40）　網代痕のある底部をあつめた。40の網代は細かい。

○第3号住居跡出土の土器（図版第42図1・2　第92図1～29）

前葉の土器（第92図8～11・15）

第1類B（第92図8・9）　弧線で肋骨文をえがくであろうと思われるところからこの仲間に入れたが，小破片のため根拠は不安定である。

第1類C（第92図11）　三角形状に沈線で文様を構成している。地は無文である。

第1類D（第92図10）　逆「く」の字状に内傾する器形は縁帯文系の第1類の口縁によく見られるところからこの仲間に入れた。

第3類（第92図15）　頸部の隆帯は指頭押圧が加えられ，胴部文様は撚糸文である。

中葉第4類（第92図1・4）　1は波状口縁の土器で，帯縄文を沈線でつないでいる。

後葉の土器（図版第42図1・2　第92図2・3・6）

第1類A（第92図3・6）　6は頸部のくびれ部に沈線がめぐる深鉢形土器である。

第3類（第92図2）　口縁に沿って2条の刻目文がめぐっている。

第5類B（図版第42図1）　器面全体に朱が塗られた小形品である。胴部は球形を呈し，底部は小さな凹底となっている。胴の最大径の位置に注口と瘤がつけられ，口唇部にも4単位の突起がついている。文様は浮彫的手法による細隆線で構成されている。

図版第42図2は胴下半以下が残存する土器で，底部が高台となり，胴に窓があいていた。おそらく壺形に近い器形かと思われる。窓及び高台に刻目文が施されている。

第92図7は口縁に沿って刻目文の列がめぐっており，第2類に近いものと思われる。

第92図　住居跡出土土器(後期)

その他の土器（第92図5・12～14）　5は隆帯がめぐっており，断面の観察から注口土器の頸部付近の破片であろうか。12～13は沈線で無文帯と縄文（12）や条線文（13）を区画している土器で，14は縄文地に沈線がみられる土器である。

粗製土器（第92図16～28）　26はやや内彎する口縁の深鉢形土器と思われ，口縁部に横走する条線文が施されている。

底部（第92図29）　細かい編み方の網代が底面にみられる。

○第9号住居跡出土の土器（第92図30～50，第93図）

前葉の土器（第92図30～42・44～50，第93図11～13）

第1類A（第92図37・38・45～48・50）　胴部文様はいずれも縄文を地文としており，37は内傾する口縁に沈線がめぐっている。

第1類B（第92図39～42）　無文地上に弧線で肋骨文を描き出しているものと思われる。

第2類（第93図11～13）　刺突文の胴部破片である。

第3類（第92図33～36）　33は口縁と頸部の刻目の入った隆帯を結ぶように「ノ」字状の隆起線がはりつけられている。34の頸部の隆帯はメガネ状で，刻目が加えられている。

第4類A（第92図44・49）　縄文を施した上に，三角形状のモチーフをえがいている。

第5類（第92図30～32）　32は指頭圧痕文列の下に縦長の刻目文が施され，指頭圧痕文とともに口縁をめぐるものと思われる。

中葉の土器（第93図1～10・15）

第2類土器（第93図1）　1は波頂部に1条の沈線を入れて，口縁をめぐる沈線とともに三角形を作り出している。

第4類（第93図2～10・15）　6を除き地文は羽状縄文である。2は波状口縁である。

後葉の土器（第92図43）　山形口縁部の破片で，羽状縄文の上に沈線で円弧をえがいている。磨消縄文ではないが，入組文をえがくものと思われるところから後葉の土器とした。

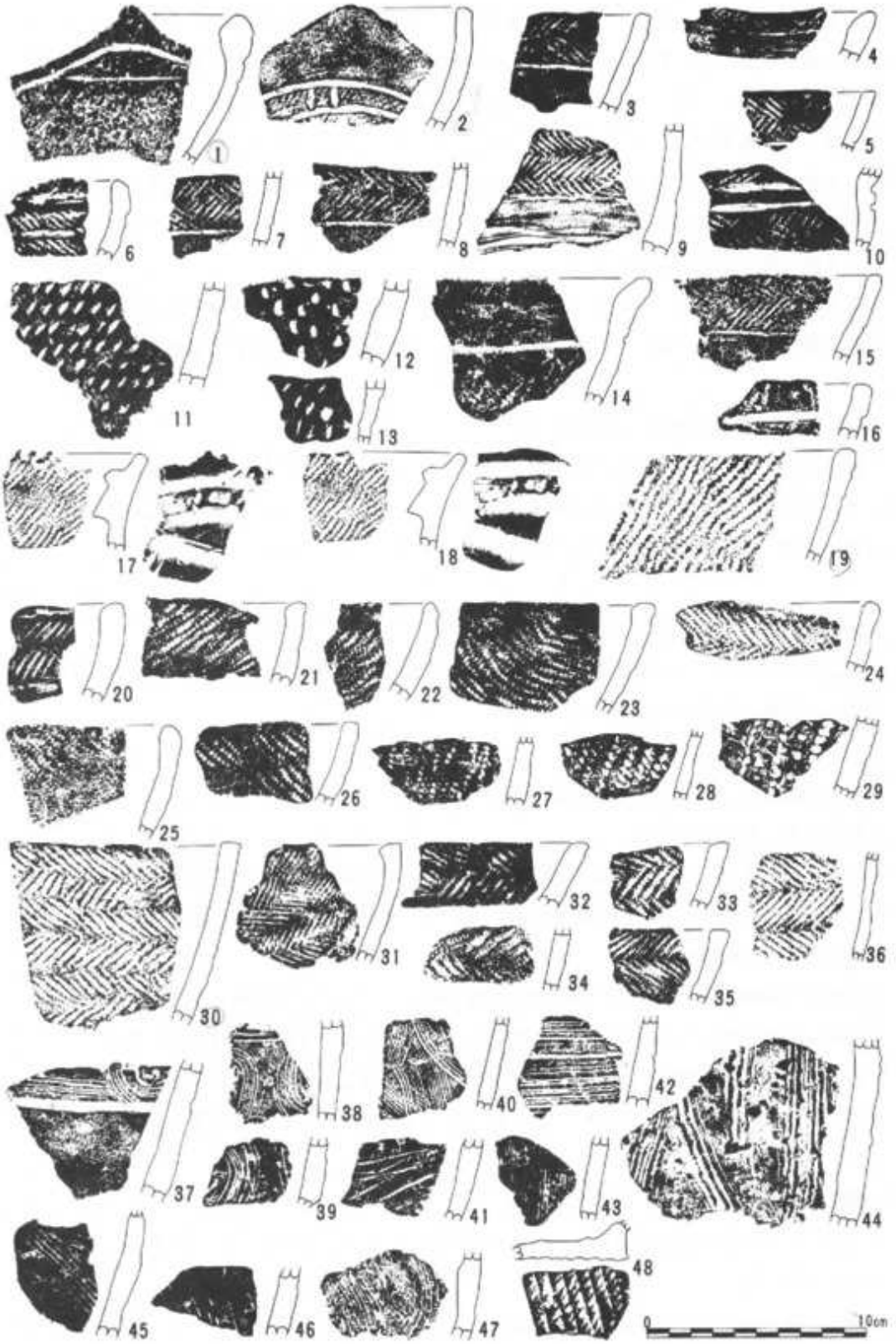
その他の土器（第93図14・16～18）　14・16は口縁と平行に沈線がめぐっている。17・18は内面に刻目のある隆帯をめぐらしている。17の口縁は鋸歯状になっていた。17・18は中葉の土器であろうか。

粗製土器（第93図19～47）　24・30～36は羽状縄文，37～47は条線文，他は縄文の深鉢形土器である。37は沈線で文様帯が区画され，粗製土器の仲間からはずれるかもしれない。

底部（第93図48）　一般的な網代とは異なる編物の痕跡がみられる。

○第10号住居跡出土の土器（図版第42図3　第94図1～20）

後葉の土器（図版第42図3　第94図1～13）



第93図　住居跡出土土器(後期)

第1類A（第94図3～9）　羽状縄文を地とした入組文土器の胴部破片である。
第1類B（第94図11～13）　いずれも磨消面はよく研磨され，残った面は浮彫風である。
第3類（第94図1・2）　2は大きな突起がついた口縁部破片である。
第5類A（図版第42図3）　頸のすぼまりが顕著でなく，口縁の直径は胴径に比して大きい。底部は丸底で，小さな凹底である。胴部文様は羽状縄文を地とした入組文が胴下半の沈線と頸部とに区画された中に，注口も含めた4単位の瘤を中心として施されている。口唇部には2個一対の突起がみられる。
第5類B（第94図10）　注口土器の口頸部破片であろう。細隆線は浮彫手法である。
粗製土器（第94図14～20）　14～16は条線文，20は撚糸文が施された胴部破片。

○第17号住居跡出土の土器（第94図21～25）

21は口縁部破片で，無文地に沈線でもって文様を描いている。22～25は無節の縄文を地として，沈線文を施している深鉢形土器の胴部破片である。いずれも全体的な意匠がつかめず，後期の土器という以外に詳細な編年的位置づけができなかった。

○第29号住居跡出土の土器（第94図26・27）

26は口縁に沿って内外面に1条の隆線がある土器で，おそらく，中葉の土器と思われるが積極的に位置づけることは困難である。

○第32号住居跡出土の土器（第94図28～37）

前葉の土器（第94図31・32）
第2類（第94図32）　刺突文の胴部破片で，A・Bいずれかは不明である。
第3類（第94図31）　頸部の隆帯は列点文が加えられ，胴部は縄文が施されている。
後葉の土器（第94図28～30）
第1類A（第94図29・30）　29は波状口縁の破片。いずれも羽状縄文が施されている。
第3類（第94図28）　口唇部がやや肥大している。口縁に2条の刻目文がある。
その他の土器（第94図34）　1条の沈線で無文の口縁と斜沈線の胴部を区画している。
粗製土器（第94図33・35～37）　37の縄文は撚りの細かい短い原体を使っている。

○第33号住居跡出土の土器（第94図38～49）

浅学にして，第33号住居跡出土土器の時期分類ができず，分類にとらわれることなく説明することにした。

38は口縁が大きく外反する深鉢形土器で，くびれ部に数条の沈線がめぐり，胴部に縦方向

第94図　住居跡出土土器(後期)

の沈線がみえる。39・40は38の胴部破片であろう。

43～46は縄文地に沈線で文様を描いているが，全体のモチーフは把握できない。

41・42は数条の刻目文が施されている深鉢形土器である。

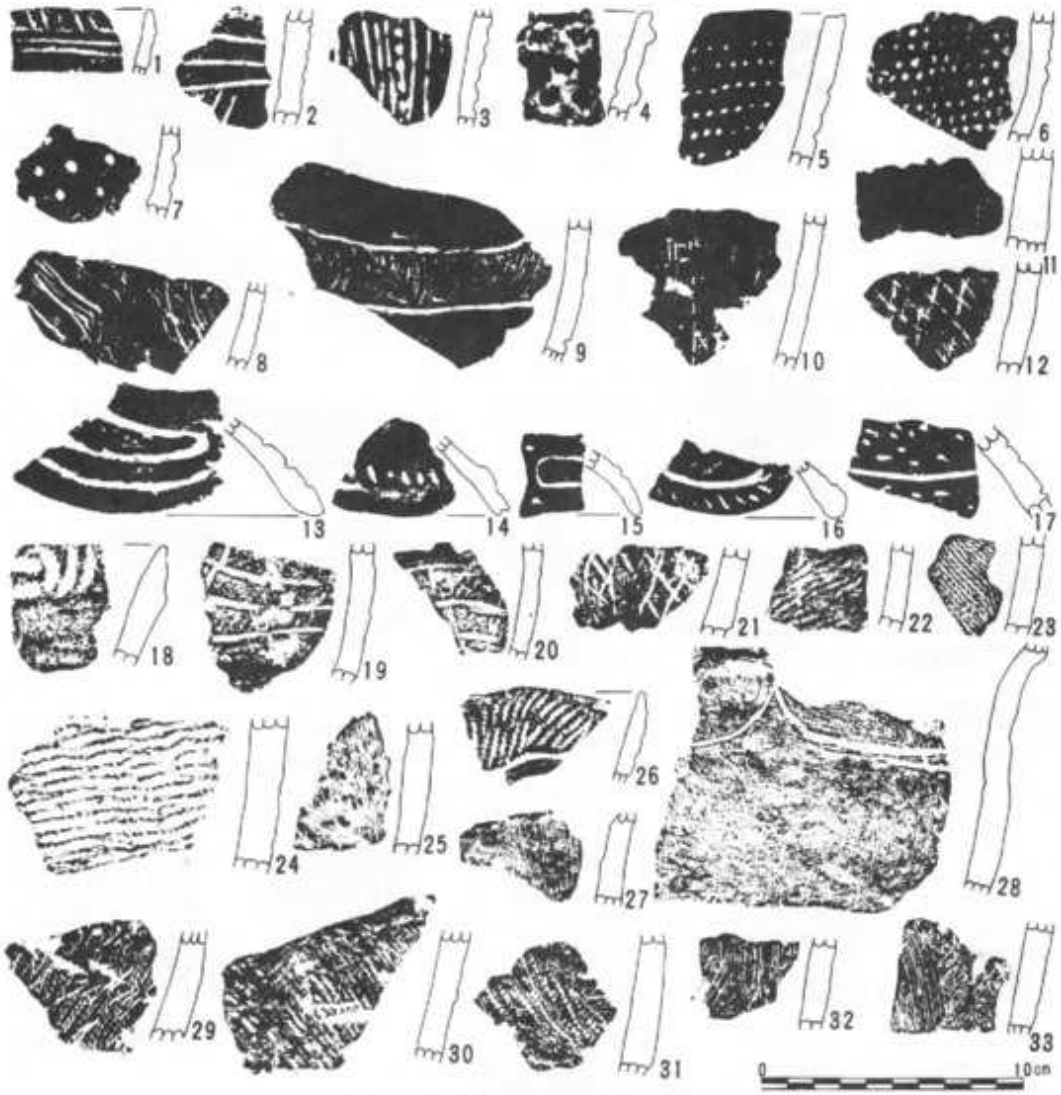
47～49は条線（47・48）縄文（49）が施された粗製土器である。

○第34号住居跡出土の土器（第95図1～17）

前葉の土器（第95図1～7・13～17）

第1類A（第95図1～3）　3は沈線間に刺突の点列が1条垂下している。

第2類B（第95図4～7）　4の刺突文は，粘土粒をはりつけた突瘤文土器である。



第95図　住居跡出土土器（後期）

第11類（第95図13～17）　14は刻目の隆帯で，他は沈線で口縁と天井とを区画している。
その他の土器（第95図９）　２条の沈線間に条線を楕円状に施文した深鉢形土器である。
粗製土器（第95図８・10～12）　11は細い撚糸文を，12は格子目状の撚糸を施している。

○第48号住居跡出土の土器（第95図18～23）

前葉の土器（第95図18～20）
第１類Ａ（第95図18）　口縁に同心円状の弧線と横の沈線を施している。
第１類Ｄ（第95図19・20）　縄文地上に沈線文がみられる。モチーフは不明である。
粗製土器（第95図21～23）　いずれも胴部破片で，21は格子目状撚糸が施文されている。

○第94号住居跡出土の土器（図版第42図４）

前葉第１類Ａ　炉中で倒立した状態で出土した。赤味をおびており，第２次焼成を受けたと思われる。胴下半の内外面にススが付着していた。４単位の「８」字状の突起をもつ波状口縁を呈している。文様は刺突文を地文として，頸部のくびれに横位の沈線を引き，文様帯を区画している。頸部は斜と縦方向に数条の沈線を交互に引き，胴部は垂線を軸として「８」字状の沈線を１ヵ所おきの垂線にからめて構成している。

○第182号住居跡出土の土器（第95図24－33）

住居跡を構成すると思われる柱穴から出土した土器である。28が無文地に沈線文を描いていることや，26に沈線がみられる他は，縄文や条線文の土器ばかりである。このため，時期決定をくだす良好な資料がなく，後期の土器とだけ位置づけておく。（駒形敏朗）

（２）Ｌピット出土の土器

○９Ｐ－Ｌ63出土の土器（図版第42図５）

前葉第10類　胴部がソロバン玉状を呈し，２ヵ所に波頂部をもつ低い口縁で，注口の孔が波頂部直下にある注口土器である。波頂部の位置にあたる胴部には小さな橋状把手がついている。文様は胴上半部に横Ｓ字状に粘土紐をはり，空白部に沈線を埋めて構成している。

○６Ｋ－Ｌ７出土の土器（図版第42図６）

粗製土器　底面に網代痕がみられる深鉢形土器で，器面全体にわたり，附加条縄文が施文されている。附加条縄文の原体はＲＬ＋ｒと思われる。

○6K－L45出土の土器（図版第42図7　第96図1）

中葉第7類（図版第42図7）　やや長目のソロバン玉状を呈する注口土器で，注口部の上とそれの反対側につり手，もしくは突起等の剥落した痕跡がみられる。底部は網代痕がついたあげ底である。また，剥落痕跡の中間位置に「8」字状にひねった粘土紐がはりつけられていた。文様は胴部の最大径と口縁の平行沈線で区画された中に，注口・粘土紐・剥落痕跡にからめた「8」字状の沈線を施している。

粗製土器（第96図1）　小波状口縁を呈し，縄文が全面に施された深鉢形土器である。

○7I－L1出土の土器（第96図2～10）

前葉の土器（第96図2・3・7・8）

第1類（第96図3）　口唇部を欠き，刻目文がめぐる口縁部破片である。

第2類B（第96図2）　右から突き刺した平口縁の破片である。

第4類B（第96図7・8）　縄文を地文として三角形状のモチーフを沈線で描き出しており，8は波状口縁を呈している。

中葉の土器（第96図9）　第7類の壺か第8類の注口土器の胴上半部の破片であろう。器面はよく研磨され，7条一組の沈線で文様を描いている。

その他の土器（第96図4・5）　4は口縁に沿って2条の沈線がめぐる土器，5は沈線文と刻目文がみられる。

粗製土器（第96図6）「8」字状に条線文を施した平口縁の深鉢形土器である。

底部（第96図10）　網代痕のある平底。

○7J－L3出土の土器（第96図11～23）

前葉の土器（第96図11～13・15・18・20～23）

第1類A（第96図15・20～22）　15・20・22は縄文を，21は無文を地文としている。

第2類（第96図23）　胴部破片でA・Bの区別がつかない。

第4類B（第96図18）　縄文を地として渦巻文と三角文を組合せている。

第5類（第96図11－13）　13は縄文地上を指頭圧痕文及び沈線文が施文されている。

その他の土器（第96図16・19）　16は縄文地に2条の沈線を口縁にめぐらす深鉢形土器の口縁部破片である。19は沈線に囲まれた中に条線を楕円状に施した胴部破片である。

無文土器（第96図17）　小波状口縁の土器である。よく研磨されている。

粗製土器（第96図14）　無文帯をもつ小波状口縁の土器である。

第96図　Lピット出土土器(後期)

○7J－L5出土の土器（第96図24～37）

前葉の土器（第96図24・25）

第2類A（第96図25）　胴部の刺突文は整然と，かつ，密に突き刺している。

第4類B（第96図24）　くびれ部に2条の押圧を加えた隆帯がめぐり，円形の貼付文を中心として縄文の上を太い沈線で文様を描き出している。

中葉の土器（第96図26～35）

第1類A（第96図31）　内面の沈線断面が丸味をおび，深く引かれていた。

第1類B（第96図29・30・32～34）　平口縁で，30の内面には口唇部直下に円文が施されていた。32～34は胴部破片である。

第1類C（第96図26～28）　内面の平行沈線間に，列点文が施されていた。

第1類の土器はいずれも薄手のつくりで，ススの付着がみられるものが多かった。

中葉その他の土器（第96図35）　曲がりくねったモチーフの磨消縄文が施されている。

粗製土器（第96図36・37）　36は口縁が外反する深鉢形土器である。

○7J－L8出土の土器（第97図1～10）

前葉の土器（第97図1・3～7）

第1類A（第97図3・4・7）　3は垂下する沈線間に刺突の点列がみられる。

第1類B（第97図5・6）　いずれも無文を地としてモチーフを描き出している。

第3類（第97図1）　波状口縁を呈し，波頂部から点列のある粘土紐をはりつけている。

その他の土器（第97図2・8・9）　2は太い沈線が口縁をめぐっている。8・9は中葉第1類Bの外面にみられる条線文が施された土器であるが，内面に文様をもたない。

粗製土器（第97図10）　円弧を描くように条線文が施されている。

○8I－L1出土の土器（図版第42図9～11　第97図11～45，第98図）

前葉の土器（第97図11～21・23～27）

第1類A（第97図13・16・17・20・21・24～26）　16は内傾する口縁に波頂部を中心として，列点文などが施されている。20の口縁は渦巻文と同心円文が施されている。

第1類B（第97図23・27）　いずれも弧線で肋骨文を構成している。23は口縁の沈線で段をつくり出している。

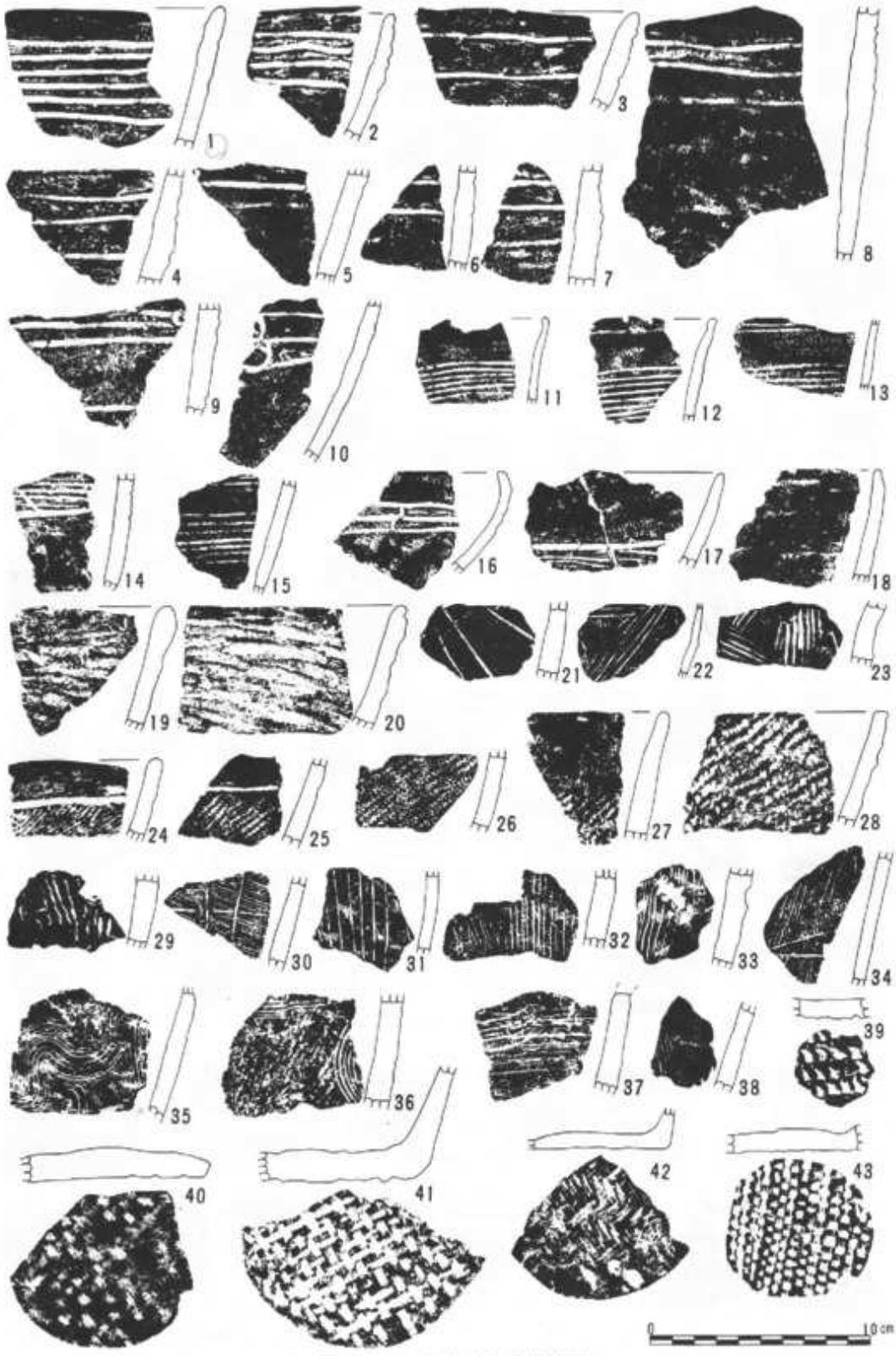
第2類（第97図11・12）　12は細かくつき刺した刺突文の胴部破片である。

第3類（第97図18・19）　メガネ状の隆帯がめぐり，胴部に撚糸文を施している。

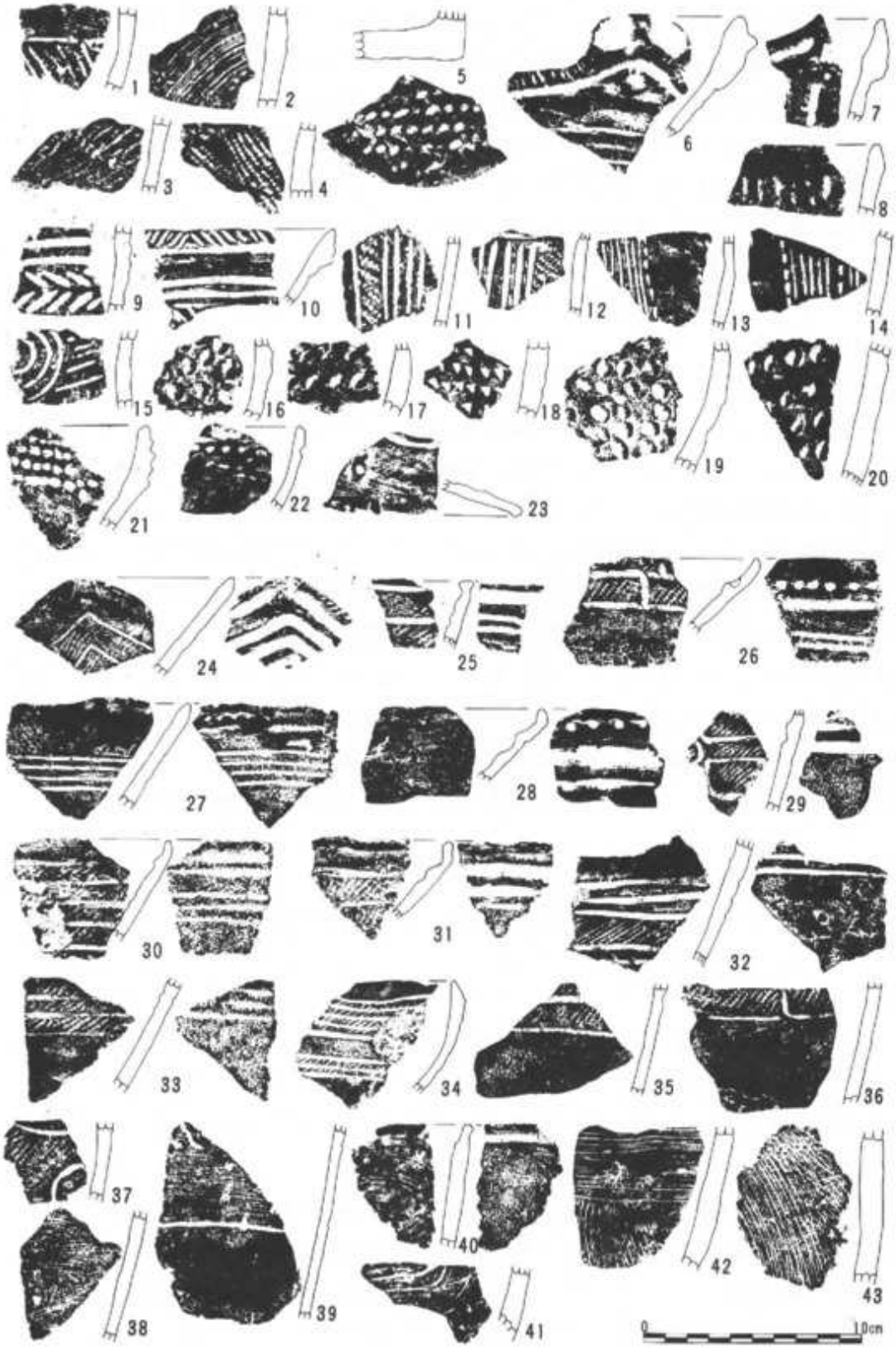
第5類（第97図14・15）　14は左下り，15は右下りの刻目文が口縁をめぐる。

中葉の土器（図版第42図9～11　第97図22・28～45，第98図1～17）

第97図　Lピット出土土器(後期)



第98図　Lピット出土土器(後期)



第99図　Lピット出土土器(後期)

第1類A（第97図28～33・41・42）　28～33は弧線でつながれた帯縄文を外面に施している。41・42は無文を地として，外面に平行沈線文を，41は内面に刻目文をめぐらしている。
第1類B（第97図43）　外面の文様は条線を横S字状に施している。
第2類（第98図1～15・17）　平口縁の深鉢形土器で9・10は「8」字状の弧線で平行沈線文が結ばれている。11～15・17の平行沈線文の間隔は1～10に比して狭い。
第5類（第98図16）　無文地に弧線連結の平行沈線文を施し，口縁がやや内彎する。
第6類A（第97図34～36）　いずれも外面に縄文を地とした弧線連結の平行沈線文が施されている。35・36は内面の列点が口縁を回っている。35は口縁に四角の切り込みが入り山形口縁を呈している。
第6類B（第97図37～40）　内面にいずれも列点文をめぐらし，37・38は渦巻文がみられる。第97図44・45は小破片で，器形の推測はむずかしいが，内面に縄文地に平行沈線文を施しているなどの文様構成から，この仲間の浅鉢形土器と思われる。
有孔土器（図版第42図9）　胴部がややふくらむ筒形の胴最下端に孔のあく土器である。胴部文様は曲がりくねった磨消縄文の無文地のところどころに，2重円文が押されている。
無文土器（図版第42図10・11　第98図18～20）　図版第42図10は朝顔状に開く鉢形土器で，口縁にススの付着がみられる。図版第42図11はよく研磨された鉢形土器である。
その他の土器（第98図21～25）　21～23は斜行沈線でモチーフを描き出す土器で，特に22は前葉第6類に近似している。24・25は頸部に沈線がめぐっている。
粗製土器（第98図26～38）　35・36は曲線の条線文を施している。
底部（第98図39～43）　39は特異な編物の痕跡で，他は普遍的な網代痕の底面である。

○8Ⅰ－L4出土の土器（第99図1～5）

1～4はいずれも胴部破片で，1は沈線文が，2は条線文が施されており，前葉の土器かと思われる。5は網代痕の底部破片である。

○8Ⅰ－L2出土の土器（図版第42図8　第99図6～43，第100図1～16）

前葉の土器（第99図6～23）
第1類A（第99図6～14）　6は波頂部がつまみあげられたような波状口縁の土器で，波頂部直下に円文がある。12・13は縦に刺突の点列がある。
第1類D（第99図21・22）　口縁に列点文が施された縁帯文系の土器であろう。
第2類（第99図16～20）　いずれも胴部破片でA・Bの区別がつかない。
第4類（第99図15）　沈線でモチーフを描きだしている。A・Bの区分は不明である。
第11類（第99図23）　2条のソーメン貼り状の粘土紐をめぐらし，その粘土紐を結ぶよう

第100図　Lピット出土土器(後期)

に，これも細い粘土紐を「8」字状にはりつけている。口唇部にも粘土粒がついている。

中葉の土器（図版第42図8　第99図24～39）

第1類A（第99図24・25・29・32・33）　いずれも外面は帯縄文が施されている。24は大きく開く波状口縁の土器で，波状にそって内面に刻目文や平行沈線を施している。

第1類B（第99図38・39）　胴部破片で内面の文様は不明だが，一応この仲間にとした。

第4類（第99図35～37）　帯縄文を平行線で区画している胴部破片で，第3類との区分はむずかしい。

第5類（第99図34）　口縁が内彎する鉢形土器で，帯縄文が2段になっている。

第6類A（第99図26・27・30・31）　30・31は外面に帯縄文を施し，口縁が直立する浅鉢形土器である。27は口唇部に列点がみられる。

第6類B（第99図28）　口縁が直立し，内面のくびれ部に列点がめぐっている。

第7類（図版第42図8）　口縁を欠く壺形土器で，胴上半部に磨消縄文を施している。底面に網代痕がついている。

無文土器（第100図5・6）　よく研磨されている。深鉢形を呈するであろうか。

粗製土器（第99図40～43　第100図1～4・7～14）　第99図40は条線で円弧文をえがいている深鉢形土器の口縁部破片で，内面が若干えぐられている。

底部（第100図15・16）　15は16のような網代痕というよりは，ムシロ状の圧痕がみられる底部破片である。

○8J－L1出土の土器（第100図17～21）

中葉第4類（第100図17）　ていねいにつくられた土器で黒光りしていた。

粗製土器（第100図18～21）　21は肉厚の口唇部に3条の沈線文がめぐっている。18・19は条線文の土器で，18は口縁と平行に施している。

○9I－L1出土の土器（第100図22・23）

いずれも縄文が施文された胴部破片にすぎない。

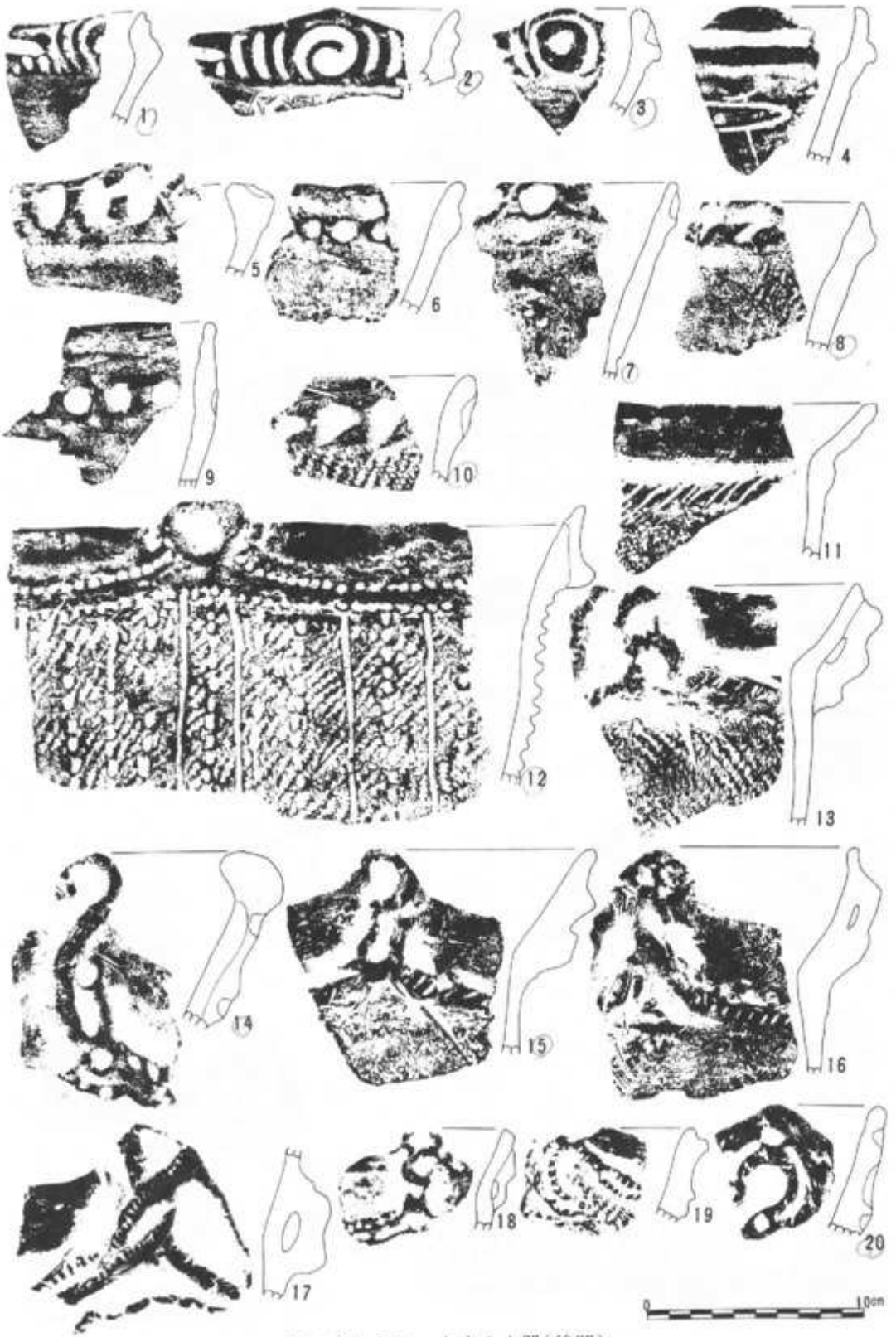
○10M－L1出土の土器（第100図24～31，第101図，第102図）

前葉の土器（第100図24～31　第101図，第102図1～8・36・37）

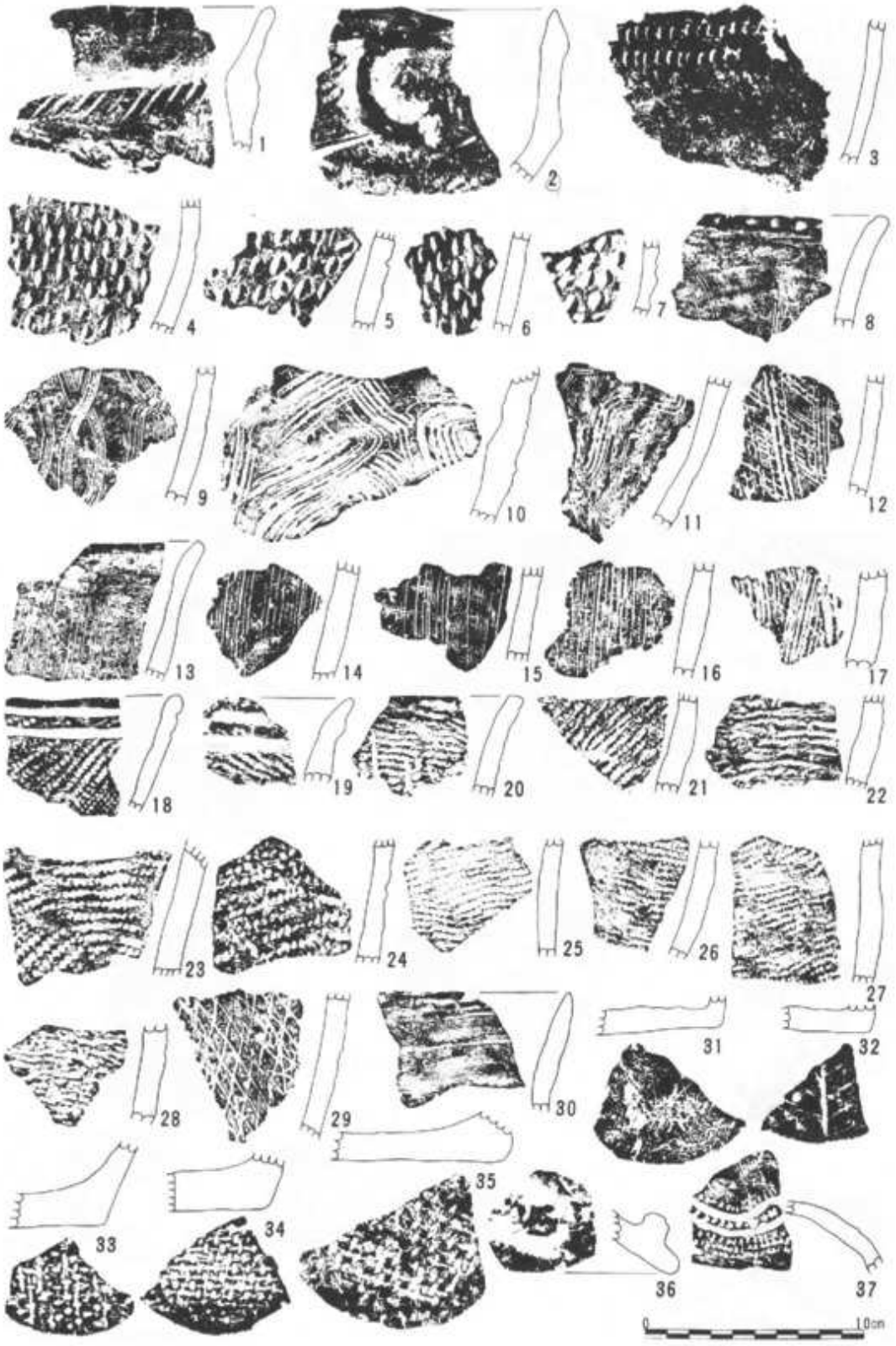
第1類D（第101図1～4）　1～3は同一個体か。同心円状の文様を波頂部を中心に施している。胴部文様が不明のため，Dにした。

第2類（第102図3～7）　3は爪形状の刺突文が施されている。

第3類（第101図11～20，第102図1・2）　いずれも波状口縁の土器で，第101図13－



第101図　Lピット出土土器(後期)



第102図　Lピット出土土器(後期)

第103図　Lピット出土土器(後期)

18は「8」字状の隆起線が，第101図19・20，第102図2は「ノ」字状の隆起線を波頂部にはりつけている。第101図12は波頂部がハート形に押しつけられ，そこから列点文が2条，口縁をめぐり，胴部は縄文の地文上を沈線及び列点文を垂下させている。文様の彫りは深い。

第4類A（第100図24・25・29～31）　2条の沈線を一組として，胴部に文様をえがき出している。24は内傾する口縁に円文と沈線をめぐらしている。31の胴部文様の地文は爪形状の刺突文である。29～31は断面観察から鉢形を呈するものと思われ，この仲間に入れた。

第4類B（第100図26～28）　26・27は文様の中心点を円文におき，2条の沈線で構成している。28は第1類Aに近似しており，あるいはこの第4類Bからはずれるかもしれない。

第5類（第101図5～10，第102図8）　第102図8は指頭というよりは，ヘラ先で口縁を押圧した土器で，胴部に条線文がみられる。

第11類（第102図36・37）　36は突起を中心に刻目の隆帯がめぐる蓋である。37は刺突文の地に2条の沈線を口縁と平行に施文しており，破片ながら蓋の天井部と思われる。

無文土器（第102図30）　深鉢形土器の口縁部破片であろうか。よく研磨されていた。

その他の土器（第102図18・19）　19の沈線は18よりも太く丸味をおびている。

粗製土器（第102図9～17・20～29）　9～17は条線文の土器で，9は「8」字状に条線文を施している。20～28は縄文，29は格子目縄文を施している。

底部（第102図31～35）　31・32は木の葉痕が，33～35は網代痕が底面に付されている。

○10M－L5出土の土器（第103図，第104図）

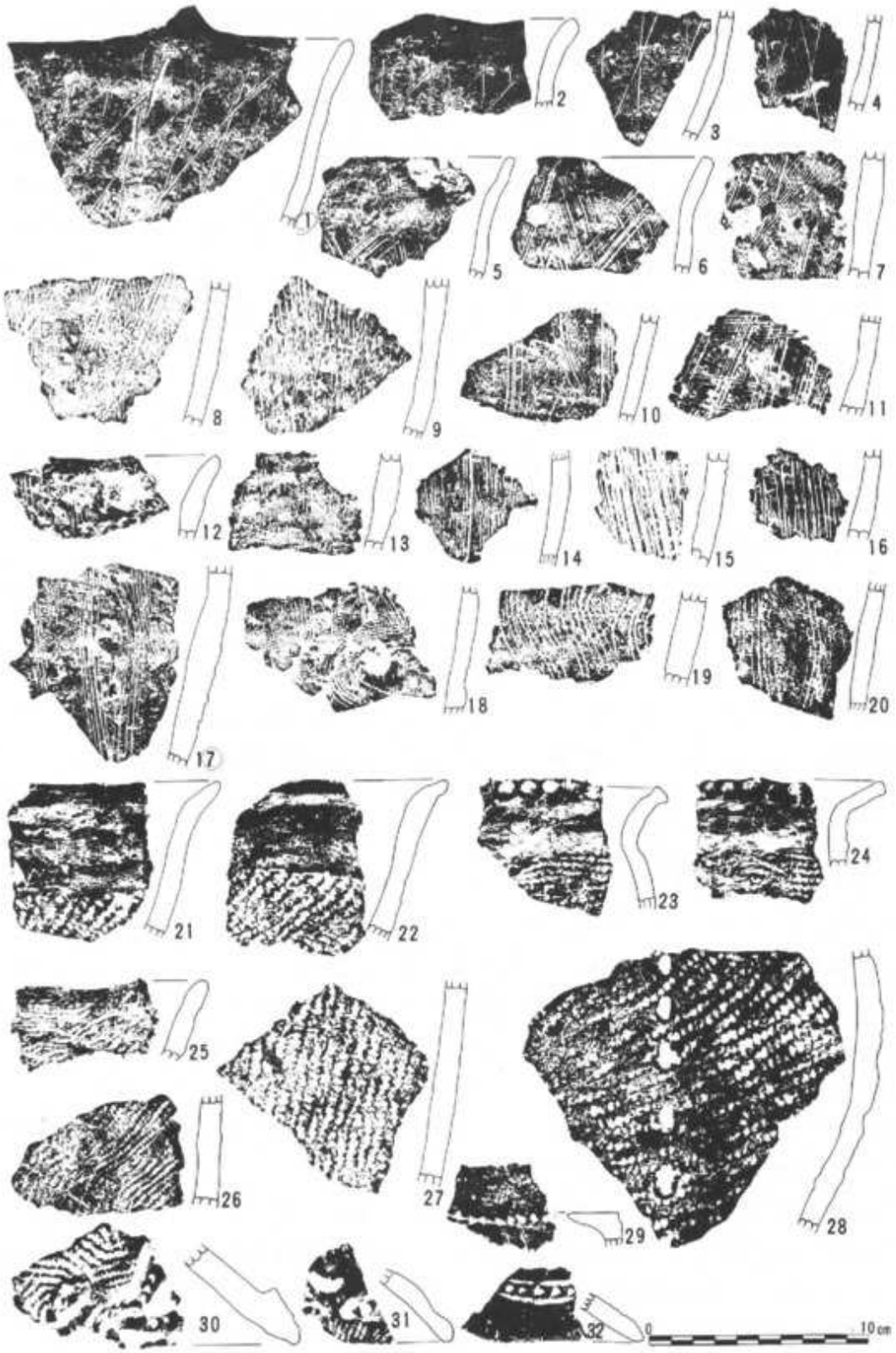
前葉の土器（第103図　第104図1～4・30～32）

第1類（第103図1～3・9）　2は縄文地に「8」字状の沈線を垂線にからめている。1・3は施文方法が2に酷似しており，この仲間に入れた。いずれも胴部破片で積極的に縁帯文系の土器とする決め手はないが，2の文様構成が縁帯文系土器の胴部文様と同じ要素をもつものとしてこの類に入れた。第103図9は口縁に刻目があり頸部の凹線をはさんだ条線文を口頸部と胴部に施しており，縁帯文系土器の仲間であろうかと思われる。

第2類A（第103図14～38）　16の橋状把手は「8」字状に，15は逆S字状にしている。いずれも橋状把手が波頂部となっている小波状口縁の土器である。14の隆帯は15～21の隆帯とは異なってメガネ状を呈している。19は頸部の隆帯から2条の隆帯が垂下している。23～38は胴部もしくは底部破片でA・Bいずれかは不明である。35は底面が外へ張り出している。

第3類（第103図10～13）　10は円形の粘土を口縁部にはりつけている波状口縁の土器である。胴部文様は12が撚糸文の他はいずれも縄文が施されている。

第4類B（第103図8）　肉厚の波状口縁の深鉢形土器で，波頂部の円文を中心として右に円弧文，左に三角枠をえがき出すものと思われ，第4類Bの土器とした。



第104図　Lピット出土土器(後期)

第5類（第103図4～7）　7は波状口縁を呈し，波頂部の指頭圧痕の下に貼瘤がある。
第6類（第104図1～4）　波状口縁の深鉢形土器でススの付着がみられる。
第11類（第104図30～32）　30は天井部に羽状縄文，口縁部に刺突の隆帯がめぐる。
その他の土器（第104図21～24・29）　21・22は口縁部が無文で，口縁部先端だけが外反する深鉢形土器である。23・24は口縁が強く外反し，口唇部に列点文がつけられている。29は口縁が直角に内側へ折れ，肩に列点文がみられる土器である。23・24・29は列点文がみられるところから前葉第5類に近い文様構成である。
粗製土器（第104図5～20・25～28）　5～20は条線文の土器で，5～8・11は第6類のような菱形のモチーフをえがきだしている。6は孔が口縁部にあけられている。25～28は縄文が施された土器で，28は列点文が垂下している。

○10N－L3出土の土器（第105図1～20）
前葉の土器（第105図1～9）
第1類A（第105図1～6）　1は波頂部に楕円形の窓があいている。
第1類B（第105図7・8）　7は縄文を地文とし，8は無文上に弧状の沈線を引いて肋骨文風のモチーフを描き出している。
第2類（第105図9）　胴部破片であるため，A・Bの区別がつかない。
その他の土器（第105図12～14）　いずれも口縁に無文帯がある土器である。
粗製土器（第105図10・11・15～19）　10・11は条線文，15～19は縄文の深鉢形である。
底部（第105図20）　20は網代痕の底面である。

○10N－L7出土の土器（第105図21～46）
前葉の土器（第105図21～26・29～36）
第1類A（第105図29・30・34）　29は縄文を地文とし，30・34は無文を地文としている。いずれも胴部破片であり，34は第4類の胴部破片としてもよい土器である。
第1類B（第105図31～33）　32は2条の平行沈線文でモチーフを描きだしている。31・33は垂線に弧線をからめて文様を構成している。
第1類D（第105図21）　第3類のように波頂部に「の」字状の太い沈線を施し，口唇部から口縁にかけて刻目文が施されている。
第2類（第105図35・36）　刺突文の胴部破片で，36は細い工具を使っている。
第3類（第105図24）　胴部の文様がみられないが，頸部に隆帯がめぐる要素は第2類Aとも言えるが，一応第3類とした。
第4類B（第105図26）　10M－L1の前葉第4類B（第100図26・27）にみられるよう

第105図　Lピット出土土器(後期)

な円文があり，太い沈線が縄文地上を引いていることからこの仲間に入れた。

第５類（第105図25）　楕円形の指頭圧痕文が口縁をめぐっている。第105図22・23は指頭圧痕文とはいえないが，この第５類の範ちゅうに入るのであろうか。22は丸竹状の工具を１点だけ押しつけ，23はと切れと切れに沈線を口縁直下にめぐらしている。

その他の土器（第105図27・28）　いずれも磨消縄文の土器である。28は大きく開く器形を呈し，中葉第３類の胴頸部の破片であろうか。

粗製土器（第105図37～46）　37～39は条線文，40は原体をそのまま押しつけ，44は綾絡の縄文，45は撚糸文，46はくずれた格子目状撚糸，他は縄文の深鉢形土器である。

○10N－L26出土の土器（第106図）

前葉の土器（第106図１～31）

第１類A（第106図10～12・15～21）　いずれも胴部破片である。15は三角枠を構成するモチーフであれば第１類Cの仲間であるが，一応ここに入れた。18・19は縦に長い弧線を垂線にからめており，図版第42図４の第94号住居跡炉中土器と同じ文様構成である。

第１類D（第106図１－４）　内傾する口縁に細い沈線で１は鋸歯状の，３・４は方形の文様を描いている。２の口縁部文様は明瞭でない。２の胴部は縄文地にヘラ状工具で三角枠もしくは菱形かとも受けとれるモチーフを構成しており，第１類Dとした。

第２類（第106図22～31）　口縁部を欠くため，A・Bいずれかは不明である。27・29は刺突痕が他と異なり細長く，粘土の盛上りも低い。30・31は粘土粒の突瘤文である。

第３類（第106図５・７・８）　５は波頂部に，「ノ」字状の粘土紐をはりつけた土器で，さらに粘土紐には列点が加えられている。８の胴部は条線文である。

第４類（第106図９・13・14）　いずれも磨消縄文で渦巻文を表現している胴部破片でA・Bの器形区分がつかない。

第５類（第106図６）　指頭圧痕文の下に刻目を加えた細隆起線がはりつけられており，胴部は縄文が施されている。

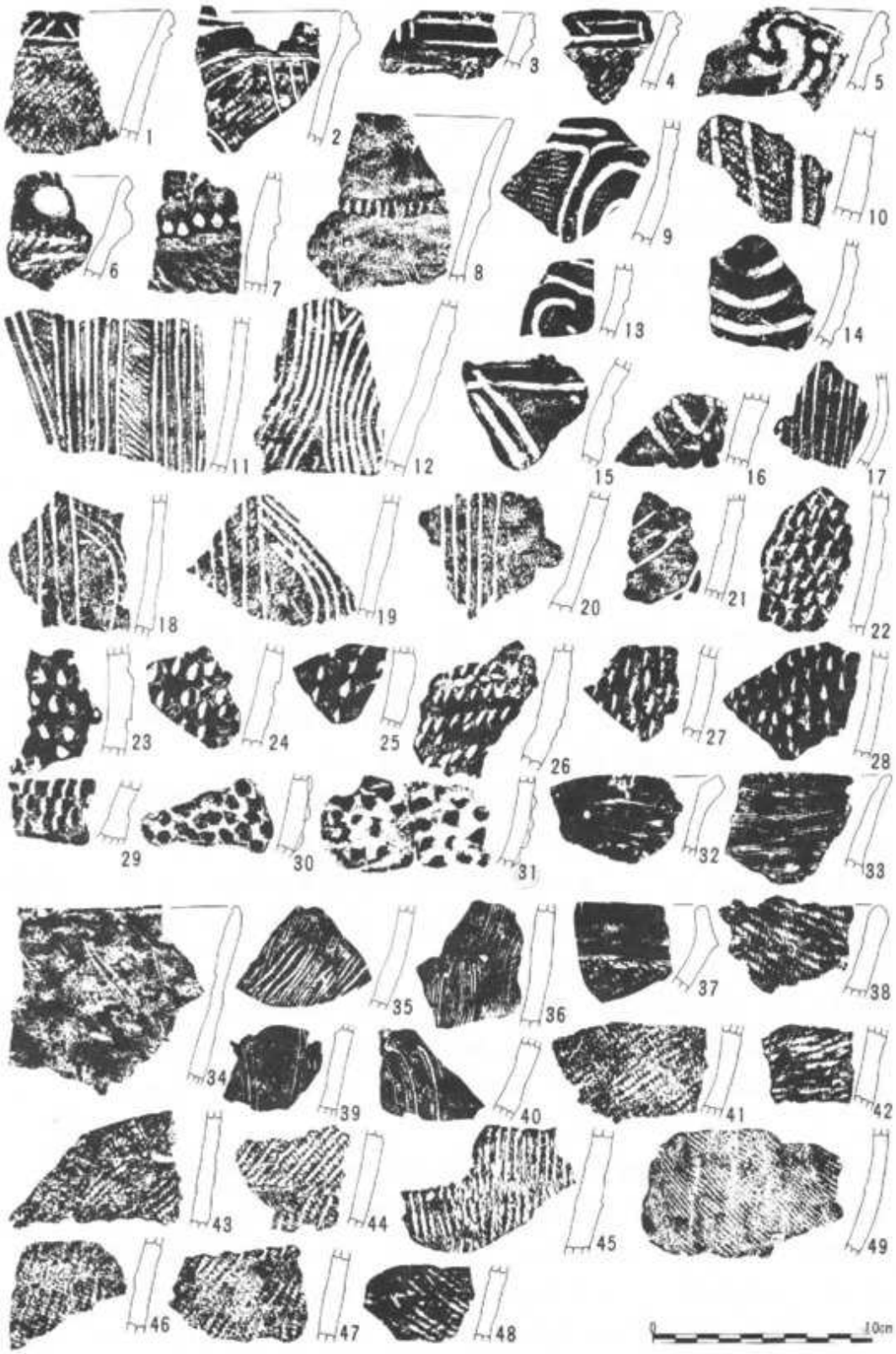
無文土器（第106図32・33）　32は口縁は若干外へ張り出している。

その他の土器（第106図37）　口縁が逆「く」字状に内傾し，屈曲部が稜をなしている土器で，おそらく鉢形を呈するであろうと思われる。

粗製土器（第106図34～36・38～49）　34～36・39・40は条線文の深鉢形土器である。45は太い撚糸文を，49は細かい縄文を密に施している。

○11M－L７出土の土器（第107図１～13）

前葉の土器（第107図１～５・７）



第106図　Lピット出土土器(後期)

第１類Ａ（第107図４・５・７）　いずれも胴部破片で，５は沈線間に刺突の点列がみられる。４は頸部に数条の沈線が横走している。

第１類Ｄ（第107図１－３）　いずれも頸部以下が無文となっている。２は波頂部に上下２個の孔が貫通している。３は折返し口縁の土器である。

無文土器（第107図11－13）　いずれも器形は深鉢形かと思われる。

その他の土器（第107図６）　頸部が逆「く」字状に内傾する。浅鉢形土器であろうか。口唇部に小さな列点文が施され，内面の屈曲部が段をなしている。

粗製土器（第107図８・９）　８は条線文，９は撚糸文が施された深鉢形土器である。

底部（第107図10）　ひとつおきに編んだ網代痕が底面にみられる。

○12N－Ｌ４出土の土器（第107図14・15）

いずれも粗製土器の胴部破片で14は条線文，15は縄文を施した深鉢形土器であろう。

○７Ｑ－Ｌ１出土の土器（第107図16－32）

前葉の土器（第107図16－26）

第１類Ｄ（第107図16・18－23）　16は三角形につまみあげた波頂部の下に孔が貫通している。18－20は刺突が波頂部に施され，口頸部に平行沈線を主体にモチーフをえがいている。18－20は同一個体であろうか。21は凹線内に縦長の刻目文がある。いずれも胴部文様が不明のため，一応第１類でも胴部文様がその他の第１類Ｄとした。

第２類Ｂ（第107図25・26）　25は口唇部が丸味をおびた土器で，見方をかえれば蓋形土器とも受けとれる。26は胴部破片でＡ・Ｂのいずれかであるのかはつかめない。

第３類（第107図17・24）　第３類のほとんどの仲間が波状口縁を呈しているのに，17は平口縁となっている。17の口縁から頸部にかけてはり付けた隆帯の上下に円文がつけられている。24は細かい刻目の隆帯がめぐっている。

その他の土器（第107図30）　口縁に１条の沈線がめぐる縄文施文の土器である。

粗製土器（第107図27－29・31）　27－29は条線文の土器で，31は縄文が施されている。

底部（第107図32）　緯を強調した網代痕の底部で，やや張り出しぎみである。

○８Ｐ－Ｌ69出土の土器（図版第42図12・13　第107図33－39，第108図－第112図）

前葉の土器（図版第42図12・13　第107図33－39，第108図－第111図）

第１類Ａ（図版第42図13　第107図33－39，第108図１－10）　図版第42図13は最大径が口縁にあり，口縁は内傾というよりはやや直立ぎみで，山形の突起を１個つけている。この山形突起には大きな窓があけられ，窓を中心とした同心円状の弧線が描かれ，さらに太い沈線

第107図　L ピット出土土器（後期）

——凹線が口縁をめぐっている。胴部は太い沈線を直・曲線状に垂下させている。この他，8P－L69出土の第1類Aの胴部文様は縄文を地としている。沈線で区画されたところどころを磨き消している例が第108図2・6・7である。第108図8は磨消したところに刺突の点列が1条垂下している。

第1類B（第109図14～23，第110図1～13）　口縁が直立ぎみに近い土器で，口縁に横長の楕円文を描き，胴部にも楕円を基調とした肋骨文を描きだしている。

第1類C（第110図14～22）　14は大きな山形口縁をもつ土器で，山形部に上下2個の孔があいており，下の孔の左脇にも孔が貫通している。14の胴部文様は3本の沈線を一単位として，縦横の線を巧みに使って連続した三角枠を描き出している。

第1類D（第109図8～13）　いずれも文様を構成する沈線は2本を1組としている。8・9の口縁は貫通した孔の周囲を回るように円文が描かれている。10・11の胴部文様は12・13と同じような連続した渦巻文が描かれるものと思われる。

第2類（第111図1～5）　2・5は爪形文と思えるような細い工具を使用している。

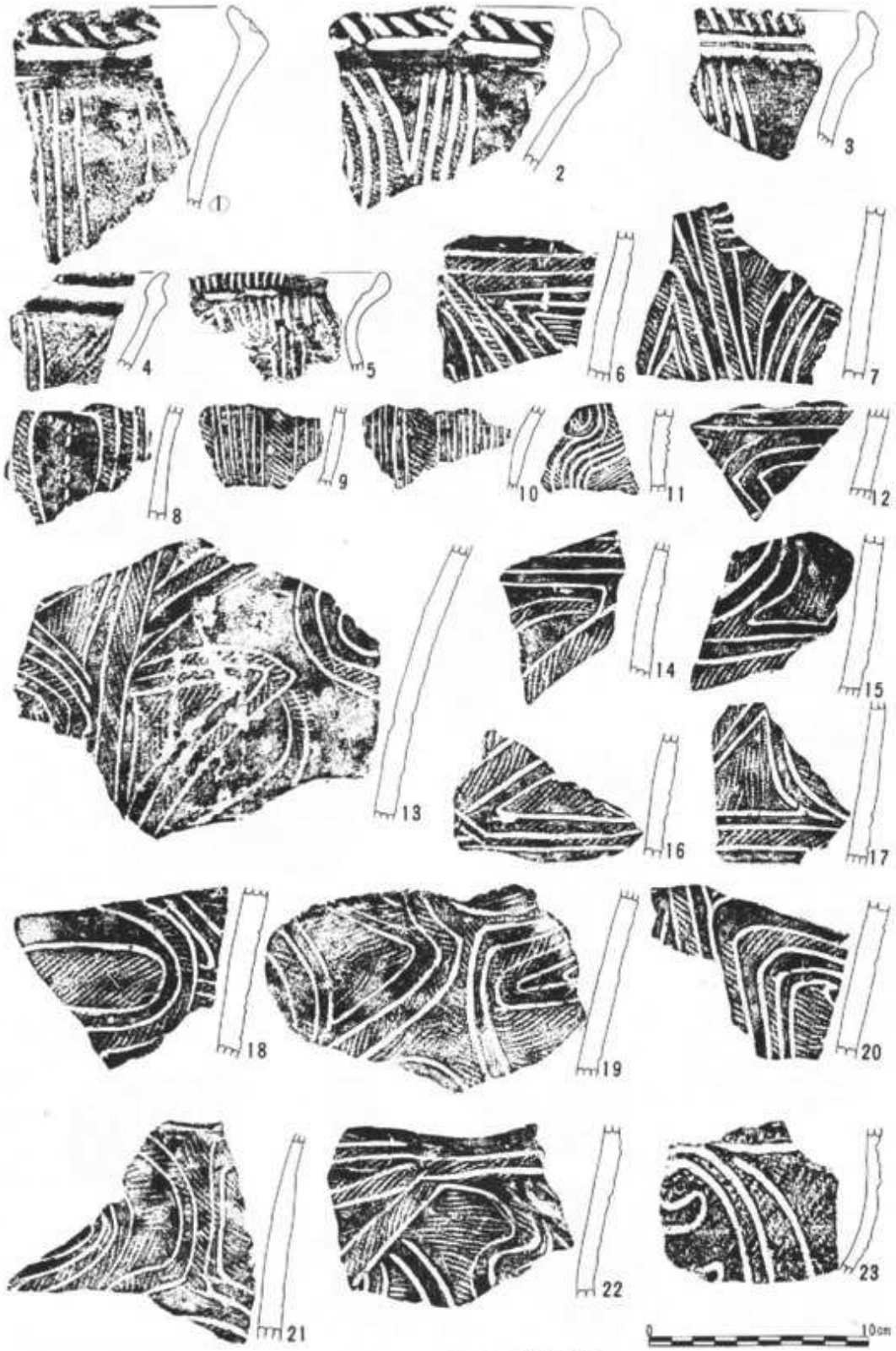
第4類B（第108図11～23，第109図1～7）　いずれも磨消縄文の手法で三角枠もしくはそれがくずれた中に渦巻の文様を描き出している。第4類の文様は三角文と渦巻文が平行関係に配されて文様を構成するのが一般的である。8P－L69の土器のモチーフはこれと異なるが，三角形と渦巻文とで文様を構成しているところから第4類の範ちゅうに入れた。器形は深鉢形と思われる。

第5類（第111図11・14－28）　指頭圧痕文の土器は，口縁がやや内傾するものが多く，ほとんどその位置に指頭圧痕文をめぐらしている。27のように口縁が内傾しないものは口唇部より若干下った位置に施している。第111図9は波頂部に円形の粘土をはりつけた土器で，口縁が大きく外反している。円形の貼付文があることから，第5類に近い仲間とも思われる。同じことが第111図29にもいえ，こちらは内彎する口縁に拓影では1ヵ所だけ指頭圧痕文がみられる。

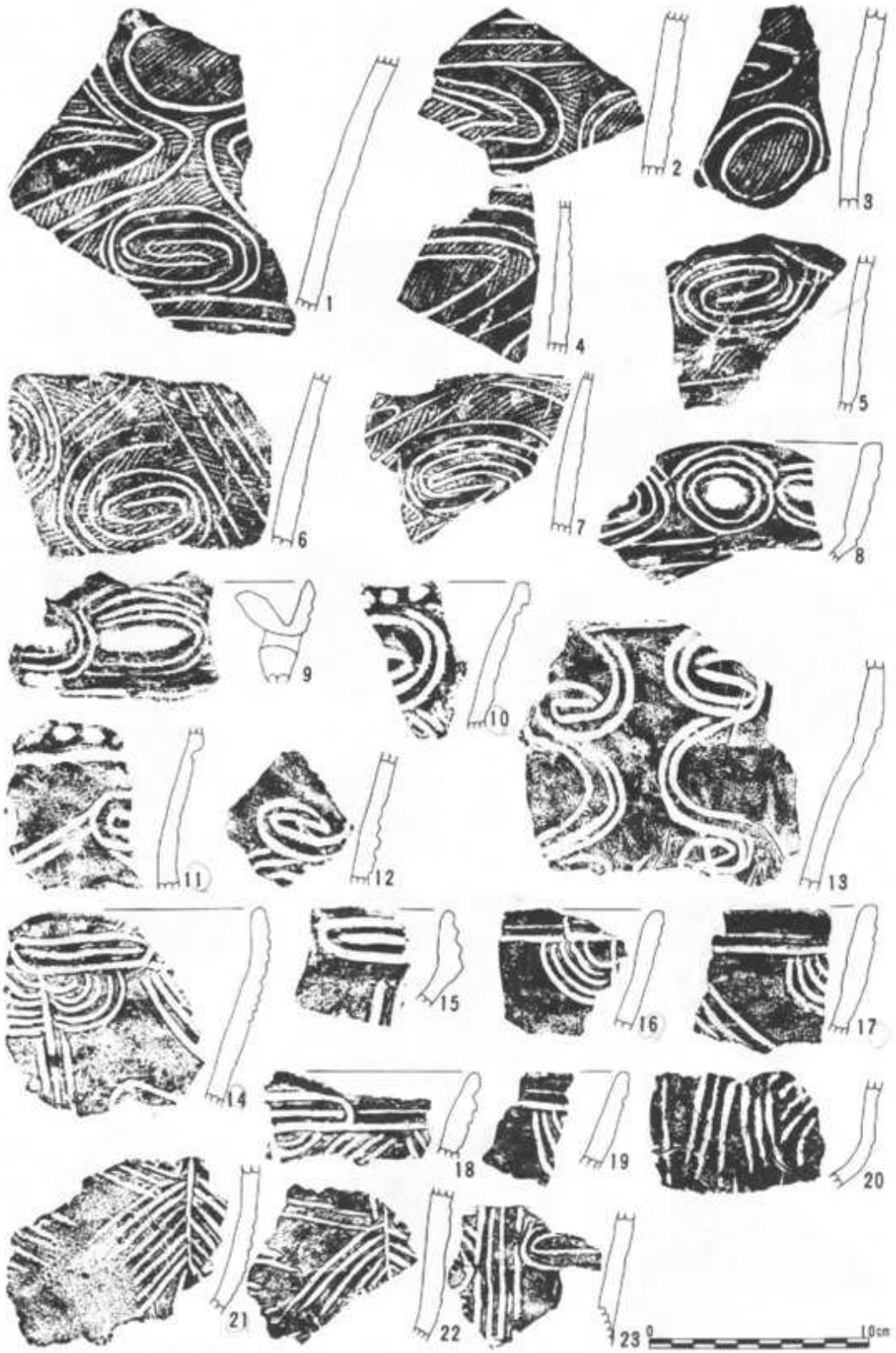
第6類（第111図6）　口縁が「く」字状に外反する深鉢形土器で，口唇部に列点がめぐっている。胴部文様は，2ないし3本を1組とした沈線で菱形文を描いている。

第10類（図版第42図12）　肉厚の注口土器で，重量はこのクラスのものとしてはかなり重い。底部は平底である。文様は胴上半部だけにみられる。まず三角枠状に粘土を盛りあげ，盛りあげた三角枠の中にも，沈線で三角形を描いている。盛りあげた三角枠の交点に一個づつ刺突文がつけられている。

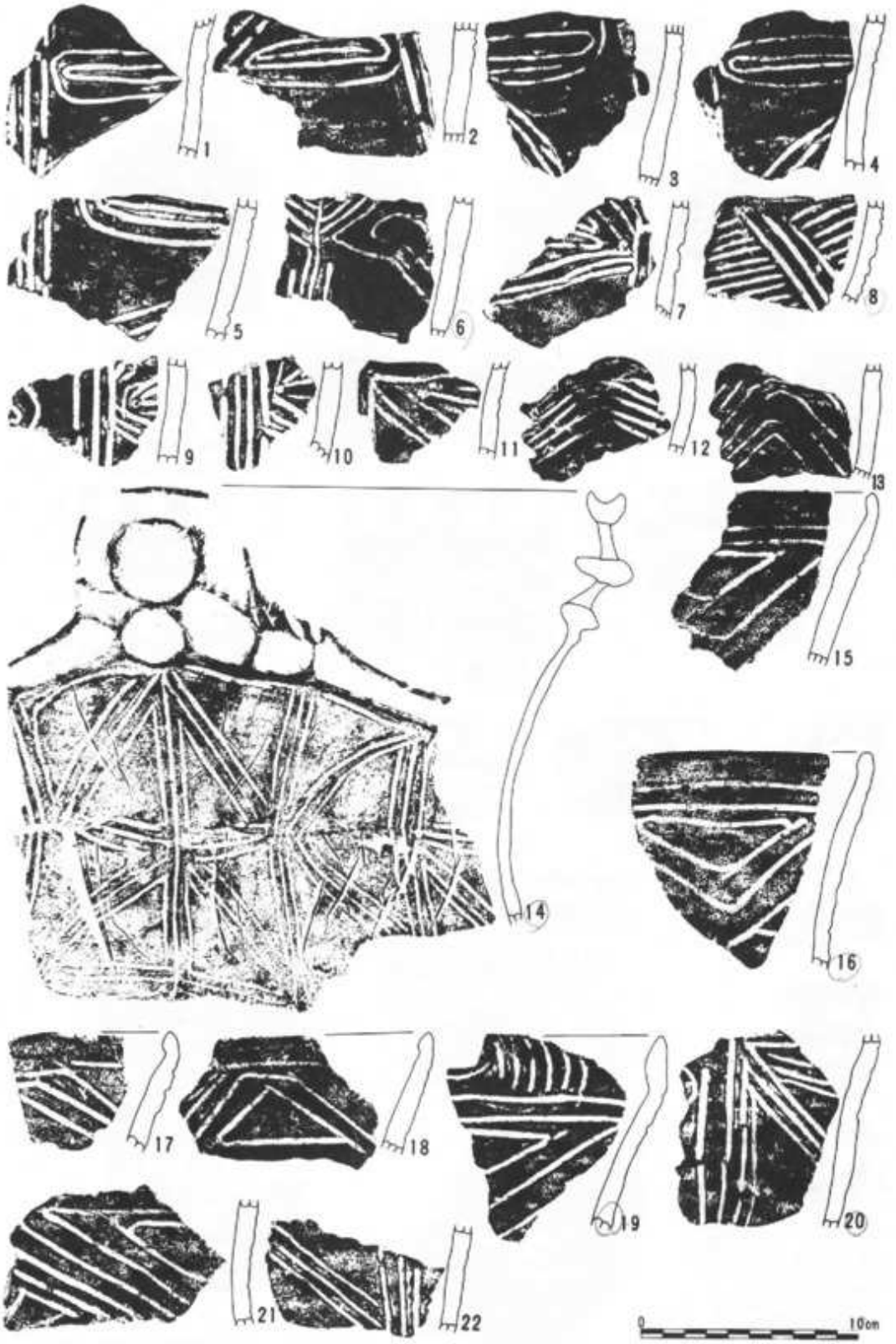
粗製土器（第111図7・8・10・12・13，第112図）　第111図7・8・10・12・13は前葉に普遍的な条線文の土器である。第112図は縄文施文の土器で，1～3は波頂部に指頭圧痕文を加え，2・3は指頭圧痕文をダブルにつけ，逆ハート形を呈している。



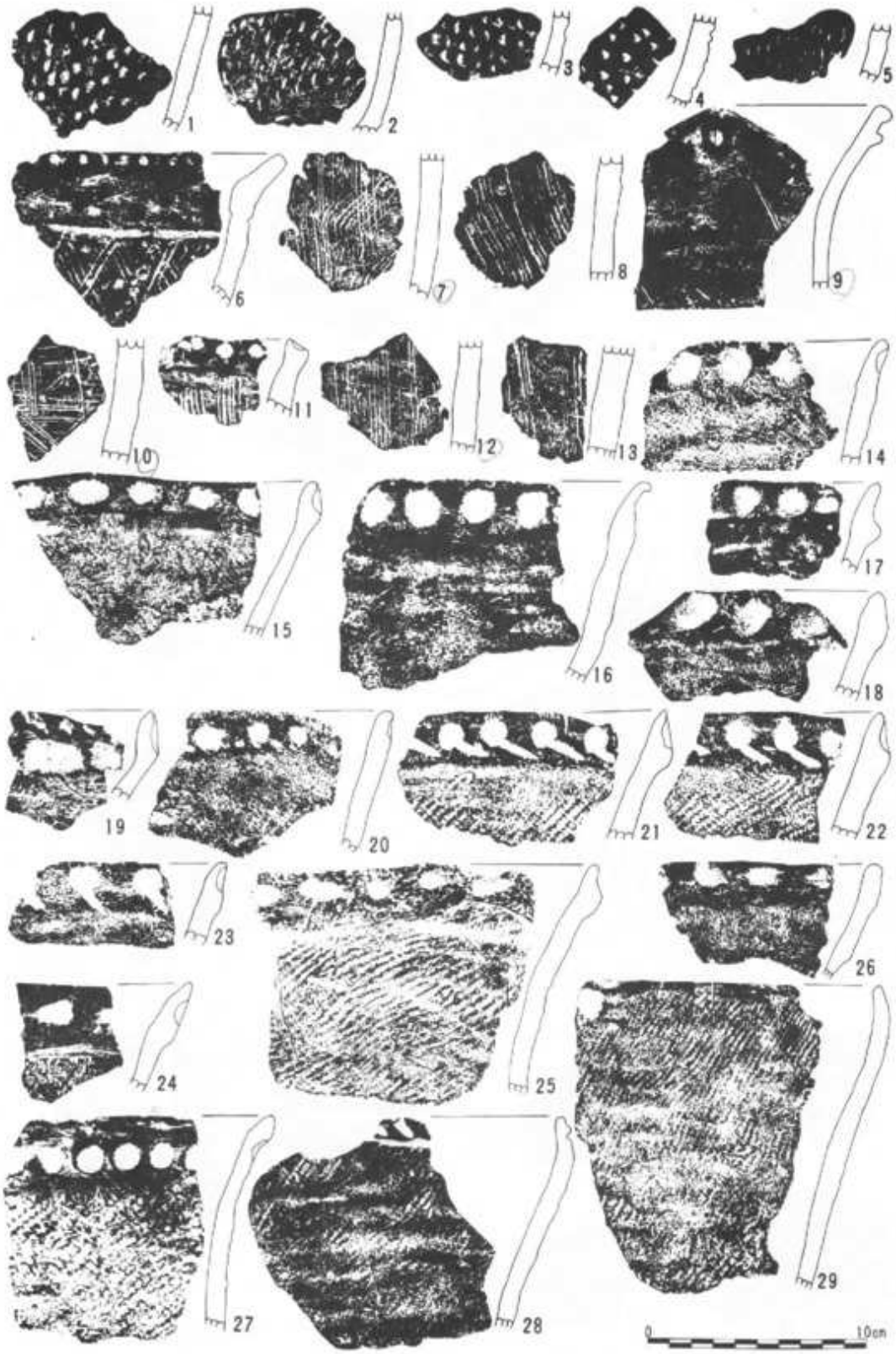
第108図　Lピット出土土器(後期)



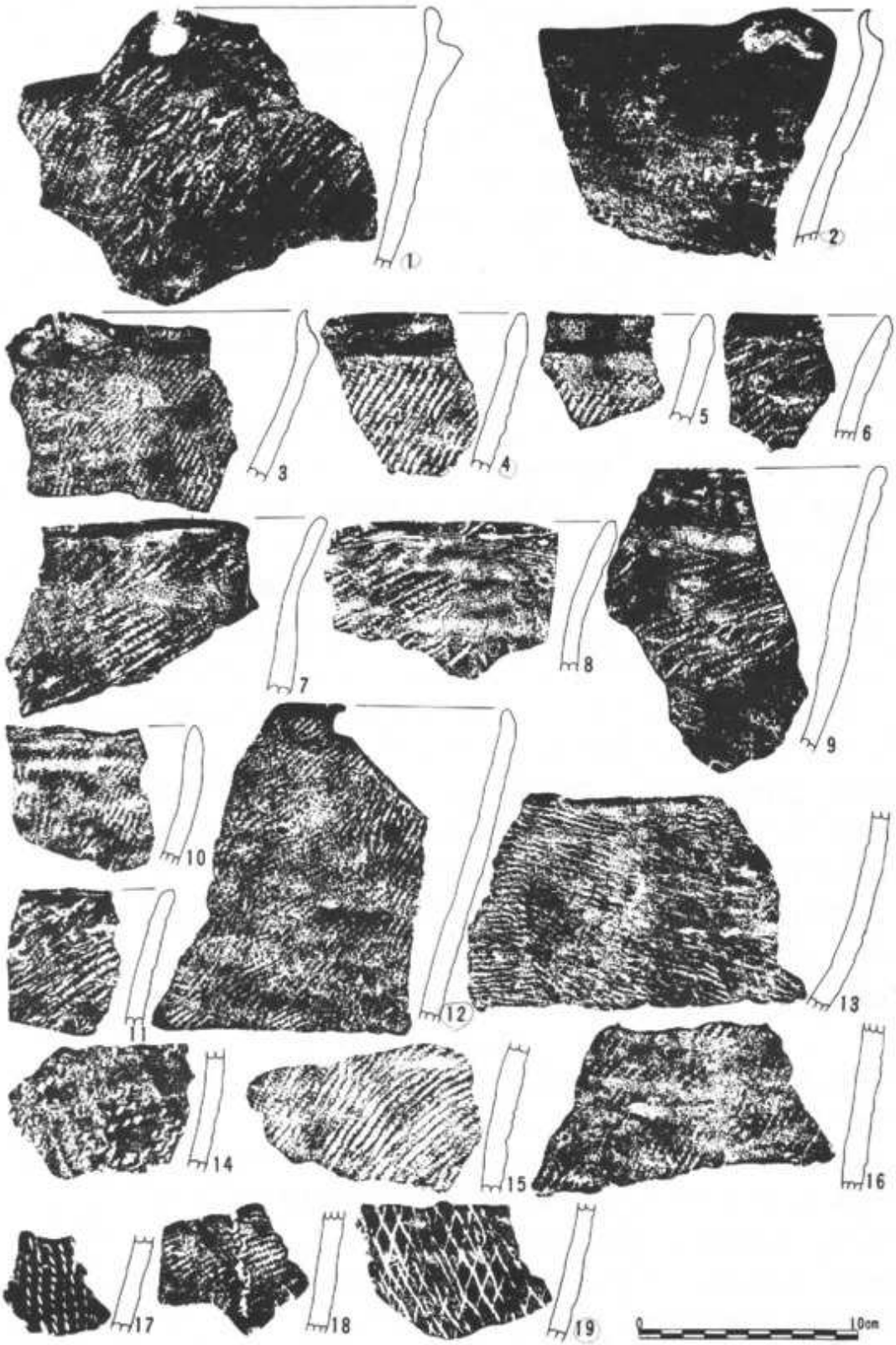
第109図　Lピット出土土器(後期)



第110図　Lピット出土土器(後期)



第111図　Lピット出土土器(後期)



第112図　Lピット出土土器(後期)

０８Ｐ－Ｌ67出土の土器（図版第42図16　第113図，第114図１～18）

前葉の土器（図版第42図16　第113図１－33・36～40，第114図１～７）

第１類Ａ（第113図１～20）　胴部文様に縄文を地文としている例が多く，19・20以外はそれである。１は渦巻文を，２は２個の孔を中心とした同心円文を施している。

第１類Ｂ（第113図21・22）　８Ｐ－Ｌ69の第１類Ｂと同じ肋骨文を描いている。

第１類Ｃ（第113図23）　２本の沈線で三角枠を描き出している。24は23の底部に近い破片で，三角枠がくずれたものであろう。

第２類（第113図30～33）　32は上部に列点文がみられる。

第３類（第113図25～29）　25・26は胴部文様が不明で，第２類Ａの可能性もある。27は粘土を「の」字状にはり付け，列点が加えられている。

第４類Ａ（第113図38）　口縁が「く」字状に折れまがった鉢形土器で，頸部は無文となっている。縄文を地文として文様が描かれている。

第４類Ｂ（第113図36・37）　この仲間に入れるのにちゅうちょしたが，三角形や円弧状に文様を描いているところから，一応第４類Ｂとした。

第５類（第114図１～７）　１～５の胴部は無文で，６・７は縄文が施されている。

第９類（図版第42図16）　胴部最大径の位置と口縁に１条の沈線がめぐり，それを結ぶように４条１組の垂線が７ヵ所に施され，その間のところどころにＳ字状の沈線が入っている。この類の土器は本遺跡からは今のところこの１点しか出土していない。口縁と底部の中心点が一致していない不安定な土器である。

第11類（第113図39・40）　39は橋状のつまみをもち，40は刺突文が施されている。

中葉の土器（第113図34・35）　いずれも細かい縄文の磨消縄文が施された壺もしくは注口土器胴上半部破片で，34は口唇部に列点がみられる。

その他の土器（第114図８～13）　口縁に広い無文帯をもつ12を除き，いずれも１条の沈線もしくは凹線が横に引かれている土器である。

粗製土器（第114図14～18）　14～16は縄文，17・18は条線文の深鉢形土器である。

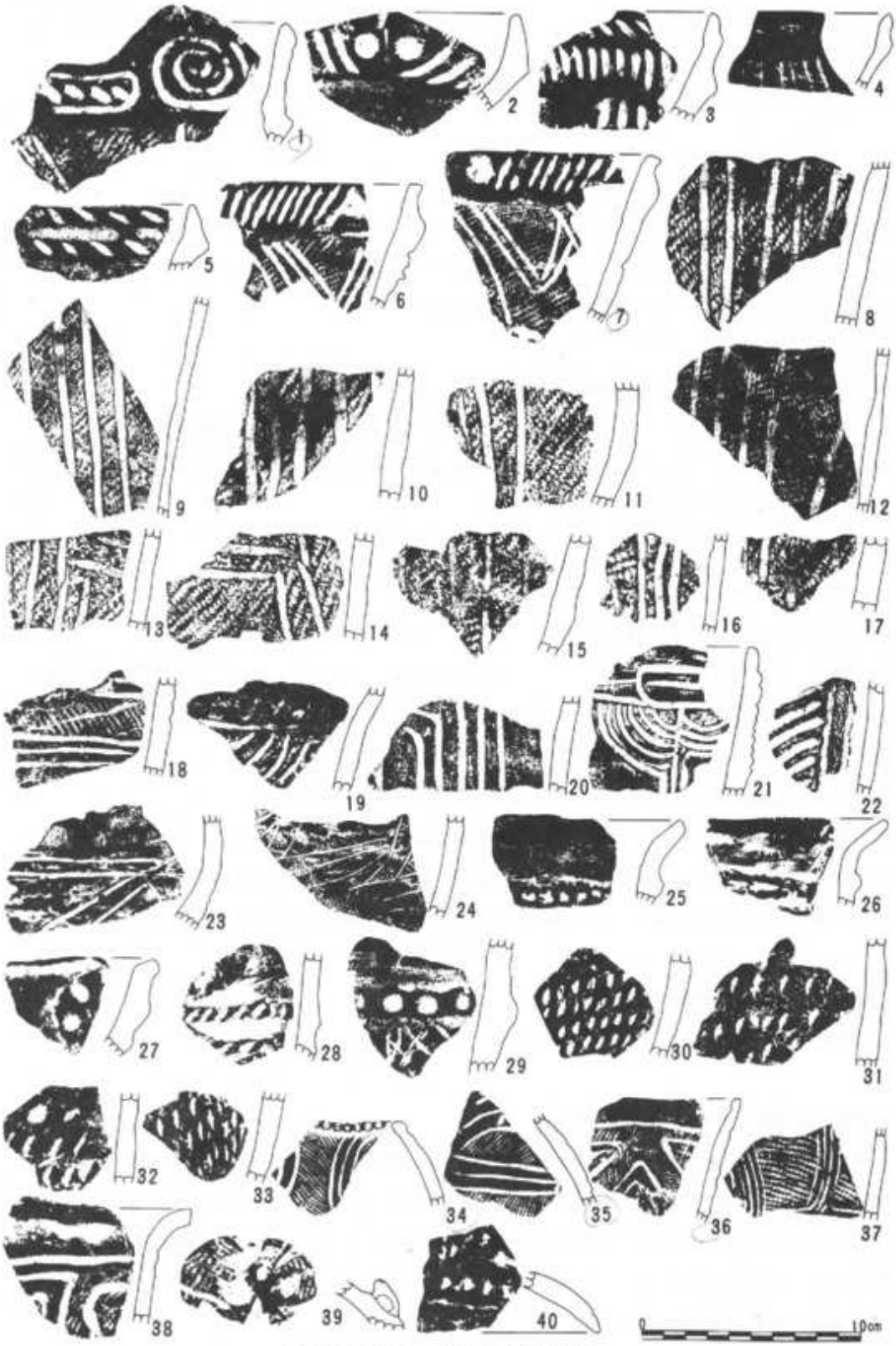
０８Ｑ－Ｌ１出土の土器（第114図19～28）

前葉の土器（第114図19～24）

第１類Ａ（第114図19～22）　19は波頂部に横長の「く」字状沈線を施し，その下端からの沈線が口縁をめぐるものと思われる。20は口縁に太い凹線をめぐらしている。

第２類（第114図23）　刺突文の胴部破片である。

第３類（第114図24）　列点を加えた隆帯は，粘土紐をはりつけたというよりも，周囲を削って盛りあげたような感じである。



第113図　Lピット出土土器(後期)

その他の土器（第114図25・26）　　いずれも口頸部が無文帯の土器で，25は綾絡縄文で，口縁が無文となっている。

粗製土器（第114図27・28）　　深鉢形土器の胴部破片である。

○8Q－L2出土の土器（図版第42図15）

前葉第1類A　　第1類には珍しく平口縁の土器で，口縁がやや内傾し，そこに太い凹線と口唇部からの刻目文を施している。胴部文様は3条1組の沈線でもって描いている。他の第1類土器に比して小形で，焼成良好な土器である。

○8Q－L3出土の土器（図版第42図14）

前葉第10類　　上向きの注口が胴の肩についており，注口の反対側には橋状把手が肩から口頸部についている。口縁は波頂部に1個の円孔をもつ波状口縁を呈している。文様は胴上半部に隆線の区画内に沈線を縦に引いている。

○7P－L9出土の土器（第114図29～40）

前葉の土器（第114図29～34・40）

第1類A（第114図29・30・33）　　いずれも胴部破片だけで，果してこの仲間かは不明だが，一応，第1類Aの範ちゅうとしておいた。33は刺突文を地文としている。

第2類（第114図32）　　胴部破片でA・Bの区別がつかない。

第3類（第114図34）　　隆帯と胴部に角ばった押引きをしている。

第5類（第114図31）　　口縁の凹線の下に指頭圧痕文を施している。

第11類（第114図40）　　頸部にメガネ状隆帯，天井部に押引きの刺突文を施している。

粗製土器（第114図35～39）　　35は左右両下りの条線文を整然と引いている。

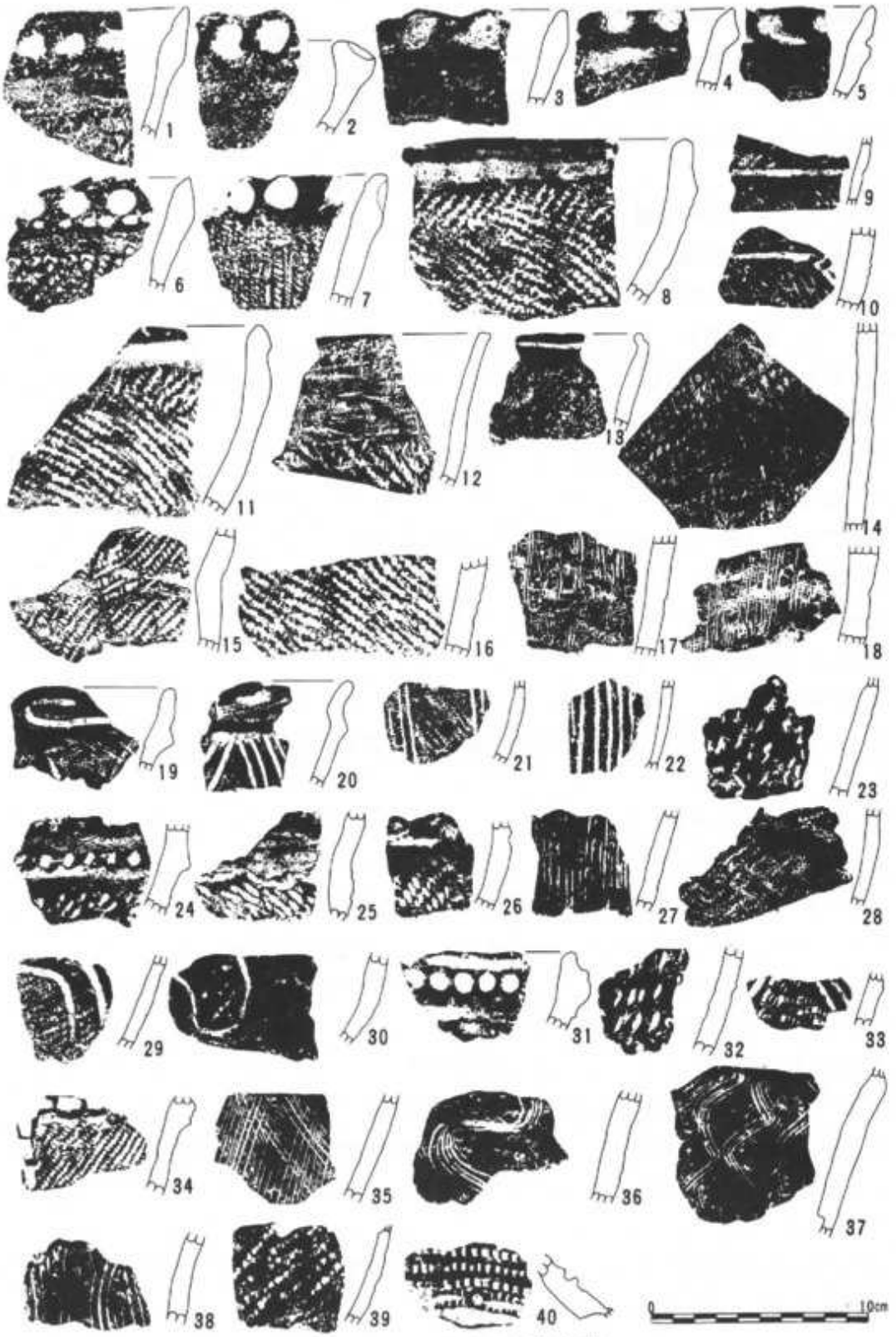
○10K－L1出土の土器（図版第42図17）

小形の手づくね土器で，磨きの状態は決して良いとはいえない。

○10O－L90出土の土器（図版第43図1・2）

前葉第4類A（図版第43図1）　　口頸部が大きく開き，小さな平底の鉢形土器である。文様は内傾する口縁に凹線と，ところどころに円文を施し，胴部に太い沈線で渦巻文と三角枠とを組合せて構成している。三角枠は渦巻文の外線をひとつの辺として連絡している。

粗製土器（図版第43図2）　　頂部に切り込みのある波状口縁の深鉢形土器で，「8」字状の条線文が胴部に施文されている。



第114図　Lピット出土土器(後期)

○10O－L140出土の土器（図版第43図３）

頸部から大きく外反する土器で，口唇部を欠いている。文様は頸部が無文で，胴部に縄文を施しただけの土器である。この土器の覆土に１cmにも満たない滑車形の土製耳飾り１点(図版第31図４）と骨片が入っていた。（駒形敏朗）

（３）Gピット出土の土器

○８K－G１出土の土器（第115図）

前葉の土器（第115図１・２・５～15）

第１類A（第115図２）　縄文地に沈線を施した胴部破片である。

第２類A（第115図５～15）　７は橋状把手が剝落した土器で，口縁は橋状把手の位置で波状を呈している。５・15は粘土の粒をつけた突瘤文である。

第５類（第115図１）　口縁部下位で胴部に近い位置に指頭圧痕文がみられる。

その他の土器（第115図３・４・16）　３・４はよく磨かれた器面に，波頂部から刺突の点列が加わった隆帯を垂下させている。これは前葉の仲間に入るであろうか。16は平口縁の土器で，１条の沈線で文様帯を区画している。口縁部には押圧縄文が１条めぐっている。

粗製土器（第115図17－31）　26～28は単節原体による撚糸文が施されている。29～31は条線文の土器で，29は上部に刻目文がみられる。

底部（第115図32）　縄を巻いたような編物の上に木の葉をおいた台の上で，土器を製作したのであろうか。そのことを示すように編物と木の葉痕が底面についている。

○８K－G２出土の土器（第116図）

前葉の土器（第116図１～13・33・34）

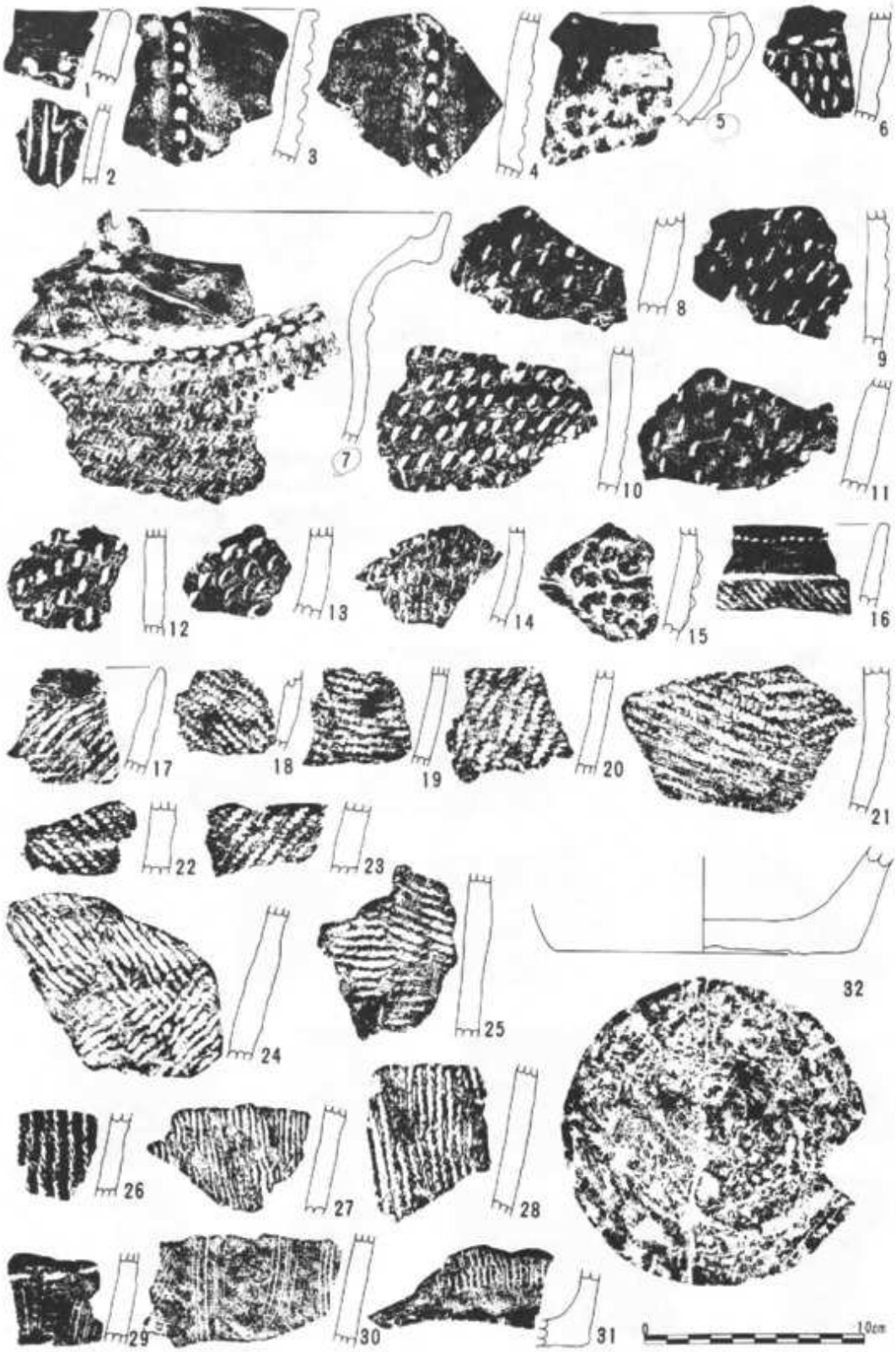
第２類A（第116図３－12）　４の橋状把手は小さくて狭いものであり，口縁は波状にならないのではないかと思われる。３は口縁が強く外に張り出している。

第３類（第116図１・２・13）　いずれも頸部の隆帯に押圧文(１・２)あるいは刻目(13)が加えられている。１・２の胴部は無文である。

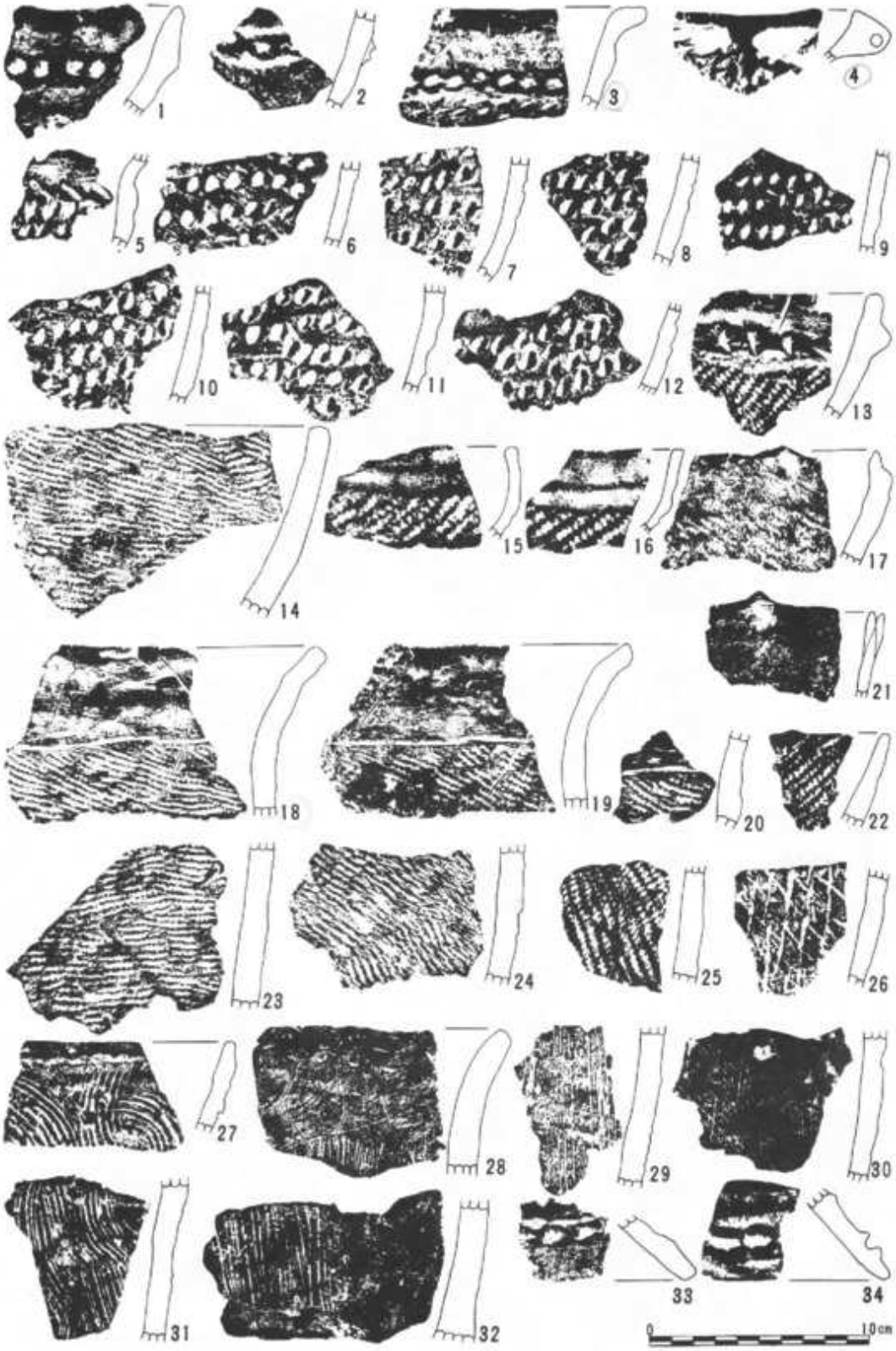
第11類（第116図33・34）　いずれも刻目の隆帯が口縁をめぐっている。第３類とした２も33・34と同じ文様構成をしており，あるいは蓋の破片であろうか。

その他の土器（第116図15－21）　いずれも口縁部が無文，胴部に縄文を施した土器で，18～20は沈線でそれを区画している。21は断面図のように口縁部の一部が外に押し出され，片口状を呈している。

粗製土器（第116図14・22－32）　27～32は条線文土器で，28は口縁に無文帯がある。26は格子目状撚糸，他は斜縄文の深鉢形土器である。（駒形敏朗）



第115図　Gピット出土土器(後期)



第116図　Gピット出土土器(後期)

（4）小ピット等出土の土器（図版第43図4～15）

LピットやGピット以外の例えば柱穴と思われるような小ピットなどから出土したもので完形品ばかり集めた。

07J－P1出土の土器（図版第43図4）

中葉第2類　口縁の粘土をつまみあげたような突起を4単位につけ，その突起と同じ位置に，円弧でつながれた平行沈線文を胴上半部に施している。土器はススが付着している。

07Q－P5出土の土器（図版第43図7）

中葉第1類A　3単位の波状口縁で，底部がやや外に張り出している。口唇部に刻目文を，内面には段をもち，外面は弧線でつながれた帯縄文を胴上部に施している。弧線は波頂部にしかみられない。この土器はスス等の炭化物の付着は全くない。

08L－P116出土の土器（図版第43図5）

前葉第11類　天井部につづみ状のつまみをもち，器面全体をよく磨いている。

08O－P18出土の土器（図版第43図6）

口縁の1ヵ所が波状になる小形土器で，全面に縄文が施されている。

08O－P79出土の土器（図版第43図8）

前葉第2類A　この仲間を代表する土器である。紐かけでもしたのであろうか外に張り出す底部に5ヵ所のえぐり込みがある。ススが付着していた。

08P－P1出土の土器（図版第43図11）

前葉第11類　口縁の4ヵ所を口をあけたように上方へ押しあげて片口状にし，2ヵ所の片口の位置には橋状把手をつけている。器面には把手・つまみも含めて円形刺突文が施されている。橋状把手のない片口の位置にはつまみから「S」字をつなげた沈線がのびている。

08P－P19出土の土器（図版第43図15）

中葉第5類　3単位の小波状口縁を呈し，胴上半部に「8」字状の弧線でつながれた平行沈線文を施している。弧線は波頂部にあたる位置だけに限られていた。

08P－P52出土の土器（図版第43図12）

前葉第9類　よく研磨された胴部に，前葉第4類Aなどにみられる渦巻文を施し，口縁部

に「S」字状の突起が3単位でつけられている。口縁が3単位に分割されるのは関東の加曽利B式の特色的なことであると言われており，前葉か中葉か大いに迷った土器である。ここでは一応，前葉から中葉への過渡的な土器として，大きな意味で前葉に含めた。

○8P－P71出土の土器（図版第43図13）

中葉第7類　口縁が外反する壺形土器で，よく研磨されて黒光りしている。特に沈線による弧線文が施された胴上半部は，他より一段低く研磨されていた。底部は平底であった。

○9K－P4出土の土器（図版第43図9・10）

後葉第4類　9の上に10が逆さにかぶさった状態で出土した。9・10の底部は丸底で，9は小さな凹みをもっており，不安定な感じを与える。9の口縁部や頸部のくびれ部及び頸部と胴部の境に刻目文がめぐっていた。胴部の磨消縄文による入組文は浮彫手法である。

○9O－P82出土の土器（図版第43図14）

前葉第7類　小形の鉢形土器で，胴上半部に渦巻文及び縦の沈線文で文様を構成している。口縁には列点がところどころにみられる。（駒形敏朗）

（5）その他出土の土器

包含層から出土した完形土器を集めた。

前葉の土器（図版第44図1～7）

第1類A（図版第44図1）　大きな1個の突起を口縁にもつ土器で，口縁の凹線内に刻目が加えられていた。胴部文様は無文上に沈線で頸部に横の弧線文，それ以下に弧線文を加えた垂線を施している。

第2類B（図版第44図2・5）　5は6の口唇部に刻目文を胴部に条線文を施す深鉢形土器の中に入った，いわゆる入子の状態で出土した（図版第5図の右の上から三段目）。5は高台がつくのであろうか，あげ底となっていた。5は全体にもろく器面全体にススがたっぷりとついていた。

第5類（図版第44図7）　口縁が4単位の波状を呈し，波頂部の指頭圧痕文の下に貼瘤が1個づつみられる。胴部は条線文である。

第11類（図版第44図3・4）　3は背の高い蓋で，巻き上げ風に沈線を口縁からつまみに施文している。4は口縁に片口状の押上げが4ヵ所にみられる。

中葉の土器（図版第44図10・11）

第3類（図版第44図10）　口縁が丸味をおびて大きく開き，胴部に帯縄文がみられ，口頸

部に縄文を施した土器である。

第6類B（図版第44図11）　第2次焼成を受けているのであろうか，全体的にもろい土器である。内面に平行沈線文とその下に帯縄文が施されている。

後葉の土器（図版第44図9）　口頸部を欠いているが，欠損部の観察から，長頸の壺形を呈するのではないかと思われる。底部は幅広の平底である。浮彫的な磨消縄文を施して入組文を描き出している。

小形土器（図版第44図12～15）　13・14は底面に網代痕がみられる。12の底部は丸底に近い平底で，不安定なつくりである。15は1ヵ所が波状を呈する口縁で丸底である。

その他の土器（図版第44図8・16）　8は短頸壺様の土器で，縄文地上の肩に渦巻文が描かれており，前葉の仲間ではないかと考えられる。16は無文の頸部がくびれる深鉢形土器で，胴部と頸部に列点文がめぐっている。時期は不明である。（駒形敏朗）

（6）土製品・石器・石製品その他.

○土偶（図版第22図34・36～45）　後期の集落位置から出土した土偶は，10O－L 140出土（40）のように豊満なものが多い。いずれも五体満足ではなく頭部・手・足を欠いている。36は8J－P3，39は6K－L4から出土した。35は土器の口縁につけられた人面把手で，眼・口はヘラ状工具の突き刺しによっている。

○土笛（図版第24図1）　直径約3.8cmの球形を呈し，写真正面の上から胎内に穴がななめにあけられていた。頭部に唇をつけてピンを吹く要領で吹くと，ピーと感高い音がする。また，頭部には吹口と直角に紐通しのような孔が貫通していた。9N－L20から玉（図版第30図3）・クッキー状炭化物（図版第30図5）とともに出土した。

○鈴状土製品（図版第24図2）　鈴のような形態をしているが，空洞にはなっていなかった。器面に縄文が施され，朱が塗られていた。

○土錘（図版第24図3・21・22）　3は紐通しの孔を中心に，十文字に紐かがりの溝がみられる小形品である。21は土器片の再利用かと思われる。

○板状土製品（図版第24図4～15）　縄文などが施文されていた土器片の周囲を打ち欠いたり磨いたりした，いわゆる「泥メンコ」と称するものである。

○スタンプ状土製品（図版第24図16～19）　一面に放射状の沈線文様を施し，他面に2～

3㎝の把手をつけている。把手には紐通し状の孔があいていた。

○土皿（図版第24図20）　底面が平らで縁を高くし，中央が凹んでいる土製品で，凹地に磨滅痕が認められる。

○磨製石斧（図版第25図3・6・8・9・17～20・23～27）　3・6・8・9は全長5㎝以下の小形品で，3を除いた3点は側面が角ばっていた。17～19・23～27は全長6㎝以上のもので，24～26は側面がやや丸味をおびている。20・27は表面が風化している。3は8N－P113，6は7K－P283からの出土で，他は包含層からの出土である。

○打製石斧（図版第25図11・14～16・21）　14は側面にえぐり込みがあり，分銅形に近いものである。11・21の石材は板状石器と同じ頁岩を使用している。

○凹石（図版第26図1～6）　図示した凹石は，いずれも後期集落地域出土のもので，両面に2点ずつの凹孔がみられる。

○石皿（図版第26図7－9）　遺跡全体で約1,500点の石皿が出土しているが，7・8のように縁と海が明瞭な石皿は少なく，9のように中央部に磨痕が観察されるものが主体を占めている。7は四角い脚が底面についていた。

○ナイフ形石器（図版第27図5）　10Pから出土した。安山岩系の石を用いている。剥離技法に旧石器時代の技術がみられるところから，出土グリッドを中心に10m×10mの範囲で地山を約50㎝発掘したが，他に旧石器時代の遺物は出土しなかった。

○石鏃（図版第27図7～12・15・17・22）　9は8O－P79，11は第9号住居跡の床，15は8O－P16，17は10N－L26，22は8L－P96から，他は包含層からの出土である。17は残存部全長約5.5㎝の大形品で，石槍と分類してもよい製品である。

○石錐（図版第27図24～27）　27はつまみの柄が大きく，刃部が短い石錐である。いずれも刃部の断面は菱形を呈していた。26は第9号住居跡の床から出土した。

○石匙（図版第27図28・29）　28は横形，29は縦形の石匙で，28は第10号住居跡から出土した。石匙の出土量は極端に少なく，遺跡全体でも10点はこえなかった。

○板状石器（図版第28図1～12）　主に頁岩を使い，偏平な石に片刃の刃部をつくり出している。板状石器は約500点出土しているが，後期集落地域だけに限られている。

○石錘（図版第28図13～17）　いずれも安山岩系の丸味をおびた偏平な石を使用している。約400点出土した石錘の多くは後期の集落地域からのものである。

○石棒（図版第29図1～3）　1は第9号住居跡出土のものである。3は亀頭部が2段につくられた細身の石棒で，亀頭部に朱が塗られていた。また，もう一方の頭部は欠損しており，剝落面にアスファルトが認められた。2は一辺が約10cmの方形を呈する亀頭部をもつもので，1・3のような断面が丸味をおびていない。このため，中世の石塔の一部かとも思われたが，石塔にしては小さいし，岩野原に中世の仏教遺跡が見あたらず，結局は縄文時代の石棒であろうということに落ちついたものである。

○浮（図版第29図6・7）　風化して軽石状に気泡が目立つ偏平な石の一端に，紐通しの孔をあけただけのものである。

○環状石斧（図版第29図8）　偏平な丸石の中央に孔をあけ周縁を研磨したもので，使用痕と思われる剝落が周縁部のところどころにみられる。

○玉（図版第30図3・4）　3はチャート質の石を磨き両面に孔をあけた小さな玉で，9N－L20から出土している。4はチャートなどよりは軟い石を勾玉状に研磨し，両面から孔をあけているが，片方がより強い。

○クッキー状炭化物（図版第30図5）　小形石皿につまった状態で出土した（図版第5図左上から3段目）。開口部直径160cm，基底部直径118cm，深さ140cmの9N－L20からの出土である。クッキー状炭化物は石皿から離すことができないほどくっついていた。石皿に火を受けた痕跡がみられる。クッキー状炭化物の出土はこの1点だけである。なお，このクッキー状炭化物は現在，奈良国立文化財研究所に石皿ともども保存処理を依頼している。

○骨（図版第31図5～12）　第29号住居跡炉中やその他から，種別不明の骨片が出土している。現在，骨片は長岡警察署を通じて，人・獣等の鑑定を依頼中である。　（駒形敏朗）

第Ⅳ章　歴史時代

歴史時代の土師器が採集されたB地区は試掘調査において，掘立柱建物跡の柱穴が22O－Ⅱbで発見された。B地区の発掘調査は22Oを中心に掘立柱建物跡の追求を目的に実施した結果，土師器を伴出する2棟の掘立柱建物跡を検出した。

1．第1号建物跡（図版第46図　第117図）

東西棟の掘立柱建物跡である。規模は桁行7間（約14.5m）×梁行3間（約5.3m）と大きく，棟の主軸方向はやや南北にかたむいている。柱間寸法は桁行1.68～2.52m，梁行1.40～2.20mと間隔が一定していない。柱間通は特に北の桁行が凸凹しており，全体的に悪い。

掘方のプランは隅丸方形や，長方形を呈し，規模は40～110cm×36～80cmと不規則で，深さは，20～68cmを計る。梁行東西の妻の柱穴は概して規模が小さい。P5・P9・P13～P18・P20の壁には柱を抜き取ったと思われるような，柱痕に向って斜めに掘り込んだ跡がみられる。また，P1・P5・P6・P19の底面は長方形ないしはそれが歪んだ形態で広い。これも柱を抜き取った痕跡であろうかとも考えたことがある。

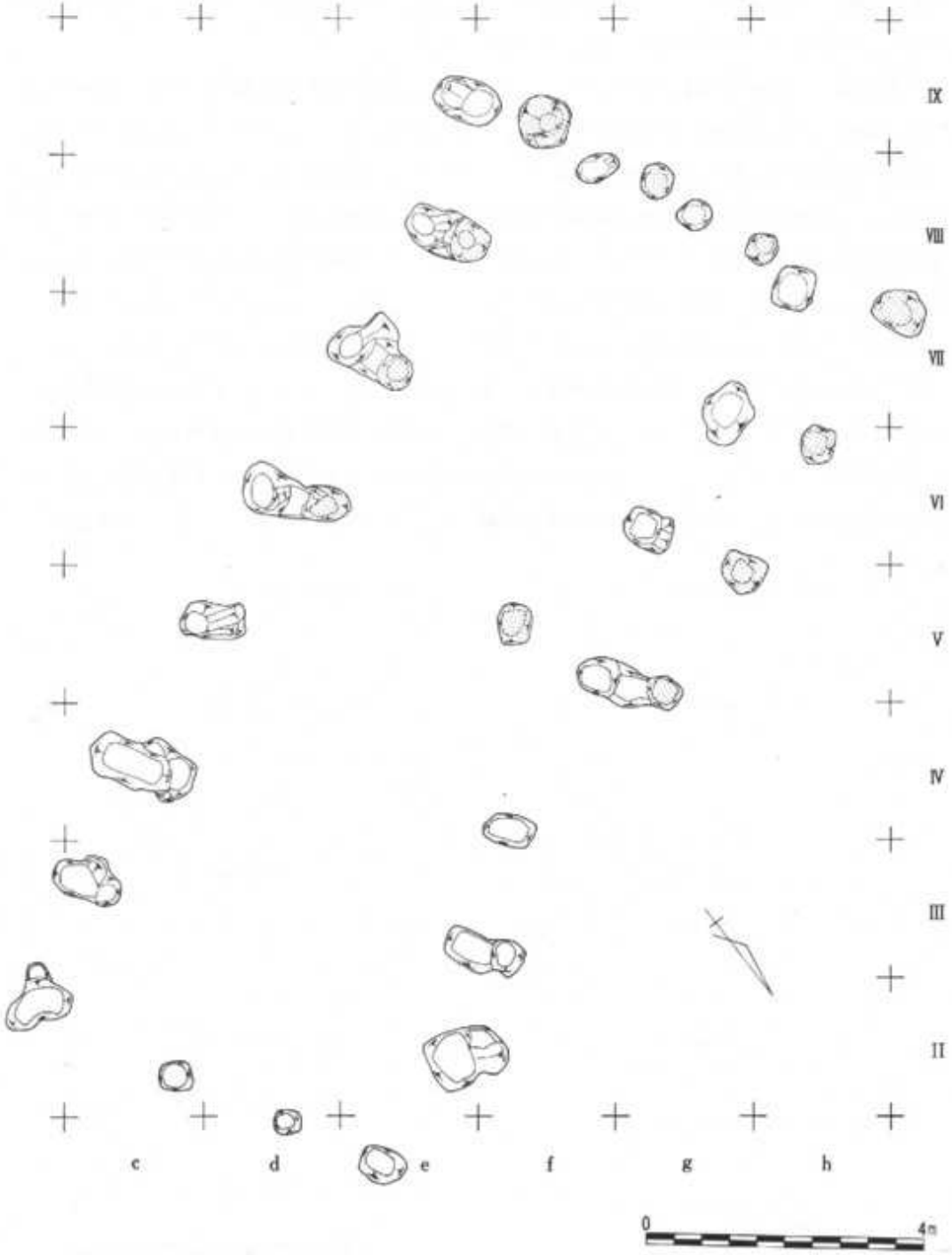
2．第2号建物跡（図版第46図　第120図）

桁行3間（約6.4m）×梁行3間（約5.6～5.8m）の東西棟の掘立柱建物跡である。第2号建物跡は，第1号建物跡の桁行西側付近が全体に北へ移動したような位置にあり，調査途中では廂ではないかと思った。P1・P4・P11・P12は第1号建物跡のP8・P15～P17と掘方が同じであった。梁行東妻のP1とP3の間には，柱穴を思わせる凹地があったが，深度が5cmと浅いため柱穴とはみなさなかった。柱間寸法は桁行約2.1～2.3m，梁行約1.7～2.45mと第1号建物跡同様に不規則であった。掘方のプランはほとんどが50～60cmの方形を呈し，深度は28～72cmを計る。柱間通りは第1号建物跡に比して通りがよい。柱抜き取り痕はP1にみられるだけである。

3．遺物（図版第45図　第119図）

B地区の遺物は建物跡付近から出土した土師器と灰釉陶器である。

○土師器（第119図）　土師器は坏形土器が平箱で約5枚出土しているが，他の器種はなかった。また，図示した以外は復元実測ができないほどの小破片ばかりであった。　1～4は第1号建物跡，5・6は第2号建物跡の柱穴からの出土である。つくりや器形に大きな差が認められないこともあり，一括して取りあつかった。1－4・6～8は口径が12～13cm，器高は3の4.6cmの他が4～4.3cm，底径は7の4.3cmの他が5～6cmとほぼ近似した数値を測る平底の坏形土器である。いずれも，底部の切離は回転糸切りによっている。3・4・8は口縁の一端にススが付着し，灯明皿に転用したのであろうか。5は回転糸切りで切り離し

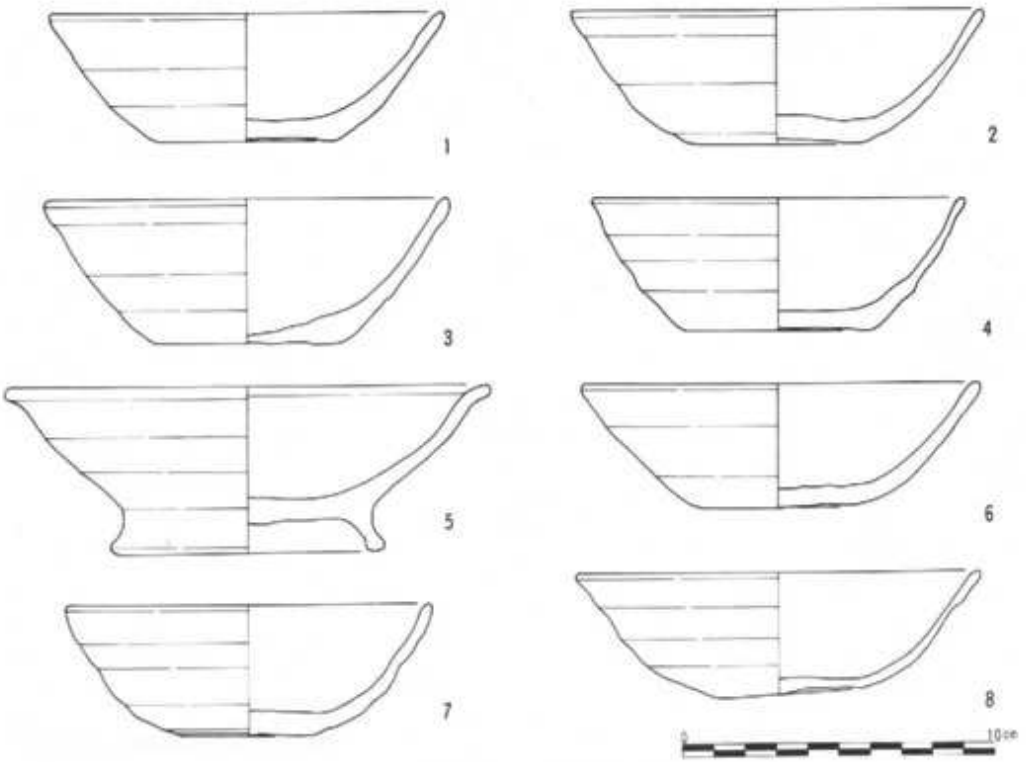


第118図　建物跡位置図(ドットのピットは
第2号建物跡，その他は第1号建物跡)

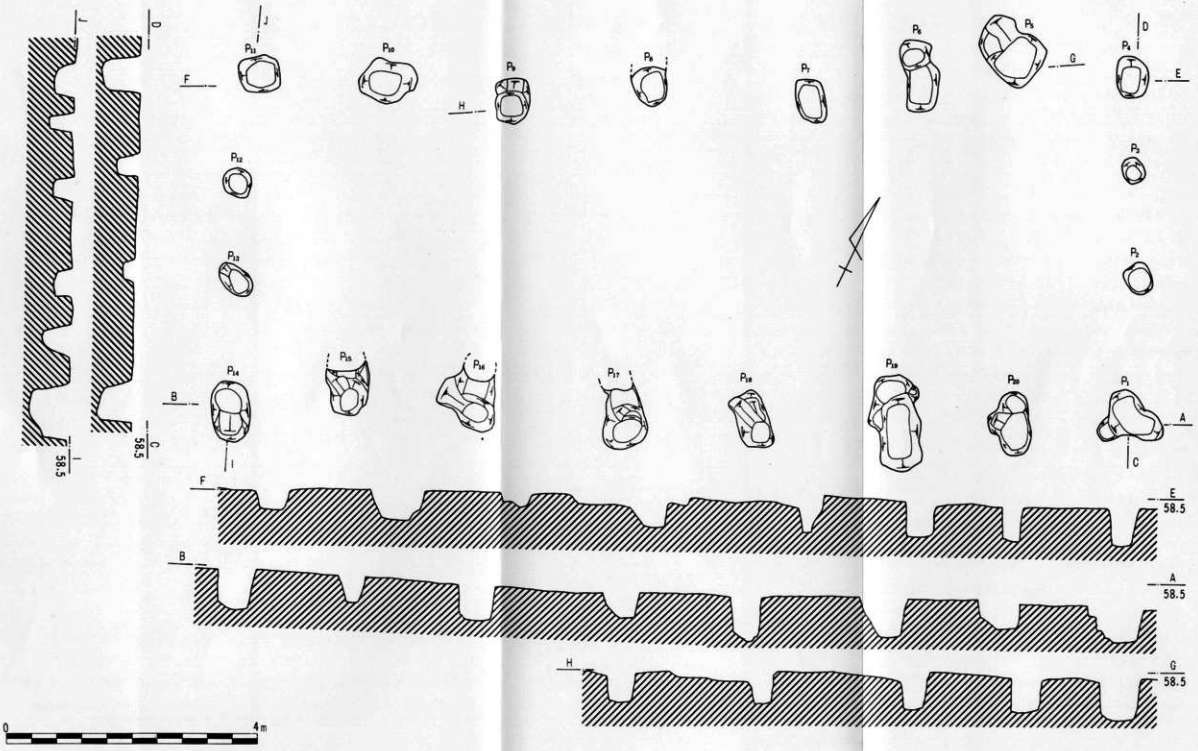
た底部に高台がつく坏形土器である。接合部はていねいに調整され，削り出しではないかとの感じさえ与えている。

○灰釉陶器（図版第45図）　口縁が丸味をおびて若干外へ張り出す，坏もしくは皿状形態を呈し，灰釉をハケでていねいに施した土器である。

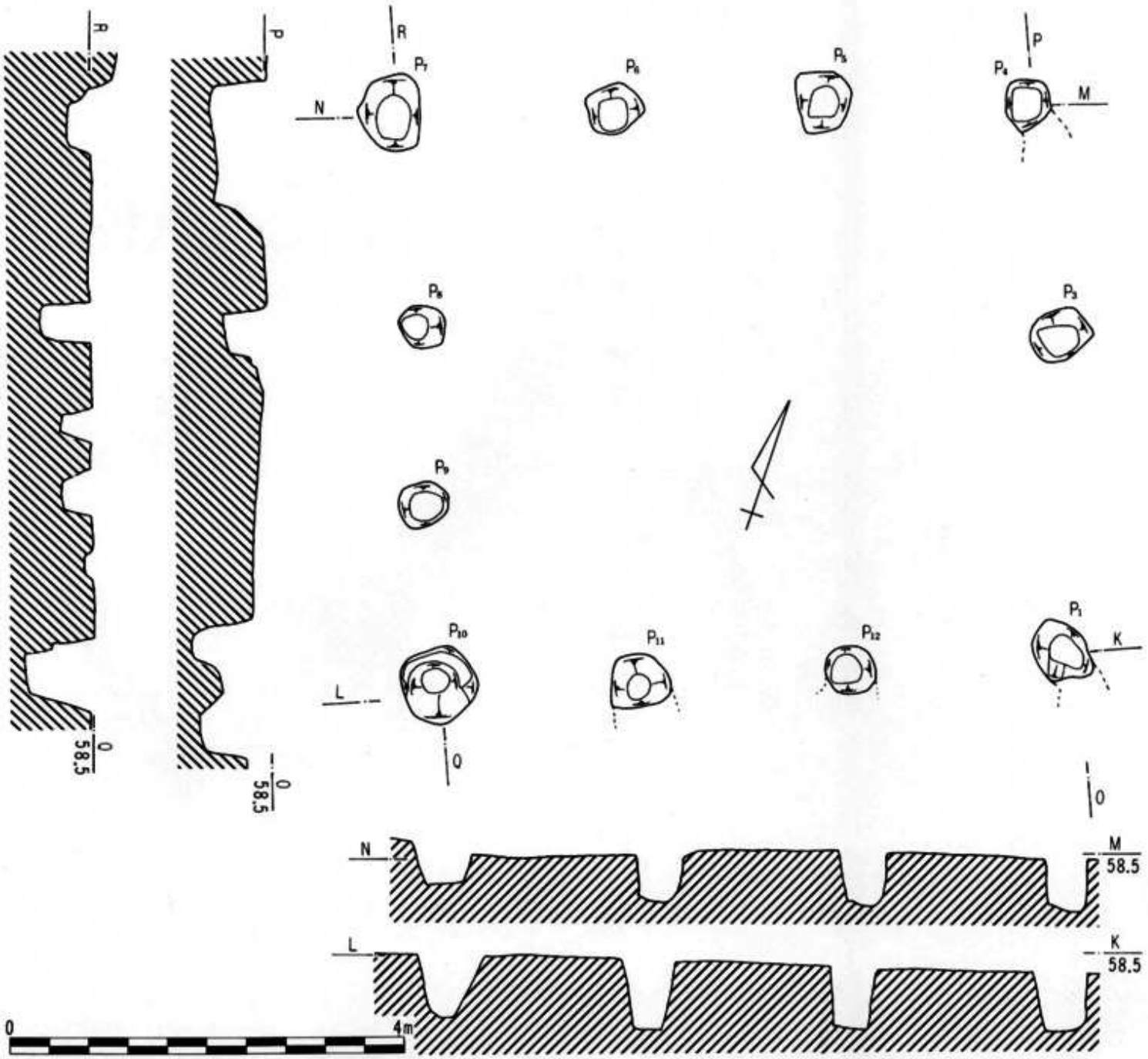
4．まとめ　建物跡の柱穴及び周辺から出土した土師器は器形や切離などから，関東の国分式に類似すると思われ，平安時代の所産と考えられる。この土師器を伴う建物跡はひとつの建物の敷地内に，もう1棟が建てられたという明らかに時間差が認められるものである。しかし，土師器に口径・器高等の数値や技術的な変化は認められない。これは短い時間内で建替えがあったと言えるのではないだろうか。では，この2棟の建物跡の新旧関係を土師器以外に考えるならば，2棟の掘方の状況に注目したいと思う。つまり，第1号は掘方の壁に柱抜き取りと思われる痕跡がみられるものが多いのに対し，第2号は1基しか認められないことである。この点から，第1号を廃棄し，その柱材の一部を用いて，第2号を建てたものと考えられるのではなかろうか。この他，坏形の土師器と灰釉陶器しか遺物がないという特異な土器セットをもつことや，建物跡が約300m西にある須恵器窯――岩野原窯跡とどのような関係にあるかなどの問題は今後の研究課題として残った。（駒形敏朗）



第119図　建物跡出土土器



第117図　第１号建物跡（鎖線は第２号建物跡の柱穴）



第120図　第２号建物跡（鎖線は第１号建物跡の柱穴）

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の調査は関越自動車道の盛土用土砂採取工事に伴い，遺跡全体を対象地として実施した。この結果，岩野原遺跡の全貌が明らかになるなど，多大の成果をあげることができた。しかし，本書刊行までに整理作業が終了したとは言えず，また，十分に資料を吟味することができず，今後の研究にゆだねるところが多い。ここではこれまでに述べてきたことを整理しながら，遺構を中心とした縄文時代の岩野原の問題点をさぐってみたい。

岩野原に生活した縄文人は中期前葉から後期後葉までの長い間に平箱3,000箱近くの遺物を残し，多くの施設——遺構をつくり，利用していたことが土器から知られる。

中期の集落は段丘の先端部に，住居跡を中心にFピット，Gピットそれに土器捨て場などで構成していた。住居跡は段丘の縁辺部や沢の周辺に，炉跡だけのものも含めて82基があった。この住居跡群はプランや炉の形態，それにテラス状遺構を伴うか否かによって，いくつかに分けられる。しかし，分類された住居跡の前後関係などの詳しいことは，土器が整理中と言うこともあり今後の課題として残った。

従来から貯蔵穴と考えられているFピットは，住居跡群の内側——特に第1土器捨て場の北側周辺部にある住居跡群の内側に多く位置し，遺跡全体で約60基近く発見されている。本遺跡のFピットは基底部に小ピットをもつ例が多く，8G－F15のように開口部と小ピットの中心線が一致しているのもみられ，Fピットの構造をさぐる手がかりを与えてくれているものと思われる。Gピット群はFピット群のさらに，内側に多く存在していた。そしてGピット群の内側——3・4Fグリッド付近は遺構のない空白部となっていた。Gピットは覆土がレンズ状堆積を示すものが少なく，装飾品の大珠や耳飾りがGピットから出土しており，Gピットの性格を考えるに，墓ではないかとの可能性を秘めている。しかし，骨等が出土せず，積極的に証明する手がかりがなく，これも今後に残された問題点のひとつとなった。

また，土器捨て場が住居跡群に囲まれた沢や傾斜地の2ヵ所にみられた。土器捨て場出土の土器に完形品も含まれており，土器がただ破損したから廃棄するという行為の他に，何かの要因が働いているのではないかと考えられる。そして，第1土器捨て場に存在する石列の解明とともに今後に残された課題として考えていかねばならないだろう。

さて，次に後期の集落に眼を移してみよう。後期集落は中期集落より奥まった段丘中央部に，住居跡・Lピットそれに約10,000基以上の柱穴と思われる小ピットが，どちらかと言えば敷石住居跡（第34号）から南側付近を空白部として環状に位置していた。これは中期集落が地形をたくみに利用していたのと好対照をなしている。後期集落の中心をなす住居跡は81基確認されているが，そのほとんどが炉跡だけのもので，竪穴住居跡として明確なものは第

2号・第3号・第9号・第10号・第32号・第48号のわずか6基にすぎない。しかも，炉跡だけのものは敷石住居の第34号と同じように第II層中に位置するものが多く，このことが後期集落を考える上で大きな障害となっている。

後期の住居跡には第12号・第49号・第50号・第182号のように根固め石の柱穴や掘方と柱痕のある柱穴を結んで住居跡とした例がある。掘方と柱痕が区別される柱穴は縄文晩期の藤橋遺跡[註1]にもある。藤橋の場合は調査対象地が「線」であることや，柱穴が無数に発見されたため，1基の住居跡を推察するに至らなかった。本遺跡の例は小ピット群の中に，あるひとつのグループとして柱穴が存在していたこともあり，住居跡として推定することが容易であった。その結果として，柱間寸法に法則があることを認められるようになった。しかも，これらの住居跡は第12号が集落中央部近くに位置する他は，北の沢の入江に面する7M・Nをはさむように7L及び7・8Oにあった。7Lには第182号A・B，7・8Oには第49号・第50号の2基づつが対峙する形になっていた。これは集落構成上の何かを暗示しているのであろうと思われる。

このようなタイプの異なる住居跡群の外をめぐるように約130基のLピットが存在していた。後期集落には，貯蔵穴と思われるFピットは1基も発見されなかった。貯蔵穴が中期のFピットから，後期にはLピットに変化したものであろうかとも考えられるが，積極的にそれを裏付ける資料がなく，今後の問題として残った。

以上のように多くの問題点が指摘されるが，いまひとつの問題としてあげられるのは，中・後期の集落間に一線を画することができるということである。この現象は沢をはさんで中期の馬高と後期の三十稲場とが対峙していることと近いと言えようし，また時代が新しくなるにつれ段丘の先端部から奥の方に移動することは藤橋[註2]と同じ傾向にあると言えよう。ここにあげた馬高・三十稲場・藤橋それに岩野原の各遺跡はいずれも大遺跡として知られている。これらの遺跡は狭い範囲で集落の移転を繰り返すことによって，序々に規模が広がり，ついには大集落を生み出したものであろう。このようにひとつの地域に長い間定住していたのは，縄文人の生活を支える食糧の確保が容易であったことを推察するにやぶさかではなかろう。しかし，長期間ひとつの所に留まるといった環境の制約も考慮しなければならないだろう。たとえば，本地方が名だたる豪雪地帯であるということをも!!

そして，このような大遺跡をとりまく転堂・雉子打場などの規模の小さい遺跡をも含めた総合的な遺跡群としての本地域を考えなければならないだろう。　（駒形敏朗）

註1．駒形敏朗他「埋蔵文化財発掘調査報告書――藤橋遺跡――」　長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会　1977年

註2．駒形敏朗他「埋蔵文化財調査報告書――藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡――」長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会　1977年